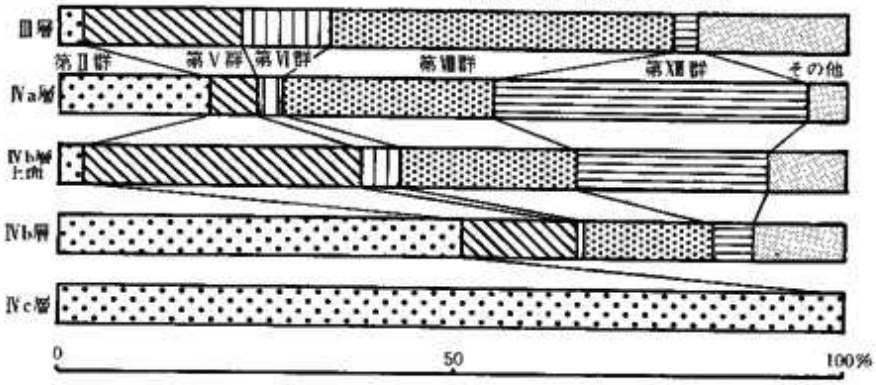
第23表　基本層出土口縁部の層位別数量

層　位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc
数　量	401	56(1)	1010(6)	54	106	1
%	25	3	62	3	7	1%未満

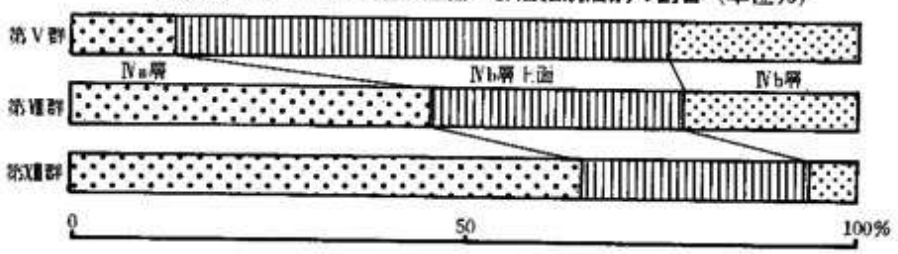
※ 総数1628(7)点　（ ）内数値は復元土器数

第24表　基本層位内での群別土器の割合（単位%）



群 / 層位	Ⅱ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	XIII	そ　の　他
Ⅰ	2	22	8	36	21	11（Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅺ）
Ⅱ	4	11	1	30	50	4（Ⅺ）
Ⅲ	3	20	11	44	3	19（Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・XII）
Ⅳa	19	6	3	25	42	5（Ⅶ・Ⅸ・Ⅺ）
Ⅳb上	3	35	5	23	24	10（Ⅰ・Ⅺ）
Ⅳb	51	15	1	16	5	12（Ⅰ・Ⅶ・Ⅸ）
Ⅳc	100	0	0	0	0	0

第25表　第Ⅴ・Ⅷ・XII群土器のⅣ層細別層別の割合（単位%）



群（資料数） / 層位	Ⅳa	Ⅳb上	Ⅳb
Ⅴ（45点）	13	63	24
Ⅷ（55点）	45	33	22
XIII（65点）	65	29	6

移動していることが推察出来る。

2．口縁部の分布(第183図2)

第183図2は基本層位Ⅲ層～Ⅳ層出土の口縁部資料1171点(復元土器6点を含む)の各グリッド別の総数量である(Ⅰ層は接合関係より原位置から大きく移動している可能性が強く、Ⅱ層は接合関係の点からは何も推察出来なかったが、原位置を保っていると断定出来る材料もないので、総数量よりはずした)。51点以上出土のグリッドはいずれも遺構の密集地点とほぼ一致する。特にJ～M－7グリッドの4グリッドは101点以上と出土量が多い。ただし、P－11グリッドからは遺構数（1住、3埋、8D、9D、11D、6P）が多い割には出土数が少ない。この傾向は遺構内出土の口縁部数を加えても、あるいはⅢ層以下出土の石器の総数の比較に於いても同様である。

これは ①1号住居の床面がすでに攪乱により消失していたことより、他地点より攪乱の度合いが激しかった。②遺物の流出がみられた。③元来、包含層中に遺物量が少なかった。④遺構内遺物が少なかった。⑤遺構の性格が異なる。の①～⑤のいずれかに起因するかと考えられるが、①に関しては遺構密集地点でもP－11同様地山上がⅢ層となっている部分が多いことより、②に関しても、すでに前述のようにⅢ層中の遺物は平面的には余り移動しておらず、加えてJ－7～Nグリッドにかけてのグリッドの方が斜地であることより、その可能性は薄い。③・④が最も順当な原因ではないかと考える。⑤に関しては、9、10号土壙では上部に遺物が人為的に置かれていた可能性が強いという調査結果、また11号土壙堆積土中には接合資料を含む同一母岩の剥片、チップ類が多量に含まれ、出土遺物の状況より自然堆積とは考え難い調査結果より、これら土壙が開口していた状態でなく、3号埋設土器同様、人為的に埋め戻された可能性が高い土壙類と考えられる。それに比べ、他の遺構密集地点の多くが自然堆積状況を示し、開口状態であったと考えられる点より、遺構堆積土中に遺物が入り込む機会が多かったと考える。従って遺構上面に攪乱を受けた場合、その上層に堆積上遺物は移動し、遺構上層に遺物が多く出土するといったことも考えられるが、口縁部資料、石器資料による分析であり、出土遺物全点にわたる分析結果でないので⑤に関してはその可能性も有り得るとしておきたい。

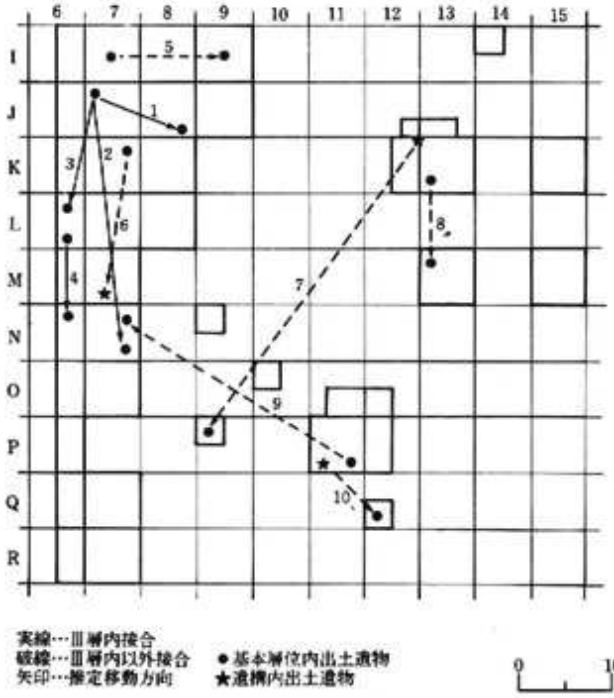
3．時代別遺物の分布(第184図1～4)

群別土器13群中ある程度の出土量を持つ第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅴ群・第Ⅵ群・第Ⅷ群・第Ⅻ群土器についての平面分布を取り扱った。第184図は各群の基本層位Ⅲ層～Ⅳ層、縄文時代の遺構内出土土器数を合計した各グリッド別の総数量である。ただしⅠ～Ⅱ層は口縁部資料と同様の理由で、風倒木痕については形成時期不明の為、数量には加えなかった。

①早期（第Ⅰ・Ⅱ群土器）（1・2）

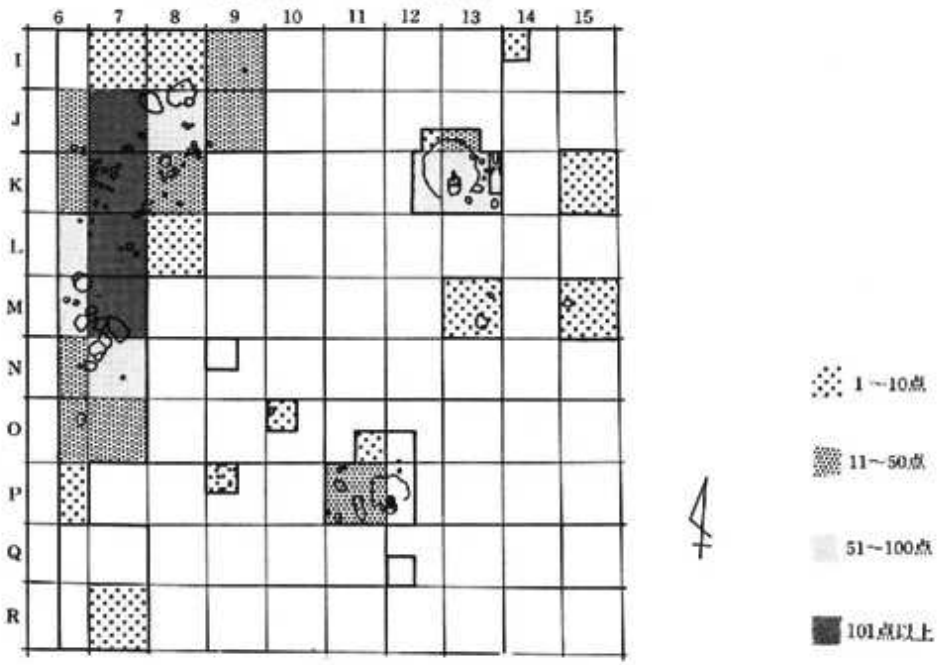
早期中葉（第Ⅰ群土器）は30点、早期末葉（第Ⅱ群土器）は108点の資料に基づく。早期中葉

1．接合関係図



No	Ⅲ層内の接合		遺物
1	J－7(a)	J－8(c)	土器
2	J－7(a)	N－7(d)	土器
3	J－7(a)	L－7(b)	土器
4	L－6(c)	N－7(b)	土器
No	Ⅲ層内以外の接合		遺物
5	I－7　Ⅰ層	I－9　Ⅲ層	土器
6	M-7(d) 6D堆1	K-7(b)Ⅰ層	土器
7	K-12(b)2堆	P-9(a)Ⅰ層	土器
8	K-13(d)Ⅱ層	M-15(a)Ⅰ層	土器
9	P-11(e)Ⅲ層	N-7(b)Ⅰ層	石器
10	P-11(d)1D堆2	Q-12(d)Ⅰ層	石器

2．口縁部資料グリット別分布図



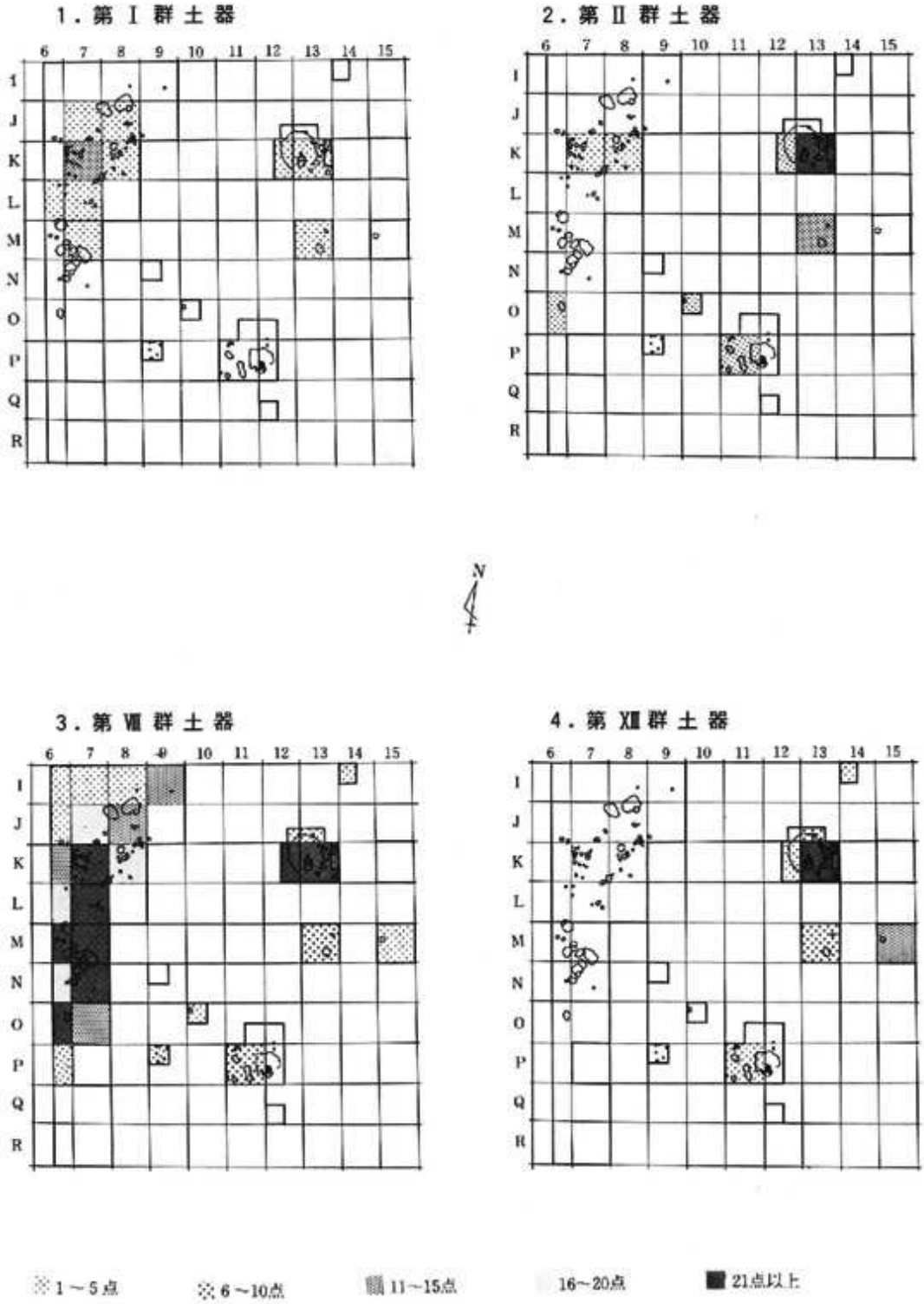
第183図　接合関係図・口縁部資料グリッド別分布図

第26表　グリッド別出土数量表（群別及び口縁部数）

A．総出土数量　　B．基本層位（Ⅲ～Ⅳ層）＋遺構（351）は除く（）出土数量　　C．基本層位（Ⅲ～Ⅳ層）出土数量

群別 / 地区名	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ		Ⅹ		Ⅺ		Ⅻ		XIII		口縁部	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	C
I－6									2	1					1	1											1	0
7									5	2	1	0			1	1					3	3					7	3
8									10	6	1	0			4	4					6	4					20	7
9									12	8	1	1			16	12					4	3					34	30
14													1	1	2	1					1	1			4	3	6	5
J－6									7	5	3	3			5	4					3	3					33	24
7	1	1			1	1	1		23	15	10(1)	10(1)	3(1)	2(1)	31	18	1	0			10(1)	7(1)					151	106
8	5	3					2		37	23	18	8	3(1)	3(1)	35	15					16	6	1(1)	1(1)	1		136	61
9									3	3	2	0									1	1	1	1			18	11
12									1	1					4	4									1	0	13	15
13									4	2	1	0			5	2					2	1			12(1)	6(1)	25	15
K－6											2	3	1	1	15	11					4	4					52	43
7	14	11	1	1	2	2	1	1	48	23	20(1)	11(1)			77	44	2(1)	2(1)			32	20					209(3)	126(1)
8	5	4	3	3	1	1			3	2	2	1			26	19					7(1)	6(1)					51(1)	34(1)
12	1	1	1	1					23	22	4	3	2	1	28(2)	21(2)					5	4			5	2	96(1)	72
13	5	5	89	86					128(4)	128(4)	14(3)	13(3)	3	3	35	34	1	1			11	10			123(4)	65(3)	212(8)	72
15									4	4	6	6													4	0	4	4
L－6	1	1							1	1	4	4			18	18	1	1			3	3					61	60
7	2	2					1	1	15	14	7	5			63	52					9	8					168	121
8															1	0					1	1					3	2
M－6									7	7	13(2)	12(2)	1	1	44	43					9(1)	9(1)					116(3)	81(3)
7	1	1			1	1			34	26	21	16	3	3	80(1)	60(1)	4	4			17	16	1	1			209(1)	113
13	2	2	19	14					5	4	2	2	1	1	14	7			1	1	2				8	7	17	9
15			1								1	1			1	1					1	1			17	15	7	5
N－6									4	4	1	1			18	18					1	1					30	30
7							2	2	39	26	15	15	2	2	89	58	1	1			16	16					198	56
9																											1	0
O－6			3	3					4	4	6	6			22	21					4	4					39	28
7			1	0					6	1	1	1			23(1)	12(1)					3	1					47(1)	21(1)
10			1	1					7	6	1	0			2	1					1	1					6	2
11											1	1															2	2
P－6															1	1					1	1					3	2
9									8	3	2	2			7	5	1	1			3	1	1	1	2	0	16	5
11			1	1					3	3	7(1)	7(1)	2	2	8	7	3	3			2	2	2	2	3(2)	3(2)	31(3)	12
12															1	0					1	0					3	0
Q－7									1																		1	0
12			1	0					4	0	4	0			4	0					3	0			11	0	17	0
R－7															1	0											5	4

※ 数値は復元土器数＋破片数、（ ）内数値は復元土器数



第184図　群別資料グリッド別分布図

(1)の時期はK－7グリッドを中心とする丘陵東側緩斜面部(2次調査区)Mライン以北に集中するが、早期末葉(2)の時期には丘陵東側緩斜面部にも多少の分布は示すが、多くはK－13グリッドを中心とする丘陵東側平坦部に分布する。

②中・後期（第Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ群土器)(3)

中期後葉（第Ⅴ群土器)、中期末葉（第Ⅵ群土器)、後期初頭（第Ⅷ群土器）の各時期ともほぼ同様な分布状況を示しており(従って後期初頭の分布図を代表記載した。503点の資料に基づく)、丘陵東側緩斜面部・平坦部の全域に分布する。特にK～N－7グリッド、K－13グリッドを中心とする遺構密集地には分布が濃く、Iライン以北、Qライン以南、丘陵東側縁辺部になると分布が薄い傾向を示す。

③晩期（第Ⅹ群土器)(4)

晩期は後葉の180点の資料に基づく。K－13グリッドを中心として丘陵東側平坦部にのみ分布し、丘陵東側緩斜面部には全く分布を示さず、中・後期とは全く異る様相を示す。

Ⅲ．各時期の遺構構成と立地

梨野A遺跡出土の土壙、ピットの大部分が、その出土状況より縄文時代内の時期別分類不可能なものであった。しかし、時期別の遺物出土数量及び遺物分布に照し合わせることによって多少は時期を限定出来るのではないかと考える。群別資料中の基本層位出土土器数（Ⅲ層～Ⅳ層)、縄文時代の遺構内出土土器との合計数量の内で、時期別土器数量は、後期初頭→中期後葉→晩期後葉→中期～後期(第Ⅶ群、第Ⅺ群、第Ⅻ群)→中期末葉の順となり、これらは全体の約90%を占める。中期後葉から後期初頭の時期に限っても約75%を占める(第Ⅺ群、第Ⅻ群土器は他の中・後期の遺物の出土状況より推し測ればその大部分が中期後葉から後期初頭の時期に所属すると考える。従って両群を加え割合を算出した)。また、晩期の遺物が丘陵東側平坦部にしか分布を示さないということより、丘陵東側緩斜面部では実に95%までが中期後葉～後期初頭で占められる。もし各時期の出土遺物の分布と各時代の遺構が同一分布を示すという大前提が許されるならば、丘陵東側緩斜面上の遺構の大部分は中期後葉から後期初頭の時代に形成されたもので、内でも後期初頭のものが最も多いと言える。これを踏まえた上で、早期から晩期にかけての時期的な丘陵利用及び遺構配置を概観して行きたい。

1．縄文時代早期

早期中葉の遺構は確認されていないが、K－7グリッドを中心とする丘陵東側緩斜面部（以後、緩斜面部）の限られた地域に遺構が形成された可能性があり、K－7グリッドおよびその周辺の無遺物のピット群のいくつかはこの時期に属すのではないかと考える。しかし、丘陵東側平坦部（以後、平坦部）には遺構はほとんど形成されなかったようである。

早期末葉の認定遺構はK－13グリッドで土壙2基、ピット3個検出されている。この時代になると前時期とは対象的に平坦部を中心に遺構が形成し始める。しかし、平坦部に於いてもごく限られた部分のみが利用されたようである。

2．縄文時代前期

前期中葉の土器片が数点、斜面部より出土しているのみである。この時代に遺構が形成されたとするならば、調査区外の丘陵先端部分の可能性が強い。

3．縄文時代中期

中期中葉前半の土器片は数点出土しているのみで、この時期の遺構が緩斜面部、平坦部に積極的に形成され始めるのは中期後葉以後である。認定遺構としては、平坦部の2号住居跡、5号ピット（以上後葉）、1号住居跡（後葉～末葉）、3号埋設土器、3号土壙（以上末葉）が上げられるが、緩斜面部の土壙、ピット類の多くは後葉～末葉の時期に属すと考えられる。この時期に特徴的なことは平坦部に住居が形成され、緩斜面部にはピット、土壙群が形成されるといった、遺構の性格に合せた立地の選定が成されている点である。

4．縄文時代後期

後期の時期には初頭、前葉、後葉の各時期の遺物の出土があるが、出土量としては前葉、後葉は微々たるもので、そのほとんどが初頭の時期にあたる。認定遺構としては平坦部では1号、2号埋設土器（以上初頭）、緩斜面部では4号、5号土壙（以上初頭）、4号ピット（前葉）が上げられるが、平坦部、緩斜面部の土壙、ピット類の大多数は後期初頭の時期に属すると考えられる。後期初頭の時期に特徴的なことは、中期と同様に緩斜面部にピット、土壙群が形成されるが、平坦部には1号・2号埋設土器のような単棺墓が形成され、住居が形成されないことである。調査経過より推し測ると平坦部未掘部分に住居が存在する可能性は薄い。しかし、後期初頭の出土遺物量の他時期に対する優位性、検出遺構の性格からすると集落が形成されたことはほぼ疑う余地はなく、住居は調査区外の北側の丘陵先端部に求められよう[注1]。

5．縄文時代晩期

末葉の時期に限定され、認定遺構としては7号、8号、9号、10号土壙が上げられる。これら遺構、遺物は全て平坦部にしか分布せず、緩斜面部はこの時期には全く利用されないようになる。無遺物であった8号土壙を除き、他の土壙は遺物出土状況より墓壙（7号）あるいはその可能性が高いもの（9・10号）である。また8号土壙も7号土壙と形態の上で酷似しており、7号土壙と同じく墓壙であった可能性もある。従ってこの時期に平坦部が墓域として活用されたことが十分に考えられる。恐らく住居もこの丘陵上に形成されたと思われるが、現在のところ、後期初頭の時期と同様に、丘陵先端部分に求める以外にない。

以上、時期別とは別に、単純に緩斜面部の遺構配置を見る限り土壙はJ－8（a・b）グリッドの大型土壙を中心とするもの、K－8グリッドの小型・中型土壙を中心とするもの、M・N－7（a、d）グリッドの中型土壙を中心とするものの3グループに分けられる。またピットもK－7（a、d）を中心とするグループ、K－8（a、b）グリッドを中心とするグループ、L－7（c）グリッドを中心とするグループの3グループ見受けられる。しかしこれらグループが時期的まとまりなのかどうかは、これら遺構の大半が時期別分類不可能な為、言及は出来ない。

Ⅳ．土壙形態（第25表）

土壙形態をA類からG類までの7類形に分類した。分類可能30例中C類が18例（60%）と最も多く、次いでE類4例、D類3例、A類2例、B・F・G類各1例の順となる。規模的には、A・B類は小型、F・G類は大型のみしか認められず、D類では大型のものはなく、E類では小型のものはない。C類には各規模のものがある。時期的にはA類・G類は晩期に所属し、C類は各時期のものを含む。他類は、時期別分類不可能な土壙であった。

以上を総合すると、梨野A遺跡ではC類が縄文時代を通して最もポピュラーな形態で、内でも中型のものがその最たるものである。

第27表　土壙形態別検出数

形態	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類
検出数	2	1	18	3	4	1	1
小型	2（晩）	1（不）	5（中1、不1）	1（不）	——	——	——
中型	——	——	10（早1、後1、晩1、不1）	2（不）	3（不）	——	——
大型	——	——	3（中～後1、後1、不1）	——	1（不）	1（不）	1（晩）

※ 早…早期末葉　中…中期末葉　中～後…中期後葉～後期初頭　後…後期初頭　晩…晩期後葉　不…時期不明

これら土壙の分布は類別による偏り等は認められなかった。

A類・G類の土壙は、他の遺跡に於いては縄文時代晩期に限定されうる土壙形態ではないが、A類の土壙は宮城県今熊野遺跡[注2]（北合地区26号土壙）、岩手県萩Ⅲ遺跡[注3]（C－9土壙1号、H－4土壙1号、H－15土壙4号）検出の縄文時代晩期中葉の土壙中にほぼ梨野A遺跡と同規模で、遺物出土状況も7号土壙と酷似するものが認められる。

Ⅴ．ま と め

(1) 基本層位中Ⅲ層は、出土遺物よりⅣ層の二次堆積層的、撹乱的様相を帯びているが、Ⅲ層中遺物接合関係より、Ⅲ層中遺物は原位置よりの平面的移動は余り認められない。

(2) 基本層位Ⅳ層中の細分層、Ⅵa層からⅣb層上面にかけては縄文時代晩期の包含層の可能性を含み、Ⅳc層は早期末葉の包含層として認められる。

(3) 土器口縁部資料各グリッド別の総数量より、遺構密集地区に口縁部資料が多く出土するという相関関係が認められた。

(4) 群別土器資料各グリッド別の総数量より、縄文時代早期中葉と末葉では分布が異り、縄文時代中・後期では調査区全域に分布し、遺構密集地区からの出土量も多い。縄文時代晩期には丘陵東側平坦部にのみしか分布を示さないことが認められた。

(5) 縄文時代各時期の遺構構成では、早期より晩期まで遺物は出土するが、集落としてとらえられるのは中期後葉以後で、中期後葉から末葉にかけては丘陵東側緩斜面にピット・土壙群が、丘陵東側平坦部には住居が形成される。後期初頭以後になると丘陵東側平坦部は住居は形成されず、埋葬施設が見立つようになり、晩期末葉には墓域が形成され、丘陵東側緩斜面は全く利用されないようになる。

(6) 梨野A遺跡の縄文時代各時期を通して最もポピュラーな土壙形態はC類で、その中でも、中型のものが最も多い。

佐藤甲二

註

1．後世の激しい撹乱により、住居床面まで削平された状態であれば、平坦部・緩斜面部の検出ピット・土壙が住居内施設であったことも十分考えられるが、ピット・土壙の配列からはこれを推し測れるような材料は得られなかった。しかし、全く可能性がないとは断定出来ない。

2．宮城県教育委員会「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書第33集』1972年3月

3．(財)岩手県埋蔵文化財センター「繋Ⅲ遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集』1982年3月

縄文時代中期の土器

縄文時代中期の土器は、第Ⅳ群から第Ⅵ群まで分類された。そのうち第Ⅳ群土器については、その項ですでに述べてあるので、ここでは第Ⅴ群土器および第Ⅵ群土器について検討を行ないたい。

第Ⅴ群土器及び第Ⅵ群土器の形態については、その復元資料が少なく、また全体の器形を推定できるような大破片も少ないため、明確にはしえないが全て深鉢形土器及びその破片であると思われる。Ⅳ、縄文時代の遺構と遺物の項では、文様構成によって第Ⅴ群土器、第Ⅵ群土器を分類し、その特徴を述べた。それらのことをまとめ、若干考察を加えてみたい。

第Ⅴ群土器

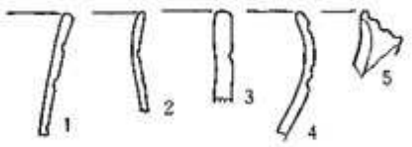
第Ⅴ群土器は、文様をもつもの(第1類)と地文のみのもの(第2類)に分類され、さらに口縁部を基点とする文様帯の特徴よりa、b、c、dに細分された。

第1類・文様をもつもの

a・口唇部に文様帯をもつもの

〈形態〉内湾する平縁(A5)、キャリパー形の深鉢の口縁部と考えられる。

〈文様〉口唇部に横位の沈線文による渦巻文(A2)と口縁部に隆沈文による横位楕円文がある。地文としてRLR縄文が施文されている。



口縁部形態模式図・A平縁

b・口唇部直下から体部まで文様をもつもの

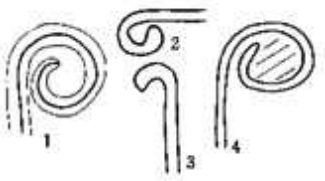
文様施文技法によりb_1、b_2に分けられる。

口縁部形態模式図・B波状口縁

b_1・口唇部に隆線文・隆沈文による渦巻文をもつもの

〈形態〉内湾する半縁のもの(A4)が多い。頸部で逆「く」の字状に折れ口縁部が内傾する小波状口縁のもの(B1)がある。

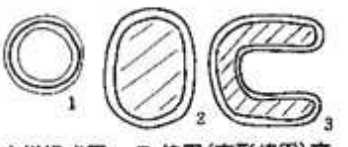
〈文様〉隆線文・隆沈文による渦巻文に沈線文による縦位渦巻文(A3・4)沈線文による縦位渦巻文(A3)+楕円文or渦巻文(B2orA4)、隆線文による円文(B1)+沈線文による楕円文or渦巻文(B2orA4)、隆沈文による隅の角張った変形「∩」文(C2)の種類の文様が伴う。地文としてLRL縄文、LR縄文がある。



文様模式図・A渦巻文

b_2・口唇部直下に沈線文による文様をもつもの

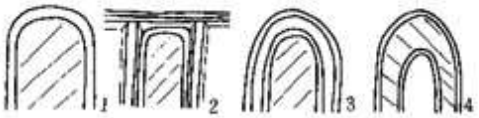
〈形態〉内弯ぎみの波状口縁である(B3)。



文様模式図・B楕円(変形楕円)文

〈文様〉沈線文に隆沈文による渦巻文or楕円文、沈線文による渦巻文or楕円文(A4or B2)の種類の文様が伴なう。刺突文が充填されている。

c・口唇部直下が無文帯になり、その下部から体部まで文様をもつもの　文様形態によってc_1、c_2に分けられる。



文様模式図・C「∩」(変形「∩」)文

c_1・沈線文による縦位渦巻文をもつもの

〈形態〉内湾する平縁のもの(A4)と波状口縁のもの(B3)がある。

〈文様〉沈線文による縦位渦巻文(A3)+二重の沈線文による縦位の楕円文or渦巻文(A4 or B2)、太い沈線による渦巻文の種類がある。地文としてLR縄文、RL縄文が施文されている。

c_2・隆沈文・沈線文による楕円文あるいは「∩」文をもつもの

〈形態〉内湾する平縁のもの(A4)と波状口縁のもの(B3)、直立する平縁のもの(A3)、外傾する平縁のもの(A1)と波状口縁のもの(B4)がある。

〈文様〉隆線文による楕円文or「∩」文(B2orC1)、沈線文による楕円文or「∩」文(B2or C1)、沈線文による「∩」文の種類がある。地文としてLR縄文、RL縄文が施文されている。充填縄文・磨消縄文が見られる。

d・口縁部が無文帯となり、体部に文様帯のあるもの

〈形態〉外傾する波状口縁のもの(B2)と、直立する波状口縁のもの(B4・5)がある。

〈文様〉頸部に口縁部と体部を区画する沈線文がつき、体部に沈線文による楕円文or渦巻文or「∩」文(B2or A4or C1)がつく。地文としてRLR縄文が充填されている。

また、体部資料の文様施文技法と文様形態の関係は

1．隆線文による楕円文

2．隆線文＋沈線文による渦巻文

3．隆沈文による楕円文・「∩」文

4．沈線文による渦巻文・楕円文・「∩」文

の4種類がある。また3には橋状の把手が貼り付けられるものもある。これらと口縁部資料との対応関係は、口縁部資料の体部文様をみると、aは体部文様が不明であるため対応関係は不明である。bはb_1において2あるいは3と対応関係がみられ、b_2では対応関係は不明である。cはc_1では不明であり、c_2では4と対応関係がみられる。dでは不明である。

底部資料は沈線文による「∩」文を体部文様にもつものであると考えられるが、口縁部資料との対応関係は不明である。

第2類・地文のみのもの

〈器形〉体部が内湾し、頸部近くですぼまる大型の深鉢と、体部から口縁部まで単純に外傾

する小型の深鉢がある。

第Ⅴ群土器の出土状況

第Ⅴ群土器の出土状況をみると、基本層から出土しているものはⅠ～Ⅳ層から出土しており、層位的にはまとまりは見られず、出土地点にもまとまりは見られない。また、遺構から出土しているものでは、比較的まとまって出土しているものは2号住居跡のみであり、他の遺構から出土しているものは、第Ⅴ群土器と認定され得るが、磨滅が著しい小破片が多く分類資料になり得なかったもの、堆積土中に散在するなど、層位的関係が不明なものがほとんどである。

2号住居跡での出土状況は、住居内施設及び床面直上から出土したものと、堆積土中より出土したものを比較してみると、施設及び床面直上出土の口縁部資料は、第1類c、dのみであり、c_1が少なくc_2、dが多くなっている。体部資料(復元資料)は、3・4であり、4の中でも「∩」文のものが最も多く、楕円文・「∩」文or楕円文のものが次いで多い。これらは沈線文による文様をもつものであるが、隆沈文による文様をもつ3は少なくなっている。また本住居跡は周溝ピットにより拡張が確認されているが、拡張前と拡張後のピット・周溝からの遺物の出土状況は極めて悪く、拡張後の施設から出土したものは、縄文土器の細片や文様の判別が不可能な程表面が摩滅したもののみで、分類資料となり得るものはみられなかった。また、炉埋設土器の外周に検出された土器があるが、体部破片であり、保存処置のために、炉の立割等の調査をせず、埋め戻したために、時期的なことは不明である。このことから住居跡拡張前・後の施設での遺物の比較はできなかった。また、住居跡堆積土出土の口縁部資料は、施設及び床面直上出土のものと同様c、dのみであり、c_2が多くdは少ない。体部資料は図示したものは3のみであるが、それ以外では、4の方が3より多くなっている。(第1表　64頁)

以上のことから2号住居跡における出土状況をまとめると、住居内施設及び床面直上出土のものと堆積土中から出土のものを比較すると、堆積中より出土したものの方が隆沈文による文様が施文されているものが多いが、その差は極めて少ない。このことから住居内施設、床面直上から出土したものと堆積土中から出土したものでは時間差は指摘できない。

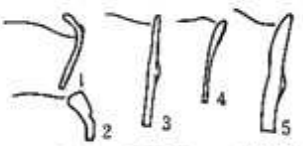
第Ⅴ群土器は、その文様的特徴から縄文時代中期大木9式に位置づけられるものである。大木9式土器は、これまでにいくつかの型式に細分する考えが出され[註1)]、賛否両意見が種々交わされてきたが[註2)]、現在までのところ型式的には2～3段階に細分される可能性が指摘されている[註3,4)]。しかし、大木9式土器が細分されることが層位的な裏付けをもって確認された資料は未だ発表されていない。梨野A遺跡においては文様のある土器は第1類a～dに分類された。これらは主に隆線文及び隆沈文によって文様が施文されるもの(第1類a、b、cの一部)と沈線文によって文様が施文されるもの(第1類bの一部、c、d)に大きく分けられる。これは、前者は隆線による渦巻文(貼付による立体的な文様表現)を多用している点とキャリパー形の深鉢を伴なう点から古い段階に、後者は文様が幅の広い調整沈線文で描かれ、その内部に縄文が充填され

る(器形が単純化し、文様表現法は磨消縄文に接近する)点で新しい段階の大木９式土器に位置づけられると考えられる。しかし、本遺跡においては、各層に混在して出土している点など、層位的に分類することができず、大部分が破片資料であり、編年資料とすることは困難である。今後層位的に良好な資料が増加することによって、大木９式土器の段階的な変遷が証明されるであろう。

第Ⅶ群土器

第Ⅶ群土器は、口縁部資料によって、口縁部から体部まで文様帯をもつもの(第１類)、口縁部にのみ文様帯をもつもの(第２類)、地文のみのもの(第３類)に分類された。

第１類　口縁部から体部まで文様帯をもつもの　これらはさらに文様形態の特徴からａ、ｂ、ｃ、ｄに分けられる。



口縁部形態模式図Ａ・波状口縁

ａ．隆沈文による楕円形文様区画をもつもの

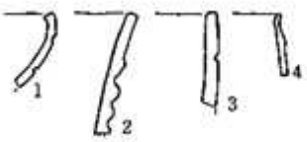
〈形態〉頸部で逆「く」の字状に折れ口縁部が内傾し、体部は外傾する波状口縁(Ａ１)と、口縁部が内湾する波状口縁(Ａ２)がある。

〈文様〉体部中央に体上部と体下部を区画する横位の隆沈文が入り、体上部に隆沈文による楕円形を基調とした文様区画(１)、沈線文による曲線的な文様区画という種類がある。文様区画内にＬＲ縄文、ＲＬ縄文、Ｌ縄文が施文されている。

文様モチーフ

ｂ．隆線文・隆沈文・沈線文による「Ｓ」字状文をもつもの

〈形態〉外傾あるいは直立する平縁(Ｂ２・３)であるが、口縁部が小突起状になるものもある。



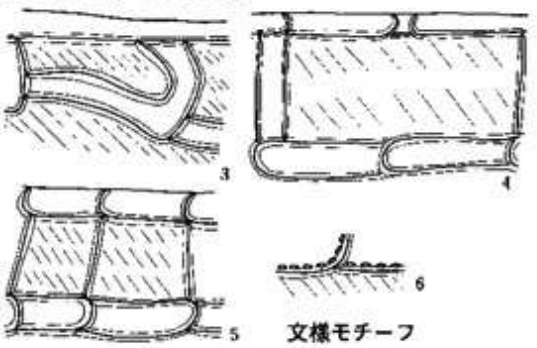
口縁部形態模式図Ｂ・平縁

〈文様〉隆線文にはさまれた無文帯が「Ｓ」字状区画　隆沈文によってはさまれた無文帯が「Ｓ」字状区画　沈線文によってはさまれた無文帯が「Ｓ」字状区画(2)の種類があり、その連結部分に鎖状隆線文がつけられるものがある。地文としてＬＲ縄文が充填されるもの、刺突文が充填されるものがある。

ｃ．隆線文、沈線文による「コ」字状文をもつもの

〈形態〉直立する波状口縁のもの(Ａ３)と頸部で逆「く」の字状に折れ、口縁部が内傾する平縁のものがある。

〈文様〉沈線文によってはさまれた無



文様モチーフ

文帯が「コ」字状区画を成し、波状口縁頂部から、「コ」字状無文帯の連結部分に鰭状隆線文がつくもの　頸部に横位の隆線文がめぐり、そこから隆線文にはさまれた「L」字状の無文帯が連結し、「コ」字状区画を成すもの(3)という種類がある。地文としてRLR縄文が充塡されている。

d．隆線文、沈線文による方形区画文をもつもの

〈形態〉口縁部はわずかに外傾するもの、内弯するもの、内傾するものがある(A2・3・4)。いずれも半縁である。体部は内弯あるいは内傾ぎみで体部中央部が張らむものがある。

〈文様〉隆線文によってはさまれた無文帯が方形区画になり縦位の無文帯に沈線文が入るもの　隆線文によってはさまれた無文帯が3単位の方形区画になり、口縁部と体部の横位の無文帯が区切られるもの(4)、隆線文による口縁部と体部の横位の無文帯の間を縦位の隆線文によって区切り、方形区画を成すもの(5)の種類がある。地文としてLR縄文、RL縄文が充塡されている。

体部資料

体部資料は、文様施文技法、文様形態によって分類すると

1．隆線文・隆沈文によって形成された無文帯が「S」字状あるいは「コ」字状の区画を成すと考えられるもの(2・3)

2．隆線文、隆沈文によって形成された無文帯が方形区画を成すと考えられるもの(4.5)

3．隆線文、沈線文に沿って連続刺突文がつくもの(6)

4．体下部の横位隆線文で体上部と体下部を区画しているもの

の種類に分けられる。これらの体部資料と口縁部資料の体部文様との対応関係をみると、1は第1類bあるいはcと、2はdとの対応関係が考えられるが、3、4に関しては対応関係は不明である。

第2類　口縁部にのみ文様帯をもつもの　これらはさらに文様施文技法と文様形態によりa、bに分けられる。

a．波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部で横位にめぐるもの　これは刺突文の有無によって①、②に分けられる。

①　隆線文に沿って連続刺突文がつけられるもの(6)

〈器形・文様〉外傾する波状口縁である。隆線文の上側に沿って連続刺突文がつけられるものと、隆線文が垂下する部分では隆線文をはさむように連続刺突文がつくものがある。頸部をめぐる隆線文以下には地文としてLR縄文が施文されている。

②　隆線文のみがつけられるもの

〈器形・文様〉外傾する波状口縁である。頸部をめぐる隆線文以下には縄文が施文される。

b．頸部に横位の隆線文がめぐり、口唇部直下から降線文が横位の隆線文に向かって垂下するもの。

〈器形・文様〉ほぼ直立する平縁である。頸部をめぐる降線文以下は不明である。

第3類　地文のみのもの

体部から口縁部まで単純に外傾する波状口縁の小型の深鉢と口縁部が内湾する平縁及び波状口縁の深鉢がある。口縁部が内湾するものは、頸部に横位の沈線文がめぐり体部と口縁部を区画し、沈線文から上部は磨き調整がなされている。地文としてLR縄文が施文されている。

第Ⅵ群土器の出土状況

第Ⅵ群土器の出土状況をみると、基本層から出土しているものは、Ⅰ層からⅣ層まで出土しており、層位的なまとまりはみられず、出土地点にもまとまりはみられなかった。この時期の遺構として、単独遺構である3号埋設土器と3号土壙があげられるが、3号土壙の遺物出土状況からは、出土土器を層位的に分けることはできなかった。他の遺構では他時期の遺物と混在した状態で検出されており、形式的なまとまりは見られなかった。

第Ⅵ群土器は、その特徴から縄文時代中期末葉大木10式に位置づけられるものである。大木10式土器は現在まで第Ⅰから第Ⅳ段階まで細分されている[註4]。この細分に従って梨野A遺跡の土器をみてみると、本遺跡第1類aは、二本松市上原遺跡出土のものに類似資料がみられ[註5]、大木10式第Ⅰ段階であると思われる。b、cは「S」字状文、「コ」字状文という文様区画がみられることから第Ⅱ段階のものであると考えられる。この第Ⅱ段階の土器は菅生田遺跡[註6]において、Aグループ及びBグループと、二段階の土器群に細分されている。本遺跡のものは、菅生田遺跡の「∫」字状文様及び「コ」字状文様のものがそれぞれb、cに対応すると考えられる。dは文様形態が方形区画文であるということから第Ⅳ段階のものであると考えられる。第2類a①は口縁部から頸部の隆線文とそれに沿った連続刺突文が施文されているということと、西ノ浜貝塚Aトレンチ第四層出土土器(所謂西ノ浜貝塚四層土器)に類似しているということから第Ⅲ段階に位置づけられると思われる。2類a②及びbは菅生田遺跡のⅡ群土器Cグループに類似している。この土器群に関しては、明確に大木10式とはされていないが、その可能性もあることが指摘されている。また体部資料は、1が第Ⅱ段階、2が第Ⅳ段階、3が第Ⅲ段階に位置づけられることが口縁部資料との対応関係から明らかである。4に関してはその位置づけは不明である。

梨野A遺跡の大木10式(第Ⅵ群)土器について以上のように第Ⅰ～第Ⅳ段階までの存在が認められるが、前述のように層位的には、全型式が各層に混在している状況であり、また資料が量的にも少なく、完形資料、復元資料がほとんど見られないということから、文様形態による細分はなされたが、この分類からでは、梨野A遺跡出土の大木10式(第Ⅵ群)土器自体の段階的な推移

を明らかにすることは不可能であり、その妥当性については、層位的に第Ⅰ～第Ⅳ段階の推移が明らかな資料の増加によって明らかなるものと思われる。

以上梨野遺跡の第Ⅴ群土器、第Ⅵ群土器について述べてきた。各々大木9式、大木10式土器に位置づけられた。これらの土器は、東北地方南部(宮城県・福島県)においてはかなり明らかになってきている。そこで福島県及び宮城県南部と、仙台湾周辺、宮城県北西部との関係が問題視されているがその接点に近い仙台市南西部に位置する遺跡の一つである梨野A遺跡においては、残念ながらそれらの関係について指摘できる事実は見出されなかった。

主浜光朗

註

1．林　謙作「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本の考古学Ⅱ』、1969

2．丹羽　茂「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』第12号　1971．に詳しい。

3．宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡報告書Ⅰ－上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集　1978．

4．丹羽　茂「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻　1981

5．註2中の二本松市上原遺跡の資料中に類似したものが見られる。

6．宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡報告書Ⅷ－富生A遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第92集　1982

第Ⅷ・Ⅸ群土器

——後期初頭の土器と前葉の土器——

第Ⅷ群土器

特徴

梨野A遺跡における第Ⅷ群土器は、器形よりみると深鉢Ⅰ～Ⅷ類(変形のものを含む)壺Ⅰ・Ⅱ類、浅鉢Ⅰ～Ⅲ類、小型鉢、蓋からなり第Ⅻ群のミニチュア土器の一部がこれに伴う可能性がある。

これらの各器形に施文される多くの「文様要素」(文様としてこれ以上分解できないもの)[註1]は、その形態的特徴と表出技法から以下の10類の「文様要素群」に大別できる。(主として101個の文様要素完結資料による。)※1群で「文様単位」[註1]を構成する場合と複数群で単位」を構成する場合がある。

体部文様としては、①渦状・弧状磨消縄文、渦状・弧状沈線文②「X」状・三角形状・斜行磨消縄文、「X」状・三角形状・斜行沈線文③横位沈線間磨消縄文、横位沈線間沈線文④弧状隆線間研磨文⑤「X」状・三角形状隆線文、「X」状・三角形状隆沈線文⑥連続刺突隆線文(1鎖状隆線文・2連続小円形刺突隆線文・3連続刻み隆線文)⑦連続刺突文が主体的である。

口縁部文様としては⑧縦位装飾文(弧状・「Ⅰ」状)、口縁部から体部にかけての連続文様としての⑨方形区画文(1．縦位隆沈線と横位沈線で区画するもの　2．並行沈線間連続刺突文によるもの)が主体的である。なお区画帯文は、その区画としての性格上「文様要素群」から分離した。

そして各文様の基点として多用される⑩単純刺突文(盲孔・輪形隆文:1～3個で完結)がある。

5グループの文様(第185図)　パーセンテージは体部資料中の文様要素(区画帯文・単純刺突文を除く)101個による。

以上の文様要素群から、共通項としての単純刺突文を分離し、文様要素群相互の関連を同一個体内での「文様単位」[註1]の構成、文様要素の共存より分析した結果更にABCDEの5グループの文様にまとめられる。

Aグループ：渦状・弧状沈線間磨消縄文、渦状・弧状沈線文及び関連する磨消縄文、沈線文のもの(1＋3a・b＋4類)

対称弧状沈線間磨消縄文と縦位波状沈線文が同一個体で1単位をつくること(1・4)、縦位長楕円形沈線間磨消縄文(上部は隆沈線で表出)と縦位波状沈線文(三角形の連続として理解できる)が同一個体で1単位をつくること(5)、渦状磨消縄文と三角形状磨消縄文が同一個体で1単位をつくり、横位沈線間文(頸部)が共存することなどから①渦状・弧状磨消縄文と②「X」状・三角形状・斜行磨消縄文及び③沈線間磨消縄文、沈線文——が密接な関係を有していることが判明する(ただし③が共伴するのは深鉢Ⅰにおいてのみである)。器形との関連をみると深鉢Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ、壺、浅鉢にみられ、数量的にも最も主体的な文様要素群で

ある。5グループ中のパーセンテージは、磨消縄文28%、沈線文27%(地文の上に沈線を描くもの25%・沈線で描いた後で研磨されるもの2%)口縁部には弧状隆沈装飾文のつくものがある。

Bグループ：隆線間研磨文(弧状)・隆沈線文(「X」状・三角形状・斜行)のもの(2+3c・d類)出土数が5点しかなく非主体的な文様要素群である(5%)。このグループは、「X」状沈線間磨消縄文と同一個体で共存し(7)、縦位波状沈線文と同一個体で1つの文様単位を構成する(8)ことからAグループと密接な関連をもつ。ただし弧状隆線間研磨文のものは仙台市六反田遺跡では連続鱗状刺突文とくんでいる[注2]。なお(1)にも一部弧状隆沈線文が認められる。

Cグループ：連続刺突文を体上部に集中的に施文するもの(5a類)

連続長方形刺突文(いわゆる「鱗状刺突文」に近い)が同一個体で鎖状隆線文と共存すること(10)、連続爪形刺突文が縦位鎖状隆線文と共存することから、次にのべるDグループと密接な関係がある。ただし弧状沈線で区画するもの(12)がある点ではAグループとの間接的な関連は認められる。相当する器形は、器形の明瞭なものは少ないが深鉢Ⅳ・壺Ⅰ・鉢に見られる。六反田遺跡においても深鉢Ⅰ・ⅡA・Ⅲ・浅鉢にはみられない[注2]。(23%)

Dグループ：連続刺突隆線文、連続刻み隆線文をもつもの(6類)

1．鎖状隆線文には、1a．体部を直線的に下垂するものと、1b．口縁部と体部の境を横走するもの(多くが一部で弧状の変化をみせる。) 2．連続小円形刺突隆線には、口縁部と体部の境を横走するもの(弧状に変化する可能性がある)があり、その他3．縦位連続刻み隆線文がある。1aは深鉢Ⅳ・Ⅵ・壺に、1bは深鉢Ⅴ・壺にあり、六反田遺跡の成果を総合すると器形ⅡAなど、多くの器形にわたって使用されている。両端が尖る細い紡垂形状の「鎖」をもつ鎖状隆線文には連続長方形刺突文(連続鱗状刺突文に近い)が伴い(壺1類)(10)、不整三角形状の「鎖」をもつ横位鎖状隆線文には連続小円形刺突文が伴う(15)。又、連続小円形刺突隆線文(横位、弧状)には、渦状の磨消撚糸文が連結、下垂し(14)、Cグループと密接な関係をもつ。又、体部を口縁部から直線的に下垂する鎖状隆線文(「鎖」は短沈線状に形成される)には斜行の磨消縄文が伴っており(13)、Aグループにも関係あることを示している。

Eグループ：方形区画文をもつもの(7類)

縦位隆沈線と横位沈線文で区画するものは、内面に横位長楕円形沈線文が施文されている(18)。並行沈線間連続刺突隆線文で区画するものも横位長楕円形沈線文が施文されている(19)。従ってAグループと関係があることを示している。

このABCDEグループの内でBはAに付随し(弧状隆線間研磨文を除く)、CとDは近い関係にあり、Aの渦状磨消撚糸文と横位弧状の連続刺突隆線文が組むことがある(深鉢Ⅵ類)。Eはむしろ ABDの表出技法による「大木10式末葉土器に特徴的な方形区画文」の残存といった性格をもつ。これらの各グループは文様的には、盲孔、輪形隆文という共通項により一括されるのであるが、層位的に共伴関係を保証するものは、各時期の土器が混在する当遺跡ではなく、

仙台市六反田遺跡の後期初頭の包含層(大木10式末葉の遺物を少量含む。)及び遺構出土の後期初頭土器との対比のものが必要となる。[註2]

六反田遺跡との比較(第186図)

器形において六反田遺跡では、梨野A遺跡浅鉢Ⅱ類と称名寺式に近似するプロポーションをもつ無文土器(第185図20)がない以外は全て共通する。文様の上でも六反田遺跡のそれに梨野A遺跡の文様は強い共通性をもつ。六反田遺跡の後期初頭土器の文様は、当遺跡同様A～Eグループに分けられ、その比はA：65%一磨消縄文31%＋沈線文34%(梨野A遺跡以下同じ:55%一28%＋27%)、B：6%(5%)、C:19%(18%)、D：9%(19%)、E：1%(4%)と構成比も近似している。以下、当遺跡と比較した場合の六反田遺跡の特徴をあげる。(器形分類は梨野A遺跡の器形分類番号である。)

①渦状・弧状磨消縄文をもつものは、小片しか残存していない深鉢Ⅲを除く全器形にわたる。

②横位渦巻三角形連結文と横位沈線間磨消縄文(頸部)は、梨野A遺跡と共通して深鉢Ⅰに存在する他、壺、小型壺に存在する。この文様は器形の制約上横位に展開するものと思われる。

③連続鱗状刺突文には、口縁部に、弧状(「C」又は逆「C」)隆線文(13)・「S」字状隆線文がつく(横位「鱗」間に間隔があるタイプ)(15)のものがある他、貫通孔ある突起をもつものは口縁部から弧状隆線間研磨文が下垂し(8)(輪形隆文のあるものあり)、突起下には縦位台形隆線間研磨文が伴う。又、連続不整長方形刺突文には、口縁部に盲孔あるI字状隆線文が伴なう(3)点、梨野A遺跡に比してバラエティがある。

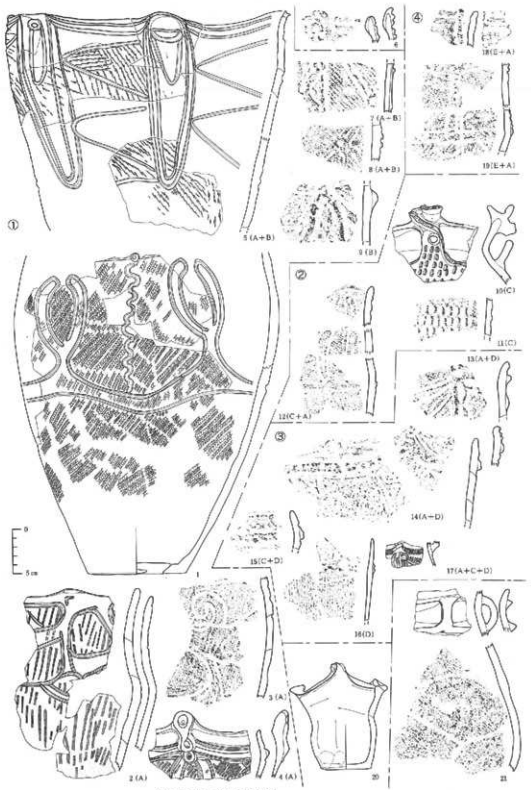
④連続刺突隆線文は、深鉢Ⅰ・ⅡB・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの幅広い器形に存在する。鎖状隆線文が体部に直状に下垂するものは深鉢Ⅲ・Ⅵ(口縁部～体部)にあり、口縁部から直線的に下垂するものは、深鉢Ⅳにある(21)。口縁部と体部の境を横走し弧状に展開し輪形隆文に接続するものは、Ⅴ類にある(25)。弧状に展開するものはⅣ類にある(24・27・28・33・36)。

⑤方形区画文については、並行沈線間連続小円形刺突文や同刺突隆線文はなく、縦位鎖状隆線文で区画し「U」字状沈線間磨消縄文と組むもの(21)や全面に網目状撚糸文を施文し方形区画隆線で区画し、縦位沈線と隆線間を研磨するもの(9)、沈線のみによる方形区画文がある(16)。いずれも大型で深鉢Ⅵに相当する。[註3]梨野A遺跡との表出技法の相違はなお、検討を要する。

⑥口縁部縦位装飾文は、梨野A遺跡同様、弧状又は「I」字状の隆沈装飾文(盲孔を伴うものが多い)が下垂するものが多い(3・14・18・20・23・29・42・43・44・47・48)他、体部に鱗状連続刺突文を伴う弧状隆線などがある(13)。

⑦梨野A遺跡では深鉢Ⅵの大型の中ぶくらみ(or下ぶくらみ)が少量しか確認されないが、六反田遺跡ではA及びDグループ文様をもつ深鉢Ⅵが良好に遺存している(9・20・21)。[註3]

⑧門前式の深鉢は、梨野A遺跡では、類似する中空突起？が出土しているのみである[註4]



第185図　第Ⅶ群土器

第186図　六反田遺跡後期初頭土器

(第131図6)が、六反田遺跡では、ほぼ完形のものが第4号住居跡(第15土壙)堆積土でA・Cグループ及び口縁部弧状隆線上端に刺突文が施文されるものと出土している(24・31・64・66・67)。

1．六反田遺跡(後期初頭)
2．下ノ内遺跡(中期末葉—大木10式末葉)
3．福島県綱取C貝塚(後期初頭—綱取1式)
4．柚窪貝塚(後期初頭—柚窪式)
5．平尾No.9遺跡(後期初頭)
6．称名寺A貝塚(後期初頭)
※2は、現地説明会資料(1982)を略図化

20　六反田遺跡後期初頭土器他

編年的位置

第Ⅶ群土器は六反田遺跡後期初頭土器と強い共通性を持つことが明らかとなった。このような土器群は伊東信雄氏の東北南部編年における後期前葉・南境式に属する。[註5]又、林謙作氏は南境式に先行するものとして柚窪式を提唱しているが、[註6]未だ資料提示は不十分である。近年、丹羽茂・筆者は方形区画文ある土器の共伴より、後期前葉でも早い時期の土器を確認している。[註8]

本群土器は、A・B・C・D・E文様グループの共伴関係を六反田遺跡の後期初頭遺物包含層(大木10式末葉の遺物を少量含む)出土土器等により保証され、[註7]更にEグループ(方形区画文の土器)の一定量の存在により、本群土器は後期初頭—南境式の早い時期に位置づけられる。[註8]

八天遺跡(岩手県北上市)における層位的出土状況との対比(第187図)

以上の編年的位置づけに、当遺跡と地域的にかなり離れているというマイナス面をもちながら、重要な手がかりを与えるものに岩手県八天遺跡の中期末葉～後期前葉土器の出土状況がある。[註9]

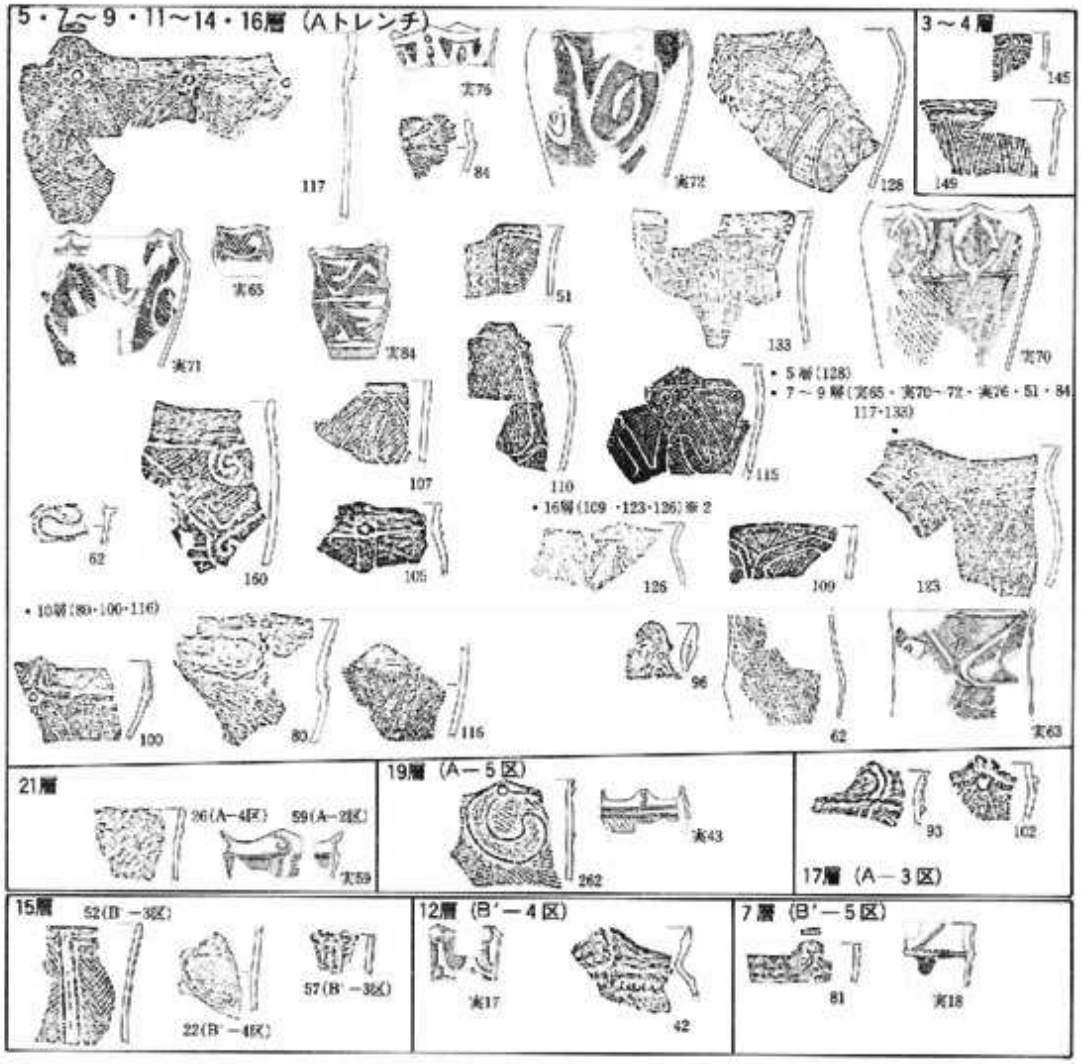
51年度調査のAトレンチ、52年度調査のB・B′・Cトレンチにおいて大別3段階の共伴関係が報文より読みとれる。①最下層にはa．口縁部の弧状隆線に沿って刺突文をもつものb．隆線上に刺突文を持つもの —— の包含層がある。八天遺跡4類(aはbの上層に多い)。

②. ①の上層に八天遺跡5・6・7類が共伴する。5類は、沈線、隆線による方形区画文の一部に、刺突文をもつもので、六反田遺跡で大木10式末葉としたものである(第187図52・57・第188図17)。6類はa.隆線による円状・半円状のモチーフをもつものと、b.口縁部の弧状隆線及び口縁部と体部を区画する隆線上に刻みをもつものである(実43)。7類は、『門前遺跡』(1974)[註4]で「前門前式」と規定したもので、「門前式」とは、文様の横方向の展開と、隆線上の2～3単位の横刻みがある点で区別されている。

③. ②の上層に八天遺跡Ⅱ群8類～Ⅲ群3類が共伴し、9類は「層位別の出土状況からその盛行はⅡ群8類～Ⅲ群1～2類併行」とし、下層ではⅡ群8類とⅢ群1類が多く、上層でⅢ群2～3類が多いとしてその漸移的な新旧関係を示唆している。8類は「門前式」で、註4)では網目状撚糸文が伴わないとしているが、八天遺跡では伴っている。六反田遺跡では、ほぼ完形品が後期初頭土器と共に土壙より出土しており[註2]、梨野A遺跡では、門前式の突起類似の破片が出土している。9類は連続鱗状刺突文を多用するもので、梨野A遺跡のCグループであり、六反田遺跡でも出土している。Ⅲ群1類は、口縁部に突起+「⊥」状の鎖状隆線文、弧状の連続小円形刺突文をもつもの(100・102)と、口縁部に盲孔ある弧状隆沈装飾文、体部に逆「J」字状の磨消縄文をもつもの(93)があり、後者は、梨野A遺跡のAグループと六反田遺跡後期初頭土器に強い類似性をもち、綱取Ⅰ式[註10]との関連をも示唆するものである。2類は、区画帯が沈帯で体部に弧状の磨消縄文(恐らく「縄文」→「沈線区画」→「磨消し」)を施文する(105・107)。盲孔・輪形隆文を多用する点で、梨野A遺跡・六反田遺跡と強い共通性がある。

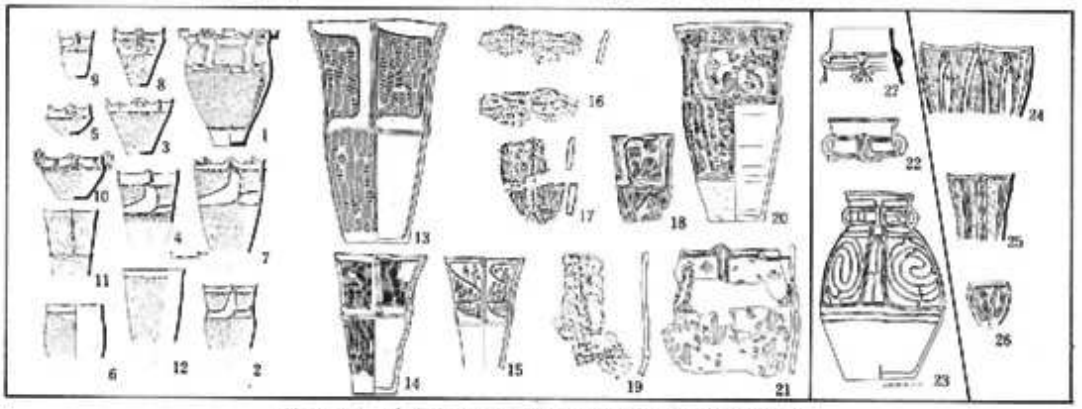
3類(115・117・実70・実71)は、「縦長渦状磨消縄文」(「倒卵状磨消縄文」)で、本遺跡で類似するものが1点ある(第126図13)が六反田遺跡では出土していない。4類は、連続S字文を伴う下垂する磨消縄文である。報文によると、4類としたわらび状磨消縄文のもの(第187図133)は連続S字状文のある深鉢(実72)の下層より出土している。(その他4類としたものに(実76)がある)

以上の出土状況と、本群・六反田遺跡後期初頭土器との対比から、本群土器は、報文のⅡ群8類からⅢ群2類及び4類中のわらび状磨消縄文をもつ土器の漸移的層位のまとまりにおさまり、報文中の6類(第187図145・149)のような縄文地文に口縁部を基点とする多条並行沈線文を施文するものとは層位的前後関係のもとに出土している(後述するように八天遺跡6類は、本群Ⅸ群土器、山口遺跡Ⅵ群土器[註12]、綱取Ⅱ式・広義の掘之内Ⅰ式に共通するものである)。以上の併行関係は本遺跡との地域差を考慮して今後の類例の増加により更に検討していく必要がある。八天遺跡の層位的出土状況はこの他にも大木10式末葉から後期初頭への転換を考える上にも有益である。即ち①段階の土器は宮城県西ノ浜4層出土土器[註13]に対応し(第188図1～12)、②段階の方形区画隆線文土の一部に刻みをもつ土器(八天遺跡報文Ⅱ群5類)は、沼津貝塚[註14]、六反田遺跡[註3]の大木10式末葉土器に対応する(第188図13～17)。そして、③段階の鎖状隆線文(連鎖状)への変化と輪形隆文の盛行(第②段階でも一部、輪形隆文が使われるが)を以て後期の開始(東北南部一岩手県南半～福島県)と考える。又その前段階は確定できないが西ノ浜貝塚4層における、並行隆



第187図　岩手県八天遺跡出土遺物

註9報文「第158図　北部遺物包含地帯A、B Trench Section」より作成
地文のみのものや同一層で同一文様のものは削除した。掲載は報文そのままである。※2報文断面図では16層は10層の上である。
※3 編集者の本堂寿一氏によればAトレンチ5・7～9・11～14は大別1層として捉えた方が良いとの御教示を得ている。



第188図　東北各地の大木10式土器～後期前葉土器

1～12は西ノ浜貝塚第4層出土(註13)13～15は沼津貝塚　22・23は堂沢遺跡9号住居跡床面共伴遺物(註35)
16～21は六反田遺跡(16～19：9b層　20：堆積土器　21：9a層)(註2)24～26は西ノ浜貝塚第3層出土(註13)
27は柚窪遺跡(註6)

線間を研磨する方形区画文土器(第188図1)の「弧状文」化の系譜に六反田遺跡出土大木10式末葉土器(第188図20・21)[註15]を位置づけ、後期初頭における鎖状隆線文への変化と、弧状隆線間研磨文の残存(写真20—3、第187図62・262)の2系統の可能性を指摘したい。即ち弧状隆線間研磨文は、六反田遺跡におけるCグループ(第186図8・14)及び綱取Ⅰ式の一部(写真20—3)として残存し、方形区画文は、六反田遺跡の中ぶくらみの大型深鉢における鎖状隆線文と磨消縄文(縄文→沈線区画→磨消)に転化する(第186図21)。第186図9は、大木10式の要素が最も強く残存している後期初頭土器(縦位波状沈線文・網目状撚糸文の存在において)と考える。又、本遺跡第185図5は下之内遺跡出土(1982)の大木10式(末葉)(写真20—2—301頁)の文様系統の可能性がある。

4つの土器群と地域性(第185図・遺跡の分布—第189図)

本群土器の地域性の検討については、A～Eグループの文様構成比を求めるには、詳細な報告書の刊行が少ないのでまずA～Eグループをもつ4つの土器群個々の分布を求める。この場合のA～Eグループは当遺跡と六反田遺跡を包括した内容とする。(従って分布記載から両者は抜く)

①A＋Bグループをもつ土器群：渦状・弧状沈線間磨消縄文、渦状・弧状沈線文を主体にし少量の斜行隆線間研磨文、隆沈線文を伴う土器群(深鉢・壺・浅鉢・蓋)。磨消縄文が主体であるが具体的モチーフとして第185図1～5・7・13・14等のような渦状斜行連結文、弧状下垂文、「X」状文があり前二者は、並行沈線間磨消縄文(縄文→沈線区画→区画内磨消—狭義の磨消縄文)、後者は磨消縄文(狭義)・沈線文・隆沈線文で表出し、口縁部に突起＋縦位隆沈装飾文・縦位隆線装飾文を伴うグループと規定した時、その主体的範囲(八天遺跡のAグループや青木畑遺跡でも口縁部の弧状隆沈装飾文が若干数存在するが)は北は宮城県袖窪貝塚[註6]・南は同、白石市菅生田遺跡[註8・17・18]で確認されている。

②Cグループをもつ土器群：連続刺突文を体上部に施文する深鉢・壺・蓋である。蓋及び壺(第185図17)に施文されるのは細かな連続刺突文で、宮城県白石市菅生田遺跡[註8]や福島県いわき市大畑貝塚[註10]に類例があり、後者では「三十稲葉式」の影響が指摘されている。「鱗状刺突文」は、口縁部が外反しゆるやかに内弯する体部をもつ深鉢(器形ⅡB)、口縁部が内傾し、外傾する体部をもつ深鉢(器形Ⅳに包括)、直線的に外傾する深鉢(器形Ⅴ)に限定され、その分布は、前述の岩手県八天遺跡[註9]・北上市樺山貝塚[註19]・陸前高田市堂の前貝塚[註20]、宮城県青木畑遺跡[註16]・西ノ浜遺跡[註21]・柴田町向畑遺跡[註22]・菅生田遺跡[註8]で確認されている。なおこのグループは前述のように本群ではDグループと密接に関連するが「鱗状刺突文」は、綱取Ⅰ・Ⅱ式において公表されているものでは少数である[註42]。

③Dグループをもつ土器群：連続刺突隆線文をもつ深鉢・壺である。前述のように多くの種類があるが大局的にみれば岩手県立石遺跡[註23]・八天遺跡[註9a]・北上市樺山遺跡[註18]・陸前高田市堂ノ前貝塚[註17]、宮城県青木畑遺跡(以上では弧状鎖状隆線文が多い)・鳴瀬町南境貝塚[註5c]に分布する。綱取Ⅰ式では[註10]①口縁部の肩孔間弧状隆沈装飾文＋体部を直状に下垂する鎖状隆線文or口縁部と体部

の境を横走する鎖状or刻み状隆線文及び②口縁部「⊥」状連続刺突隆線文など多様である。前述のように本群ではCグループと密接な関係を有する。

④Eグループをもつ土器群：方形区画文の深鉢・壺である。青木畑遺跡[註16]では輪形隆文＋縦位隆線文により区画するものと、梨野A遺跡と同様に並行沈線間連続刺突文により区画するものが、C・Dグループと共に出土している。菅生田遺跡[註8]では方形区画隆線文のものが少量出土している。福島県綱取遺跡の綱取Ⅰ式土器には、前述のように隆線間研磨文で方形区画文を表出し(弧状文を伴う)ているものがある[註18]。(写真20—3—301頁)

次に当遺跡及び六反田遺跡後期初頭土器により提起される重要な問題の一つである「周辺の各型式—門前式[註4]・袖窪式[註6]・綱取Ⅰ・Ⅱ式[註10]・称名寺式[註24]・堀之内Ⅰ式[註25]・及び十腰内Ⅰ式[註33]等との併行関係」を検討するために、現段階での共伴関係、器形・文様の共通性・近似性を整理しておく。

門前式土器[註4]は岩手県陸前高田市門前貝塚を標式遺跡とし、公表資料としては、立石遺跡[註23]・八天遺跡[註9]、宮城県青木畑遺跡[註16]・六反田遺跡[註2]にあり、一部公表資料としては、宮城県蔵王町二屋敷遺跡[註26]を南限とする。本群土器との共伴関係について、前述の八天遺跡において「本群土器及び六反田遺跡後期初頭土器類似の遺物を含む数層を「まとまり」とした場合、この層の下半部」に多いという事から本群・六反田遺跡後期初頭土器の時間幅の前半における併行関係を想定し、今後検証していく必要がある。

「**袖窪式**」**土器**において、現在まで公表された4点の資料[註6]の内、壺(第188図27)は、当遺跡(第185図21)・六反田遺跡(第186図39)出土の壺に器形・文様共に酷似している。又深鉢(写真20—4—301頁)の「X」状文のモチーフは、前述のように、当遺跡・六反田遺跡・二屋敷遺跡・小梁川遺跡及び遠隔地の出土例として東京都平尾No.9遺跡[註17]出土のものがある(写真20—5—301頁)。以上の公表資料はいずれも当遺跡におけるA・B・Dグループに包括され、「X」状文が前述の深鉢において方形区画(鎖状隆線文)と共存する点でEグループとも関連する。以上により宮城県中央部から南半部における強い斉一性が認められる。

綱取Ⅰ・Ⅱ式土器[註10・11]は福島県いわき市綱取貝塚の前者はC地点、後者は第4地点出土の土器を各々標式とする。Ⅰ式は「貼瘤文や隆線文或いは太い沈線文により装飾意匠文を描き、特に口縁部が体部と明確に区別される構成」を示しており、Ⅱ式はこれらの「意匠文が簡略化されたものである」(「例えば頸部の隆線は沈線に変化、貼瘤窩文は盲孔の窩文に変貌」)としている[註10b]。

当遺跡・六反田遺跡のAグループに含まれるⅠ口縁部の縦位弧状隆沈装飾文・口縁部と体部を区画する隆沈帯区画文・文様基点としての輪形隆文(「貼瘤窩文」)の多用は、綱取Ⅰ式及びⅡ式の一部との強い共通性が認められる。ただし細部については、相違がある。例えば綱取Ⅰ式に多用される「V」字状文が当遺跡、六反田遺跡には認められない[註27]。現段階での公表資料として宮城県柴田町向畑遺跡[註22]には、研磨後「V字」状沈線文(上端鉤状)が施文されるものがあり、同様にV字状文をその主体文様とする関東における称名寺式との並行関係を考える上で重要である[註28]。又、Ⅰ口縁部突起についても、六反田遺跡の「楕円形渦文突起」(第186図43・44・47・48)と強い類

似があるが、本県では対称弧状をなすものは少ない。[注29)] 又器形の点では綱取Ⅰ式では称名寺式に特徴的な「口縁部から頸部にかけてゆるやかに大きく外反し口縁部が短く内傾する」深鉢があるが、本群にはみられないが、例えば口縁部の縦位弧状隆沈装飾文を1つのメルクマールとした時、綱取Ⅰ式は、本県の梨野A遺跡・六反田遺跡に強い近似性をもち、その分布の北限は前述の岩手県八天遺跡にまで達している。[注9)] 又綱取Ⅱ式の「わらび状文」、「J字文」、縦位波状沈線文は、当遺跡や六反田遺跡出土のものとモチーフの点などで共通するものがある。[注42)]

称名寺式との関係は、前述の向畑遺跡[注22)]の例の他に、当遺跡では、前述の器形と異なるが称名寺式の一部の器形に類似する内外面全面研磨の深鉢が1点存在する(第185図20)。同様の器形のもの(無文ではないが)は、福島県綱取遺跡の綱取Ⅰ式の中にもみられ[注11)]、綱取Ⅰ式との関連でまず捉えるべきであろう。文様モチーフの中には称名寺A貝塚出土称名寺Ⅰ式土器(写真20-4)。同B貝塚出土Ⅱ式土器[注32a)]に類似するものがある(第186図18・20)が、口縁部の「C」字状(弧状)隆沈線文(「C字形貼付文」)[注32a)]で盲孔間を沈線でつなぐものが称名寺Ⅱ式に盛行する[注32a)]点、及び当遺跡で弧状沈線間に連続刺突文(一列)が施文されるもの(第185図12)は、称名寺Ⅱ式に表出技法の上で近似している点は、本群・綱取Ⅰ式との併行関係を考える上で重要である。しかし六反田遺跡後期初頭土器に前述の弧状沈線間刺突文のものがないことは今後の検討を要する。

掘之内Ⅰ式土器は、弧状文(「曲線文」)・斜行文(「幾何学文」)を主として沈線及び磨消縄文で表出する。[注31)] 掘之内Ⅰ式土器は近年、掘之内Ⅰ式の初期の部分を切離す必要が主張されている。[注32)] 未だ層位的根拠等を明瞭にしうる資料は十分ではないが、前述の岩手県八天遺跡で当遺跡第Ⅷ群土器類似の土器の更に上層に、多条弧状沈線文の土器が存在し(第187図145・149)このような土器が「掘之内Ⅰ式の初頭」以外の掘之内Ⅰ式土器に近似していることから「掘之内Ⅰ式初頭」(初期)を分離しうる可能性は十分あると考える。文様モチーフとしては、本群には、今村啓爾氏が「掘之内Ⅰ式初期」とした千葉県貝ノ花貝塚出土の対称弧線下垂文(J定文のように弧状上端の片側の空間がないもの)のものがみられる。ただし、本群Aグループの土器は沈線間磨消縄文を主体とするが、例えば貝ノ花遺跡では縄文地文上に沈線で施文されるという違いがある。又文様形態的には、貝ノ花貝塚のものは本群Aグループのような口縁部と体部を区画する隆沈帯はみられずより曲線的に流れる傾向を持つ等やや後出的要素がある。このモチーフはやはり綱取Ⅰ式[注10)]にも存在し、本群との併行関係を考える上で重要である。

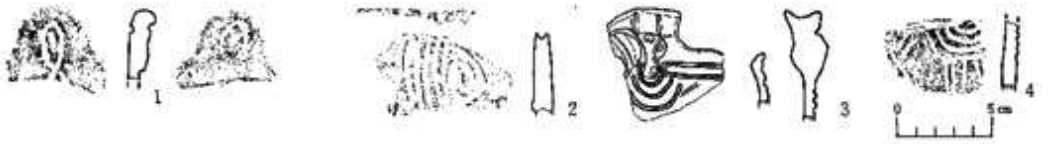
十腰内Ⅰ式[注33)]は、東北北部編年における後期前葉(広義)の土器である。渦状・弧状の磨消縄文・沈線文を特徴とする。青森県弘前市十腰内遺跡を標式遺跡とし、岩手県立石遺跡[注23)]・八天遺跡[注9)]でも確認され、後藤勝彦氏は、「十腰内Ⅰ式(新)」は南境貝塚まで拡がっているとしている。[注34・35)] 又、十勝内Ⅰ式以前の後期初頭土器の存在も指摘されているが[注34)]各研究者によりその基準はまちまちである。当遺跡では、十腰内Ⅰ式に類似する土器は出土しておらず、本群土器に類似性を多く

面を丁寧に研磨している。類例としては、青森県蟹沢遺跡第3群土器[註35)]に近似するものがある。葛西勵氏はこの3群土器を「十腰内Ⅰ式土器」の直接的母胎となる土器で「前十腰内Ⅰ式土器」[註35)]としている。氏は層位的根拠を明示してないが報文によれば、9号住居跡で当遺跡出土の壺に類似する壺(第188図23)と貼床面上で共伴する壺があり、その壺の口縁部片の縦位把手に盲孔？開沈線文のあること(第188図22)は、本群土器をはじめ東北南部の後期初頭土器の特徴と共通する点である。「前十腰内Ⅰ式土器」における網目状撚糸文の存在を含めて今後、資料の増加をまってその併行関係を検討していくべきであろう。

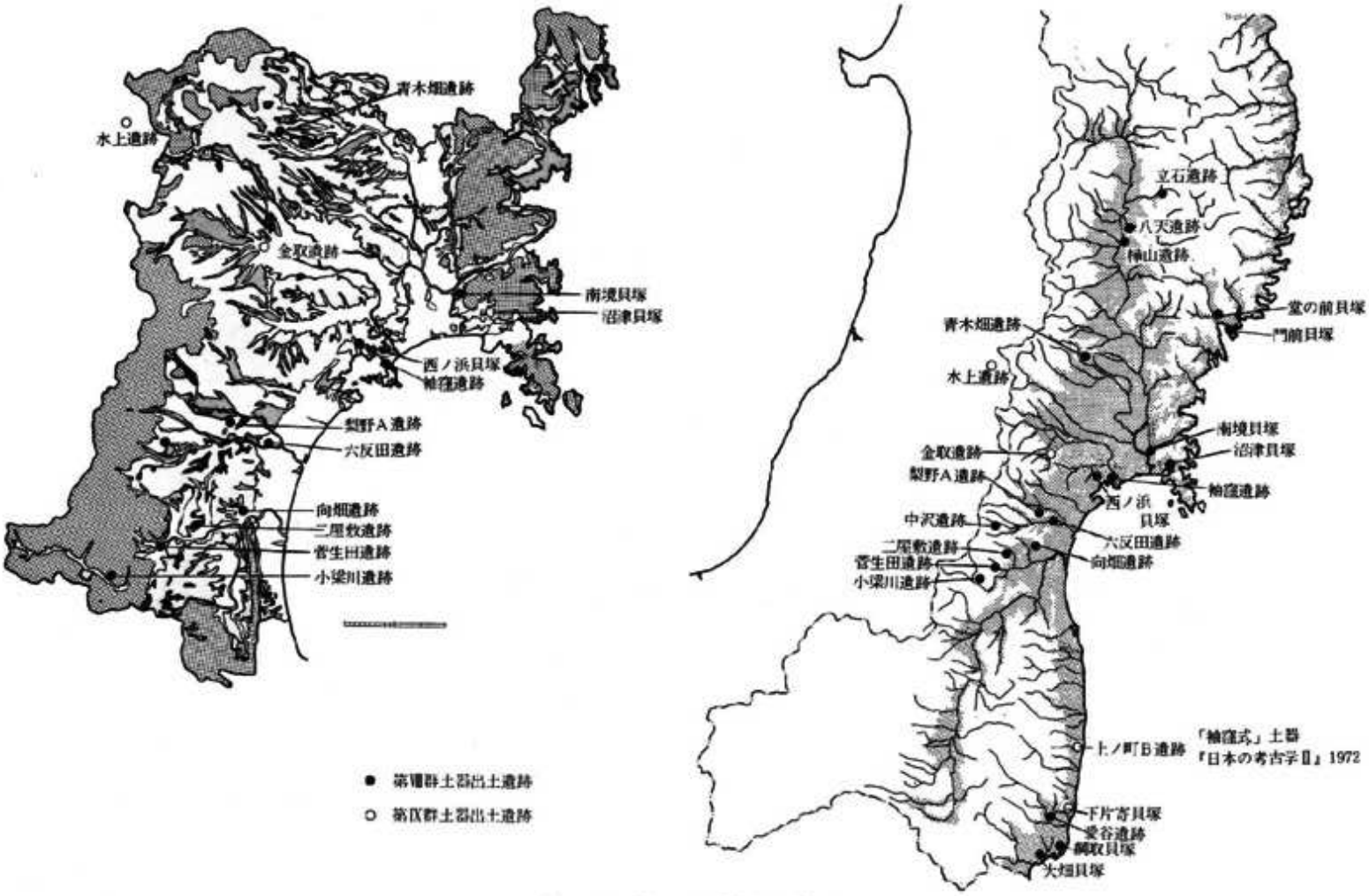
第Ⅸ群土器について

1類は突起に縦位「S」字状文、2類は体上部の文様基点や突起に多条弧状並行沈線文の施文されるもの(A・B共下図参照)で仙台市六反田遺跡後期初頭土器の範疇にないものである。層位的出土例は八天遺跡にある。即ち1類は、「八天遺跡Ⅱ群9類(当遺跡Ⅷ群土器Cグループ)の「層位別出土量」により報告者が判断した「盛行」のまとまり」(八天遺跡Ⅱ群8類～Ⅲ群2類)には属していないが、層中で実際には共伴しており、2類に相当する土器は、この層の更に上層より出土している[註9a)]。又、宮城県余取遺跡で報告者が「その出土状況から時期差はない」としている後期前葉の包含層では、1類類似のものと2類類似のものが共存していることからその時期差[註37)]は近接していると思われる。1類は後藤勝彦氏が南境貝塚出土土器A群に含まれるとしたもので[註5c)]「西ノ浜貝塚3層出土土器に相当するB群土器」より「確実に下層より出土している」と指摘したものである[註13)]。2類に類似する文様は綱取Ⅱ式に豊富に含まれる[註10・38)]。そして掘之内Ⅰ式のうち前述の「掘之内Ⅰ式土器の初頭」を差引いたもの、特に千葉県方面、例えば貝ノ花貝塚に共通するモチーフに近似する[註32)]。又、前述の西ノ浜3層出土土器も、貝ノ花貝塚出土土器にみられる変形わらび状文に近いモチーフの可能性がある[註32b)]。

以上、1類は後期前葉において当遺跡Ⅷ群土器に直続するかその後半部分で共存する可能性がある。2類はAに後続し、福島県を中心とする綱取Ⅱ式・関東特に千葉県方面の掘之内Ⅰ式(「初頭」を除く)に併行関係にある可能性が強いものである。その分布は前述の岩手県八天遺跡までわずかであるが遠する[註39)]。西ノ浜3層出土土器もそのモチーフからこの段階に近いと思われる。



第Ⅸ群土器　1類：1　2類：2～4



第189図　第Ⅷ・Ⅸ群土器分布図

ま と め

第Ⅷ群土器は梨野A遺跡の東南約7.5kmに所在する六反田遺跡包含層及び遺構出土後期初頭土器のもつ特徴にほぼ包括され、1．A（渦状・弧状磨消縄文、沈線文）＋B（隆線間研磨文・隆沈線文）グループを施文する土器群を主体に2．Cグループ（連続刺突文―「鱗状刺突文」[註40]主体）と3．Dグループ（連続刺突or刻み隆線文）をもつ土器群及び4．Eグループ（方形区画文）をもつ土器群――により構成される。標高180～190mの丘陵上の当遺跡と標高10m前後の自然堤防上の六反田遺跡との土器における類似は当時の人間集団の居住空間を考える上で注目される。これらは大木10式末葉文様形態の系譜に連なる4．Eグループ文様をもつ土器群を伴うことや八天遺跡の出土状況との対比から後期前葉の早い時期（初頭）に位置づけられる。そして1・2・3・4の構成比から宮城県中央部～県南部に強い共通性をもつまとまりを有することが判明した。又2．と3．グループにおいて岩手県南部～宮城県北部と共通性をもち、1．グループにおいて福島県域との共通性を有することが判明した。

各型式間における併行関係としては、「前十腰内式」―門前式―（六反田・梨野A遺跡後期初頭土器）―「袖窪式」―綱取Ⅰ式及びⅡ式の一部―称名寺式～堀之内Ⅰ式（初頭）を今後の検証のための仮併行ラインと考える。

第Ⅸ群土器は、第Ⅷ群との共伴関係を六反田遺跡後期初頭土器によって保証されないもので、八天遺跡の出土状況などから1類（S字文のもの）は、Ⅷ群土器の直後か後半に近接し、2類（多条弧状並行沈線文のもの）は、Ⅷ群土器より確実に後出のもので後期前葉（広義）の後半に位置づけられる。文様モチーフの対比から2類は綱取Ⅱ式・堀之内Ⅰ式（「初頭」を除く―特に千葉県方面）との併行関係を今後の検証のための仮併行ラインと考える。なお、Ⅷ・Ⅸ群土器各々に伴なう文様のない土器（研磨のみ・地文のみ）は出土状況の制約から分析しえなかった。

以上により太平洋岸河川諸流域における土器の特徴の共通性が示唆する人間集団間の交流の問題も提起されるが、層位的検出例の少い現状では、資料の増加をまって検証していく必要がある。

末筆ながら伊東信雄先生・藤沼邦彦氏・丹羽茂氏・阿部ひろし氏他宮城県教育委員会の諸氏・本堂寿一氏（北上市立博物館）樫村友延氏（いわき市教育文化事業団）佐藤正一氏（山形県教育委員会）より多大の御指導を頂いた事を感謝し、思いちがいがあれば、もとより筆者の責任であることを申し添えます。

田 中 則 和

註1　丹羽茂他「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ・宮城県文化財調査報告書第52集』宮城県教育委員会1978

2　田中則和他「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第34集 仙台市教育委員会1978

3　六反田遺跡の器形分析より、同遺跡においては、径30cm前後のものを「大型」と規定している。

4　及川洵氏他『門前遺跡』岩手県陸前高田市教育委員会（1974）で規定する「門前式」を指す。

5a　伊東信雄「古代史―縄文文化の変遷」『宮城県史』宮城県　1957

5b 伊東信雄他「縄文時代－縄文土器」「解説－はじめに」『宮城県史34史料集』宮城県1981

5c 筆者は註2の「六反田遺跡発掘調査報告書」(1981)にて後藤勝彦氏の「縄文後期宮戸Ⅰb式周辺の時味」『東北の考古・歴史論集』における後期前葉の編年「A群土器(宮戸Ⅰa式?)・B群土器(宮戸Ⅰb式)・C群土器(南境式)」に従ったが、氏は「縄文後期の土器」『縄文土器大成③後期』講談社1981で見解を修正し「南境式(宮戸Ⅰb式)」としている。したがって本論では「南境式－後期前葉」という大枠から改めて記述をすすめていく。伊東信雄氏が5aで公表した資料は、掘之内Ⅱ式に類似し、文様モチーフも充填縄文部により表現され、本群土器と相違するが、5bでは、写真のみであるが門前式・軸線式の要素を包括したものとして南境式を捉えていると解釈し御本人に会い、直接確認することができた。

6 林謙作「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本の考古学』Ⅱ河出書房　1967

7 註2の「後期初頭土器の分類」と対比させると、Eグループが六反田遺跡の1A類(1類:口縁部と体部に連続した文様が施文されるもの)に相当し、(A・Bグループには1A類の定義そのものには含まれる点で、方形区画文の系譜をひくものがある。一第185図13)、Aグループは、1A・2A・B・Dにまたがり(2類は口縁部と体部を区画するもの)、C・Dグループは2類に属するが特にDグループは口縁部と体部を突起部によって連結する点に特徴がある。

8 丹羽茂他「省生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書・宮城県文化財調査報告書第92集』宮城県教育委員会1983
筆者は註2の「後期初頭土器の分類」の中で1A類の説明として①「大木10式(末裔)特有の縦位区画隆起線、方形区画文(沈線区画・隆起線区画の後に縄文が充填される)が、各々鎖状隆起線、磨消縄文手法又は磨消撚糸文手法(縄文又は撚糸文を施文した後で沈線区画し区画内を磨消す)に変化し、縦位波状沈線文、地文に網目状撚糸文、縦位縄文＋綾絡文が出現する。」とし②「後期前葉の宮戸Ⅰb式土器(原文「b」ヌケ)、南境式(註5c参照)に先行」するとしたが、①、②間の論理的展開は非常に不十分なものであり、本書でその補完の責を果したい。

9a 本堂寿一他「八天遺跡(昭和50年～昭和52年度調査)」『北上市文化財調査報告25集』北上市教育委員会　1979

9b 同上「Ⅲ A、B'トレンチの層位と類別土器について」による

10a 馬目順一「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について」『考古』第16号　1970.

10b 馬目順一「大畑貝塚調査報告」いわき市教育委員会　1975

11 金子・和出「綱取C地点貝塚の発掘」『小名浜』いわき市教育委員会磐城出張所　1968

12 佐藤洋他「山口遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第33集　仙台市教育委員会　1981

13 加藤孝・後藤勝彦「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県埋蔵文化財調査報告書第13集』宮城県教育委員会1967

14 阿部正光・佐藤正人・三塚敏明「沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書」石巻市教育委員会　1976

15 丹羽茂氏はすでに註8において沼津貝塚(第17図版2、第20図版、第21図版)、六反田遺跡(第46図)を「大木10式最終段階」としている。

16 加藤道男「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書第85集』宮城県教育委員会　1982

17 七ヶ宿町小梁川遺跡にて「X」状磨消縄文＋波状沈線文(Xの中央に8の字状輪形隆文)と縦位鎖状隆線文により文様を構成する深鉢を実見したが、このグループが主体を占めるかどうかについては報告書の刊行を待つしかない。又、蔵王町二屋敷遺跡には、梨野A、六反田遺跡にある渦巻＋斜行磨消縄文のモチーフが存在するが、六反田遺跡等の場合と反転し充填縄文によりモチーフを表現している土器のあることを実見した。(「縄文土器大成3後期」(1981)・P39－91の遺物など)又遠隔地に存在する例として東京都平尾No.9遺跡(安孫子昭二「平尾遺跡調査報告」1974)があり「X」状文と渦巻文が共存している例で安孫子氏は、綱取Ⅰ式との類似を指摘し、現地の土器属性の違いから「搬入」としている。(P298－20－3参照)

18 BグループがAグループに同一個体で共存するものとして宮城県川崎町「中沢遺跡(「川崎町史」1975)で縦位長楕円形隆線文と縦位波状沈線文の共存例がある。

19 鈴木孝志他「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告」「文化財調査報告第7集」北上市教育委員会　1969

20 及川洵他「堂ノ前貝塚」陸前高田市教育委員会　1972

21 主浜光朗氏御教示

22 芳賀寿幸「向畑遺跡調査概報」『柴田町郷土研究会会報』第7号　1974

忠岡・芳賀「向畑遺跡」『柴田町の文化財』第5集　1974

23 中村良幸「立石遺跡」『大迫町埋蔵文化財報告第3集』　大迫町教育委員会　1979

24 吉田　格「横浜市称名寺貝塚」『東京都武蔵野郷土館調査報告書第1冊』　1960

25 堀之内土器については山内清男「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌43』1928　同『日本先史土器図譜』(1939～41)

堀之内貝塚については、清水潤三「堀之内貝塚シーⅠ・シーⅡ地点発掘報告」・西村正衛・玉口時雄・金子浩昌「堀之内貝塚リ・ハ・エ地点発掘報告」岸沢長介・麻生優「堀之内貝塚エ・ミ・キ・モ・サ地点発掘報告」『人類学雑誌65　3』1957

26 二屋敷遺跡は、註17の他に林謙作・藤沼邦彦他「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報・宮城県文化財調査報告書第24集』1971・『白石市史・考古資料編』1976(門前式土器の破片が掲載されている)で紹介されている。

27 未公表資料として註26の二屋敷遺跡に称名寺式類似の文様をもつものがある(実見)

28 本県における、綱取Ⅰ式との類似・「V」字状文の少なさについてはすでに丹羽茂氏註8の指摘がある。

29 註26の二屋敷遺跡では、口縁部縦位装飾文として対称弧状のものを実見している。

30 吉田格「神奈川県称名寺貝塚」『関東の石器時代』盛山閣1972、実際には同書は拓本不鮮明のため註32で今村氏引用のものを参考にした。同氏は称名寺Ⅱ式に位置づけている。

表出技法は、本群が沈線間磨消縄文であるのに対し、称名寺B貝塚のものは、磨消縄文は少ない。

31 柚沼修平「堀之内土器論1・2」『史館5号・6号』1975・1976

32a 今村啓爾「称名寺土器の研究(上)(下)」『考古学雑誌63　1・63-2』日本考古学会1977「Ⅰ式・Ⅱ式」の概念は本書による。

32b 関根孝夫「第8章遺物一第1節一土器」『貝の花貝塚・松戸市文化財調査報告書第4集』松戸市教育委員会(1973)では「中期的要素を強く残す」、「堀之内Ⅰ式土器・称名寺式1群・2群と呼ばれるもの」を1類とし「それぞれ主体的な存在として検出しえていることは、これが時間的な関係に位置づけられる」としている。ただし1類のなかでの共伴関係を明らかにしうるものはない。

33 今井富士雄・磯崎正彦他「十腰内遺跡」　田村誠「大曲1号遺跡」『岩木山』1968

34 後藤勝彦「後期初頭の土器一東北地方」『縄文土器大成3後期』1981

鈴木克彦「中宇田遺跡」『国道280号線道路改良工事関係埋蔵文化財試掘調査報告書」青森県教育委員会　1973

鈴木克彦「亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会　1974

成田誠治「千歳遺跡13青森県埋蔵文化財調査報告書第27集」青森県教育委員会　1976

35 葛西勵「餐沢遺跡」青森市餐沢遺跡発掘調査団　1979

「十腰内1式土器の編年的細分」『北奥古代文化第11号」　1979

36 註2のP284・この17号土壙堆積土よりもう1点、遺跡全体としては非常に希少な多条並行弧状沈線文をもつ土器(既群土器とは異なる)が出土している。

37 小野寺祥一郎他「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書第70集』　1980

38 馬目順一「綱取貝塚第4地点発見の堀之内Ⅰ式期土器の考察」『小名浜』いわき市教育委員会磐城出張所　1968

「上ノ町B遺跡調査報告」『南奥考古学研究叢刊第3冊』　1981

39 名和達朗・阿部明彦他「水上遺跡第2次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書第40集』山形県教育委員会(1981)掲載の水上遺跡に1類類似の土器群があり、当遺跡でも出土している内外面施文のみの深鉢が出土している。内陸部(標高225～226m)における「連続S字文」ある土器の分布地として重要である。丹羽茂氏の御教示を頂いた。

40 「縄状刺突文」をもつ土器は六反田遺跡(註2)では、口縁部弧状隆線文と体上部に隆線開放扇文を伴うことが確認されている。

41 堀之内式・称名寺式及びH本海側の資料については若干しか検討できなかった。今後の検討によって補充してゆきたい。

42 馬目順一氏は「堀之内式土器シンポジウム(1982)で、愛谷遺跡資料を用い綱取Ⅱ式を3細分したが、この中の「蕨手紋や鉤状」字紋あるいは蛇行する複位のジグザグ紋が磨消縄文で盛行する一群」は、本群・六反田遺跡出土土器と共通性をもつ「シンポジウム資料」(1982)

縄文土器の底部

松岡　敦子

梨野A遺跡出土の縄文土器底部資料は、遺構、基本層Ⅰ～Ⅳ層、風倒木痕中より988点出土しており、底部圧痕の有無と種類によって編物痕、木葉痕、無文（全面研磨され何らの圧痕も認められないもの）、不明圧痕、不明に分類した。

編物痕を有する底部は、編物痕のみで研磨が及んでいないもの76点、編物痕に研磨が及んでいるもの81点、全部で157点である。編物痕が認められるものが全体の中で示める割合は15.9％である。編物痕に研磨が及んでいるものには、一部研磨、周辺研磨そして全面研磨しているものがある（全面研磨はむしろ無文の範囲に含まれるものであるが底部破片資料のため研磨の範囲を明確にしえないため、研磨の範囲による細分は行なわなかった）。

木葉痕を有する底部は、木葉痕のみ15点、木葉痕に研磨が及んでいるもの25点、全部で40点（4.0％）である。無文は154点（15.6％）、何らかの圧痕と思われる不明圧痕は4点、不明（小片のため分類不可能の遺物も含む）は633点である。

また、底部研磨の有無より分類すれば研磨の及んでいる遺物は、全体の中で264点（26.7％）で3割近くになる。

1．編物痕について（第190図．第192図1～11）

編物痕を有する底部157点のうち編み方が判別できる底部は、41点である。編物型式は3型式に分けられそのうちⅢ類については「おもて」と「うら」の圧痕がある（第28表）。各型式に組織図、その下に単位（編み方に規則性がある場合、繰り返しの単位がある）、編み方の説明を載せた。図の表示は、タテの材がヨコの材の上にあるところを斜線、タテの材がヨコの材の下にあるところを白で示した。

Ⅰ類……「1本越え　2本潜り　1本送り」に編まれているもの（第190図1）

Ⅱ類……「2本越え　3本潜り」に編まれているもの（2）

Ⅲ類「おもて」……「4本越え　2本潜り」に編まれているもの（3）

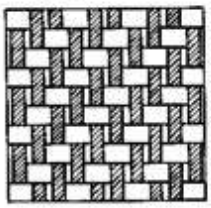
「うら」……「4本潜り　2本越え」に編まれているもの（4）

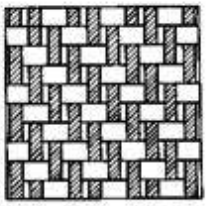
Ⅰ類は、「1本越え　2本潜り　1本送り」に編まれているもので左1本送り9点、右1本送り13点で計22点（53.7％）出土しており本遺跡において一番多い編み方であり、又、

第28表　底部の編物圧痕型式と数量

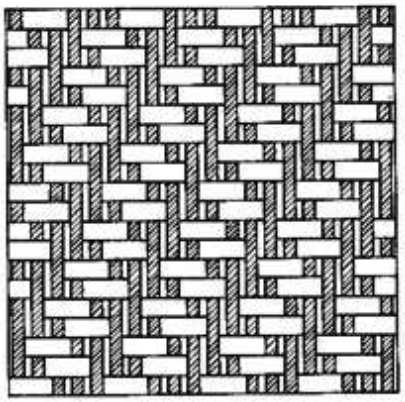
型　式	Ⅰ　類	Ⅱ　類	Ⅲ類のおもて	Ⅲ類のうら	計
計	22	1	10	8	41
%	53.7	2.4	24.4	19.5	100

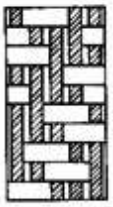
1．Ⅰ類



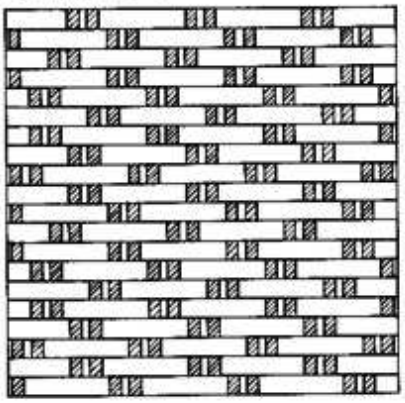


2．Ⅱ類

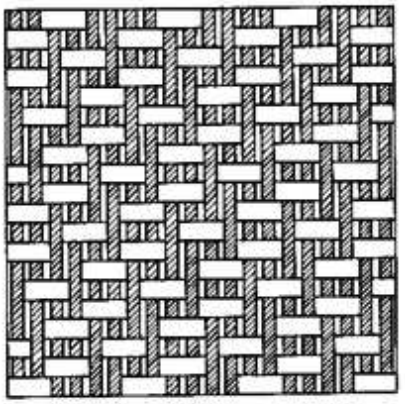


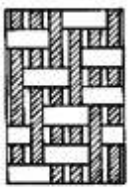


3．Ⅲ類「おもて」



4．Ⅲ類「うら」





第190図　編物模式図

Ⅰ類は東日本に多くみられる編み方と報告されている。[注1]第192図1はⅠ類に編まれている。2は研磨されている。材の幅はヨコ2～4.5mm、タテ2～5mmであるが3は晩期の土器の底部であり材の幅はヨコ1～1.5mm、タテ1.5～2mmと細い材で編まれており、他のⅠ類の圧痕とは異なる感じを受ける。又、タテヨコの材の他にナナメの材が加わっているものがある。

Ⅱ類は、「2本越え　3本潜り」に編まれているもので1点(2.4%)出土しており、4は編物の上で土器を成形した後、底部に粘土を足して全面研磨したものと考えられ、一部粘土の剝れたところより編物痕が観察された。敷物利用後に底部に粘土を足した例は、宮城県山口遺跡[注2]、六反田遺跡[注3]でもみられる。又、同じ編み方は京都府桑飼下遺跡[注4]より出土している。材の幅はヨコ1～3.5mm、タテ1～2.5mmと細い材で編まれている。

Ⅲ類は、模式図の編み方説明より、Ⅲ類の「おもて」で越え、潜りになっている部分がⅢ類の「うら」では潜り、越えになっており、Ⅲ類は「おもて」と「うら」の編み方が観察された。又、「おもて」と「うら」の送りは左右対称なので同一の敷物利用の可能性が考えられる。Ⅲ類の「おもて」は、「4本越え　2本潜り」に編まれているもの10点(24.4%)出土、Ⅲ類の「うら」は、「4本潜り　2本越え」に編まれているもの8点(19.5%)出土しておりⅠ類に次いで多い編み方である。同じ編み方は、Ⅲ類の「うら」は福島県八景腰巻遺跡[注5]、Ⅲ類の「おもて」は宮城県青島貝塚[注6]、袖窪貝塚[注7]、Ⅲ類の「おもて・うら」は、六反田遺跡[注3]で出土しており、但し、「おもて」の送りは左送りで本遺跡では右送りである。5はⅢ類の「おもて」に編まれており、6は材に筋又は2本組の材で編まれている。7、8はⅢ類の「うら」に編まれている。材の幅はⅢ類の「おもて」はヨコ1.5～8.8mm、タテ2～5mm、Ⅲ類の「うら」はヨコ2.5～5mm、タテ2.5～4mmである。

9、10、11は編み方不明である。底径については、編物痕を有する底部を底径よりみると底径5.0～14.9cmの範囲であり底径10.0～11.9cmが多い。

2．木葉痕について（第192図12～14）

木葉痕を有する底部は40点出土している（木葉痕のみ15点、木葉痕に研磨が及んでいる25点）。14は木葉が2枚重なっていると思われる。又、六反田遺跡でみられたような木葉と編物のだぶる底部[注8]は、観察されなかった。

底径については、底径5.0～11.9cm、13.0～13.9cmの範囲であり、底径10.0～10.9cmが多い。又、底径10.0cm以上の底部は8点である。

3．不明圧痕について（第192図15・16）

何らかの圧痕と思われる底部で研磨が及んでいるもので4点出土している。

4．底部を利用している遺物について

土製円板の中で底部を利用している遺物が3点出土している。無文が2点であり、もう1点は編物痕で研磨が及んでいるもので、編み方はⅠ類である。

5．まとめ

底部圧痕より当時のカゴ、敷物の編み方を間接的に知ることができる[註8]が編物痕においては、本遺跡では越えと潜りの数の異なる3型式の編み方がみられる。一番多い編み方は、Ⅰ類…「1本越え　2本潜り　1本送り」であり、東日本に多い編み方とされている[註1]。次いでⅢ類、Ⅱ類となる。Ⅰ類とⅢ類で97.6%を占める。又、Ⅰ類とⅢ類の編み方は、六反田遺跡出土の大木10式末葉～後期初頭の底部にみられる編物型式のⅡ、Ⅵ類に対応して、六反田遺跡でも編物痕の87.2%（編み方不明を除く）を占めて最も多い編物型式である[註3]。

又、青島貝塚出土の底部で当遺跡底部Ⅲ類の「おもて」に相当する拓影図30の4はカゴなどの容器の底～胴部の編み方の圧痕と思われる[註6](191図)。底あみはタテヨコ4本1組の材で網代あみ(3本とび)で、胴あみはⅢ類の「おもて」の編み方である。又、六反田遺跡出土のⅥ類の「うら」(本遺跡のⅢ類の「うら」)の底部で拓影第7図の10は、タテの材が扇形に開いている[註3](第191図)。以上の事から2遺跡の例ではあるが本遺跡のⅢ類の「おもて、うら」は、カゴなどの容器の胴あみの可能性が考えられる。

時期は、晩期の第192図3(Ⅰ類)の他は出土した遺構、層位より大半が中期後葉～後期初頭及び晩期と思われる。そして近年調査され、詳細な報告書の刊行されている宮城県の遺跡である上深沢遺跡[註9]の大木9式土器、富生田遺跡[註10]の大木10式土器の底部には編物痕が観察されるものが非常に少ない[註11]。又、西ノ浜貝塚4層出土の大木10式土器の底部には編物痕がいくつかみられる[註12]が、同土器は大木10式でも後半とされる[註13]ということなどから、本遺跡出土の編物痕を有する底部の多くが大木10式の後半段階から後期初頭に位置づけられる可能性も考えられる。

最後に底部をまとめるにあたって佐藤甲二氏、田中則和氏はじめご指導下さった方々に深く感謝致します。

註

1．安孫子昭二　「平尾No19遺跡　網代痕について」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』　南多摩郡平尾調査会1971　P173、174より

2．佐藤洋　「土器製作技術について」『山口遺跡発掘調査報告書』　仙台市教育委員会1981　P199より

3．松岡敦子　「六反田遺跡出土縄文土器の底部」『六反田遺跡発掘調査報告書』　仙台市教育委員会1981　P202より
編物圧痕は7型式に分けられⅥ類の「おもて・うら」は、本遺跡のⅢ類「おもて・うら」と同じ編み方である。P212より「無文で分類した中で編物痕の残存する底部外面に更に粘土をつぎたしている例がある。」

4．上羽陽美「底部圧痕」『桑飼下遺跡発掘報告』　京都府舞鶴市平安博物館1975　P125～　「網代の編み方」より編み方模式図、分類Ⅰと同じである。

5．佐藤房枝・田中礼子　「底部資料」『東北自動車道遺跡調査報告書』　宮城県教育委員会1982　編み方は6類にされているが区分されたワクを取りタテヨコを反対にすると本遺跡のⅡ類の「うら」になる。

6．加藤孝・後藤勝彦　「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』1975　P54の拓影、図30の4の底部圧痕が本遺跡のⅡ類の「おもて」の編み方と同じである。

7．宮城県桃生郡鳴瀬町宮戸島洞窟　洞窟貝塚資料　宮城教育大学考古学研究会所蔵資料実見

8．植松なおみ　「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』1980　P20～

9．丹羽茂他　「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県教育委員会1978

10．丹羽茂他　「嘉生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』　宮城県教育委員会1982

11．註9)の報告書で「無文」と分類されているものでも編物痕が認められるものもあり、「編物痕がない」ということではなく、ていねいなミガキにより、編物痕が磨り消された可能性を持っている。

12．加藤孝・後藤勝彦　『西ノ浜貝塚緊急発掘調査報告』1967

13．丹羽茂　「大木式土器」『縄文文化の研究　第4巻　縄文土器Ⅱ』　雄山閣1971

参考文献

(1) 荒木ヨシ　「縄文時代の網代編み」『物質文化』1971

(2) 草間俊一編　「崎山弁天遺跡」　岩手県大船渡町教育委員会

(3) 額田巌　「竹細工の民族学的研究」『物質文化』7　1966

(4) 植松なおみ　「東北型網代圧痕について一鳥取市桂見遺跡出土資料の再検討を中心に一」『古代文化』

(5) 日本観光文化研究所　『暮しの中の竹とわら』1982

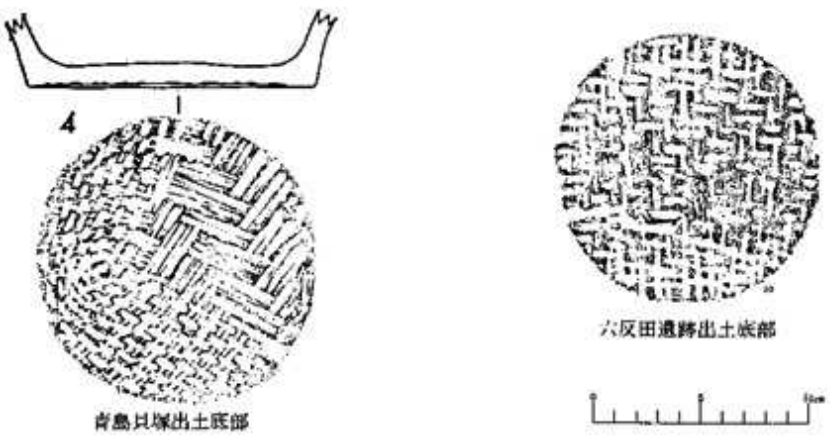
(6) 『季刊　考古学』創刊号　雄山閣1982

(7) 宇野文男　「パシー文化圏における土器作り」『季刊人類学』

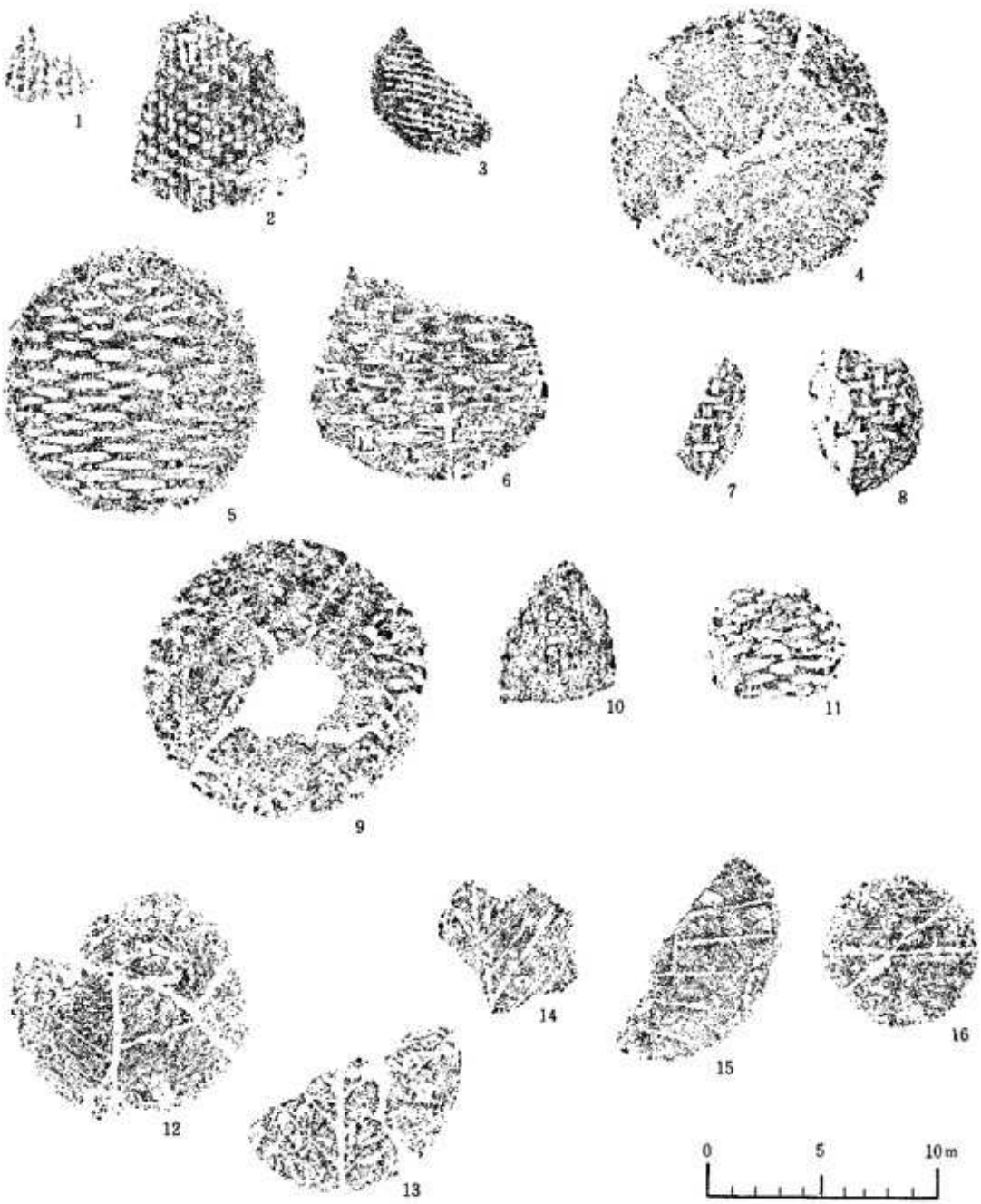
(8) 小林行雄　「編物」『続古代の技術』1964

(9) 後藤和民　『縄文土器をつくる』　中公新書1980

(10) 新井司郎　『縄文土器の技術』　中央公論美術出版1973

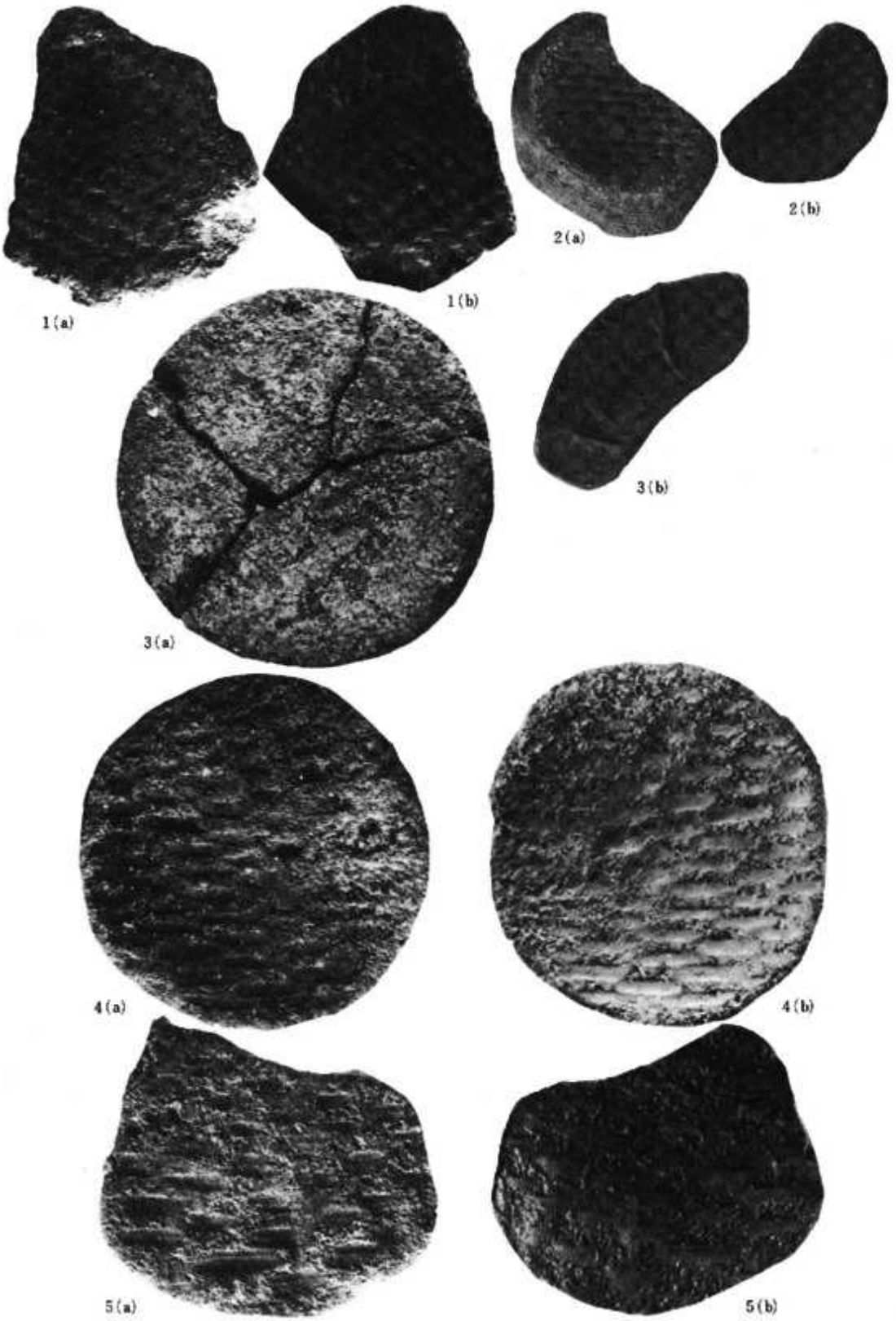


第191図　底部拓影(1)

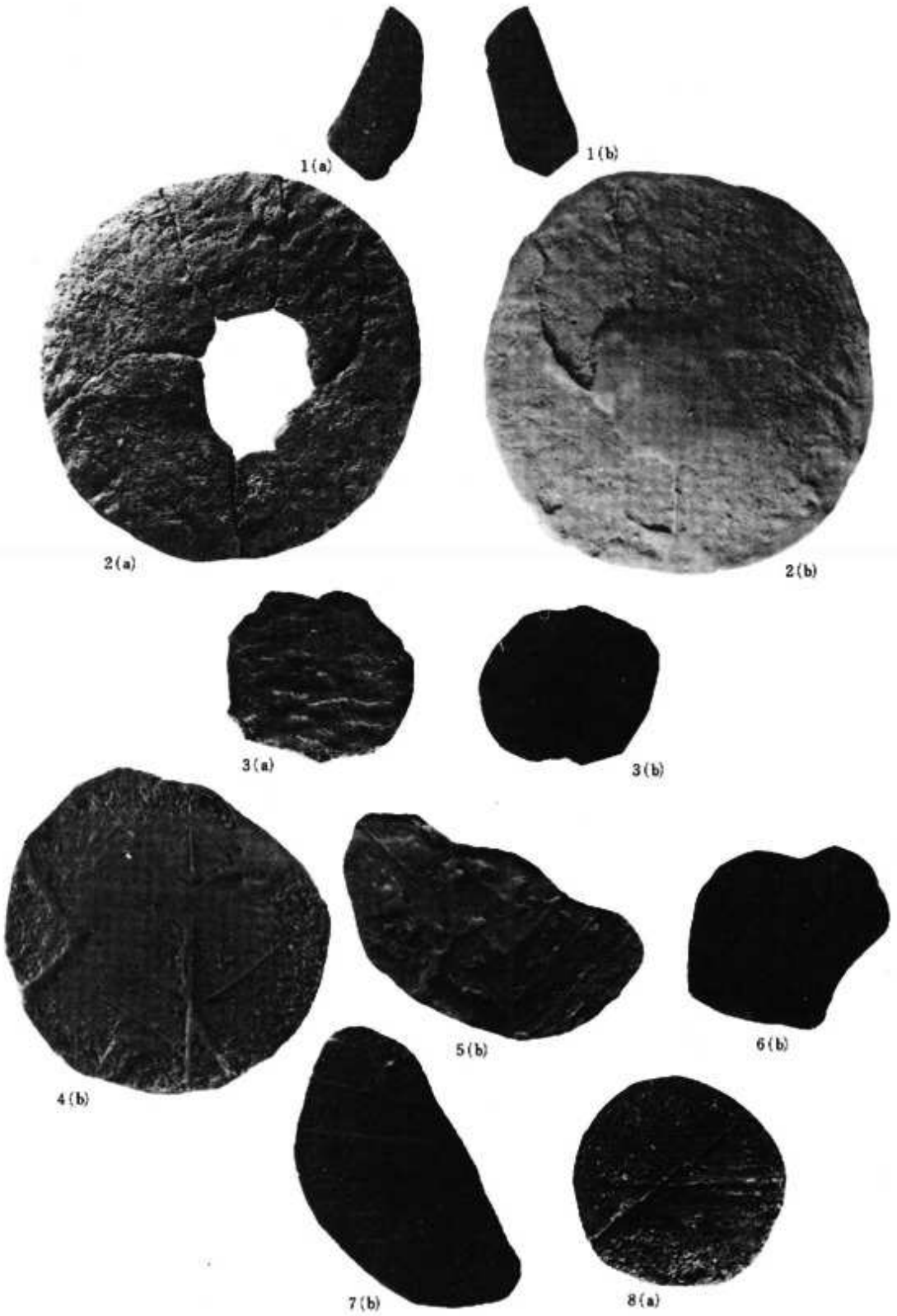


拓影	編み方	写真図版	備考	拓影	編み方	写真図版	備考
1	I 類		13D 堆積土1層 M-6(d)	9	編み方不明	第194図-2	復元土器 2号住居土器 K-13(b)
2	I 類	第193図-1	N-6(b) Ⅲ層	10	編み方不明	—	表採
3	I 類	第193図-2	第142図 K-12(b) Ⅰ層	11	編み方不明	第194図-3	K-7(a) Ⅲ層
4	II 類	第193図-3	6D 堆積土1層 M-7(c)	12	木葉痕	第194図-4	2号住居跡 堆積土1層 K-13(a)
5	Ⅲ類・おもて	第193図-4	K-7(d) Ⅲ層	13	木葉痕	第194図-5	I.-6(c) Ⅲ層
6	Ⅲ類・おもて	第193図-5	19D 堆積土1層 J-8(b)	14	木葉痕	第194図-6	20D 堆積土2層 N-7(a)
7	Ⅲ類・うら	第194図-1	J-8(b) Ⅰ層	15	不明圧痕	第194図-7	K-7 Ⅲ層
8	Ⅲ類・うら	—	K-8(a) Ⅲ層	16	不明圧痕	第194図-8	20D 堆積土1層 N-7(a)

第192図 底部拓影 (2)



第193図　底　部　写　真(aは実物、bはモデリング)(1)



第194図　底　部　写　真(aは実物、bはモデリング)(2)

接合資料について

―6号ピット出土の接合資料について―

多賀城跡調査研究所　後藤　秀一

本遺構からは、88点の石器が出土している。その内容は、石匙1点(第67図1)、石錐1点(第67図4)、彫刻刀形石器(ピュアリン)1点(第67図6)、スクレイパー13点(このなかには、〝鋸歯縁石器〟―(デ)で表示、〝ノッチ〟―(ノ)で表示を含む。第67図2、3、5、7～12)、2次加工のある剥片10点、微細剥離痕のある剥片6点、剥片47点、石核3点、砕片6点である。また、この遺構の性格としては、石器やその素材となる目的剥片の貯蔵施設の可能性が高い。このようにピットから多量の石器が出土する例は、これまでいくつかの遺跡でも確認されており、その性格としては剥片の貯蔵施設と考えられている[註1]。しかし、このような遺構は、さほど類例があるわけではなく、その性格については今後さらに検討を要する。

ところで本遺構からは、5例の接合資料が抽出できた。すなわち、

接合資料1：スクレイパー4点＋剥片15点＋石核1点の接合資料である。なお、他に同一母岩のスクレイパー1点、剥片2点がある。

接合資料2：2次加工のある剥片1点＋微細剥離痕のある剥片1点＋剥片7点の接合例である。

接合資料3：3点の石器が接合して1個の剥片になる接合例である。

接合資料4：スクレイパー1点＋剥片1点の接合例である。(第69図26～28)

接合資料5：剥片2点の接合例である。

以上5例のなかで、特に接合資料1・2・3は、石器製作技術のあり方の実態を示す良好な資料であり、以下順に説明して行きたい。

接合資料1　(第68図1～10、69図11～20、71図11)

個体別資料2例の接合資料である。すなわち、本資料のなかで最後に剥離された剥片は石核に転用され、さらに剥離が進められているのである。

〈剥離の順序〉

①：剥片1・2・3の打面を形成した剥離。

②：①で形成された剥離面を打面として、剥片1・2・3の連続剥離（最低5枚以上の剥片が剥離されている)。

③：②で形成された剥離面（剥離作業面）を打面として(打面を90°転位)、4・5・6の連続剥離（最低4枚以上の剥片が剥離されている)。

④：③で形成された剥離面（剥離作業面）を打面として（打面を90°転位)、7・8・9・10・11

・12・13の連続剥離（最低９枚以上の剥片が剥離されている）。

⑤：さらに、打面を90°転位して、②の剥離と同様な方向からの加撃により、14・15・16・17・18・19・20の連続剥離（最低９枚以上の剥片が剥離されている）。

⑥：20を石核に転用して剥片の剥離。

工程を見れば、③は打面作出とも考えられるが、剥片が最低４枚以上連続して剥離されていること、その剥片からスクレイパーが作られていることから打面作出とは考えられず、目的剥片の獲得と捉えられる。剥離作業は、打面作出工程を特に設定することなく進められるのであり、①～⑥はすべて目的剥片の生産工程と把握できる。すなわち、石核の形状に促して旧剥離作業面なども利用して打面転位を頻繁におこなうことにより、打面作出と剥離作業面の更新をおこないながら、目的剥片を生産しているのである。

また、剥離作業における打面調整、打面再生、頭部調整、剥離作業面に対する調整の痕跡はまったく認められない。

接合資料２　（第70図１～９、72図１）

〈剥離の順序〉

①：剥片１・２・３・４の打面の一部を形成した剥離。

②：①で形成された剥離面を打面として、剥片１・２・３・４の連続剥離（最低８枚以上の剥片が剥離されている）。

③：加撃点を90°左へ移動して、剥片５だけの剥離。

④：②の剥離がおこなわれた打面と同一の打面から６・７・８・９の連続剥離（最低７枚以上の剥片が剥離されている）。

剥離作業には、接合資料１と同様に、打面調整、打面再生、頭部調整を示す痕跡が認められない。しかし、剥片５の剥離は、旧剥離作業面に対して側面から１回だけおこなわれた剥離であり、それに後続する剥離はふたたび打面を90°転位して、5の剥離以前の剥離作業と同一の方向からの加撃によって連続しておこなわれている。以上のことからすれば、③の剥離は、剥離作業面に対する調整と捉えられる。

接合資料３　（第69図21～25）

この接合資料は、21が石核より剥離された時、同時に22と23に割れたものである。そして23はその割れた面から二次加工が施され、その時に24と25にさらに割れている。24・25はその特徴から、折断調整石器のようにも見えるが、実際は以上のような二次加工時に割れたものである。この資料は、折断調整石器の規定の不充分性を示す資料といえる。

まとめ

以上これらの接合資料１～３から、縄文時代の石器製作技術のあり方の一断面を捉えること

ができた。すなわち、接合資料1では、何ら調整技術を施すことなく、打面の転位を石核の形状に促して頻繁におこなうことにより剥離作業面を更新し、目的剥片を獲得している。このような剥片生産のあり方は、縄文時代の剥片生産技術に関する報告は少ないが、そのなかでは一般的に見られる特徴といえる(註2)。また接合資料2では、縄文時代の剥片生産のあり方のなかでは、これまでほとんど見られなかった剥離作業面に対する調整技術のあり方の一端を把握することができた。このことは、今後縄文時代の剥片生産のあり方を追求していく場合、重要な資料となることを意味する。さらに接合資料3は、折断調整石器の規定の不充分性を指摘する好資料である。すなわち、この接合資料は折断調整石器における折断の認定には充分な注意が必要であることを物語るものである。

註

1：ピットから多量の石器や目的剥片が検出された例としては、

○高畑遺跡、東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ。（岩手県文化財調査報告書第49集）、P.P165～252、岩手県教育委員会。1980

○桜松遺跡、御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（岩手県埋文センター文化財調査報告書第29集）P.P9～144。岩手県教育委員会。（財）岩手県埋蔵文化財センター。1982

がある。またその性格は異なる可能性もあるが、石器・剥片が集中して検出された例としては、

○柴浜遺跡、乙部町教育委員会、1977

○峠下聖山遺跡、七飯町教育委員会、1977

などがある。

2：類例としては、上記注1の各遺跡の報告書の他に、

○田中英司、1977、縄文時代における剥片石器の製作について、埼玉考古16号、P.P33～47

○後藤秀一、1980、附、金剛寺貝塚採集の剥片接合資料、宮城県文化財調査報告書第67集、P.P41～53

などがある。

出土石器について

石器は4169点出土した。石器の出土状況は遺構の分布と符合し、遺構と遺物の関係が充分ではないにせよ保持されていることを示した。遺構出土の石器は全体の20%を占め、1～Ⅳb層出土が72%を占めた。遺構出土の石器のうち、幾組かの同一母岩資料が確認されたが、限定された時期を特定できる、特徴的な石器は確認できなかった。しかし、土器によって明らかにされた遺跡の時期が、石器に反映していることが予想されることから、資料化の方法としては、分類に主眼をおいた。この場合、分類即時期の特定を意図しているのではなく、今後の石器研究の一資料の意である。具体的には、出土数量の多い器種―石鏃・スクレイパー・石錐・石斧・礫石器等を対象とした。出土数量の66.7%を占める剥片・チップ・石核については、剥片の長幅関係等のみを検討し、石核については行わなかった。石核と剥片の関係を、剥片の分析でその傾向をうかがう程度にとどめたのは、上深沢遺跡[註1]の分析結果と同様の傾向が予想されたからである。以下、分類によって明らかにされた本遺跡出土石器の特徴的な点について述べる。

- ○ 石鏃は232点出土したが、基部が凹状のものが約70%を占め、基部が突出するものは、11%を占めるにすぎない。
- ○ ポイントは37点出土したが、そのうち所謂　斜軸尖頭器様のものが7点確認された。
- ○ 石鏃とポイントの分類基準については、岡村の指摘[註2]があるが、本報告では、石鏃とポイントの長幅関係図に各々の類型を付加し、分類をこころみた。
- ○ スクレイパーのうち、「不定形石器」としてとり扱ったものの中で、各型式の資料の提示は不足しているきらいがあるが、将来一つの器種として独立していく可能性がある。
- ○ 石斧は21点出土したが、そのうち約43%のものに、打痕が認められた。
- ○ 礫石器は153点出土したが、そのうち8点に「擦痕」が認められる(Ⅳ類)。この種の石器は座散木遺跡[註3]の1～3層、北前遺跡[註4]第6土壌で出土しており、縄文時代早期に帰属する可能性がある。

柳沢　みどり

註

1　宮城県教育委員会(1978)「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』

2　岡村道雄(1979)「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例　その1」『東北歴史資料館研究紀要』第5巻

3　石器文化談話会(1978)「座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅰ」石器文化談話会誌　第1集

4　仙台市教育委員会(1982)「北前遺跡調査報告書」仙台市文化財調査報告書　第36集

Ⅷ. ま と め

1．梨野A遺跡は3年間に渡る調査結果により、縄文時代早期から晩期、古墳時代中期の遺構が検出され、縄文時代中期後・末葉には集落が形成されたことが明らかになった。

2．土器、石器等の遺物の出土状況は、遺構群の配置と相関関係を有している。また、縄文時代に於いては遺跡緩斜面部、平坦部が各時期によって遺構構成が異なっており、各時期に於ける当遺跡(丘陵)の利用の変化が窺える。

3．検出遺構では、縄文時代の住居跡2軒・埋設土器4基・炉跡1基・土壙34基・ピット66個、古墳時代の土壙1基であった。縄文時代の遺構で時期が確定されるものとして、早期末葉の土壙2基・ピット3個、中期後葉の住居跡1軒・ピット1個、中期後葉～末葉の住居跡1軒、中期末葉の埋設土器1基・土壙1基、中期後葉～後期初頭の炉跡1基・土壙1基、後期初頭の埋設土器2基・土壙2基、後期前葉のピット1個、晩期後葉の土壙4基であったが、時期不明のピット、土壙の多くは中期後葉から後期初頭に位置づけられるものと思われる。

4．遺構内・基本層位内等より縄文時代早期中葉から晩期後葉に渡る土器片約40000点、復元土器31点、石器約4,000点を出土した他、古墳時代、平安時代、中世の遺物を若干出土した。縄文時代の遺物出土量では後期初頭、次いで中期後葉の順となっている。

5．縄文後期初頭(南境式期の早い時期)には、当遺跡に於ける最多の土器量が示すように、居住空間が形成されたと考えられる。これらの土器群(第Ⅷ群)は、その分析により松島湾岸の一部(紬窪遺跡)から広義の名取川流域と阿武隈川流域に至る共通性がもつまとまりの中に包括された。更に、岩手県域、福島県域と一部の土器文様要素群の共通性より、これらの地域とも、恐らく河川を通じての人間集団の交流を反映していると考えられる。

6．出土石器中、打製・磨製石器は1231点(剥片・チップ・石核は2783点)、礫石器は153点、石製品・砥石各1点であった。石器中、帰属時期の決定が出来る資料は貧しく、縄文時代各時期に於ける石器の器種、器種内型式の比較は不可能であった。

7．縄文時代の住居跡、土壙、ピットより同一母岩資料や接合資料が出土した。特に6号ピット出土の石器の接合資料は、縄文時代の石器製作技術復元に関する良好な資料であった。

佐藤甲二・田中則和・柳沢みどり

沼　原　A　遺　跡

（ C － 247 ）

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：第1地点　1次調査　昭和54年5月7日～10月12日
2次調査　昭和55年4月8日～4月20日
第2地点　1次調査　昭和54年11月12日～12月10日
2次調査　昭和55年4月24日～6月14日

対象面積：第1地点　1次調査　2650㎡　2次調査　600㎡
第2地点　1・2次調査　740㎡

発掘面積：第1地点　1次調査　1413㎡　2次調査　110㎡
第2地点　1次調査　150㎡　2次調査　740㎡

担当職員：佐藤甲二・斎野裕彦・田中則和・渡部弘美・篠原信彦

Ⅰ．遺跡の立地(第1図)

沼原A遺跡は造成地南東端の丘陵中腹に位置する。この丘陵は頂部標高約170mとし、南東側、標高120～125mの間に、南東に緩やかに傾斜する平坦部を持つ。この平坦部に続く北西奥、標高125～130mの間には幅約15m、全長約60mの谷地形が、また南西側、丘陵斜面部には狭い平坦部分が数ヶ所みられる。平坦部北側、西側は上りの急斜面となり、南側、東側は深い沢、県道(菅生一折立線)へ至る下り急斜面となる。丘陵平坦部と茂庭低地との比高は約65mである。

沢を挟んだ南西側には峯館がそびえ、この沢の上流約150mには嶺山C遺跡が位置する。造成用地買収前まで、平坦部は桑畑、谷部は杉の植立地となっていた。

佐藤甲二

Ⅱ．調査の方法と概要

沼原A遺跡は昭和54、55年の2年次に渡って調査された。1次調査(昭和54年度)は、平坦部(第1地点)の本調査、谷部(第2地点)の試掘調査、2次調査(昭和55年度)は平坦部南西側の斜面及び狭い平坦部分(第1地点)の試掘調査、谷部(第2地点)の本調査を実施した。

1．調査の方法(第1図)

〈第1地点〉平坦部分はN－21°－Wを縦軸ライン(A～Q)、これに直交する横軸ライン(1～33)による3×3mグリッドを設定し調査を行う。平坦面部西側斜面部は、地形に応じて幅約2～4mのトレンチ7本(A～G)を設定し調査を行う。

〈第2地点〉谷心線に沿うラインを横軸(01～18)、これに直交するラインを縦軸(ⅡA～ⅡE)とする3×3mグリッドを設定し、調査を行う。

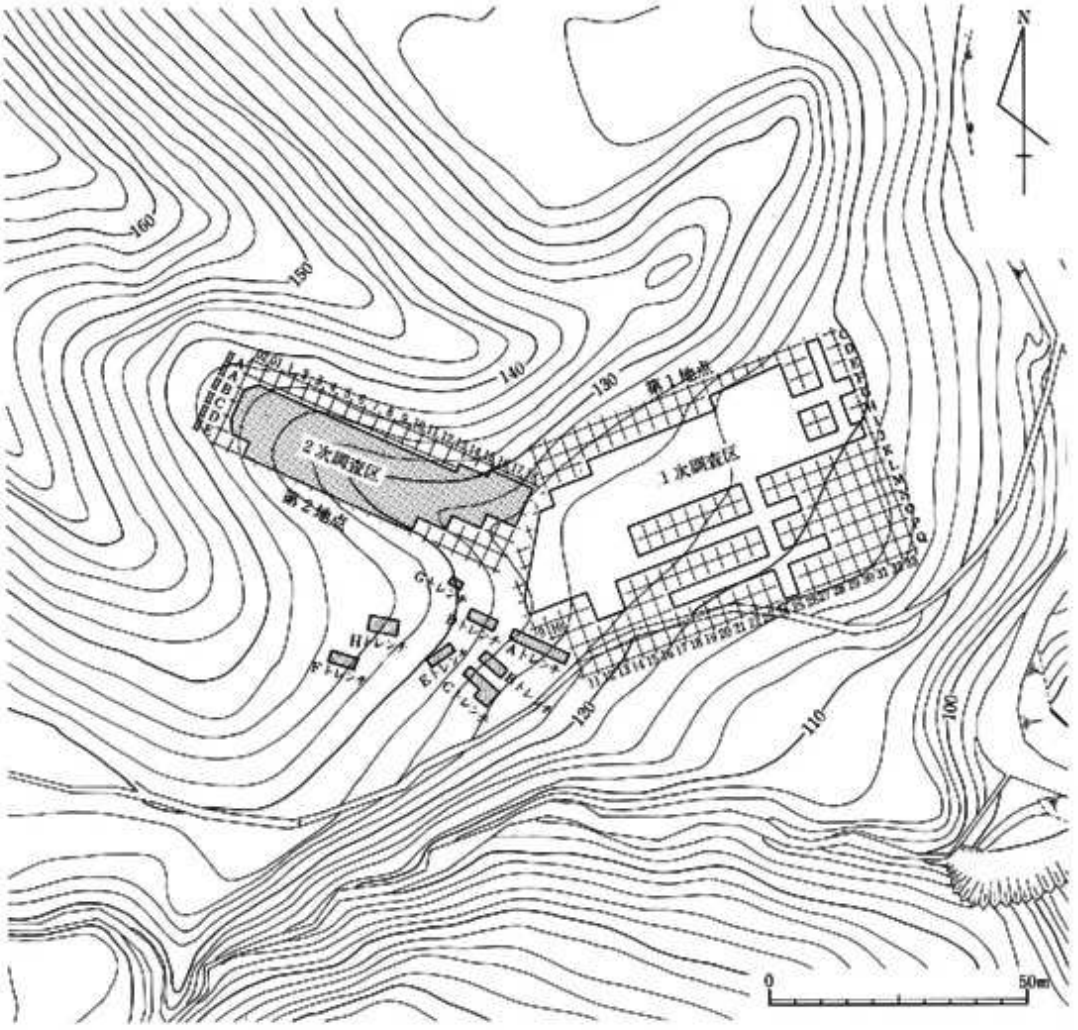
2．調査の概要

1次調査(第2図、写真1～4)

〈第1地点〉5月7日～10月12日までの約5ヶ月間調査を実施した。平坦部約2600㎡が調査対象で、調査面積は約1400㎡である。F・I・L・Oラインを基本グリッドとして調査を行ったが、Lライン以南、30ライン以東では20～40cmのⅠ層(表土)下が直接地山となり、遺物、遺構は検出されなかった。また地山は耕作時に於ける攪乱をかなり受けていた。北側、北西側平坦部奥の丘陵際では地山が浅い谷状地形を呈しており、この部分を中心としてⅠ層からⅥ層までの各層が確認された。Ⅳ層は平安時代、Ⅵ層は縄文時代の遺物を含む。Ⅴ・Ⅵ層中からは若干の弥生時代の土器片を出土している。検出遺構は浅い谷状地形部分に沿って縄文時代の土壙が6基(1～6

号)、J・K−11グリッドを中心として平安時代の住居跡が1軒検出された。以上の他に、H−13グリッドⅥ層中よりほぼ完形の縄文時代晩期初頭の鉢を1点出土したが、これに伴う遺構は検出されなかった。尚、縄文時代の土壙6基は全てⅤb層上面で検出された。これは土壙が深かった為に(検出面より約1.5m前後の深さ)、後世まで窪みが残り、最終的にそこにⅤa層(灰白色火山灰)が溜まり、Ⅴb層上面でⅤa層の落ち込みを確認することで土壙は検出された。従って土壙の掘り込み面より上位で検出されている。土壙堆積土中に確認された基本層中の最下層がⅥ層であることにより、これら土壙はⅥ層堆積以前に掘り込まれており、これら土壙は縄文時代に所属すると考えられる。

〈**第2地点**〉11月12日～12月10日までの約1ヶ月間調査を実施した。第1地点で検出した土壙が北西側の谷にも続くのではないかということでⅡCラインを中心に150㎡の試掘調査を行った。



第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図

1．第1地点
全景
（北より）

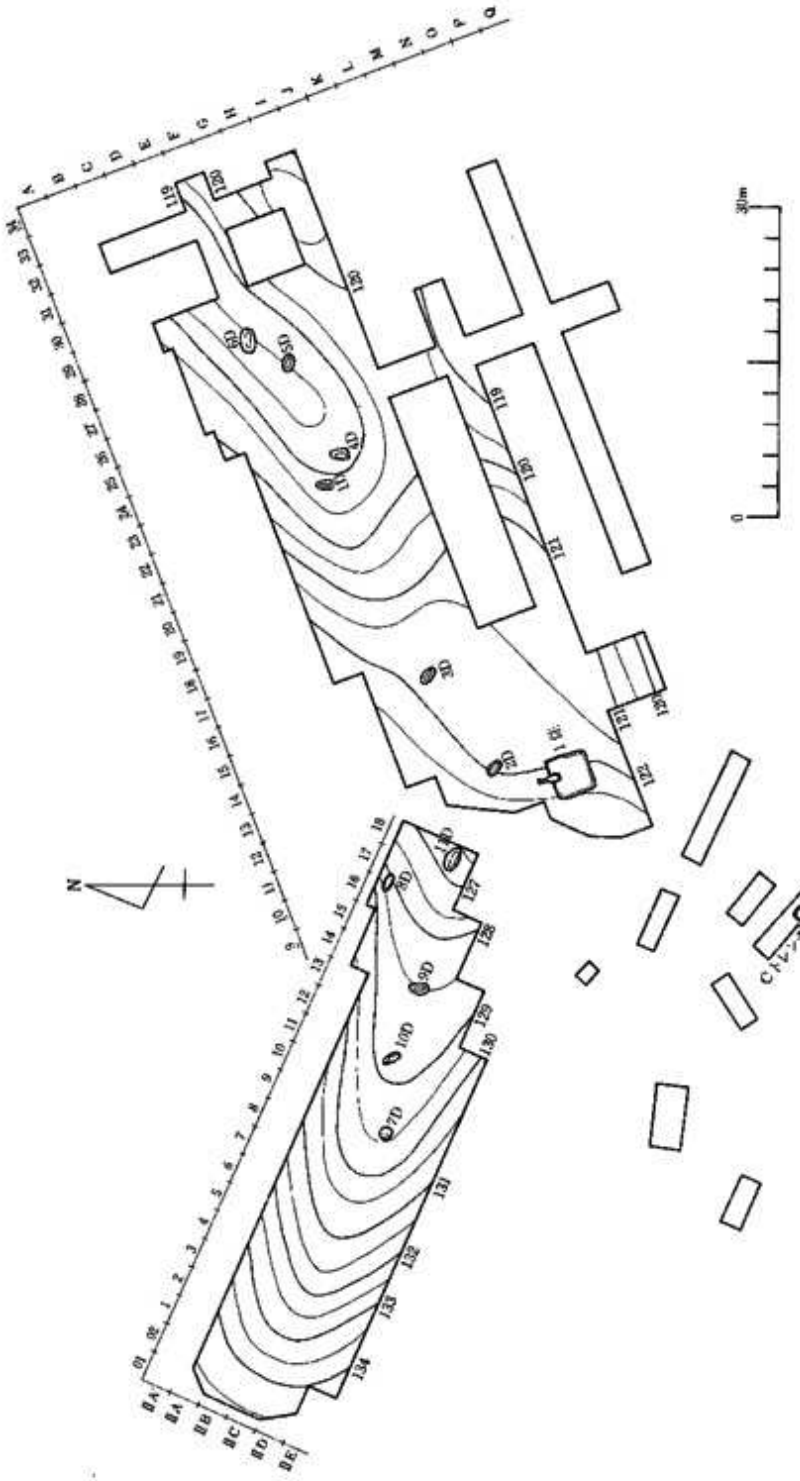
2．第1地点
発掘風景（1）
（北より）

3．第1地点
発掘風景（2）
（西より）

4．第２地点
発掘風景
（南東より）

5．第２地点
全　景　（1）
（北東より）

6．第２地点
全　景　（2）
（北西より）



第2図　遺構配置図

その結果この地区にもⅠ～Ⅵ層までの各層が確認され、ⅡC－9グリッドⅣb層上面では土壙1基(7号)が確認され、次年度本調査の運びとなった。

2次調査(第2図、写真5・6)

〈**第1地点**〉4月8日～4月20日までの半月間調査を実施した。1次調査検出の1号住居跡の西側、南西側の丘陵斜面上及び数ヶ所みられる狭い平坦部分約600㎡を調査対象とし、約110㎡の試掘調査を行った。約10～20cmのⅠ層下が地山となり、Cトレンチで時期不詳の土壙1基が検出され、拡張を行なった。他のトレンチでは遺構は検出されなかった。また全てのトレンチで遺物は1点も出土せず、遺跡のひろがりはCトレンチ以西では期待出来ない状況であった。

〈**第2地点**〉4月24日～6月14日までの約1ヶ月半調査を実施した。谷部全域約740㎡の調査を行う。Ⅰ～Ⅱ層までは重機により排土、Ⅲ層から人力による調査とした。その結果、縄文時代の土壙が第1地点同様Vb層上面で3基(7・9・11号)、地山上面で2基(8・10号)、合計5基が検出された。Ⅳ層中よりはかなりまとまった平安時代の土器片を出土したが、これに伴う遺構は検出されなかった。

以上2ヶ年に渡る調査により、第1・2地点から縄文時代の土壙11基、平安時代の住居跡1軒、時期不詳の土壙1基を検出した。出土遺物は縄文時代(前期～晩期)、弥生時代、平安時代の土器を中心として平箱3箱程度であった。

佐藤甲二

Ⅲ. 基本層位(第3図)

現表土第Ⅰ層から地山第Ⅶ層までの大別7層から成り、これらはさらに10層に細別される。第1地点、第2地点とも基本層位は同一である。ただし、第2地点に於いては、第Ⅳ層、第Ⅵ層の細分が可能であった。また、第Ⅱ層から第Ⅵ層は、第1地点ではⅠライン以北、平坦部奥側の丘陵際で地山が浅い谷状地形を呈している部分のみに(以下、層位説明文中のⅡ層以下の分布範囲は、この谷状地形部分での分布範囲をさす)、第2地点では調査区全域に分布する。

第Ⅰ層 暗褐色(10YR3/4)シルト層。現表土層。第1地点では畑地耕作土である。厚さ10～40cm。

第Ⅱ層 黒褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を少量含む。第1地点では断片的にしか分布しないが、第2地点では調査区全域に分布する。厚さ20cm前後。

第Ⅲ層 暗褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を多量に含む。第1地点では15ライン以東に分布し、14ライン以西ではほとんど分布しない。第2地点では調査区全域に分布す

る。厚さ20cm前後であるが、第1地点G－25グリッド付近では約40cm程の厚い堆積状況を示す。

第Ⅳ層 第2地点では2層に細分された。第1地点、第2地点とも全域に分布する。平安時代の遺物を出土する。

Ⅳa層 黒色(10YR3/1)シルト層。風化凝灰岩粒を少量含む。厚さ10cm前後。

Ⅳb層 黒褐色(10YR3/2)シルト層。風化凝灰岩粒を少量含むが、粒子の細い層。厚さ15cm前後。

第Ⅴ層 2層に細分される。

Ⅴa層 明黄褐色(10YR6/6)火山灰層。第1、第2地点とも下層第Ⅴb層の窪み状部分に堆積しており、分布は断片的である。厚さ5cm前後。若干の平安時代の遺物を含む。

Ⅴb層 暗褐色(10YR3/4)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。炭化粒を微量含む。第1地点、第2地点とも全域に分布する。厚さ20cm前後。

第Ⅵ層 第2地点では3層に細分された。第1地点、第2地点とも全域に分布し、縄文時代の遺物を出土する。

Ⅵa層 黒褐色(10YR3/2)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。谷心線上に厚く堆積する。厚い部分で約30cm。

Ⅵb層 黒褐色(10YR3/2)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。層の起伏が大きく、不安定な堆積状況を示す。厚さ20cm前後。

Ⅵc層 褐色(10YR4/6)粘土質シルト層。地山漸移層。風化凝灰岩粒を多量に含む。第Ⅵb層同様層の起伏が大きい。谷心線上では堆積が薄く(約5cm前後)、周辺部では厚い(約30cm前後)。

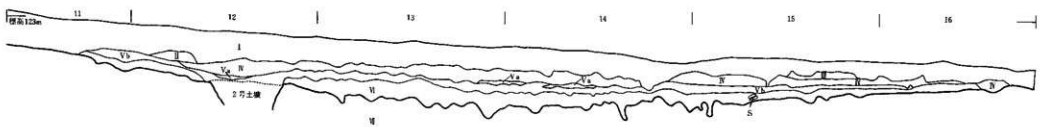
第Ⅶ層 黄褐色(10YR5/8)粘土層。地山層。3～5cmの凝灰岩を含む。第2地点ではかなり凹凸状を呈する。

以上、第Ⅰ層から第Ⅵ層は、第1地点の地山が浅い谷状になる部分及び第2地点の谷地形にレンズ状の堆積をしている。それらの谷心線上では厚く堆積し、地山まで約1.5mの厚さを呈する地点もある。地山粘土層下は凝灰岩層となっている。地点によっては地山粘土層が分布せず、直接凝灰岩層となる場合もある。特に第1地点32ライン以東ではこれが顕著であった。

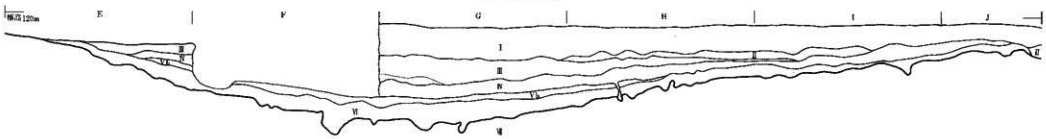
Ⅵ層中には縄文時代の遺物を含むが、細分層内での遺物上の時期差は見い出せなかった。また弥生時代の土器片がⅤ・Ⅵ層中より若干出土したが、余りにも少量な為、元来どの層に属するかは断定出来なかった。

佐藤甲二

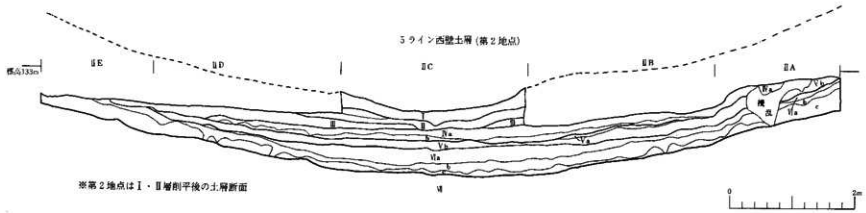
Iライン北壁土層(第1地点)



25ライン東壁土層(第1地点)



5ライン西壁土層(第2地点)



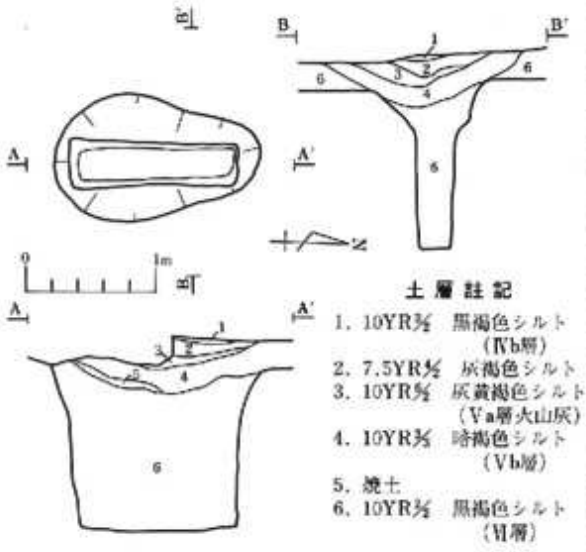
※第2地点はⅠ・Ⅱ層削平後の土層断面

第3図 基 本 層 位

Ⅳ. 遺構と遺構内出土遺物

1. 縄 文 時 代

1号土壙(G・F－22・23グリッド)



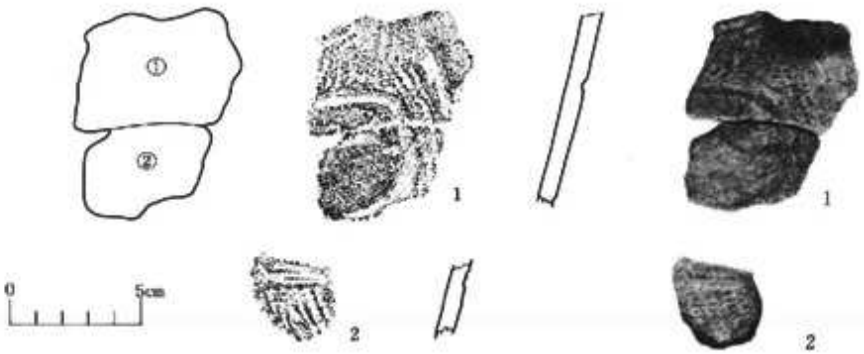
1号土壙遺構計測表

単位：cm

上 端	中 段	下 端	深 さ	長軸方向	
156×100	130×33	118×25	124	N－33°－W	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形、底面は平坦である。

出土遺物　縄文土器片5点，フレーク1点

堆積土2層中より縄文土器片2点、フレーク1点、堆積土3層中より縄文土器片1点、堆積土4層中より縄文土器片2点が出土している。第4図1は堆積土4層出土のうち1点と、F－22グリッドⅥ層より出土した1点の接合したものであり、堆積土3層出土の第4図2と同一個体である。また、これらと同一個体の遺物は計16点出土している。分布は遺跡東部の東北方に開く浅い谷地形の中に集中しており、1号土壙はその分布域の中にある。

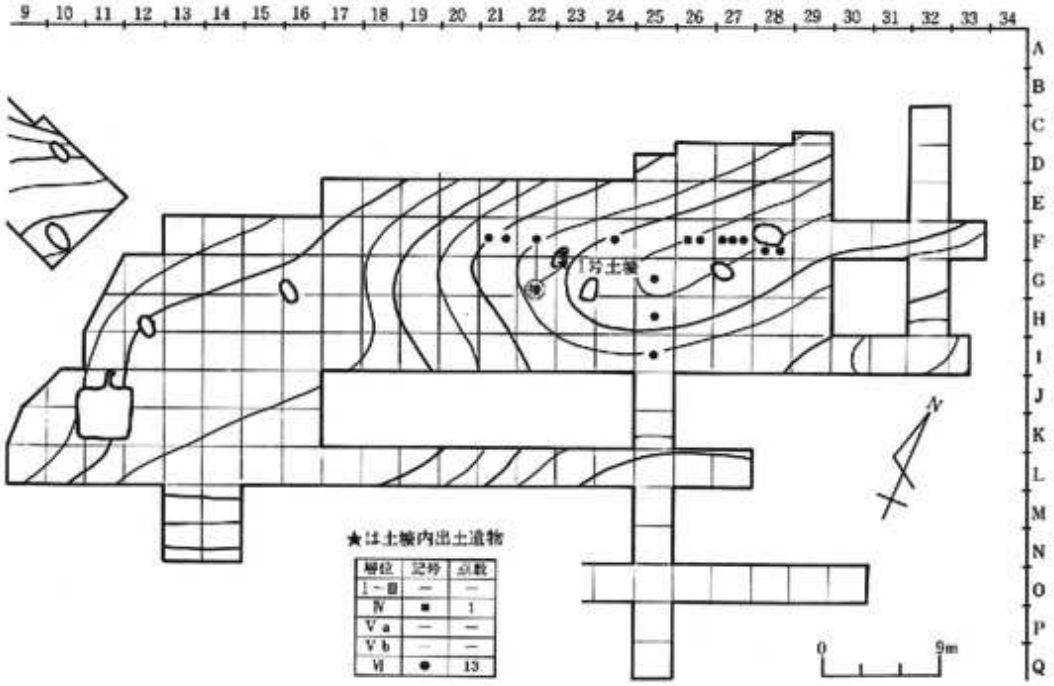


1号土壙遺物観察表

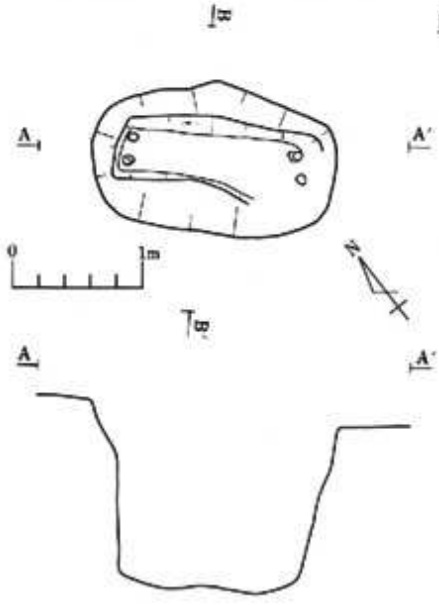
	番 号	出土地点	層 位	部 位	施 文 ・ 調 整	時 期
第4図1	①	1号土壙	堆4	体 部	1.R縄文 沈線文 → 磨き 内面、磨き	縄文中期末葉
	②	F － 22	Ⅵ	体 部		
第4図2		1号土壙	堆3	体 部		

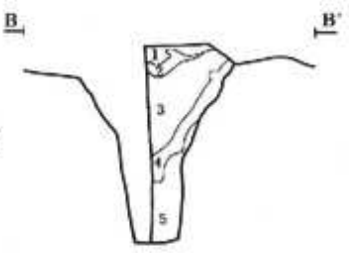
第4図　1　号　土　壙　(1)

1号土壙関係遺物接合分布図



2号土壙(H・I－12グリッド)





土層註記

1. 10YR3/4 黒褐色シルト (Ⅳb層)
2. 10YR5/6 明黄褐色シルト (Va層火山灰)

以下の層は、調査中に崩落したために不明。

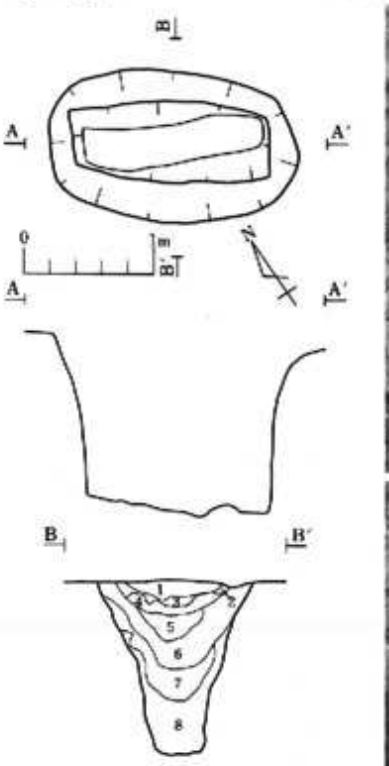
2号土壙遺構計測表

単位：cm

上端	中段	下端	深さ	長軸方向	
186×118	(156)×60	(142)×(48)	136	N－48°－W	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形と考えられる。底面は平坦であり、4個のピットがある。

第5図　1号土壙(2)・2号土壙

3号土壙(G・H－15・16グリッド)



土層註記
1. 10YR3/1 黒色シルト(Na層対応)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト(Nb層対応)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト(Nb層対応)
4. 10YR5/6 にぶい黄燈色シルト(Va層火山灰)
5. 10YR3/2 黒褐色シルト(小礫石含む)
6. 7.5YR3/2 黒褐色シルト(Vb層対応)
7. 10YR3/1 黒色シルト(VI層対応)
8. 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土(地山崩壊土)

3号土壙遺構計測表

単位：cm

上端	中段	下端	深さ	長軸方向	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形、底面はやや凸凹はあるがほぼ平坦である。
190×118	148×62	136×36	136	N－22°－W	

出土遺物　縄文土器片30点．弥生土器片１点

堆積土３層中より縄文土器片６点、堆積土６層中より縄文土器片21点が出土、また層位は不明であるが土壙内から他に縄文土器片３点、弥生土器片１点が出土している。

第７図１は堆積土３層出土のうち１点とＩ－13グリッドⅥ層より出土した土器片４点の接合したものである。これと同一個体は第27図4(364頁)など計39点が出土している。基本層から出土している同一個体遺物は、ほとんどがⅥ層出土であり、Ｊ－13グリッドⅥ層からは30点が出土している。分布は遺跡中央部のやや平坦な所に集中しており、３号土壙と分布域の中心とにはやや距離がある。

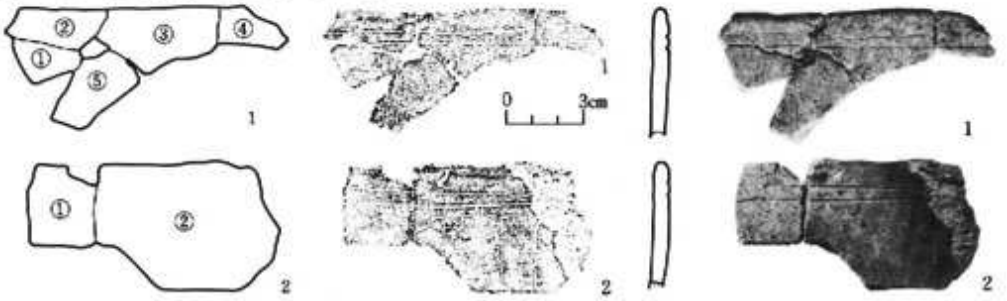
第８図１は６層出土のうち１点と土壙から出土しているが層位不明のもの１点がＩ－13、Ｉ－14、Ｋ－13の各グリッドⅥ層から出土した５点と接合したものである。これと同一個体は第

第6図　3　号　土　壙　(1)

8図2～5を合わせて14点出土している。分布域の中心はⅠ－13、Ⅰ－14グリッドであり、3号土壙とはやや距離がある。基本層位における遺物の出土層位はK－13グリッドの1点と3号土壙付近で出土した1点がⅣ層である以外は全てⅥ層である。

第9図1～6の6点は同一個体であり、1と2が層位は不明であるが3号土壙出土のものである。分布は3号土壙付近の遺跡中央のやや平坦な所に集中している。

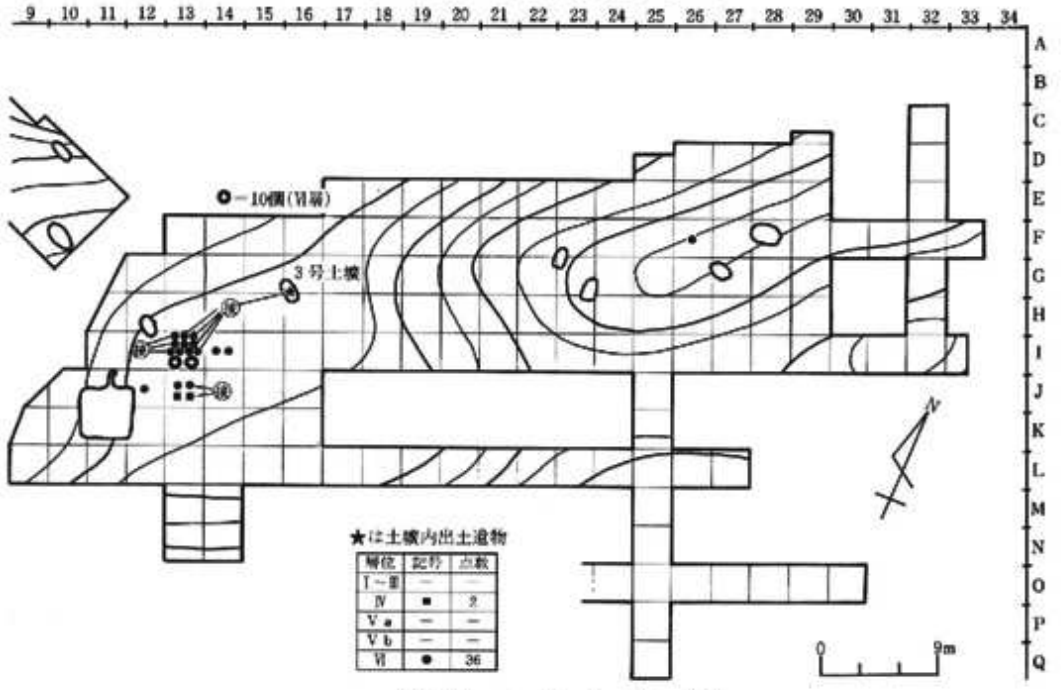
第9図7～11の5点は同一個体であり、7は3号土壙出土遺物ではあるが、出土層位は不明である。第30図2(367頁．3点が接合)も同一個体であり、他に1点同一個体が出土しており、計9点が出土している。基本層位における出土層位はⅣ層3点、Vb層5点であり、分布は遺跡中央のやや平坦な所に集中している。



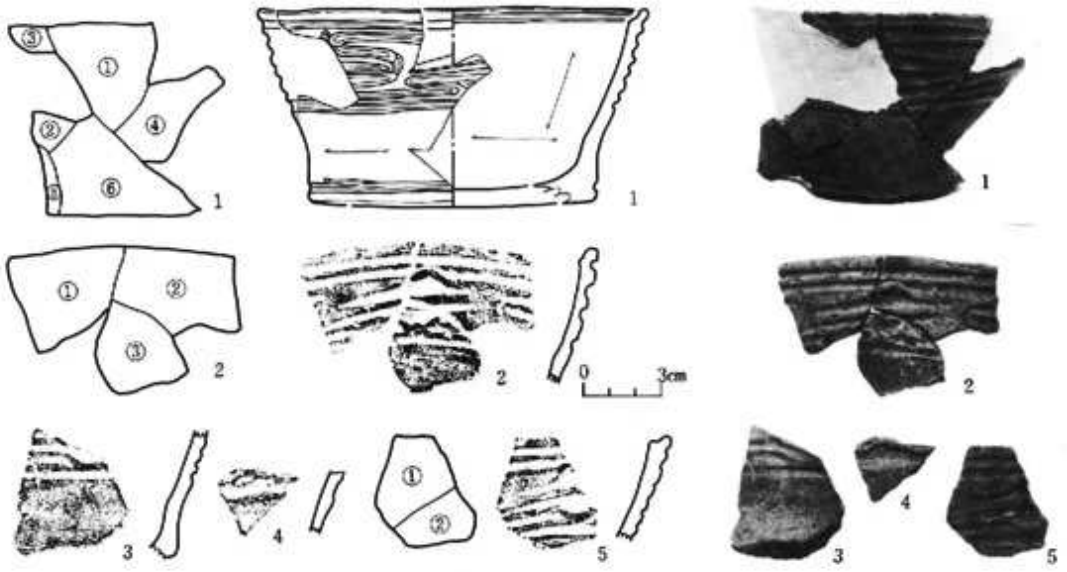
3号土壙土器観察表　その1

	番号	出土地点	層位	部位	施文・調整	時期
第7図1	①	3号土壙	堆 3	体部	口縁部－沈線文→磨き 体部上半－櫛目状沈線文 内面磨き	縄文後期
	②～④	Ⅰ－13	Ⅵ	口縁部		
	⑤	Ⅰ－13	Ⅵ	体部		
第7図2	①　②	Ⅰ－13	Ⅵ	口縁部		

3号土壙関係遺物接合分布図　その1



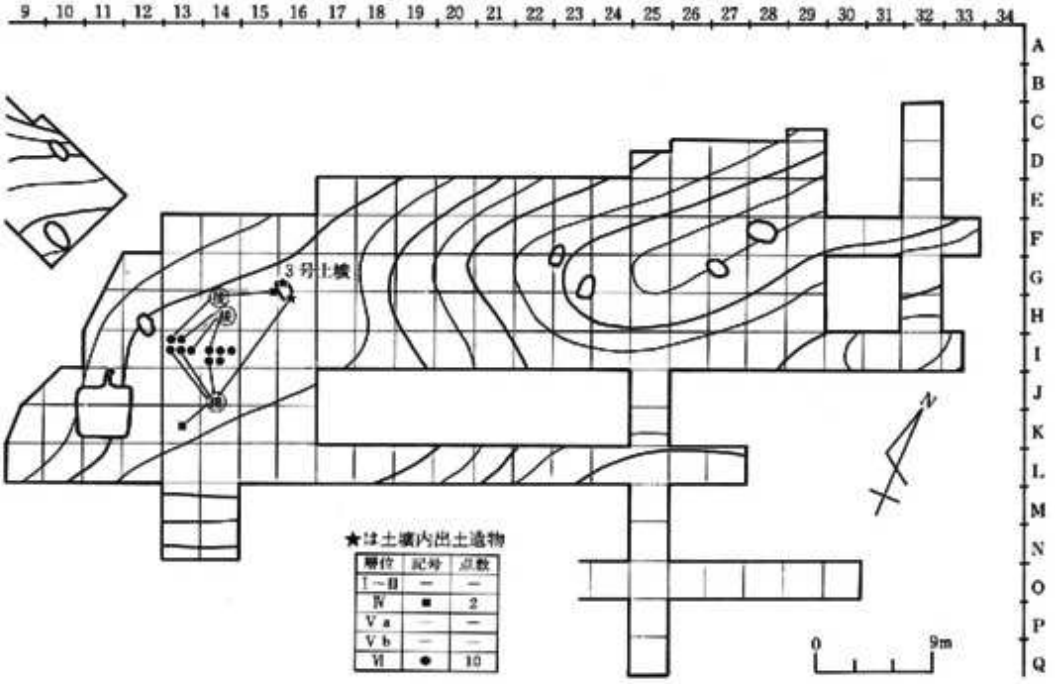
第7図　3　号　土　壙　(2)



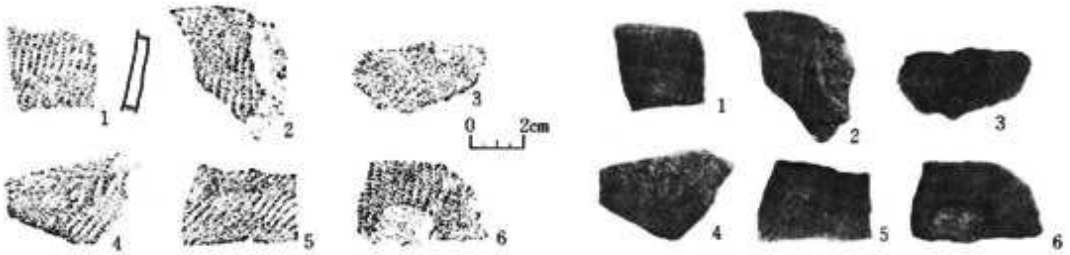
3号土壙土器観察表　その2

	番号	出土地点	層位	部位	形態・法量・施文・調整	時期
第8図1	①	3号土壙	不明	口縁部	平縁の浅鉢　底部丸底 口縁部から体部上半は外傾、体部下半でくびれ、底部に向ってやや開く（口縁部～底部片残存） 口径15.0cm　底径11.0cm　器高7.5cm 口縁部～体部上半～沈線文＋彫去（変形工字文）→磨き 体部下半～沈線→磨き 底部～磨き？ 口縁部内面～沈線文 体部外面に黒斑あり	縄文晩期末葉
	②	3号土壙	底 6	体部		
	③	K — 13	Ⅳa	口縁部		
	④	I — 14	Ⅵ	体部		
	⑤・⑥	I — 13	Ⅶ	底部		
第8図2	①	I — 14	Ⅵ	口縁部		
	②	I — 13	Ⅵ	口縁部		
	③	I — 13	Ⅵ	体部		
第8図3		I — 14	Ⅶ	底部		
第8図4		I — 14	Ⅵ	体部		
第8図5	①	GH−15・16	Ⅳ	口縁部		
	②	I — 13	Ⅵ	体部		

3号土壙関係遺物接合分布図　その2



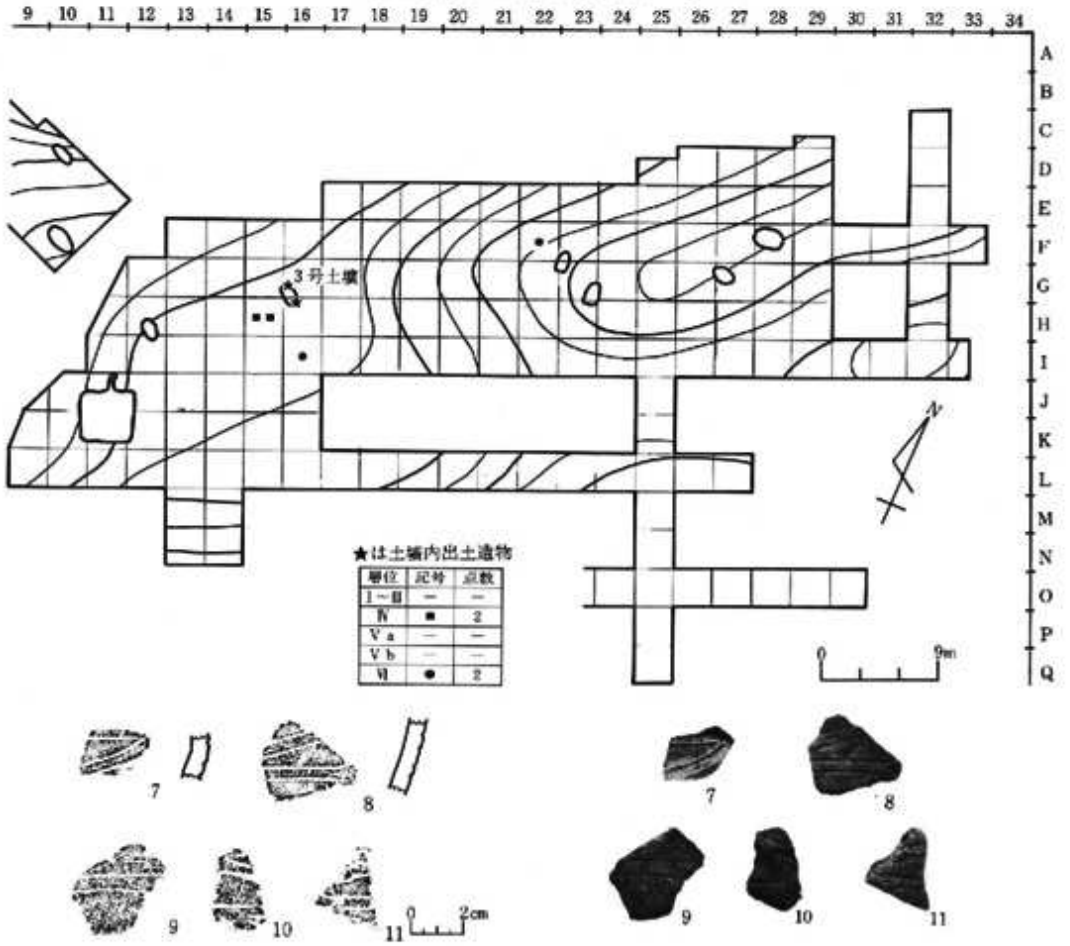
第8図　3　号　土　壙　(3)



3号土壙土器観察表　その3

		出土地点	層位	部位	施文・調整	時期
第9図	1・2	3号土壙	不明	体部	横位L R縄文→綾絡文 内面 磨き	縄文後～晩期
	3・4	H－15	Ⅳ	体部		
	5	F－22	Ⅵ	体部		
	6	I－16	Ⅵ	体部		

3号土壙関係遺物接合分布図　その3

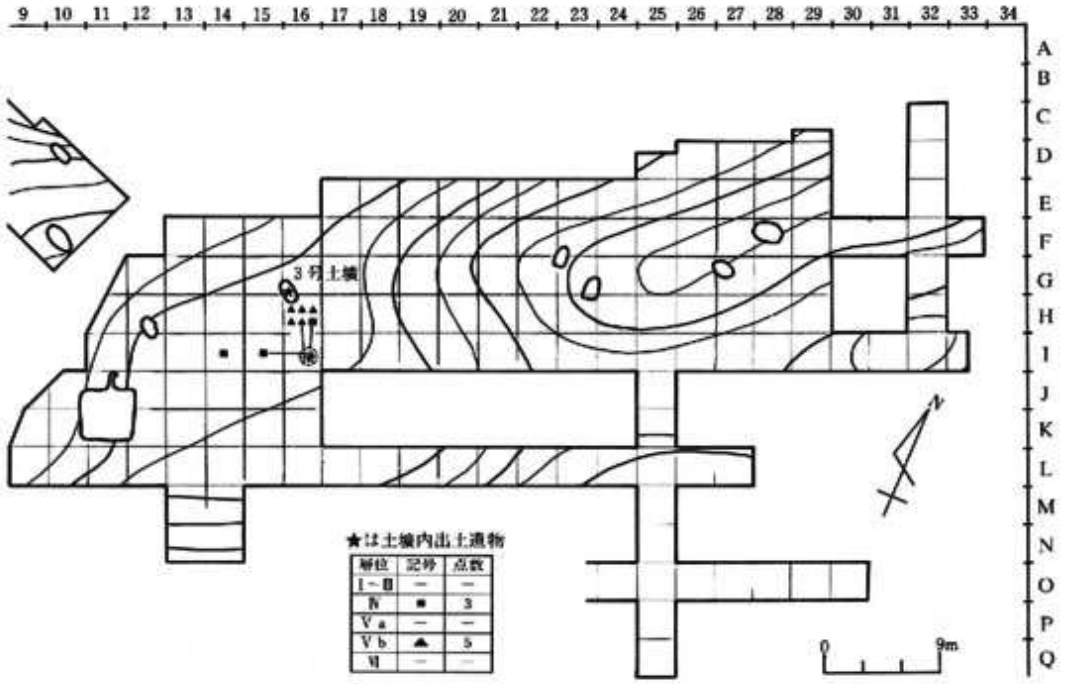


3号土壙土器観察表　その4

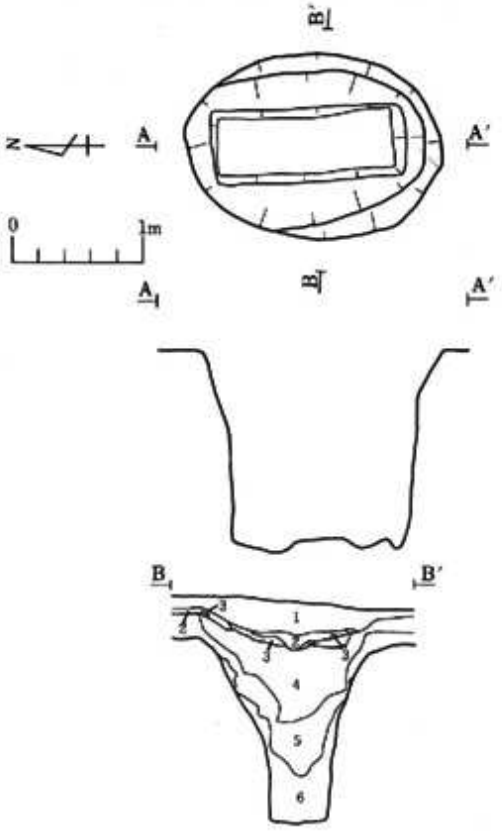
		出土地点	層位	部位	施文・調整	時期
第30図2 （3点が接合）		H－16	Vb	体部	沈線文（変形工字文）→磨き 内面 磨き	弥生中期後半
		H－16	Vb	体部		
		I－15	Ⅳ	体部		
第9図	7	3号土壙	不明	体部		
	8・10	H－16	Vb	体部		
	9	I－14	Ⅳ	体部		
	11	H－16	Ⅳ	体部		

第9図　3　号　土　壙　(4)

3号土壙関係遺物接合分布図　その4



4号土壙(G・H－23グリッド)



土層註記

1. 10YR3/1　黒色シルト(IVa層)
2. 7.5YR5/3　灰褐色シルト
3. 10YR5/2　灰黄褐色シルト(Va層・火山灰)
4. 10YR3/3　暗褐色シルト(Vb層)
5. 10YR3/2　黒褐色シルト(VI層)
6. 10YR5/6　褐色粘土質シルト(地山崩壊土)

4号土壙遺構計測表

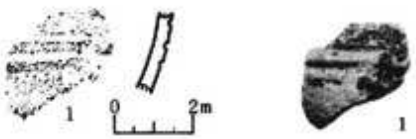
単位：cm

上端	中段	下端	深さ	長軸方向	
198×144	149×57	136×45	154	N－22°－W	上端平面形が楕円形、下端が隅丸長方形、底面はやや凸凹がある。

第10図　4号土壙(1)

出土遺物　縄文土器片６点．剥片１点

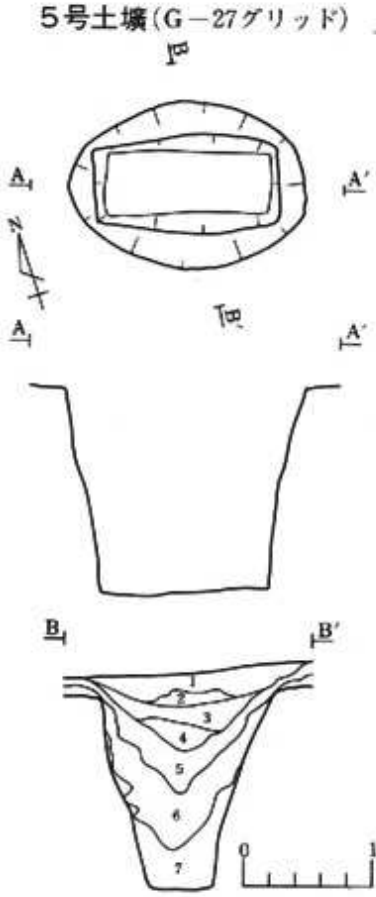
堆積土５層中より縄文土器片２点、堆積土４層中より縄文土器片３点、微細剥離痕のある剥片１点が出土している。第11図１は堆積土５層出土のうちの１点である。

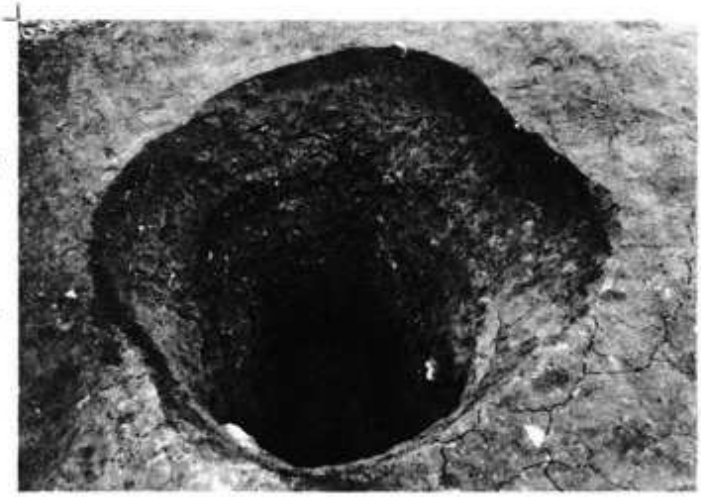


４号土壙土器観察表

	出土地点	層位	部位	施文・調整	時期
第11図１	４号土壙	堆 5	体部	沈線文 → 磨き　　内面 磨き	縄文晩期？

５号土壙(G－27グリッド)





土層註記

1. 10YR3/1　黒色シルト(Ⅳa層)
2. 7.5YR5/2　灰褐色シルト
3. 10YR5/3　灰黄褐色シルト(Va層・火山灰)
4. 10YR3/3　黒褐色シルト(炭化物を多量に含む)
5. 10YR3/3　暗褐色シルト(Vb層)
6. 10YR3/2　黒褐色シルト(Ⅵ層)
7. 10YR5/6　黄褐色シルト(地山崩壊土)

５号土壙遺構計測表

単位：cm

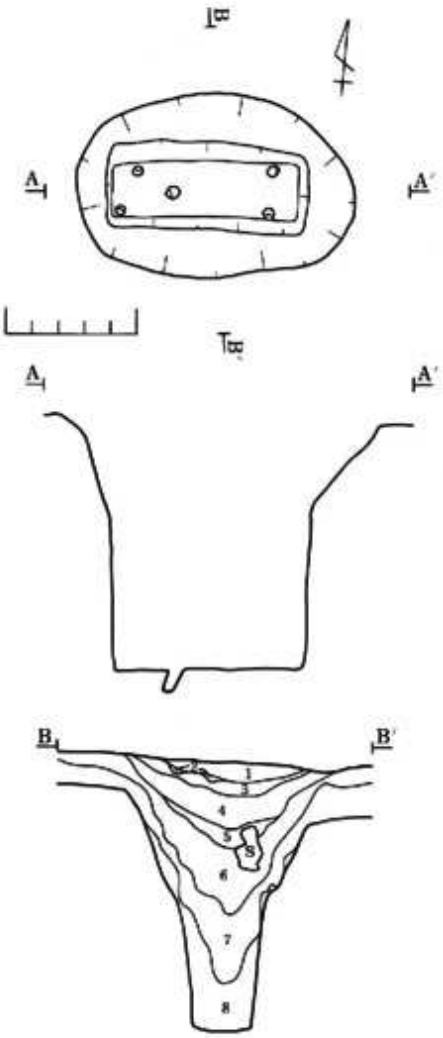
上端	中段	下段	深さ	長軸方向	
180×130	142×76	128×48	162	N－64°－W	上端平面形が楕円形、下端は隅丸長方形、底面は平坦である。

出土遺物　縄文土器片１点

堆積土２層中より縄文土器片１点が出土している。

第11図　４号土壙(2)・５号土壙

6号土壙(E－28グリッド)



土層註記

1. 10YR3/4　黒褐色シルト(Ⅳb層)
2. 10YR5/6　灰黄褐色シルト(Va層・火山灰)
3. 10YR5/1　褐灰色シルト(火山灰混合土)
4. 10YR3/3　暗褐色シルト
   (Vb凝灰岩の小礫を含む)
5. 10YR3/2　黒褐色シルト
6. 10YR3/4　暗褐色シルト(凝灰岩の小礫を含む)
7. 10YR3/2　黒褐色シルト(Ⅵ層)
8. 10YR5/4　にぶい黄褐色シルト質粘土
   (地山崩壊土)

6号土壙遺構計測表

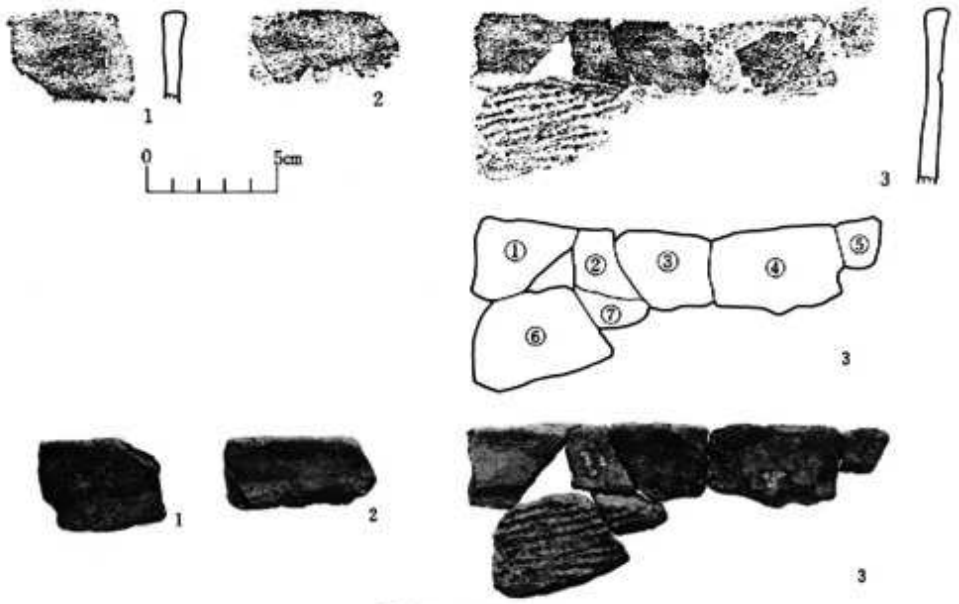
単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形、底面は平坦であり、ピットが5個ある。
211×143	155×68	143×42	190	N－77°－E	

出土遺物　縄文土器片3点

5層、6層、7層の各層中より縄文土器片が1点ずつ計3点出土している。第13図1は7層出土のもので、第13図2と3と同一個体である。分布は遺跡東部の東北方に開く浅い谷地形の所に集中しており、6号土壙はその東に位置する。基本層位における出土層位はF－25グリッドⅣ層出土の1点を除き、全てⅥ層出土であり、土壙内堆積土7層が基本層Ⅵに対応することから第13図1は、Ⅵ層堆積時にⅥ層といっしょに土壙内に入り込んだものである。

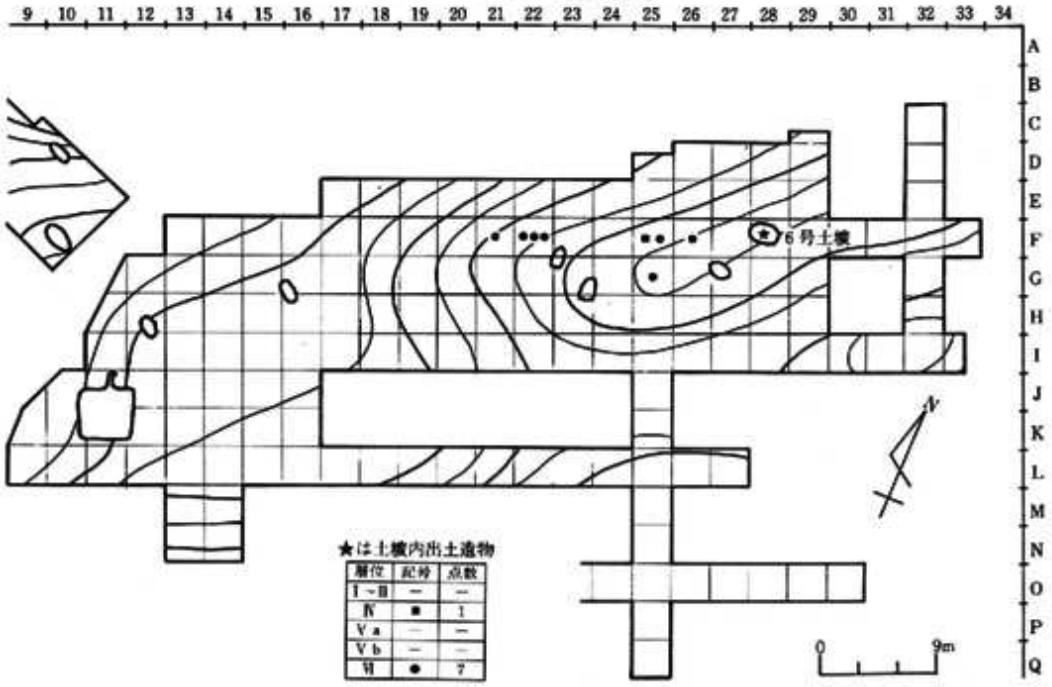
第12図　6　号　土　壙　(1)



6号土壙土器観察表

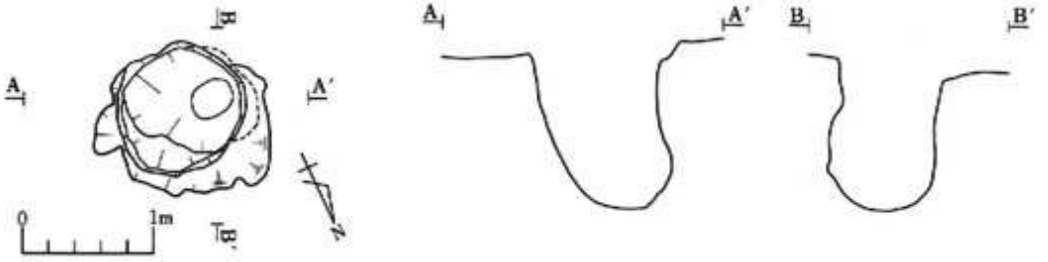
			出土地点	層位	部位	施文・調整	時期
第13図	1		6号土壙	堆 7	口縁部	口縁部ー磨き 体部上半ー横位LR縄文→沈線文 内面 磨き	縄文中期 後葉～末葉
	2		F－22	Ⅵ	口縁部		
	3	①	F－21	Ⅵ	口縁部		
		②	G－25	Ⅵ	口縁部		
		③	F－25	Ⅳb	口縁部		
		④	F－25	Ⅵ	口縁部		
		⑤	F－26	Ⅵ	口縁部		
		⑥⑦	F－22	Ⅵ	体部		

6号土壙関係遺物分布図



第13図 6 号 土 壙 (2)

7号土壙(ⅡC・D－9グリッド)

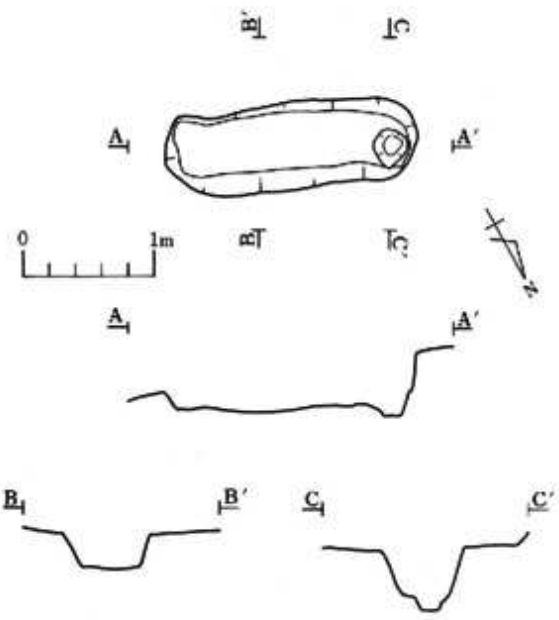


7号土壙遺構計測表

単位：cm

上端	中段	下端	深さ	長軸方向	
115×114	99×94	34×26	126		上端・下端平面形共に円形、土壙下半は西方へオーバーハングする。

8号土壙(ⅡA′－16・17グリッド)



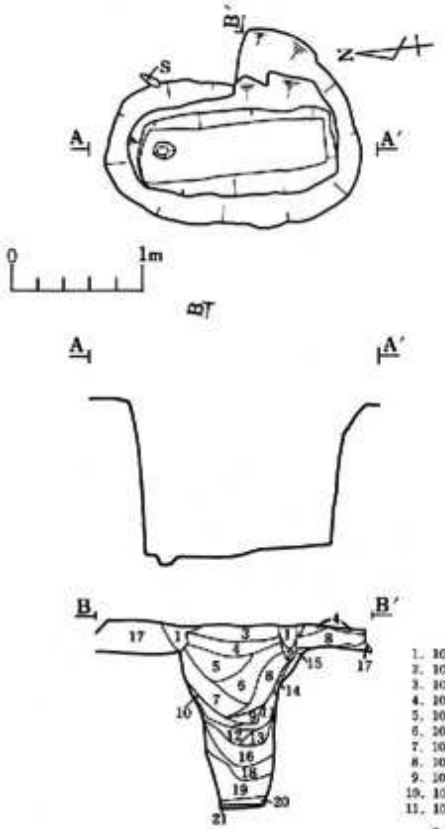
8号土壙遺構計測表

単位：cm

上端	中段	下端	深さ	長軸方向	
194×70		180×44	28	N－60°－E	上端・下端平面形共に隅丸長方形、底面は平坦であり、ピットを1個有する。堆積土は単層である。

第14図　7号土壙・8号土壙

9号土壙(ⅡB・C−14グリッド)



土層註記

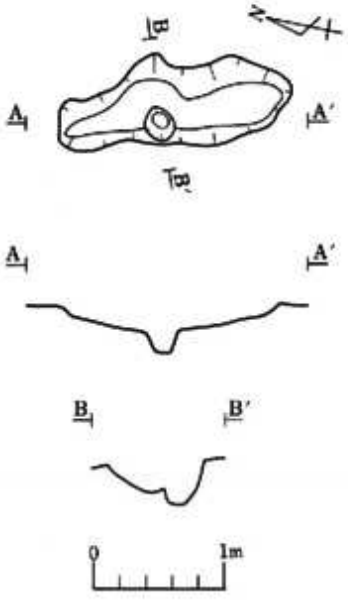
1. 10YR系 黒褐色シルト
2. 10YR系 暗褐色シルト
3. 10YR系 灰白色シルト(Va軽石混)
4. 10YR系 黒褐色シルト(炭化物、及び小礫を含む)
5. 10YR系 褐色シルト(小礫を含む)
6. 10YR系 暗褐色シルト(Vb軽)
7. 10YR系 暗褐色シルト(Vb軽細層)
8. 10YR系 黒褐色シルト(Ⅵa軽)
9. 10YR系 暗褐色粘土質シルト
10. 10YR系 暗褐色粘土質シルト
11. 10YR系 黒褐色シルト(Ⅵb軽)
12. 10YR系 暗褐色粘土質シルト
13. 10YR系 黒褐色粘土質シルト
14. 10YR系 黒褐色シルト
15. 10YR系 黒褐色粘土質シルト(地山崩壊土)
16. 10YR系 にぶい黄褐色粘土質シルト(地山崩壊土)
17. 10YR系 褐色粘土質シルト(Ⅵc軽)
18. 10YR系 褐色粘土質シルト(Ⅵc軽細層)
19. 10YR系 褐色粘土質シルト(地山崩壊土)
20. 10YR系 黒褐色粘土質シルト(炭化物を含む)
21. 10YR系 黒褐色シルト

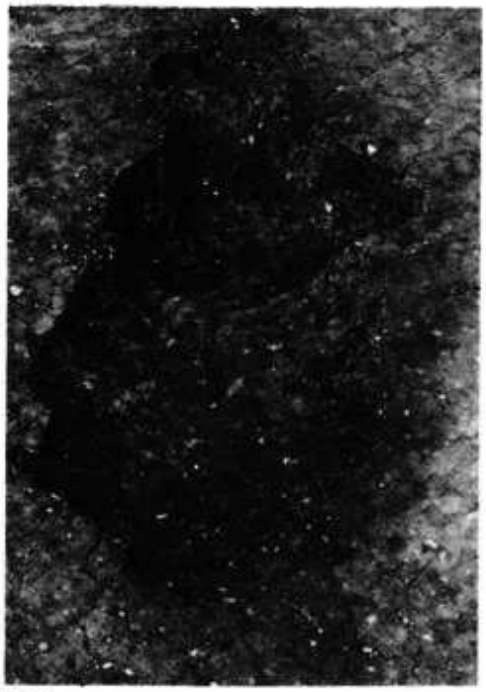
9号土壙遺構計測表

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
194×154	178×96	142×40	142	N−13°−E	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形、底面は平坦であり、ピットが1個ある。

10号土壙(ⅡB・C−11・12グリッド)





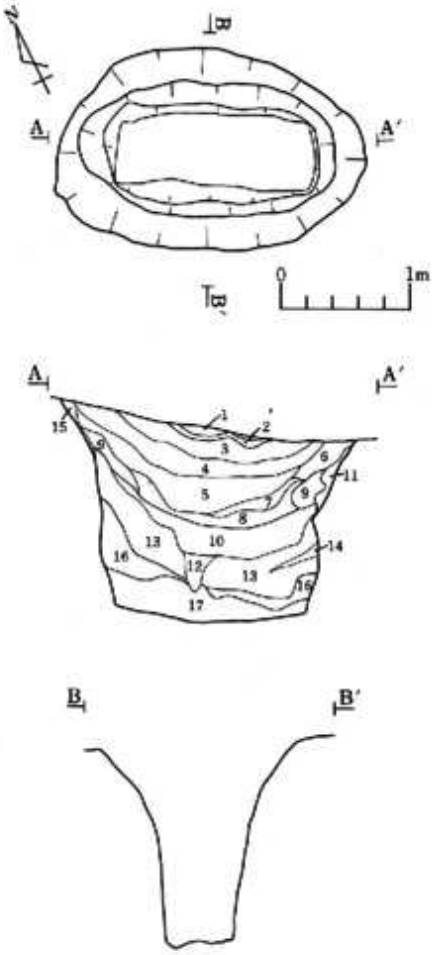
10号土壙遺構計測表

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
182×72		169×36	28	N−30°−W	上端・下端平面形共に不整長楕円形、底面はゆるやかな傾斜をもち、ピットを1個有する。堆積土は単層である。

第15図　9号土壙・10号土壙

11号土壙（ⅡB－18グリッド）



土 層 註 記

1. 10YR⅔　黒褐色シルト（Ⅳb層対応）
2. 10YR⅔　灰白色シルト（Ⅴa層・大山灰）
3. 10YR⅔　黒褐色シルト
4. 10YR⅔　褐色シルト
5. 10YR⅔　暗褐色シルト（Ⅴb層対応）
6. 10YR⅔　褐色シルト
7. 10YR⅔　黒褐色シルト（Ⅵa層対応）
8. 10YR⅔　暗褐色シルト
9. 10YR⅔　黒褐色シルト（Ⅵb層対応）
10. 10YR⅔　暗褐色粘土質シルト
11. 10YR⅔　褐色粘土質シルト（Ⅵc層対応）
12. 10YR⅔　黄褐色粘土質シルト
13. 10YR⅔　褐色粘土質シルト（Ⅵc層対応）
14. 撹乱
15. 10YR⅔　黄褐色粘土質シルト（地山崩壊土）
16. 10YR⅔　明黄褐色粘土（地山崩壊土
17. 10YR⅔　褐色粘土質シルト（地山崩壊土）

11号土壙遺構計測表

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形、底面はほぼ平坦である。
240×164	198×104	152×56	168	N－63°－W	

第16図　11　号　土　壙

斎　野　裕　彦

2. 平 安 時 代

1号住居跡（第17～22図、写真7～9）

出土地区：J・K－11グリッド。南に下る緩斜面上。

検出面：地山上面。ただし、南側の一部はⅥ層上面。これは地山が南側に下り傾斜し、住居北側を中心とする大部分にはⅥ層が堆積していなかった為である。

平面形：約4×4mのほぼ方形。

堆積土：堆積土は6層から成り、住居内には堆積土1～2層、カマド内は堆積土2～6層が認められた。各層とも自然堆積状態を示す。

床面：床面はほぼ水平な平坦面となる。南側はⅥ層中となる為、貼床（粘土。厚さ約10cm以下）が施こされている。他は地山を床面とする。

壁：南壁・東壁の一部は検出されなかったが、北壁は良好に残存しており、壁高約50cmを呈する部分も認められた。

周溝：東側を除きほぼ全周。幅20cm、深さ10cm前後。

ピット：床面上で7個検出されたが、全て深さ10cm前後の浅いもので、柱穴と認定出来るものはない。P_2は東側コーナに位置する深さ約15cmの浅い土壙状のもので、上端平面形は不整形であるが、底面は約80×40cmのほぼ長方形を呈している。このピットの上部からは、浅い溝状のものが、カマド方向、南壁方向へ2条延びている。堆積土中よりは鉄滓1点、土師器片2点が出土した。P_3は床面ほぼ中央に位置する、上端規模約40×20cmの上端平面形ほぼ楕円形、深さ約10cmのピットで、断面形はスリ鉢状を呈する。堆積土中には炭化材及び炭化粒が多量に含まれ、ピット内及び周辺部は焼けていた。

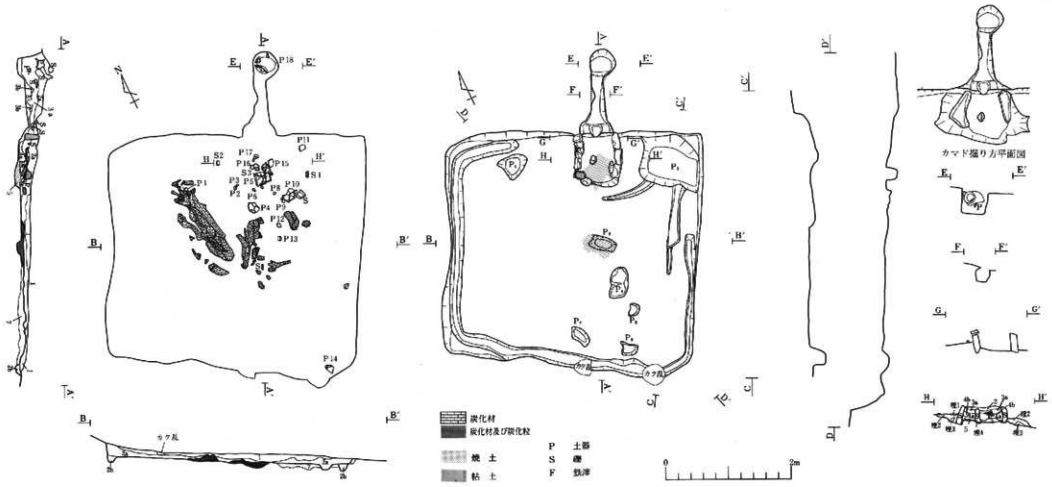
カマド：北壁中央部に設置される。燃焼部は地山をU字形に掘り込み、さらにその両端に溝状の掘り込みを入れ、袖石として大形の角礫を3個づつ並べている。焚き口付近の底面はかなり強く焼けている。燃焼部が煙道につながる部分は浅い窪み状となる。煙道部の長さは約1.2mある。煙り出し部には、体部下半欠失の須恵器の甕が入れられていた。煙道部壁面はオーバーハングしており、また堆積土中にも燃焼部のような崩落粘土が認められず、地山をくり抜いて構築したものと考える。

出土遺物：住居堆積土、床面、カマド内より、実測可能な土器7点、土器片16点、石器3点、鉄滓3点が出土した。

（土器）（第18～20図）

土師器：カマド及びその周辺の床面より甕4点、堆積土第2層より甕、坏各1点が図化された。その他、破片資料として甕14点（口縁部1、体部12、底部1）が出土している。

坏は、第19図4の底部片が1点出土しただけで、製作に際してロクロ使用されている。底部



1号住居跡土層註記

1層 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
炭化物を多量に含む

2a層 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
炭化物が混り込んだ基色土を含む
粘性あり

2b層 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
2a層に地山ブロックを含んだもの

3a層 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト
焼土粒、多量の炭化粒を含む
粘性なし

3b層 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト
3a層と同様の層であるが、ブロック状の炭化粒と少量の焼土粒を含む

4a層 極暗赤褐土 (5YR2/6) シルト質粘土
多量の焼土粒・少量の炭化粒を含む
粘性が強い

4b層 極暗赤褐土 (5YR2/6) シルト質粘土
4a層と同様の層であるが、焼土がブロック状に含まれる

5層 焼土

6層 褐色～暗褐色 (10YR5/4～3/) シルト
3・4層にて層のブロックが混入したもの
土色は含まれる層層の量により異る
粘性なし

7層 褐色 (10YR4/) シルト質粘土
硬質 多量の地山(礫層)がブロック状に含まれる

埋1層 褐色 (軟質) シルト質粘土
カマド掘り方埋土
多少焼けている(埋2層の土に混れた地山が混ったのかも知れない)

埋2層 褐色土 シルト質粘土
カマド掘り方埋土
地山のブロックを含む
粘性なし

埋3層 黄褐色土 シルト質粘土
カマド掘り方埋土
地山ト埋2層の混合土
粘性なし

埋4層 赤褐色 シルト質粘土
カマド掘り方埋土
4a層に類似
粘性あり

1住居内炭化物・遺物出土状況

第17図 1号住居跡

7．1号住居跡完掘状況

8．1号住居跡カマド内遺物出土状況

9．1号住居跡カマド完掘状況

の切離し技法は、回転糸切り無調整である。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕は、全体の器形を観察できるものはなく、第18図１以外は、すべて破片である。第18図１は、底部を欠損する以外はほぼ完形に近いもので、器高は口径より大きく、最大径の位置は体部にある。製作に際してロクロ使用のもので、体部外面には縦位のヘラケズリ、体部下半には「ＲＬ」縄文が施されている。第18図２・第19図１は、口縁部から体部の破片で、製作に際してロクロ使用されている。第19図２・３は体部下半から底部の破片で、２は内外面刷毛目・ナデ、３は外面がヘラケズリ・刷毛目、内面が刷毛目・ナデ調整されている。

土師器は、製作に際してロクロ使用のものがカマド、床面より出土していることから、氏家和典氏の土師器の編年によると表杉ノ入式(平安時代)に相当する。

須恵器：甕２点が出土しただけである。図化されたものは、煙出し出土のもの(第20図１)だけで、カマド出土のもの(第19図５)は、拓影資料である。

１は、口縁部から体部下半が観察される。口縁部は外反し、端部は上下にわずかにつまみ出している。内外面ともロクロ調整され、体部外面には、縦・横位のヘラケズリ、ナデ調整が施されている。最大径の位置は体部にある。５は、口縁部の小破片である。口縁部は外反し、端部は上下にわずかにつまみ出している。外面には、ロクロ調整以前にタタキ技法を施している。

〈石器〉(第21・22図)

床面より砥石、使用痕のある珪化木、珪化木片が、カマド内よりは礫石器が各１点出土した。砥石(第21図１)は荒砥と中砥の中間的なもの[註1)]で、表裏面ともかなりの使用痕が認められ、中央部が窪んだ状態となっている。使用痕は側面にも認められる。礫石器(第21図２)は石材が軟質の凝灰岩で、歪んだ球形を成し、その凸面に掻き傷と思われる使用痕が認められる。表面は火熱によって赤変している。珪化木片は長さ×幅×厚さが10cm×25cm×0.5cmの扁平な短冊形で、表面が火熱により黒変している。

〈鉄滓〉(第22図)

床面、２号ピット、カマド上部(第22図２)より３点出土した。この内床面出土の椀形滓(494頁写真４)は鍛冶滓という分析結果(479頁参照)が出ており、他のものも同様なものと思われる。

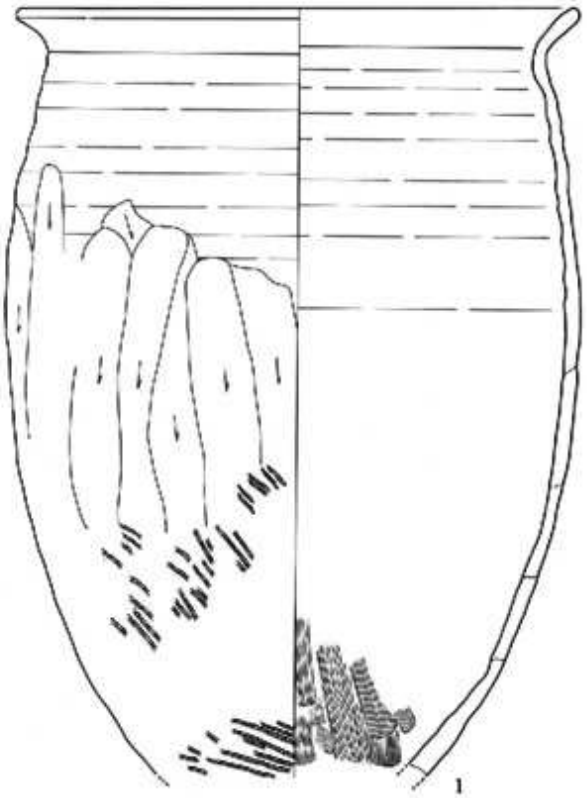
その他：３号ピットからカマド付近にかけての床面上から多量の炭化材がまとまって出土した。３号ピットを除けば炭化材下の床面に焼土が認められない点、周溝・他のピットの堆積土・住居内堆積土第２層に多量の炭化粒、焼土粒を含まない点より、火災住居に伴う建材とは異なる。これらはクリ、ブナ属の炭化材であるという同定結果(478頁参照)が得られている。

佐藤甲二・篠原信彦・柳沢みどり

註

１．刀剣研究家、中川　高氏の御教授による

土器

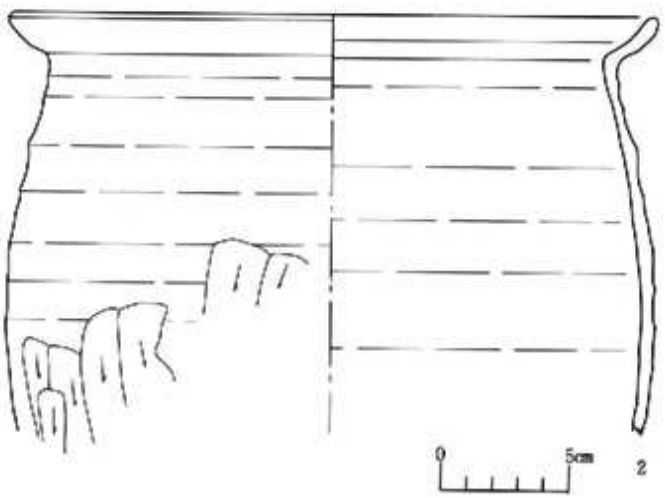


1

1

接合表

図	接合	地区名	遺構名	層位	備考
1			1住・カマド	堆4a	P5
	＋		1 住	床面	P6
	＋		1 住	床面	P9
	＋		1 住	床面	P10
	＋		1 住	床面	P13
	＋		1 住	堆2a	P11
	－	J－12		Ⅳ	



2

2

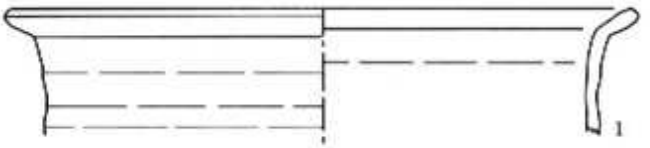
接合表

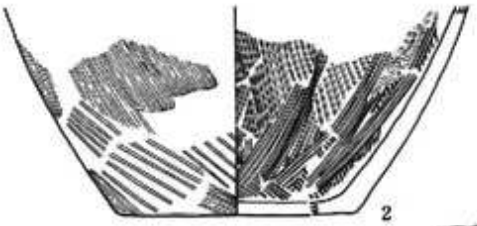
図	接合	遺構名	堆積土	備考
2		1住・カマド	4a	P16
	＋	1住・カマド	4a	P17
	＋	1 住	床面	P14

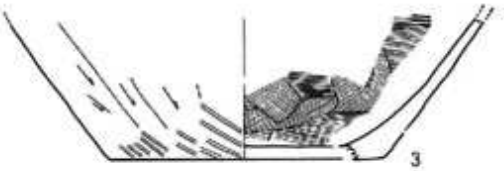
観察表

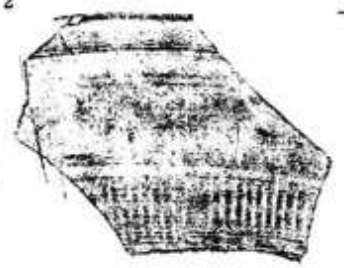
図	出土地点	種類	口径cm	器高 cm (残存器)	最大径 cm	外面調整	内面調整	備考
1	カマド・床面	土師器	21.6	(30.0)	22.1	ロクロ、体部ヘラケズリ RL縄文	ロクロ、ナデ	P5、6、9、10、11、13
2	カマド・床面	土師器	(25.0)	(16.2)	25.0	ロクロ、体部ヘラケズリ	ロクロ	P16、17

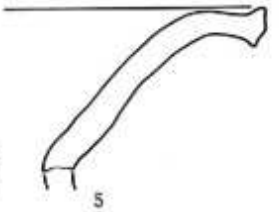
第18図　1号住居跡出土土器（1）

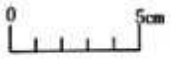












接合表

図	接合	遺構名	層位	備考
1		1住	堆2a	P 2、P 8
	＋	1住	堆2a	

接合表

図	接合	地区名	遺構名	層位	備考
2			1住・カマド	底面	
	＋		1住	堆2a	P12
	＋		1住	底面	P 4
	－	J-13・14		Ⅳ	
	－	J-13		Ⅳ～Vb	
	－	J-13		Ⅵ	

接合表

図	接合	地区名	遺構名	層位	備考
3			1住・カマド	堆4a	P 5
	＋		1住	床面	P1、P4
	＋	I-14		Vb	
	＋	J-13		Ⅳ	
	－	H-12		Ⅳ	
	－	I-12		Ⅳ	
	－	I-12		Ⅳ～Vb	

観察表

図	出土地点	種類	口径 cm	底径 cm	器高 cm (残存高)	外面調整	内面調整	備考
1	堆積土2a層	土師器	24.3	——	(4.9)	ロクロ	ロクロ	P 2、8
2	カマド・床面	土師器	——	10.5	(8.1))	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	P 2、4
3	カマド・床面	土師器	——	(9.2)	(5.3)	ヘラケズリ、ハケメ	ハケメ、ナデ	P1、2、4
4	堆積土2a層	土師器	——	5.6	(1.4)	ロクロ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	——
5	カマド	須恵器	——	——	——	タタキ後ロクロ	ロクロ	P15

第19図　1号住居跡出土土器(2)

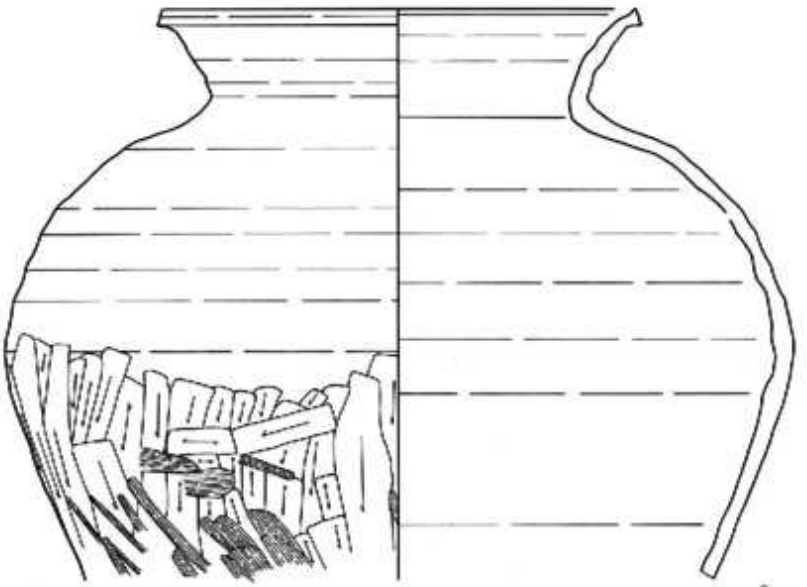


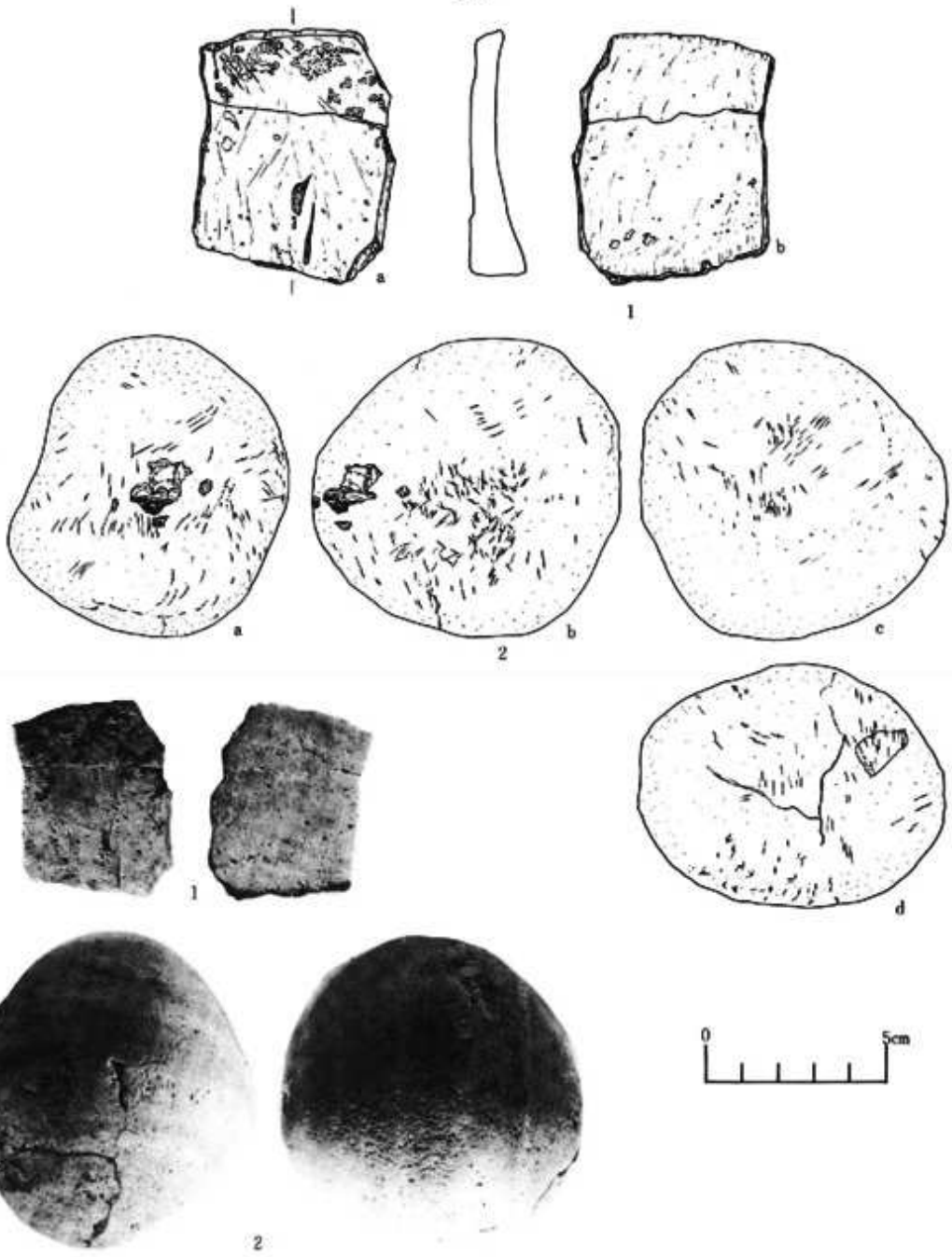
図	接合	地区	遺構名	層位	備考
			1住・竪出		P18
	+	K−13		Ⅳ	

観察表

図	出土地点	種類	口径 cm	器高 cm (残存高)	最大径 cm	外面調整	内面調整	備考
1	竪出し	須恵器	18.6	(22.1)	30.4	ロクロ、体部下半ヘラケズリ、ナデ	ロクロ	P18

第20図　1号住居跡出土土器(3)

石器



観察表

単位：mm

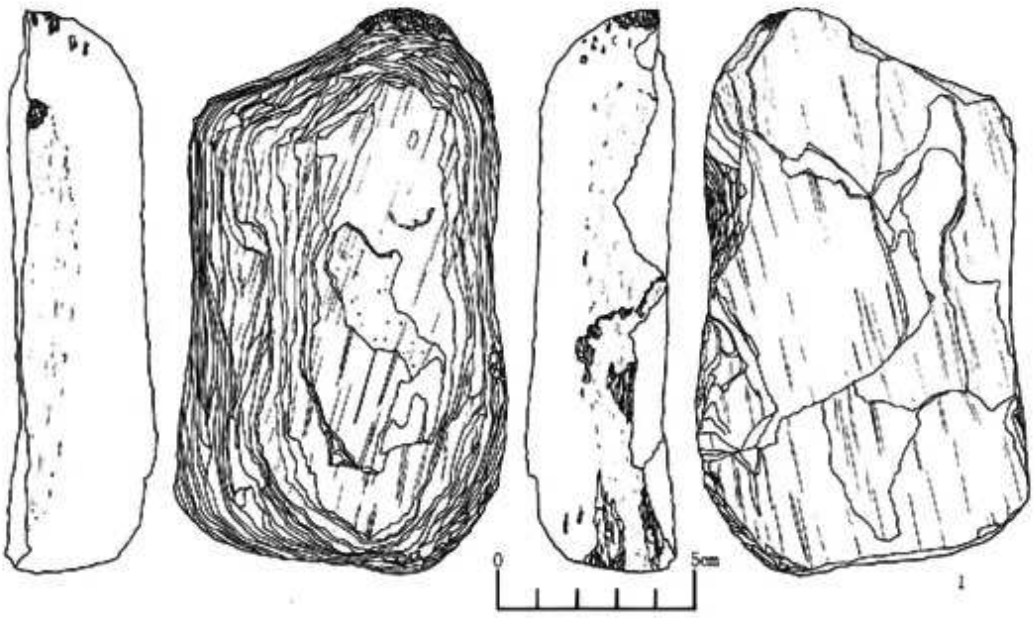
図	出土地点	長さ	幅	厚さ	使用痕・他	石材	備考	登録番号
1	床面	68.0	52.5	14.3	長軸方向の両側縁及びa、b両面に磨耗(a) 短軸方向の一側縁及びa面に鋭い傷痕	珪質凝灰岩	S2	130

単位：mm、g

図	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	備考	登録番号
2	カマド	81.5	84.0	67.0	500	A	a、b、c、d面の凸部に敲打痕(d)が分布	Ⅲ	凝灰岩	S3	132

第21図　1号住居跡出土石器（1）

1号住居跡カマド内
礫石器(第21図2)の拡大



観察表

単位：cm、g

図	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用様・他	分類	石材	備考	登録番号
1	床面直上	146.0	85.0	37.0	570	G	側面の突端部に敲打痕(b—1) 長軸方向の側面に磨痕(a)	VI-1	珪化木	S1	187

鉄滓

(カマド上部出土)

第22図　1号住居跡出土石器(2)・鉄滓

3. 時 代 不 明

12号土壙（第23図）

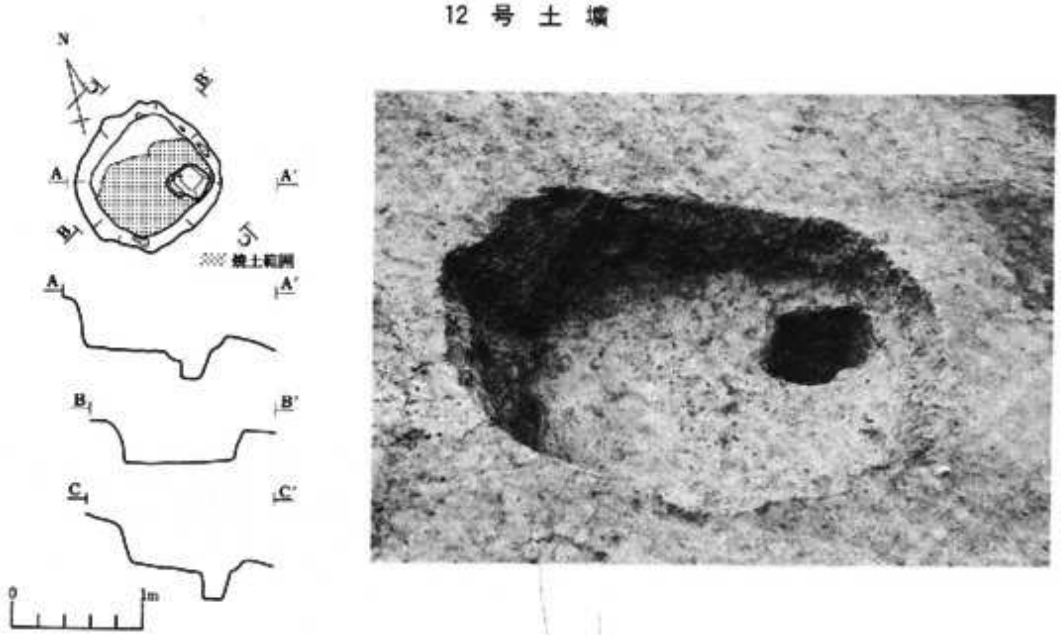
第1地点南西側下り緩斜面上に設定したCトレンチで検出された。検出面はⅠ層排土後の地山上面である。上端辺約1m、底面辺約80cmの上端・底面平面形とも隅丸正方形、深さ約40cmの土壙である。壁は強く立つ。堆積土は単層であるが、底面近くでは小片の炭化材を多量に含み、底面には焼け面が認められた。また壁面の一部にも焼け面が認められた。底面北東側コーナー際には上端の一部が崩れているが、上端辺約20cm、下端辺約15cmの上端・下端平面形とも方形、深さ20cmのピットが1個検出された。ピット内には焼け面は認められなかった。

土壙底面、堆積土中、ピット内よりは何ら遺物は出土しなかった。従って検出面の点からも出土遺物の点からも、当土壙の所属する時代は不明である。

尚、堆積土下層出土の炭化材はクリであることが同定結果(478頁参照)で得られた。

佐 藤 甲 二

12 号 土 壙



第23図　12号土壙

V. 出 土 遺 物

1. 土　　器（第1～2表、第24～32図）

縄文土器：基本層位（表採も含む）より完形及び復元土器3点、破片資料527点（口縁部44点、体部454点、底部破片29点）、遺構内（1・3・4・5・6号土壙）より破片資料37点（全て体部破片。基本層位と接合、同一個体のものは含めず。）が出土している。時期的には前期前葉、中期中葉・後葉・末葉、後期初頭・中葉・後葉・後葉～末葉、晩期前葉・後葉までの早期を除く各時期のものが出土しているが、時期的なかたよりは認められない。ただし、晩期前葉の出土遺物中にはほぼ完形のものが1点含まれる。層位的にはⅥ層を中心に出土している。

弥生土器：基本層位より破片資料3点（口縁部・体部・底部各1点、遺構内出土の1点は基本層出土のものと同一個体）が出土している。これらは全て弥生時代中期桝形期に属する。

土師器：基本層位（表採も含む）からはⅣ層を中心として、坏3点、高台付坏1点、甕2点が図化された。その他、破片資料として、坏9点（口縁部5点、体部3点、底部1点）、甕70点（口縁部8点、体部60点、底部2点）が出土している。

坏は、いずれも製作に際してロクロ使用され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整のもの（第31図2・3）、切り離し技法は不明で、手持ヘラケズリされるもの（第32図3）がある。ヘラミガキの方向は、口縁部・体部が口縁部と平行、底部が放射状である。

高台付坏は、第32図4の底部片が1点ある。製作に際してロクロ使用され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。高台は付高台である。

甕は2点あり、製作に際してロクロ未使用のもの（第31図1）とロクロ使用のもの（第32図1）がある。第31図1は、器高がわずかに口径より大きく、最大径の位置が口縁部にある。調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部外面が縦・横位の刷毛目、内面がヘラナデ、ナデされている。底部には蓆状圧痕があり、底部の周辺はヘラケズリされている。

第32図1は、器高が口径より大きく、最大径は体部にある。外面の調整は、体部から底部にかけて、縦・横位ヘラケズリ、内面の調整は、体部下半から底部に刷毛目・ナデされている。

赤焼土器：基本層位からは図化されたものとしてH－14グリッドⅤb層より坏1点（第32図2）が出土している。その他、破片資料として坏体部2点がある。いずれも製作に際してロクロ使用のもので、内面には、ヘラミガキ、黒色処理は見られない。

須恵器：基本層位からは坏口縁部片2点（Ⅳ・Ⅴb層）、甕体部片1点（Ⅰ層）が出土した。

2. 石　　器（第3表、第33～37図）

基本層位（表採も含む）より48点、遺構内（1・4号土壙、2号住居跡）より5点出土している。

基本層位出土数量中、Ⅳ層出土のものは28点と全体の約60%を占め、さらに剥片が遺跡全体で約40%を占めているのが特徴的である。

3. 鉄　　滓（第37図）

K－13グリッドⅠ層より1点出土した。茶褐色のやや粗鬆な不定形塊状のものである。

佐藤甲二・篠原信彦・柳沢みどり

第1表　縄文時代・弥生時代出土数量表

出土地点		縄文											弥生時代			
		完形・復元土器	破片				前期	中期	後期		晩期		破片			
			総数	口縁部	体部	底部	破片	破片	復元	破片	復元	破片	総数	口縁部	体部	底部
基本層位	Ⅰ	—	23	2	21	—			—	—	—		—	—	—	—
	Ⅱ	—	6	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	Ⅳ	—	120	4	111	5		—	—	2	—	1	—	—	—	—
	(a)	—	(2)	—	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(b)	—	(3)	(1)	(2)	—		—	—	(2)	—		—	—	—	—
	Ⅴ		58	6	48	4	—		—	1	—	2	2		1	1
	(a)	—	(5)	(1)	(3)	(1)	—	—		—	—	—	—	—	—	—
	(b)		(49)	(4)	(42)	(3)	—		—	(1)	—	(2)			—	—
	Ⅵ	3	312	32	261	19	3	4	1	12	2	9	1	1	—	—
	(a)		(89)	(7)	(78)	(4)	(1)		—	—	—	(1)		—	—	—
	(b)	(1)	(165)	(20)	(135)	(9)	(2)	(1)		(1)	—	(4)	—	—	—	—
	(c)	(1)	(45)	(4)	(36)	(5)	—		—	—	—	—		—	—	—
表採		—	9	—	8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
小計		3	527	44	454	29	3	4	1	15	2	12	3	1	1	1
遺構内		—	37		42	—	—	—		—	—		—	—	—	—
合計		3	564	44	491	29	3	4	1	15	2	12	3	1	1	1

第2表　平安時代土器出土数量表

出土地点		土師器					赤焼土器					須恵器				
		実測土器	破片				実測土器	破片				実測土器	破片			
			総数	口縁部	体部	底部		総数	口縁部	体部	底部		総数	口縁部	体部	底部
基本層位	Ⅰ	—	4	—	4	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
	Ⅱ	—	2	—	2	—		—	—	—	—	—	—	—	—	—
	Ⅳ	3	42	7	32	3	—	2	—	2	—	—	1	1	—	—
	(a)	(1)	(1)	—	(1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(b)	—	(2)	—	(2)	—		—	—	—	—	—	—	—	—	—
	Ⅴ	3	12	4	8	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—
	(a)	(2)	(2)	(1)	(1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(b)	(1)	(8)	(2)	(6)	—	(1)	—	—	—	—	—	—	(1)	—	—
	Ⅵ	—	18	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
表採		—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
小計		6	79	12	64	3	1	2	—	2	—	—	3	2	1	—
遺構内		6	15	4	10	1	—	—	—	—	—	1	1	1	—	—
合計		12	94	16	74	4	1	2	—	2	—	1	4	3	1	—

第3表　石器出土数量表

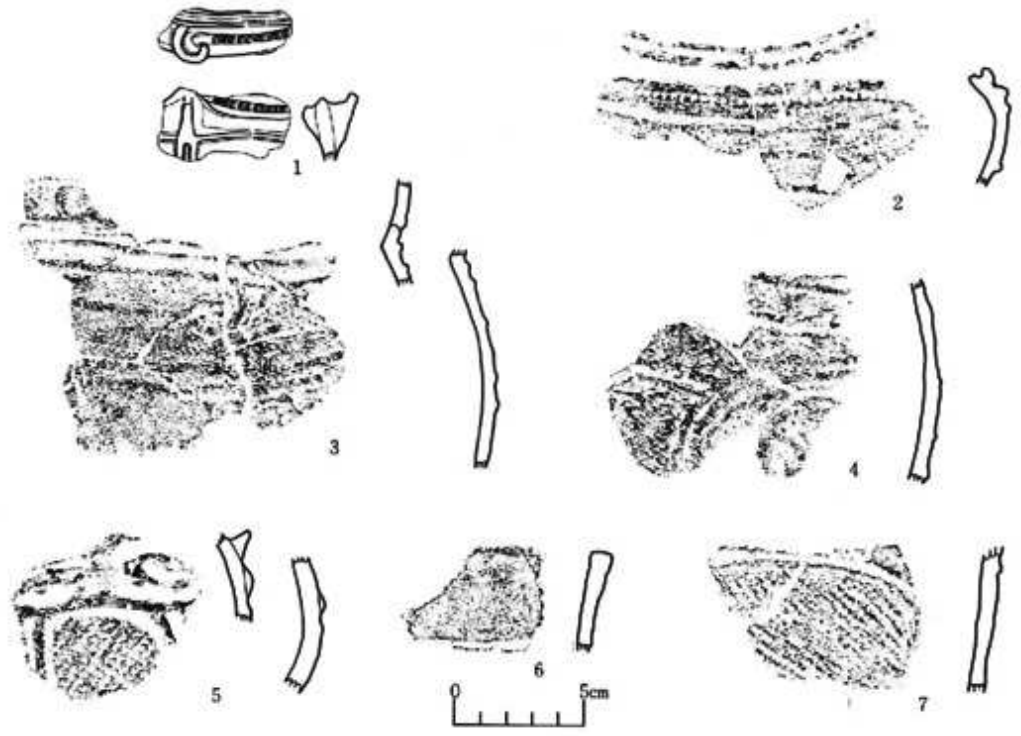
出土地点		石鏃	石錐	石匙	ポイント	スクレイパー	S・F	M・F	剥片	石核	石斧	磨石	礫石器		合計
													Ⅲ	Ⅵ-1	
基本層位	Ⅰ	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	Ⅱ	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
	Ⅳ	3	—	—	—	—	2	—	2	1	—	—	—	—	8
	Ⅴ	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	Ⅵ	4	1	2	—	4	2	1	9	—	2	—	3	—	28
表採		—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	—	—	—	8
小計		9	1	2	1	4	4	1	20	1	2	—	3	—	48
遺構内		—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	1	1	1	5
合計		9	1	2	1	4	4	2	21	2	2	1	4	1	53

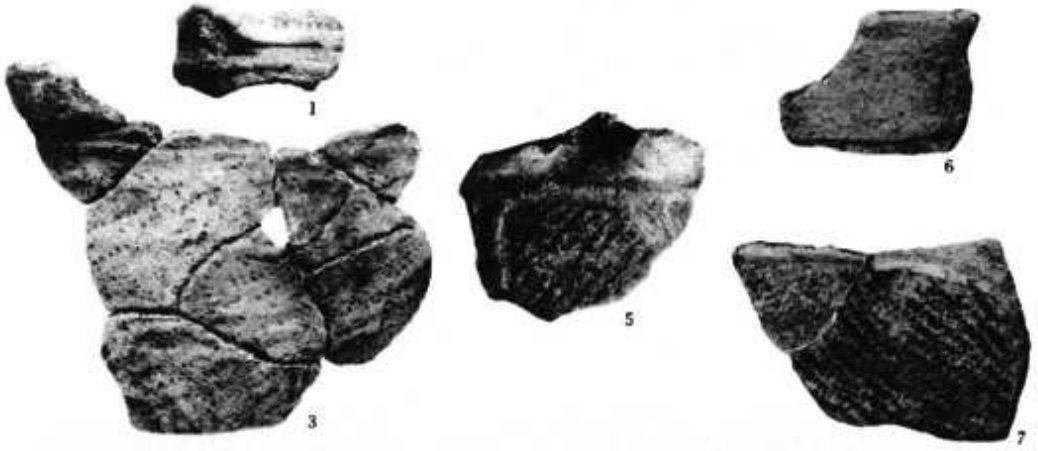
土 器

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	ⅡB－1	Ⅵb	深鉢	口縁部～体部上半	平縁	横位LR縄文、貫通孔	—	縄文前期前葉	内外面磨滅
2	ⅡB－2	Ⅵb	深鉢	体部	—	横位LR多条縄文＋横位LR多条羽状縄文	—	縄文前期前葉	—
3	ⅡA－2	Ⅵa	—	体部下半～底部	—	体部下半：横位LR縄文 底部：LR縄文	—	縄文前期前葉	—

第24図 出 土 土 器 (1)

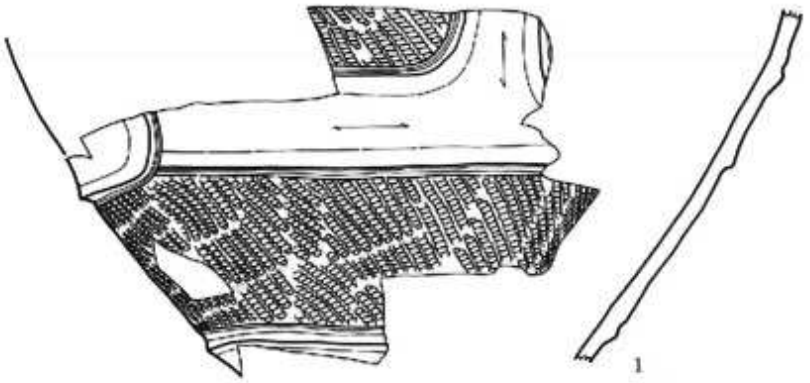


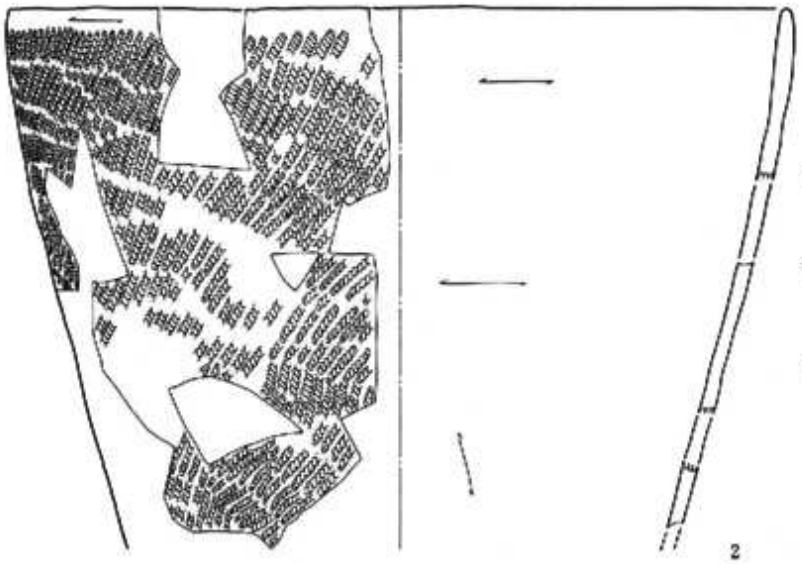


観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	G−25	Ⅵ	深鉢	口縁部	平縁	口唇部：沈線 口縁部：貼付＋隆線文→刺突文	—	縄文中期中葉	内外面磨滅
2	F−25	Ⅵ	深鉢	口縁部	平縁	口唇部：沈線 口縁部：縦位ＲＬ縄文→隆線文→沈線文	磨き	縄文中期中葉	外面磨滅 図１と同一
3	F−27	Ⅵ	深鉢	口縁部−体部上半	—	体部：縦位ＲＬ縄文→隆線文	磨き	縄文中期中葉	外面磨滅 図１と同一
4	F−26	Ⅵ	深鉢	体部上半	—	縦位ＲＬ縄文→隆線文	磨き	縄文中期中葉	外面磨滅 図１と同一
5	H−12	Ⅵ	深鉢	体部上半	—	隆線文→縦位ＲＬＲ縄文→沈線、磨き	磨き	縄文中期中葉	—
6	G−25	Ⅵ	深鉢	口縁部	平縁	沈線文→磨き	磨き	縄文中期後葉〜末葉	外面磨滅
7	F−23	Ⅵ	深鉢	体部	—	沈線文、縦位ＬＲ縄文→磨き	磨き	縄文中期後葉〜末葉	外面磨滅 図６と同一

第25図　出土土器（2）





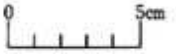
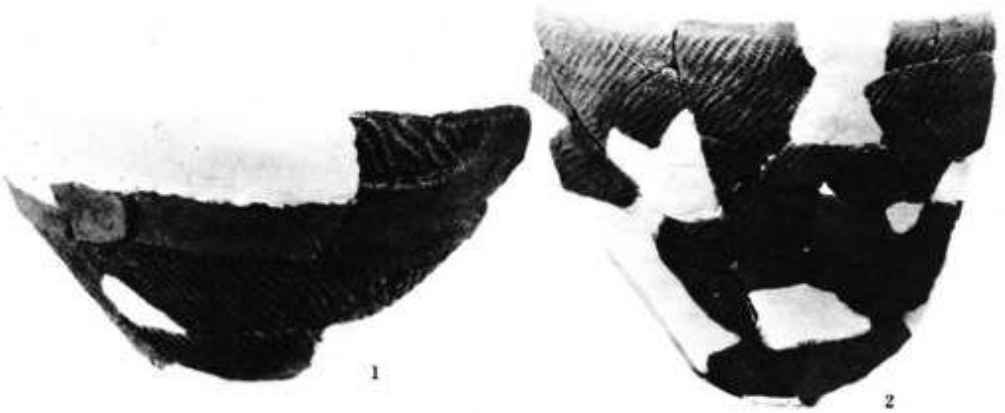


図	接合	地区名	層位
2		ⅡC－5	Ⅵc
	＋	ⅡC－5	Ⅳ
	＋	ⅡC－9	Ⅳ
	＋	ⅡC－11	Ⅳ
	＋	ⅡC－5	Ⅴ
	＋	ⅡB－3	Ⅴb
	＋	ⅡB－4	Ⅵa
	＋	ⅡC－4	Ⅵb
	＋	ⅡD－3	Ⅵa
	＋	ⅡC－5	Ⅵb
	＋	ⅡC－6	Ⅳb
	＋	ⅡB－4	Ⅵc
	－	ⅡC－7	Ⅵ
	－	ⅡC－8	Ⅵ
	－	ⅡD－4	Ⅵa
	－		表採

接合

表

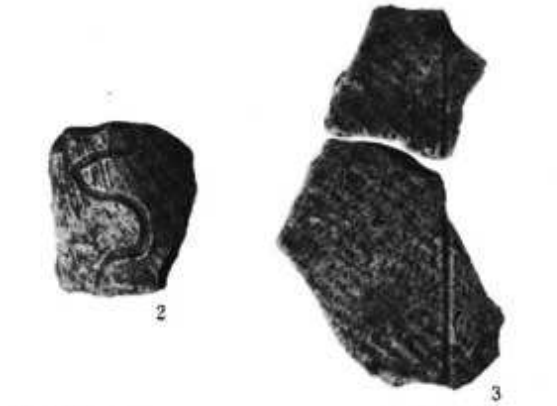


観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	ⅡC－12	Ⅵb	鉢	体部	―	隆線文→縦位LR縄文→沈線文→磨き	磨き	縄文中期末葉	―
2	ⅡC－5	Ⅵc	深鉢	口縁部～体部	平縁	口縁部：磨き 体部：横位LR縄文	磨き	縄文後期	口径(30cm)

第26図　出土土器（3）

接合表	図	接合	地区名	遺構	層位
	5		F−27	—	Ⅵc
		＋	G−25	—	Ⅵb
		−	F−26	—	Ⅵa



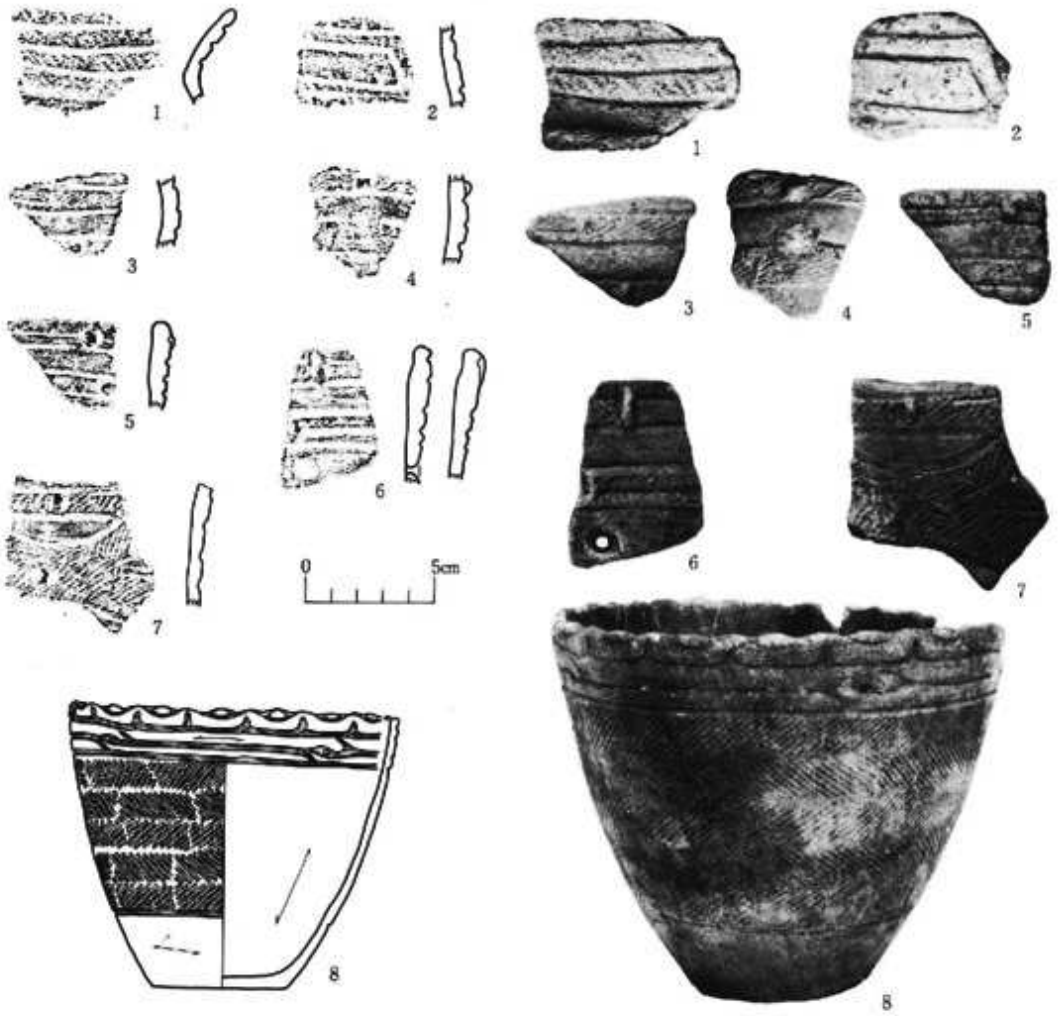
観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	ⅡD−3	Ⅳb	深鉢	口縁部〜体部上半	突起	口縁部：貫通孔→沈線→磨き 体部上半：横位LR縄文→沈線文→貫孔→磨き	磨き	縄文後期初頭	内面一部剥離
2	D−32	Ⅵ	深鉢	体部	—	横位L無条文→沈縄文	磨き	縄文後期初頭	—
3	ⅡE−4	Ⅵb	深鉢	体部	—	横位RL縄文→沈縄文	磨き	縄文後期初頭	—
4	Ⅰ−13	Ⅵ	深鉢	口縁部〜体部上部	平縁	口縁部：沈線→磨き 体部上半：タテ目沈線文	磨き	縄文後期	—

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
5	F−27	Ⅵ	鉢	口縁部〜底部	平縁	—	縄文後期	再利用土器？(縄積痕口縁部転用) 内外面磨滅

外面施文・調整	口縁部〜体部：タテ目沈線文　底部：磨き
法量(cm)・器形	口径(最大径)(15.5)　器高8.0　器底8.6　口縁部から底部にかけてやや内寄

第27図　出土土器（4）



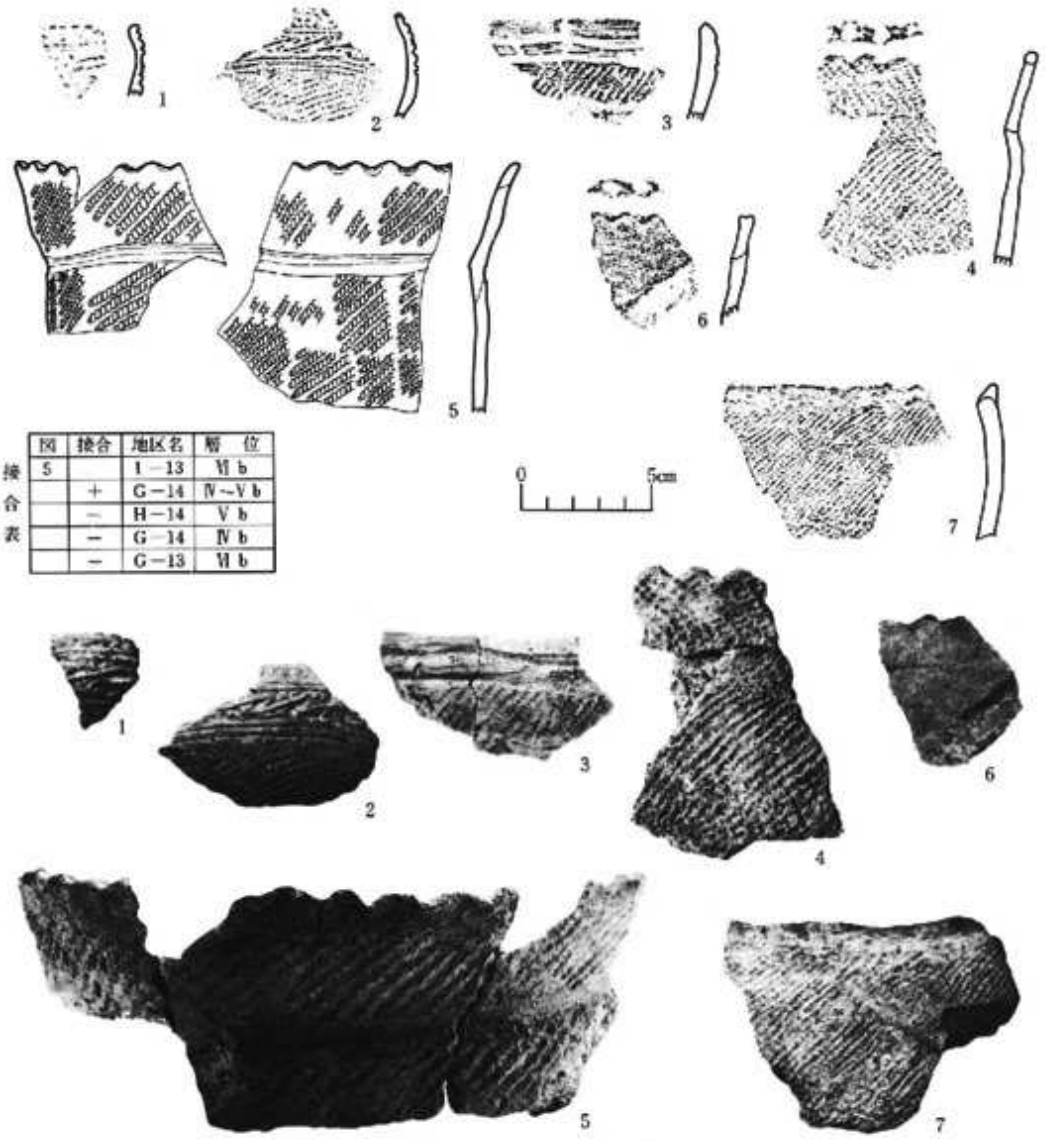
観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	J－12	Ⅵ	深鉢	口縁部	波状	沈線文、横位ＲＬ縄文→磨き	磨き	縄文後期中葉	――
2	J－13	Ⅵ	深鉢	体部上半	―	沈線文、ＲＬ縄文？→磨き	磨き	縄文後期中葉	外面煤付着 図1と同一
3	F－22	Ⅵ	深鉢	体部	―	沈線文、横位ＬＲ縄文→貼瘤→磨き	―	縄文後期後葉	内面磨滅
4	G－17	Ⅵ	深鉢	体部	―	沈線文、横位ＬＲ縄文→貼瘤→磨き	―	縄文後期後葉	内面煤付着 図3と同一
5	J－14	Ⅴb	深鉢	口縁部～体部上半	平縁	沈線文→貼瘤→磨き	磨き	縄文後期後葉	――
6	G・H－15・16	Ⅵ	深鉢	口縁部～体部上半	平縁	貫通孔、沈線→貼瘤→磨き	磨き	縄文後期後葉	――
7	ⅡA－16	Ⅵa	深鉢	体部	―	沈線文、ＲＬ縄文→寄せ上げ→磨き	磨き	縄文後期後葉	――

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
8	H－13	Ⅵ	鉢	口縁部～底部	小波状	磨き	縄文晩期初頭	ほぼ完形

法量（cm）	口径（最大径）12.5　底部5.0　器高10.8
外面施文・調整	口縁部～体部上半：沈線文＋刺突（玉抱三叉文）体部：横位LR・RL羽状縄文　体部下半：沈線→磨き　底部：磨き
器形	口縁部から底部にかけて若干内弯

第28図　出土土器（5）



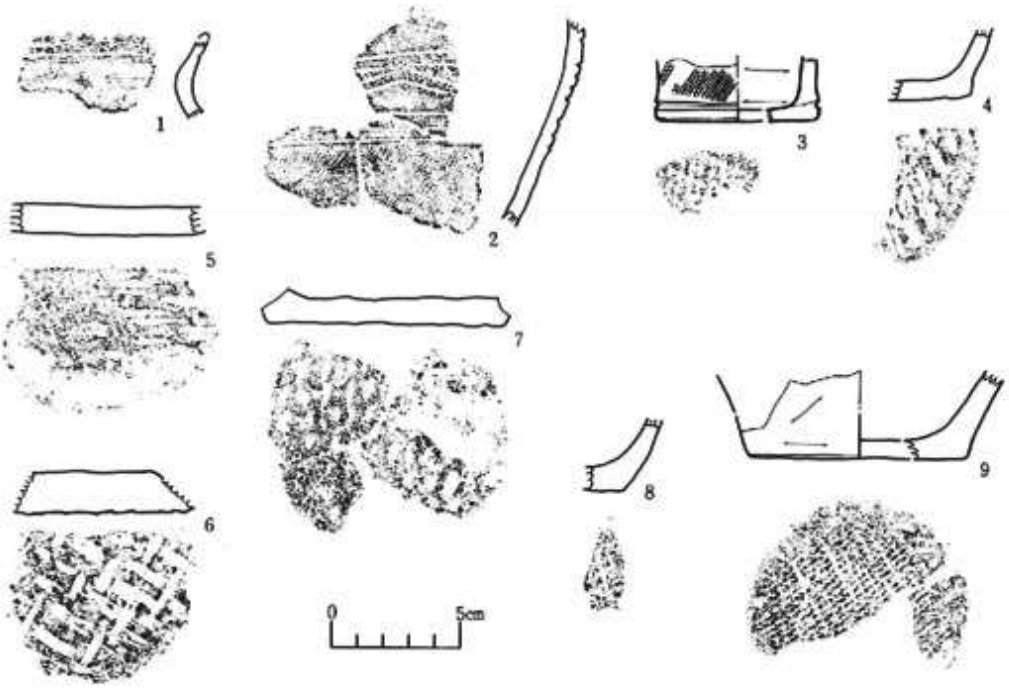
接合表

図	接合	地区名	層位
5		I−13	Ⅵb
	+	G−14	Ⅳ〜Ⅴb
	−	H−14	Ⅴb
	−	G−14	Ⅳb
	−	G−13	Ⅵb

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	ⅡB−4	Ⅵa	浅鉢	口縁部	平縁 刻み目	沈線文(羊歯状文)→磨き	磨き	縄文晩期前葉	——
2	ⅡB−3	Ⅴa	浅鉢	口縁部〜体部	—	体部上半：沈線文(羊歯状文)→磨き 体部：横位RL縄文	磨き	縄文晩期前葉	図1と同一
3	ⅡA−15	Ⅵb	鉢	口縁部〜体部	平縁	口縁部：沈線文→磨き 体部：横位LR縄文	磨き	縄文晩期	——
4	ⅡC−2	Ⅵb	深鉢	口縁部〜体部	平縁 刻み目	横位LR羽状縄文	ナデ	縄文晩期	——
5	I−13	Ⅵ	深鉢	口縁部〜体部	平縁 刻み目	横位LR縄文	磨き	縄文晩期	口径(19cm)
6	H−14	Ⅵ	深鉢	口縁部	平縁 刻み目	横位ナデ	磨き	縄文晩期	——
7	ⅡC−02	Ⅵb	深鉢	口縁部〜体部	平縁	口縁部：磨き 体部：横位LR縄文	磨き	縄文晩期	——

第29図 出土土器 (6)



接　合　表

図	接合	地区名	遺構名	層位
2		H−16	—	Vb
	+	I−15	—	Ⅳ
	−	I−14	—	Ⅳ
	−	H−16	—	Ⅳ
	−	G−16	3号土壙	堆

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	H−16	Vb	壺	口縁部〜頸部	平縁？	沈線文→磨き	磨き	弥生中期後半	口頸部欠損
2	I−15	Ⅳ	鉢	体部	—	体部上半：沈線文（変形工字文）→磨き 体部下半：横位LR縄文	磨き	弥生中期後半	—
3	G・H−15・16	Ⅳ	—	体部下半〜底部	—	体部下半：沈線、横位LR縄文 底部：網代	—	弥生中期後半	内外面磨滅 底径（6cm）
4	ⅡD−1	Ⅵa	—	体部下半〜底部	—	体部下半：磨き 底部：網代	—	縄文	内面磨滅
5	G−15	Ⅵ	—	底部	—	底部：網代	—	縄文	内外面磨滅
6	I−14	Ⅴ	—	底部	—	底部：網代	—	縄文	内面磨滅
7	G−14	Ⅵ	—	底部	—	底部：網代	—	縄文	内外面磨滅
8	ⅡA−15	Ⅵb	—	体部下半〜底部	—	体部下半：磨き 底部：網代	磨き	縄文	—
9	ⅡC−6	Ⅵb	—	体部下半〜底部	—	体部下半：磨き 底部：網代	—	縄文	内面磨滅 底径8.4cm

第30図　出　土　土　器　（7）

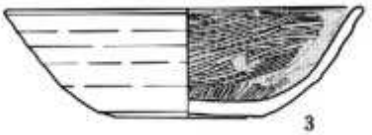
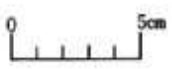


図	接合	地区	層位
1		ⅡD－4	Va
	＋	ⅡC－4	Ⅳ
	＋	ⅡC－4	Ⅴ
	＋	ⅡC－4	Ⅳa
	＋	ⅡD－4	Ⅳ
	＋	ⅡD－4	Ⅳb
図	接合	地区	層位
2		ⅡB－3	Va
	＋	ⅡB－3	Ⅳa
	＋	ⅡB－7	Ⅳa
	－	ⅡB－5	Ⅳb
	－	ⅡB－3	Ⅳb
図	接合	地区	層位
3		ⅡC－4	Ⅴ
	＋	ⅡC－4	Ⅳ

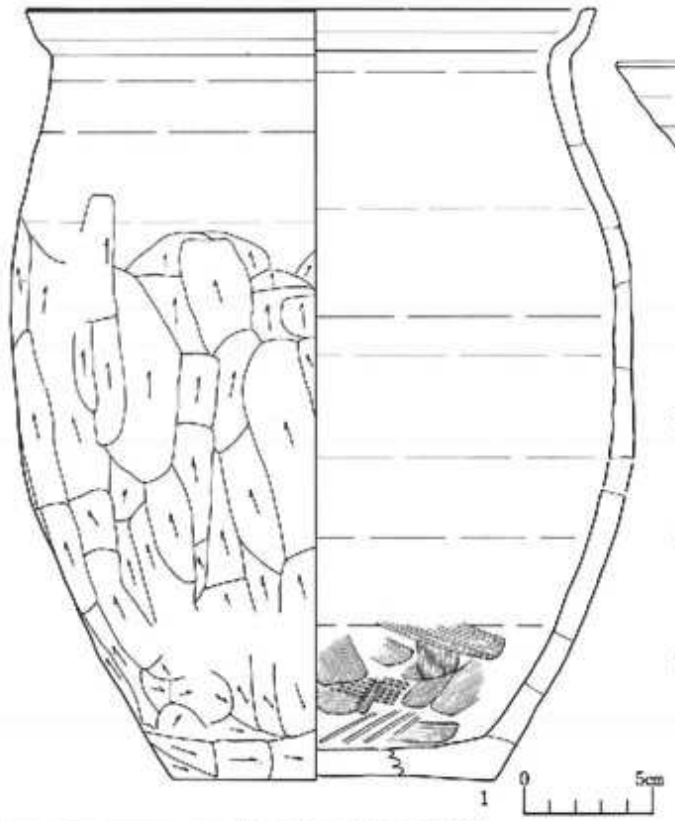
接合表



観察表

図	地区名	層位	種類	口径 cm	底径 cm	器高 cm (残存高)	最大径 cm	外面調整	内面調整
1	ⅡD-4	Va	土師器	26.0	9.6	26.7	26.0	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、底部籾状圧痕	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ・ナデ
2	ⅡB-3	Va	土師器	——	5.7	(1.5)	——	ロクロ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理
3	ⅡC-4	Ⅴ	土師器	13.8	5.8	4.2	——	ロクロ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理、付着物

第31図 出土土器 (8)



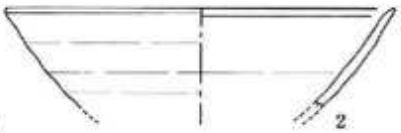
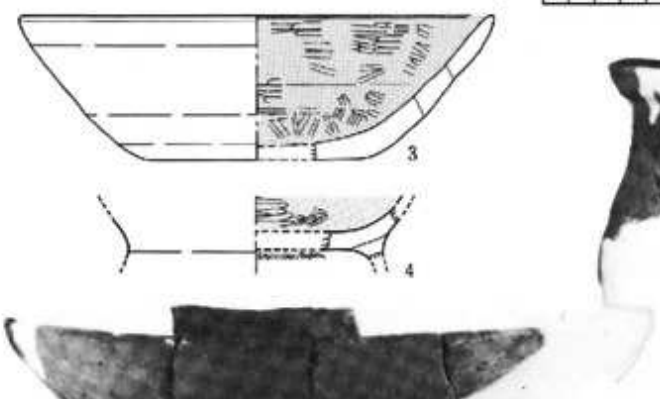


図	接合	地区	層位
1		ⅡD－4	Ⅳa
	＋	ⅡC－3	Ⅳa
	＋	ⅡC－4	Ⅳa
	＋	ⅡC－4	Ⅴ
	＋	ⅡC－4	Ⅵ
	＋	ⅡC－5	Ⅳ
	＋	ⅡC－8	Ⅳ
	＋	ⅡD－2	Ⅳ
	＋	ⅡD－3	Ⅳa
	＋	ⅡD－3	Ⅲ
	＋	ⅡD－3	Ⅳ
	－	ⅡD－4	Ⅰ
	－	ⅡD－4	Ⅳ
	－	ⅡD－4	Ⅳb
図	接合	地区	層位
3		J－13	Ⅳ
	＋	Ⅰ－14	Ⅰ
	＋	Ⅰ－14	Ⅳ
	＋	Ⅰ－15	Ⅳ
	－	Ⅰ－14	Ⅵ
	－	Ⅰ－14	Ⅴb
図	接合	地区	層位
2		H－14	Ⅴb
	＋	H－13	Ⅳ
	－	H－14	Ⅳ

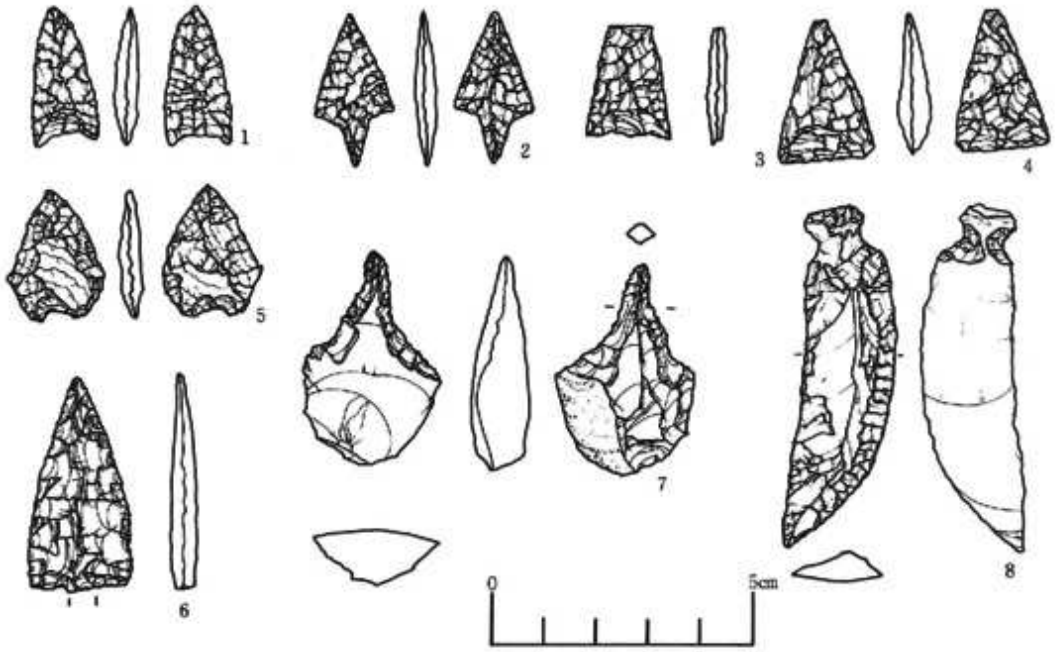


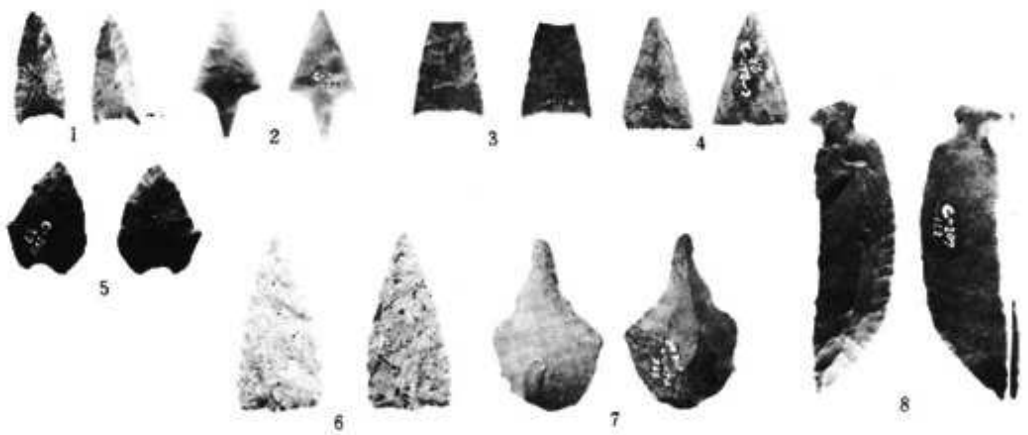
観察表

図	地区名	層位	種類	口径 cm	底径 cm	器高 cm (残存高)	最大径 cm	外面調整	内面調整
1	ⅡD-4	Ⅳa	土師器	21.8	12.3	30.0	23.8	ロクロ、体部ヘラケズリ	ロクロ、体部ハケメ・ナデ
2	H-14	Ⅴb	赤焼土器	15.0	(15.0)	(3.9)	——	ロクロ	ロクロ
3	J-13	Ⅳ	土師器	18.3	8.5	5.6	——	ロクロ、底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理
4	ⅡD-3	Ⅴb	土師器	——	——	(2.0)	——	ロクロ、付高台	ヘラミガキ、高台ナデ、黒色処理

第32図　出土土器（9）

石 器



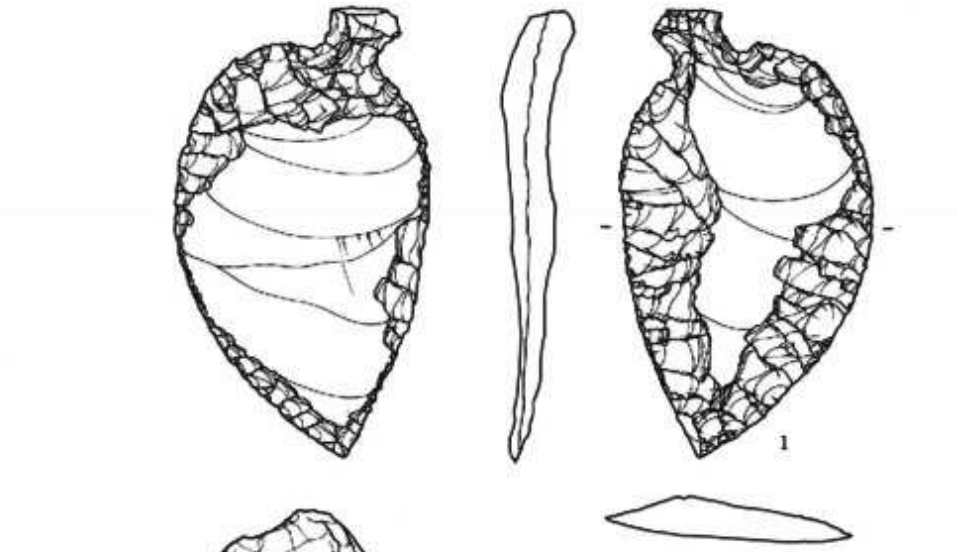


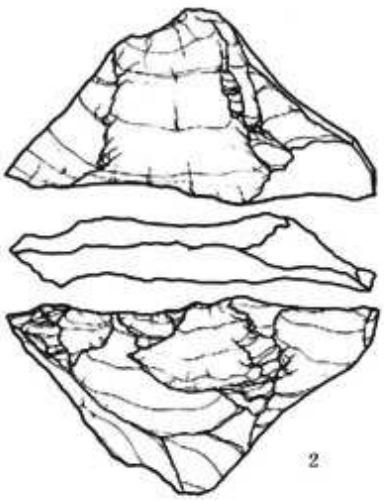
観察表

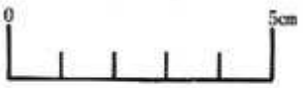
単位：mm

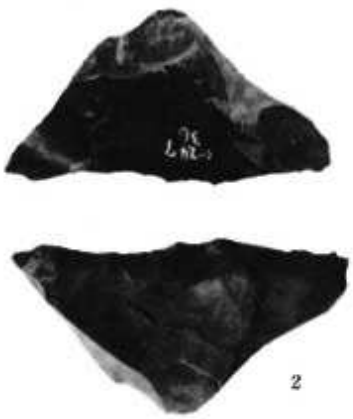
図	地区名	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	H－11	Ⅵ	石 鏃	27.0	12.5	4.0	――	Ⅵω㉖	珪質頁岩	110
2	I－14	Ⅵ	石 鏃	29.0	15.3	4.0	――	Ⅱo②	チャート	124
3	ⅡD－8	Ⅵa	石 鏃	21.5	15.5	2.3	――	Ⅵω⑳	珪質頁岩	129
4	ⅡC－6	Ⅳ	石 鏃	27.5	18.2	6.2	――	Vγ⑲	珪質頁岩	24
5	J－13	Ⅳ	石 鏃	25.0	18.5	4.0	――	Ⅵω㉓	珪質細粒砂岩	37
6	ⅡD－2	Vb	ポイント	41.5	20.0	5.0	基部欠損	Ⅰ	流紋岩	161
7	ⅡA－16	Ⅵa	石 錐	41.2	26.0	10.7	――	Ⅱb1	珪質頁岩	233
8	G－20	Ⅵ	石 匙	66.5	17.0	6.0	――	Ⅱ	珪質頁岩	152

第33図 出 土 石 器 (1)







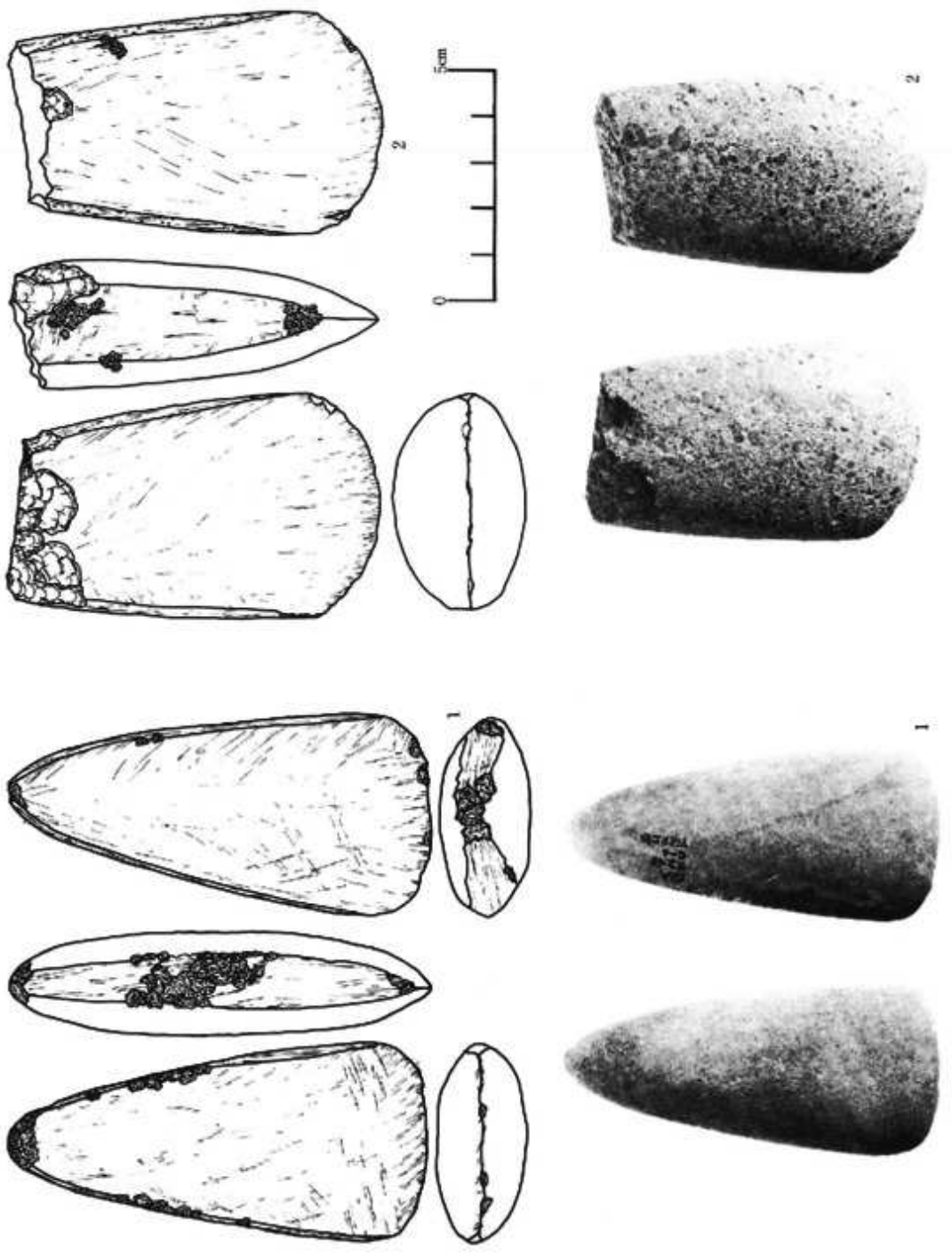


観察表

単位：mm

図	地区名	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	IIC−11	VI b	石匙	87.0	48.0	10.0	刃部の形状が整っている	II	珪質頁岩	252
2	J−12	VI	石核	38.5	73.5	13.4	——	—	珪質頁岩	36

第34図　出土石器（2）

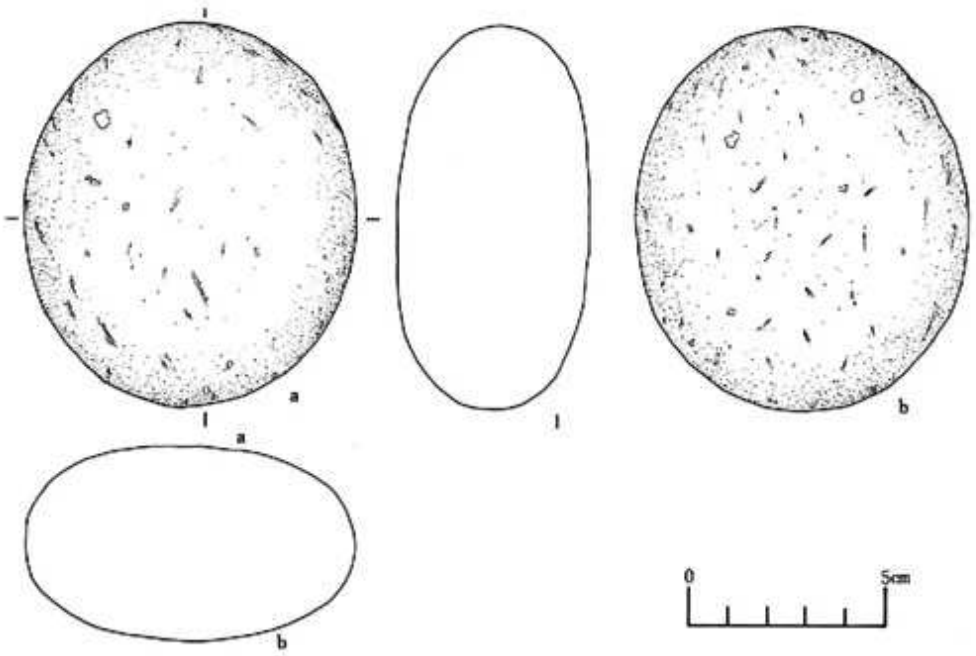


観察表

単位：mm

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	ⅡC－6	Ⅶa	90.5	44.5	20.5	基部及び周縁中央部に敲打痕(A)	Ⅱa	砂岩	16
2	Ⅰ－12	Ⅵ	80.0	48.5	28.5	基部欠損、側面の一部に敲打痕(A)	Ⅱb	角閃石安山岩	174

第35図 出土石器 (3)

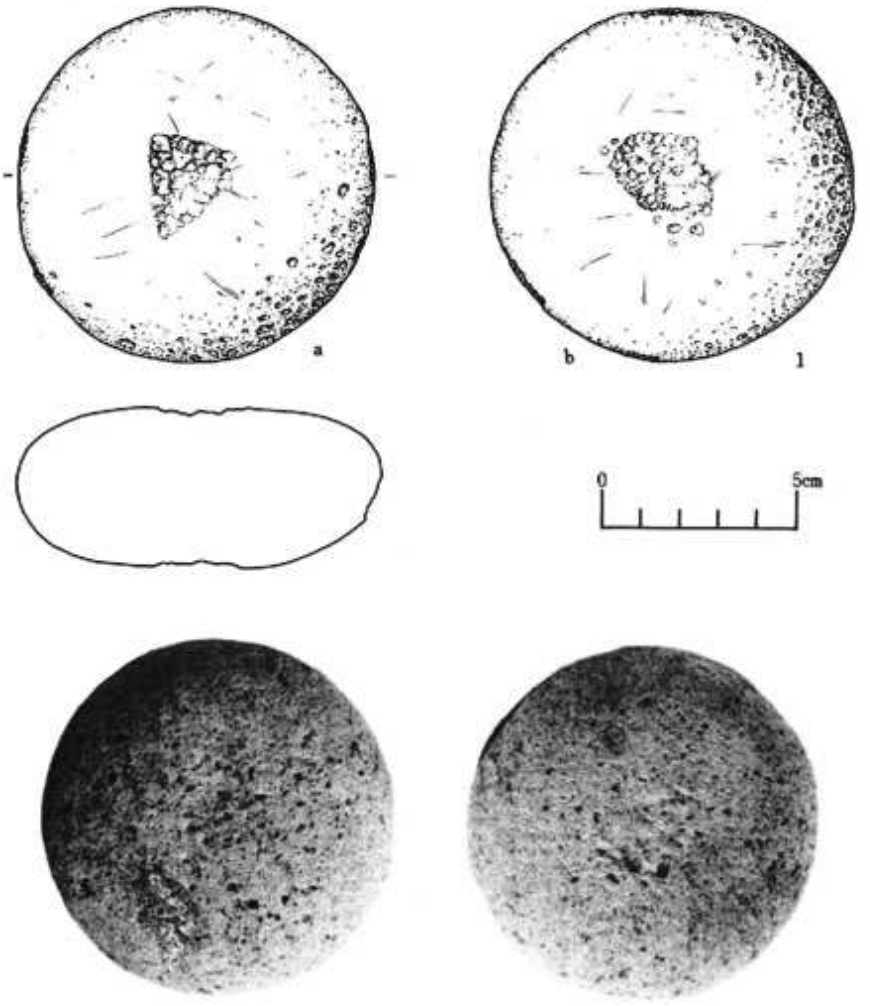


観　察　表

単位：mm、g

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
1	ⅡB－1	Ⅵ	99.2	84.0	49.0	650	C	a、b両面とも磨痕(a)	Ⅲ	安山岩	1

第36図　出　土　石　器　(4)



観察表

単位：mm, g

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
1	ⅡC－5	Ⅵc	91.0	92.3	41.0	55.0	B	a、b両面に磨痕(a)と敲打痕(b－2) 全周に敲打痕(b－1)	Ⅲ	安山岩	２０３

鉄　滓

K－13グリッド
Ⅰ層出土

第37図　出土石器(5)・鉄滓

Ⅵ. ま と め

1．縄文時代の遺構と遺物

沼原A遺跡において検出された縄文時代の遺構は土壙11基である。土壙の配置は、第2地点の谷部では谷心線(河道の横断面内の最大水深の点を上・下流に結んだ線[註1])。当遺跡では河道は検出されなかったが便宜上使用する。)に沿って5基、第1地点では西側の平坦部に2基、東側では北斜面のすぐ下を東西に走る浅い谷の谷心線に沿って4基がある。総じて土壙の配置は弧状を呈し、谷及び浅い谷の谷心線に制約を受けている。

これらの土壙の中で8号土壙、10号土壙を除く9基の土壙は従来「陥穴」[註2]・「陥し穴状遺構」[註3]・「Tピット」[註4]等と称されてきたものである。7号土壙は上端平面形が円形であるが、他の8基は上端平面形が楕円形、下端平面形が隅丸長方形、断面形が逆台形もしくはその上半がさらに外に開く形態をしている。底面は平坦なものが多く、2号・6号・9号土壙はピットを有する。規模においては下端平面形の長軸が152～118cm、短軸が56～24cm、深さは190～124cmである。土壙の堆積土は地山崩壊土・基本層・基本層対応の層・その他の層で構成されており、全て自然堆積により埋まっている。3号・4号・5号・6号・9号・11号土壙は最下層に地山崩壊土が堆積し、その上層に基本層最下層のⅥ層が堆積している。2号土壙の最下層は不明であるが、1号土壙は地山崩壊土の堆積が見られずⅥ層により土壙のほとんどが埋まっている。また8号土壙、10号土壙は平面形が隅丸長方形と長楕円形と差異はあるが、共に底面にピットを1基有していること、規模においてはほぼ同様であること、堆積土がⅥ層であることに共通性が認められる。沼原A遺跡で検出された11基の土壙は、2号・7号土壙の堆積状況に不明な点はあるが、他の土壙はⅥ層の堆積状況から、土壙の構築された時期はⅥ層の堆積時期以前であり、全ての土壙が谷心線に制約を受けた配置をしていることから同一時期の土壙群と考えられる。

2．平安時代の遺物と遺構

沼原A遺跡出土の土師器、赤焼土器、須恵器は全て平安時代に属する。これら土器の分布は1号住居跡周辺、谷部分に集中的にみられ、第1地点平坦部17ライン以東になると、ほとんど分布を示さない。遺物の分布状況、調査経過からすると、当時代の住居は平坦部に1軒しか存在していなかったことになる。さらに、①住居跡床面出土の炭化材が、出土状況より燃料用の薪炭材である公算が強く、しかもクリ、ブナ材がひろく製鉄用燃料として利用されている点、②住居跡床面より鍛冶滓が出土した点　③住居跡中央部検出3号ピットが、他遺跡の鍛冶遺構[註5・6]に認められるほどの強い焼け面は認められはしなかったが、規模、形態の上では鍛冶炉との類似性が強い点、を考え合せ1号住居跡は製鉄関連遺構—鍛冶遺構—と推定される。また、1号住居跡南側で検出された12号土壙は、時期決定遺物を欠くが、住居に隣接し、壁面、底面に焼

け面が認められ、クリの炭化材を出土しているという点で、1号住居跡に伴う鍛冶関連遺構と考える。

3．1号住居出土の礫石器（第21図2）

この種の石器は、中本遺跡[註7]、大平山元遺跡[註8]等でstone－retacherと報告されているものに類似しているが、それらはいずれも旧石器時代に属するものである。同種の傷はさらに追跡され、縄文時代早期から中期後半の礫、及び縄文土器片、弥生土器片、土師器片にも確認されたという報文もある[註9]。しかし、本遺跡出土の礫石器が果してstone－retacherとして認定できるか否かは、同種の資料の追加を待つ必要がある。また、カマド内より土師器と混在して出土しており、1号住居跡に伴う出土遺物ではあるが、当時代に転用された可能性も十分考えられ、この石器の所属時期については不明である。

斎野裕彦・佐藤甲二・柳沢みどり

註

1．町田貞他「地形学辞典」 二宮書店 1981
2．霧ヶ丘遺跡調査団「霧ヶ丘」 1973
3．瀬川司男「陥し穴状遺構について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要Ⅰ』 1981 P．1～16
4．札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告ⅩⅣ」 1977
5．登里町教育委員会「沼崎山遺跡」「登里町文化財調査報告書 第2集」 1980
6．宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡－昭和51年度発掘調査概報」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1976』 1976
7．加藤晋平、桑原護「中本遺跡」 1969
8．横山裕平、他「大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書」「青森県立郷土館調査報告書第8集、第11集」 1980、1981
9．安藤洋一 中村富代重「stone－retoucherと思われる礫と類似した傷のある土器片」
『考古学ジャーナル、Vol．107』 1975

沼　原　B　遺　跡

（ C — 245 ）

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原30

調査期間：第1地点　1次調査　昭和54年8月23日～10月5日

2次調査　昭和55年6月16日～8月19日

第2地点　2次調査　昭和55年4月23日～4月26日

対象面積：第1地点　1次調査　1600㎡　2次調査　300㎡

第2地点　2次調査　900㎡

発掘面積：第1地点　1次調査　500㎡　2次調査　300㎡

第2地点　2次調査　120㎡

担当職員：渡部弘美・斎野裕彦・加藤正範・佐藤　洋

Ⅰ．遺 跡 の 立 地（第1図、写真1）

沼原B遺跡は造成地のほぼ中央部南側の窪地に立置する。標高156～160mの間にひろがる約4,000㎡の窪地で、四方を標高180～190mの丘陵に取り囲まれており、丘陵との比高は約20～30mである。窪地は中央部が湿地帯になっており、北西側、南東側に比較的水の影響を受けない緩斜面を持つ。また、南東側丘陵に移行する緩斜面上の標高160～165mの間には、緩やかな傾斜の狭い平坦部がある。

遺跡の南東丘陵下の谷部には沼原C遺跡、南西丘陵には嶺山B遺跡が隣接する。

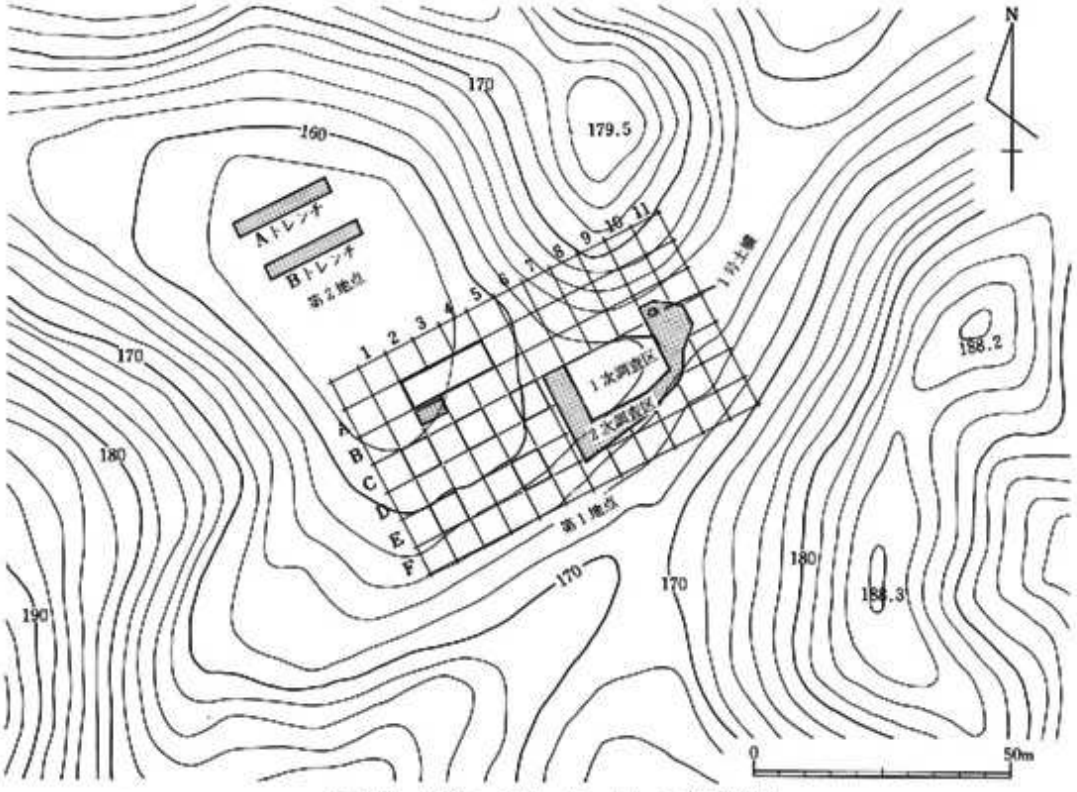
佐 藤 甲 二

Ⅱ．調査の方法と概要（第1図）

沼原B遺跡は昭和54、55年の2年次に渡って調査された。1次調査（昭和54年度）は、湿地帯南東側の緩斜面、狭い平坦部分（以上、第1地点）、2次調査（昭和55年度）は、第1地点の拡張、湿地帯北西側の緩斜面下の湿地帯（第2地点）の調査を実施した。

1．調 査 の 方 法

（第1地点）縦軸ライン（A～F）をN－28°－Wとし、これに直行する横軸ライン（1～11）による



第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図

1．調査前全景（南西より）

2．54年度調査全景（南西より）

3．55年度調査全景（南東より）

6×6mグリッドを設定し、調査を行う。

〈第2地点〉第1地点横軸ラインに平行する3×20mの2本のトレンチ(A、B)を設定し、調査を行う。

2．調査の概要

1次調査(写真2)

〈第1地点〉8月23日～10月5日までの約1ヶ月半調査を実施した。1～9ラインまでの約1,600㎡が調査対象で、調査面積は約500㎡である。A・C・Eラインを中心として調査を進めたが、Ⅰ～Ⅲ層まで無遺物層で、5ライン以西ではⅢ層下が地山となり、A－2・3グリッド地山上面で自然礫の集中がみられた他、遺物、遺構は検出されなかった。C－7グリッドでは地山上にⅣ層が検出され、この層より縄文時代の土器片を出土した為、C－8・9、D－7～9グリッドを拡張したが、Ⅳ層中より縄文時代の遺物を出土したのみで、Ⅳ層中、及びⅣ層下地山上面でも遺構は検出されず、木の根によるピット状の攪乱が多数認められたのみであった。

2次調査(写真3)

〈第1地点〉6月16日～8月19日までの約2ヶ月間調査を実施した。10ライン以東を中心とする、1次調査区の周辺部約300㎡を調査した。B－2グリッドを除く他のグリッドは、Ⅰ～Ⅱ層ま

で重機により排土を行い、Ⅲ層より人力による調査を行った。D－6、C－10グリッドでは地山が浅い窪地状になっており、両地点を中心として、新たに地山(Ⅷ層)上にⅤ～Ⅶ層が検出され、これら各層より縄文時代の遺物を出土した。B－10グリッド緩傾斜面よりは縄文時代の土壙が1基検出された。またB－2グリッド調査の結果、1次調査で検出されたA－2・3グリッドの礫の集中は、自然のものと判明した。

〈第2地点〉4月23日～26日の4日間調査を実施した。北西援斜面下の湿地帯の約900㎡が調査対象で、調査面積は約120㎡であった。2本のトレンチとも表土下約1.5m掘り下げたが、Ⅷ層は認められず、第1地点とは異なる層位を呈し、湿地帯の様相を顕著に表わしていた。遺物、遺構は皆無であった。

以上、2ヶ年に渡る調査の結果、縄文時代の土壙1基、縄文時代の遺物を出土するⅣ～Ⅶ層が検出された。遺跡の範囲は南東側の狭い平坦部を中心としており、湿地帯周辺部では遺物、遺構は確認されなかった。出土遺物は土器片を中心として平箱2箱分程度であった。

佐藤甲二

Ⅲ．基本層位(第1地点)(第2図)

現表土層より地山層までの大別8層から成り、これらはさらに10層に細分される。

第Ⅰ層　黒褐色(10YR3/2)シルト層。現表土層。草の根、木の根を多量に含む。厚さ約15cm。

第Ⅱ層　暗褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を含む、厚さ約20cm前後、調査区全域に分布。

第Ⅲ層　黒褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を多く含む。調査区全域分布するが、7ライン以東では断片的となる。A－3グリッド付近では厚さ約30cm程も厚く堆積する。

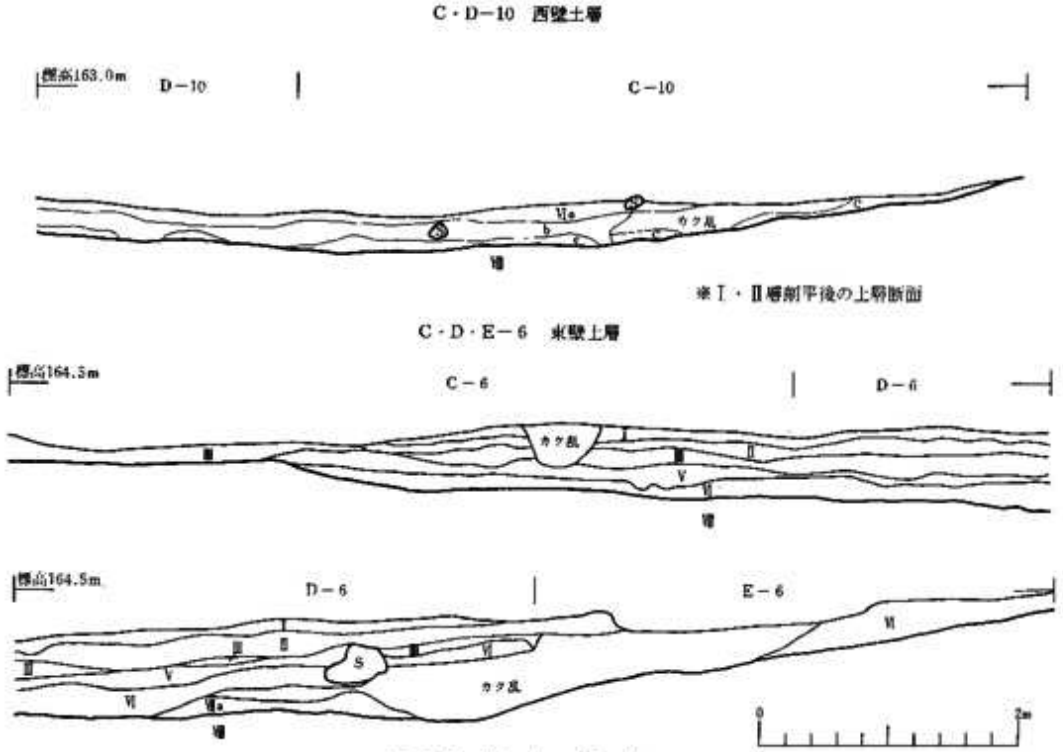
第Ⅳ層　黒褐色(10YR3/2)シルト層。多量小礫を含む。C・D－7・8グリッドの狭い範囲にのみ分布。起伏の大きな層。厚さ約10cm。縄文時代の遺物を多く含む。

第Ⅴ層　黒色(10YR3/1)シルト層。炭化粒、小礫、風化凝灰岩粒を含む。D－6、C－10グリッド周辺部のみに断片的に分布。厚さ20cm前後。縄文時代の遺物を若干含む。

第Ⅵ層　褐色(10YR5/6)シルト層。炭化粒微量、風化凝灰岩粒を含む。D－6グリッド周辺部中心に分布。C－10グリッド付近にも断片的に分布。厚い部分で約30cm。縄文時代の遺物を含む。

第Ⅶ層　3層に細分される。Ⅶa層がD－6、E－8グリッドで若干の分布を示す他は、C－10グリッド付近でしか分布せず。いずれの層も縄文時代の遺物を含む。

Ⅶa層　暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト。小礫を少量、風化凝灰岩粒、炭化粒を含む。厚さ15



第2図 基 本 層 位

cm前後。

Ⅶb層　黒褐色(10YR2/2)黒褐色シルト層。小礫を少量、風化凝灰岩粒を多量に含む。厚さ15cm前後。

Ⅶc層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層。地山漸移層。風化凝灰岩粒を含む。断片的な分布を示す。厚さ5～10cm。

第Ⅷ層　黄褐色(10YR5/6)粘土層。地山層。3～5cmの凝灰岩をまばらに含む。C－8グリッド周辺では木の根の影響により上面が凹凸状態となっている。

以上Ⅰ層からⅧ層の内、6ライン以東のⅠ～Ⅳ層は木の根によってかなり攪乱を受けている。また、縄文時代の遺物を含むⅣ～Ⅶ層には遺物よりの時期差は見い出せず、堆積状態も起伏が激しく、不安定な堆積状況である。

佐 藤 甲 二

Ⅳ. 遺　　構

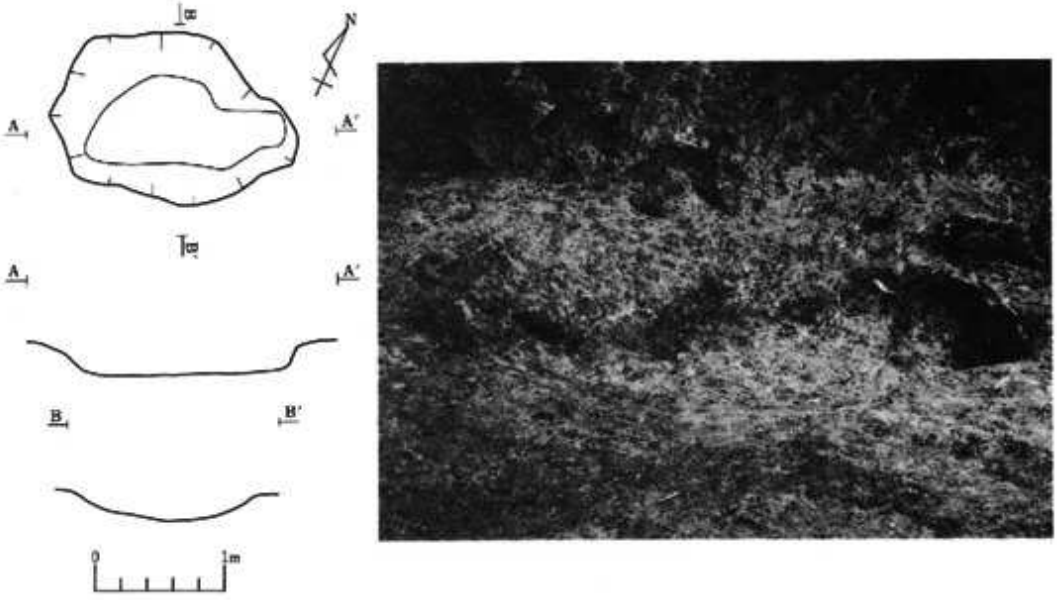
1号土壙(第3図)

1号土壙は窪地東南側緩斜面、B－10グリッドの南西コーナーに位置し、すぐ北は標高179.5mの丘陵頂部があり急斜面となっている。検出面は地山上面である。

土壙の上端平面形は不整楕円形で、長軸規模184cm、短軸規模110cmを測り、下端平面形は不整長楕円形で、長軸規模156cm、短軸規模70cmを測る。深さは22cmと浅く、底面はほぼ平坦である。底部施設はなく、下端の長軸方向はN－65°－Eである。土壙は黄褐色粘土層で埋まっており、人為的な堆積状況を示している。遺物は皆無である。

土壙の検出された東南側緩斜面は中央部がやや窪んでおりレンズ状堆積を呈している。しかし、土壙は中央部から離れた丘陵際に位置する為に、検出面(地山上面)上には、Ⅶ層の堆積が認められず、直接、Ⅵ層に覆われている。Ⅳ層も下層と同様に縄文時代晩期の遺物を含んでいる点より、当土壙の構築時期は縄文時代晩期以前と考えられる。尚、土壙の性格は不明である。

1 号 土 壙



第3図　1 号 土 壙

V. 出 土 遺 物

1. 土器 (第1表、第4～7図)

出土土器は全て縄文土器で、基本層位を中心として、復元土器5点、破片資料122点(口縁部10点、体部108点、底部4点)が出土している。時期的には中期後葉、晩期末葉のものが認められるが、大多数が晩期の時期に包括される。層位的には、Ⅳ層の出土量が最も多い。

佐 藤 甲 二

第1表 縄文時代土器出土数量表

出土地点		復元土器	破片資料 総数	口縁部	体部	底部	中期 破片	晩期 復元	晩期 破片	不明 破片
基本層位	Ⅰ	—	3	—	3	—	—	—	—	3
	Ⅲ	1	13	1	11	1	—	—	1	12
	Ⅳ	4	71	3	65	3	—	4	5	66
	Ⅴ	—	1	—	1	—	—	—	—	1
	Ⅵ	1	15	—	15	—	—	1	—	15
	(a)	(1)	(15)	—	(15)	—	—	(1)	—	(15)
	Ⅶ	—	12	4	8	—	1	—	3	8
	(a)	—	(3)	(1)	(2)	—	—	—	—	(3)
	(b)	—	(4)	(2)	(2)	—	(1)	—	(1)	(2)
	(c)	—	(5)	(1)	(4)	—	—	—	(2)	(3)
表採		—	7	2	5	—	—	—	2	5
合計		5	122	10	108	4	1	5	11	110

2. 石器 (第2表、第8・9図)

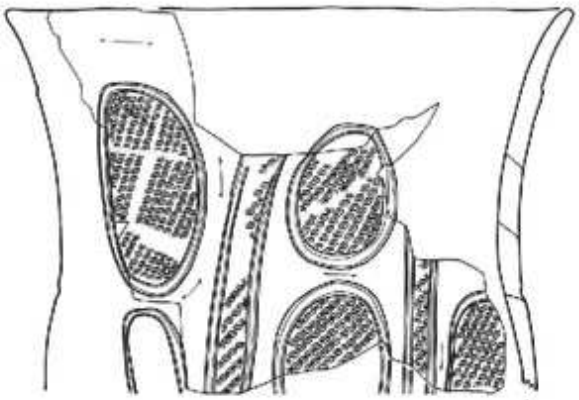
基本層位を中心として19点出土した(表採資料4点含む)。これらの内、礫石器はわずか1点である。層位的にはⅣ層出土のものが多い。尚、A－3グリッドⅠ層出土の砥石は、出土状況より新しい時代のものと考えられる。

柳 沢 みどり

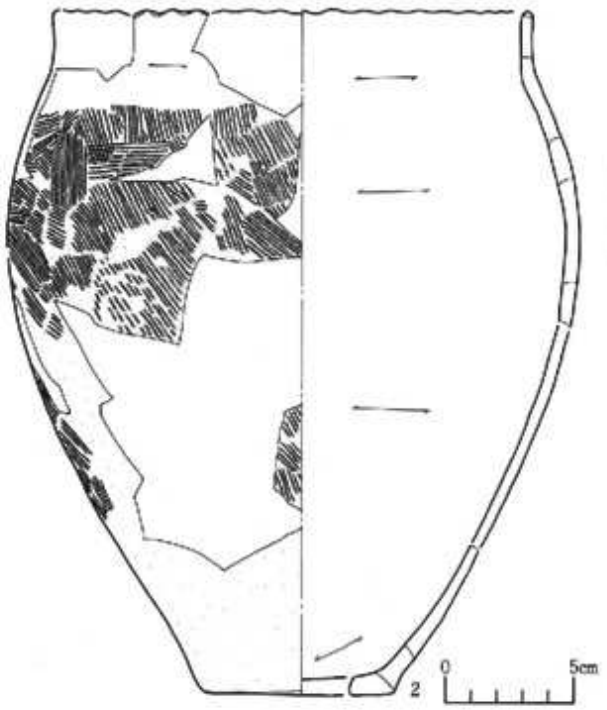
第2表 石器出土数量表

出土地点		石鏃	石匙	箆状石器	不定形石器	S・F	M・F	剥片	石核	砥石	礫石器Ⅲ	合計
基本層位	Ⅰ	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	3
	Ⅳ	—	—	1	—	—	2	2	2	—	1	8
	Ⅴ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
	Ⅶ	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	4
表採		1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	3
合計		4	1	1	1	3	2	2	3	1	1	19

土　器



接合表	図	接合	地区名	層位
	1		C－10	Ⅶb
		＋	C－11	Ⅴ

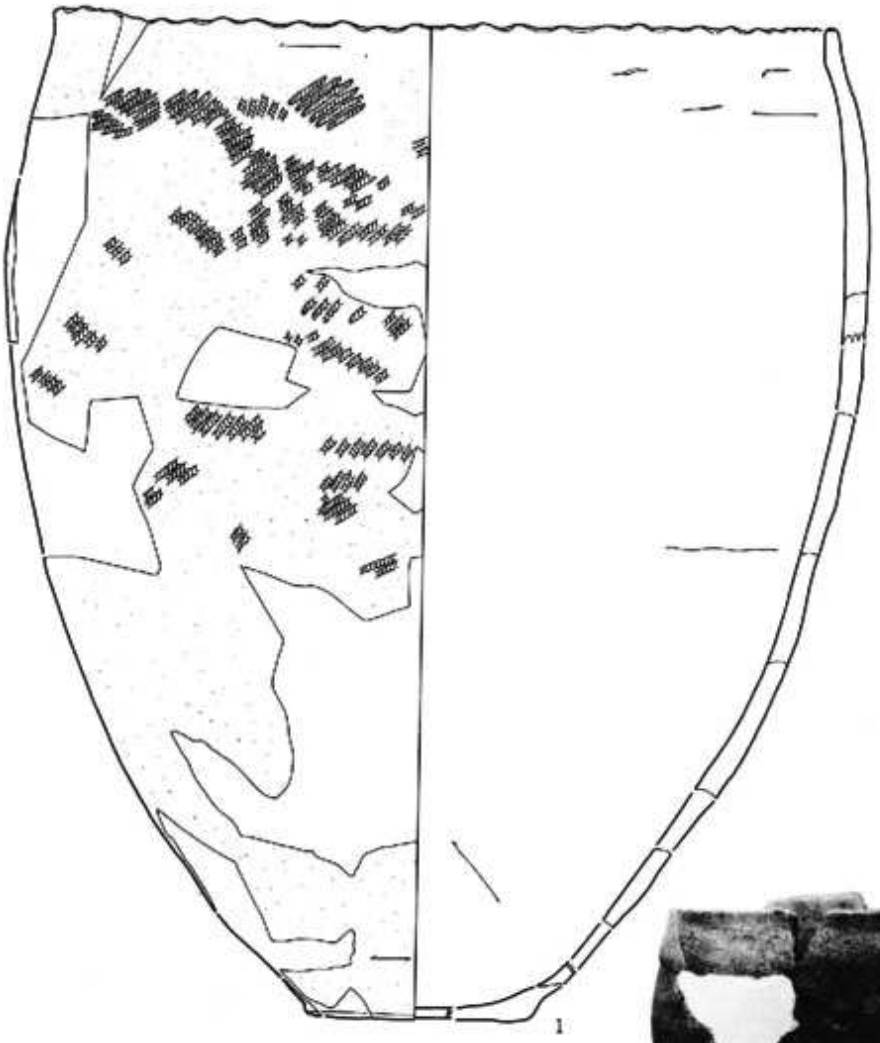


接合表	図	接合	地区名	層位
	2		C－7	Ⅳ
		＋	D－7	Ⅰ
		＋	C·D－7·8	Ⅲ

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
1	C－10	Ⅶb	深鉢	口縁部～体部	平縁	磨き	縄文中期後葉	―――
法量 (cm)			口径(最大径)(22.0)					
外面施文・調整			口縁部：磨き　体部：ＲＬＲ縄文→沈線文→磨き					
器形			口縁部外反、体部上半でくびれ、体部中位で膨らむ。口径と体部最大径がほぼ等しい。					
図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
2	C－7	Ⅳ	深鉢	口縁部～底部	平縁、刻み目	磨き	縄文晩期	底部穿孔の可能性もある。
法量 (cm)			口径(18.5)　最大径(体部上半)(22.0)　底径5.3　器高26.6					
外面施文・調整			口縁部：磨き　体部：Ｒ撚糸文　体部下半：磨き　底部：磨き					
器形			最大径を体部上半に持ち、口縁部やや外反、体部上半で膨らむ					

第4図　出土土器（1）



0 5cm

接合表

図	接合	地区名	層位
1		C－7	Ⅳ
	＋	C－7	Ⅲ
	－	D－7	Ⅰ
	－	D－7	Ⅲ
	－	D－7	Ⅳ
	－	C・D－7・8	Ⅱ

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
1	C－7	Ⅳ	深鉢	口縁部～底部	平縁、刻み目	磨き	縄文晩期	内外面磨滅。体部外面に黒斑あり。
法量 (cm)			口径(30.0) 最大径(体部上半) 33.0 底径8.7 器高38.5					内面に輪積痕明瞭に残す。
外面施文・調整			口縁部：磨き 体部：横位LR縄文					
器形			口縁部ほぼ直立、体部上半でやや膨らむ					

第5図 出土土器(2)

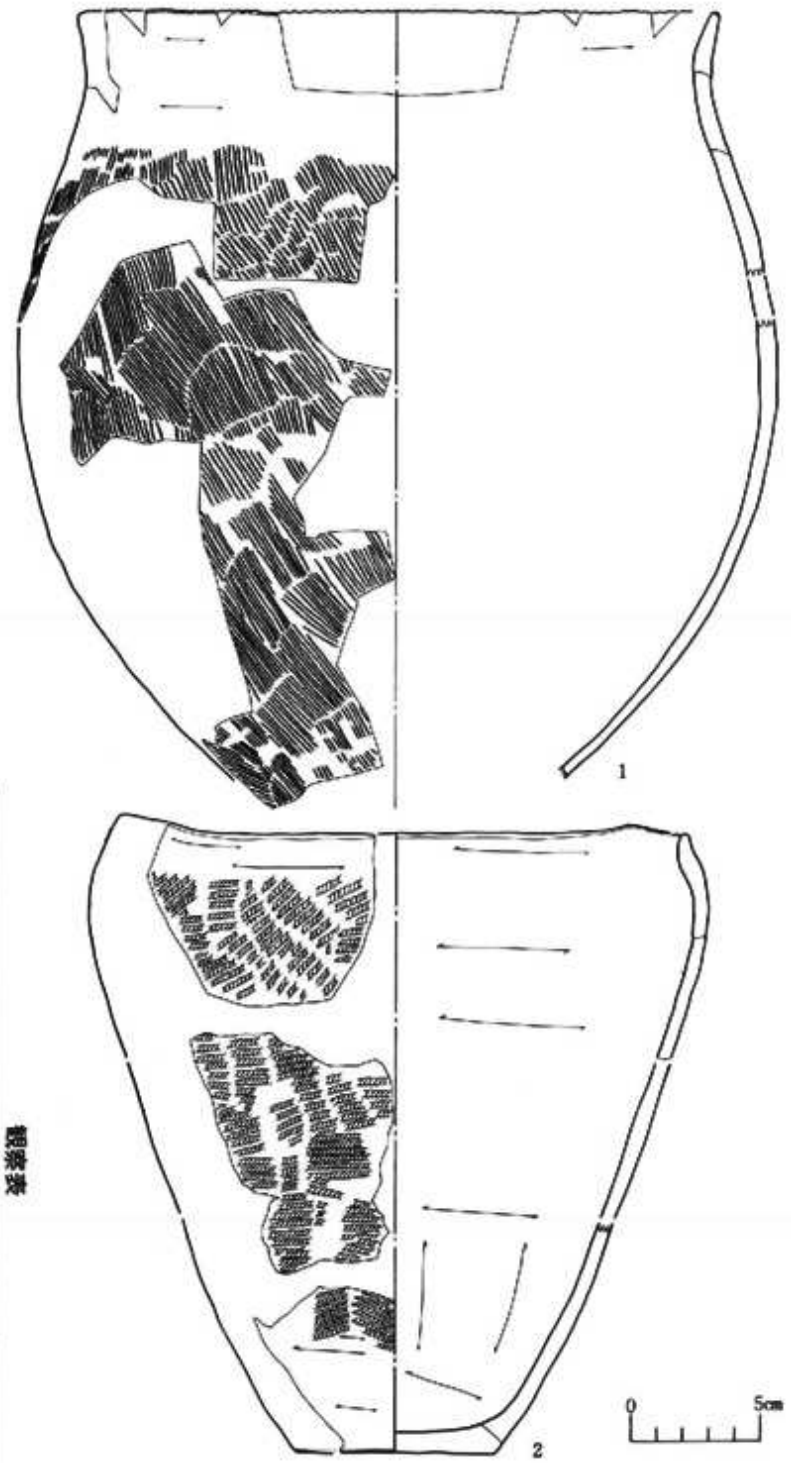


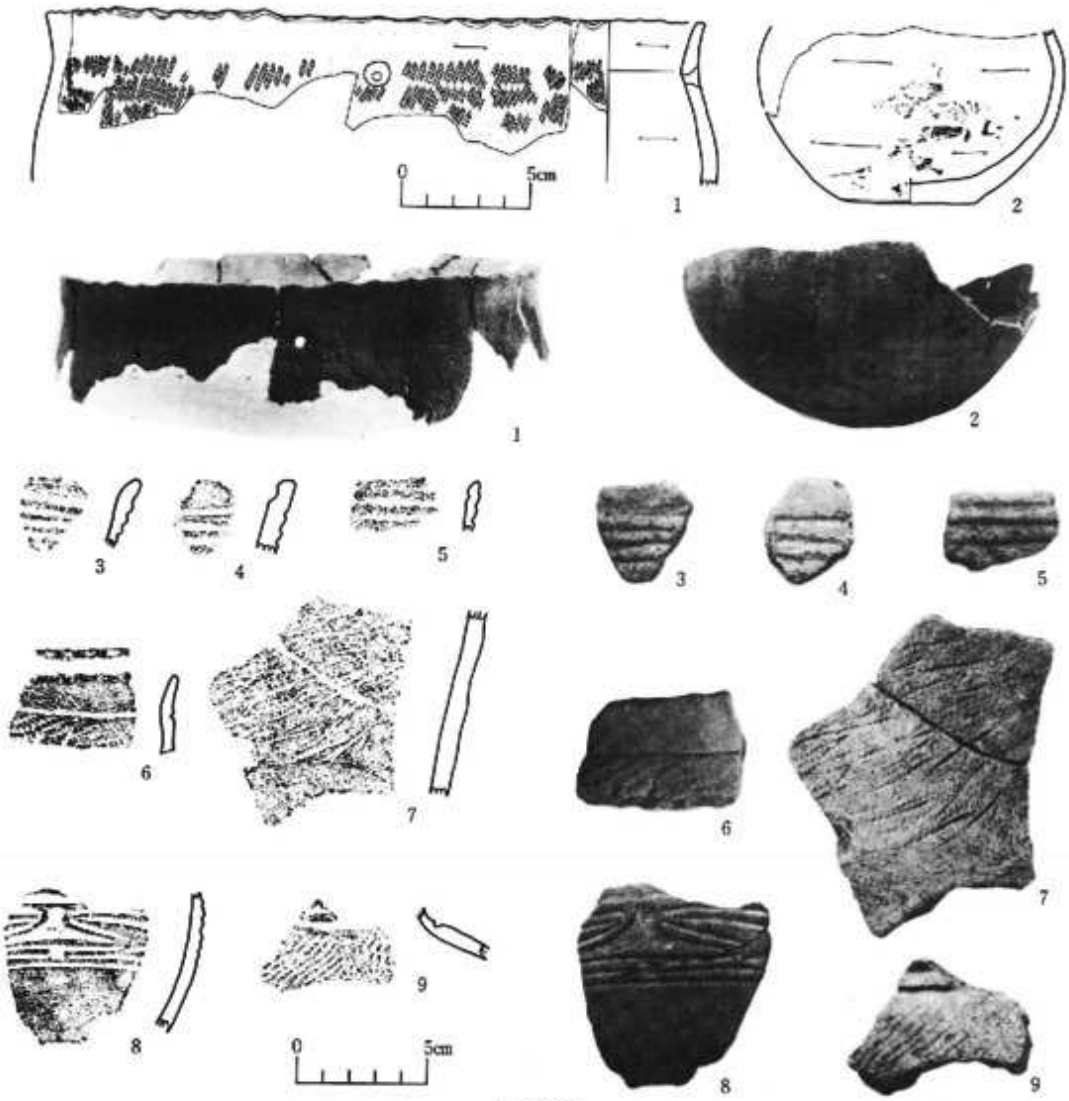
図	接合	地区名	層位
接合表 1		D－6	Ⅶa
	＋	D－5	表採
	－	D－6	Ⅲ
	－	表　採	

図	接合	地区名	層位
接合表 2		C－8	Ⅳ
	－	C－8	Ⅲ
	－	D－7	Ⅲ

第6図　出　土　土　器　(3)

観察表

図	遺構名	層位	器種	部位	成形・調整	胎土	焼成	色調	残存	時代	備考
1	D－6	Ⅶa	深鉢	口縁部～体部	口縁部～体部：横位ナデ、粗い斜位ナデ	砂粒・小礫	良好	内：にぶい黄橙色 外：にぶい黄橙色	口縁部～体部1/3	縄文後期	内外面煤付着
法量	(cm)				口径(25.0) 器高(残存高)(29.0)						
外面施文・調整					口縁部：横位ナデ 体部：縦位粗いナデ						
内面施文・調整					口縁部：横位ナデ 体部：横位ナデ後、横位ヘラミガキ						
図	遺構名	層位	器種	部位	成形・調整	胎土	焼成	色調	残存	時代	備考
2	C－8	Ⅳ	深鉢	口縁部～底部	縄文	砂粒・小礫	良好	内：にぶい黄橙色 外：にぶい黄橙色	口縁部～体部1/3	縄文後期	内外面煤付着
法量	(cm)				口径(22.0) 器高(残存高)(29.0) 底径(7.6) 器厚(5.0)						
外面施文・調整					口縁部：横位ナデ 体部：LR縄文 体部下半：横位ナデ 底部：横位ナデ						
内面施文・調整					口縁部～体部：横位ナデ 底部：ナデ						

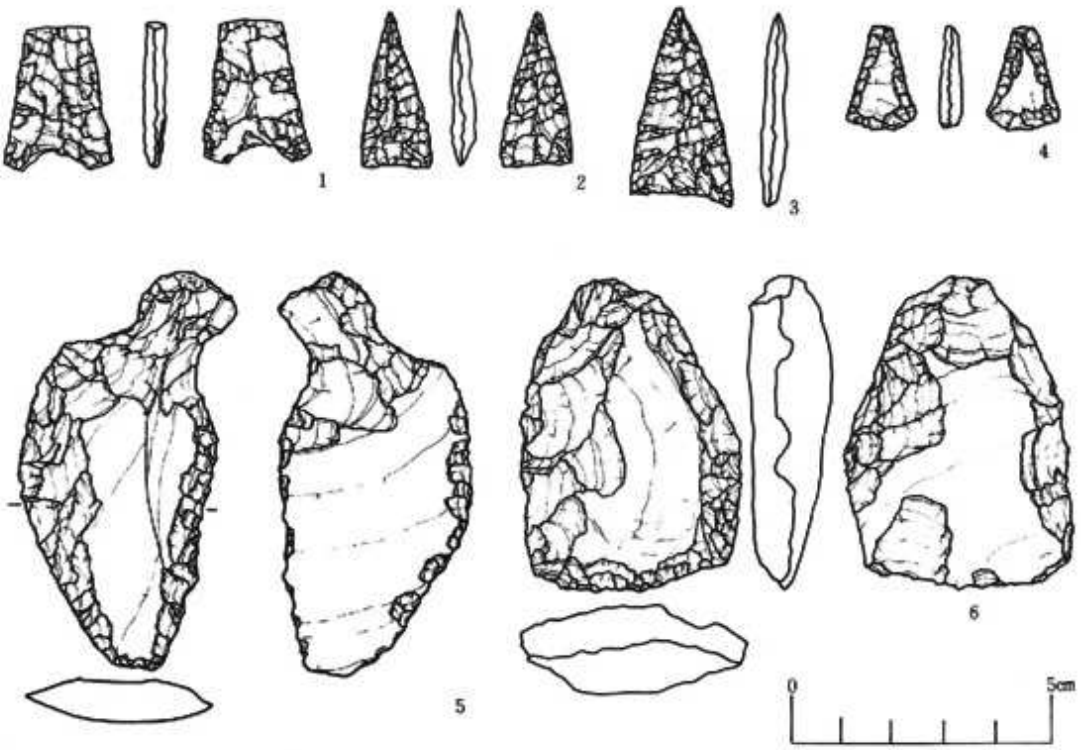


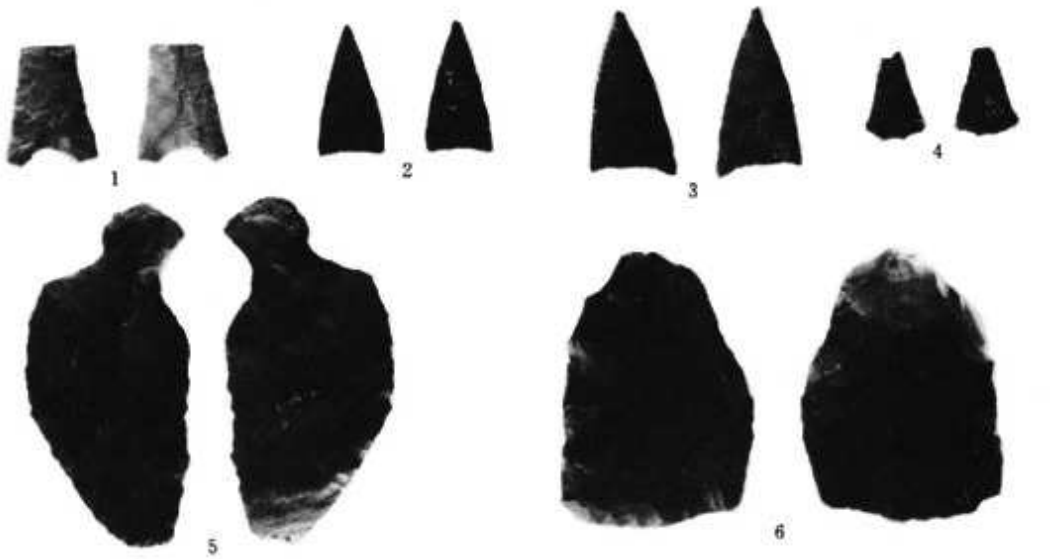
観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	C－8	Ⅳ	深鉢	口縁部～体部上半	平縁 刻み目	口縁部：貫通孔，磨き 体部：横位ＬＲ縄文	磨き	縄文晩期	外面黒斑あり 口径25.3cm
2	C－8	Ⅲ	壺？	体部～底部	—	体部：磨き→顔料 底部：磨き	ナデ	縄文晩期	内外面磨滅 底径5cm
3	D－6	表採	鉢	口縁部	平縁？	沈線文	—	縄文晩期後葉	内外面磨滅
4	C－7	Ⅳ	鉢	口縁部	平縁？	沈線文→磨き	沈線磨き	縄文晩期後葉	—
5	C－7	Ⅳ	鉢	口縁部	平縁	沈線文	沈線	縄文晩期後葉	内外面磨滅
6	C－7	Ⅲ	鉢	口縁部～体部上半	波状？刻み目	口縁部：磨き 体部上半：沈線文，横位ＬＲ縄文	磨き	縄文晩期	—
7	D－10	Ⅶb	鉢	体部	—	横位Ｒ撚糸文→磨き	磨き	縄文晩期	—
8	C－7	Ⅳ	浅鉢	体部	—	体部上半：沈線文＋彫去(変形工字文)→磨き 体部下半：磨き	磨き	縄文晩期後葉	—
9	C－10	Ⅶc	壺	頸部～体部上半	—	頸部：沈線→磨き 体部：横位ＬＲ縄文	磨き	縄文晩期	—

第7図　出土土器（4）

石　器



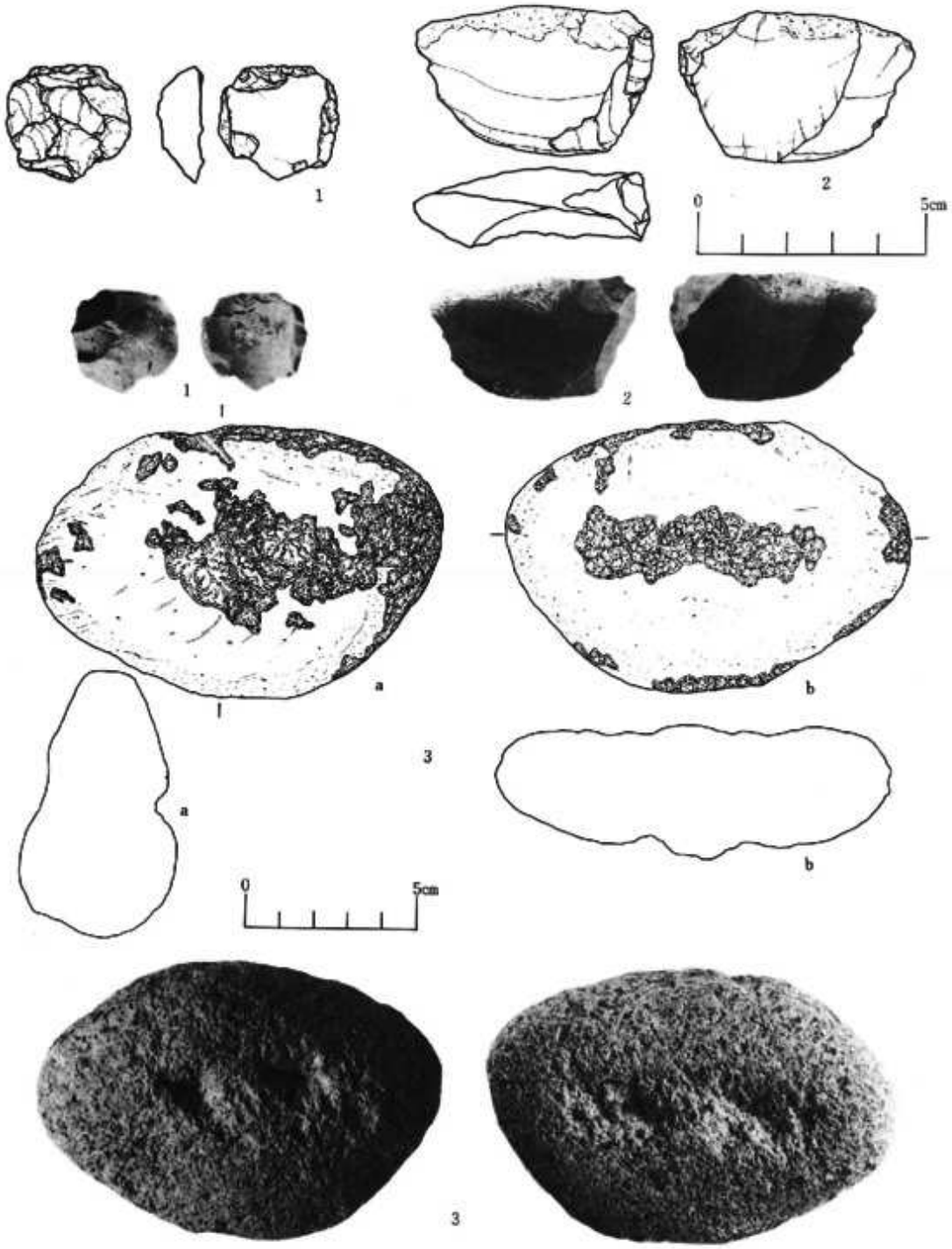


観察表

単位：mm

図	地区名	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　　考	分類	石　材	登録番号
1	E－8	Ⅶa	石　鏃	(26.9)	(20.5)	4.3	尖頭部と脚部欠損	Vω㉙	珪質頁岩	105
2	C－11	Ⅶb	石　鏃	29.6	14.0	2.9		Ⅶω㉙	珪質頁岩	116
3	表　採	—	石　鏃	37.6	19.4	4.0		Ⅶω㉙	珪質頁岩	石10
4	D－10	Ⅶb	石　鏃	(19.7)	13.3	3.0	尖頭部と脚部欠損	Ⅶω㉙	チャート（サヌカイトを含む）	130
5	C－10	Ⅶ	石　匙	77.0	37.0	14.0		Ⅱ	珪質頁岩	124
6	C－7	Ⅳ	楔状石器	61.0	42.5	16.6		Ⅰ	チャート	25

第8図　出　土　石　器　(1)



観察表

単位：mm,g

図	地区名	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	D－7	表採	不定型石器	26.0	27.5	10.0	一部に自然面を残す	IB	珪質凝灰岩	106
2	D－7	I	石核	32.5	52.0	18.5	——	——	珪質頁岩	5

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
3	D－6	IVa	119.0	80.0	47.5	535	C	a、b両面に磨き（a）と敲打痕(b－2) 長軸方向の一側面に「擦痕」（c）他の部分に敲打痕(b－1)	III	安山岩	191

第9図 出土石器 (2)

Ⅵ. ま と め

沼原B遺跡の地形環境について

沼原B遺跡は窪地に立地している。調査の結果、第2地点の窪地周辺部からは遺構・遺物は全く検出されなかった。また第2地点は調査時点において湿地的な性格が強く水が湧いてくるため、一部水溜めを作りながらの調査となった経緯がある。第2地点のセクション図を示すことはできなかったが、概略を述べると表土下約60cmまでは湿性の強い明黄褐色～黄褐色のシルト層であり、それより下層は一部黒褐色土層をはさむが粘性・湿性の強い黄褐色～褐色の粘土質シルト～粘土層が堆積しており、地表下約1.8mまで確認された。また各層が窪地中央部へ向けて傾斜していることが観察され、これらの層の多くは流水が窪地へ運んだ堆積物であり、沖積層と考えられる。

第1地点の2次調査は6月に始められたが、7月上旬に多量の降雨があり窪地の大半は水面下に没してしまった。水面は標高161mまで上がり窪地中央部では水深約4.5mを測り、A・B－2～4グリッドの調査は不可能となった。窪地西方の丘陵頂部Dが造成工事により崩されており普段よりも流れ込む水量が多かったことにもよるが、水面はなかなか下がらず、A・B－2～4グリッドの調査再開は8月上旬となった。最終的にはポンプにより排水を行い、水を全て汲み上げたが、このことは梅雨期及び多量の降雨の際には通常起こり得る現象と考えられる。現に一次調査においても今回同様水没している。8月19日調査終了時における沼原B遺跡の状況は写真3に水面及び水中ポンプのホースが見えることからも明らかである。

地形的に窪地は集水域であり、窪地に集まった水は梨野層に地下水として滞水されることは事実であるが、沼原B遺跡では梨野層の上層に粘土層があることから地下への水の浸透する速度が極めて遅いものと考えられる。沼原B遺跡同様に窪地に立地する嶺山A遺跡においては7月の多量の降雨に際しても水が溜まることがなかった。これは集水量にもよるが嶺山A遺跡には沼原B遺跡のような粘土層が存在しないことや複雑な地質構造に起因するものと考えられる。

以上の事は、水理地質的に重要な窪地では地質構造の相異により地下への水の浸透する速度が大きく異なること、沼原B遺跡においては、窪地中央部が不定期的に水の溜まりやすい所であることを示している。

この点で遺構の検出された窪地東南の比較的標高の高い緩斜面は定住地としては適さないが、不定期的、短期間の居住の場及び水場としての水利条件は備えているものと考えられる。

斎野裕彦

4．水 没 状 況

沼原C遺跡

（C－248）

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：昭和55年6月19日～9月11日

対象面積：2800㎡

発掘面積：530㎡

担当職員：加藤正範・佐藤甲二・斎野裕彦

Ⅰ．遺跡の立地(第1図)

沼原C遺跡は造成地のほぼ中央南側の谷地形に立地する。南東にひらく標高160～164mの間の幅約45m、長さ約75mの谷で、周囲の丘陵との比高は約20～30mである。南東に向ってゆるやかに傾斜しており、谷開口部より南東側は沼原堤へ至る下りの急斜面となる。

遺跡の北側丘陵下の窪地には沼原B遺跡が、西側丘陵の窪地には嶺山A遺跡が立地する。尚、用地買収前までは、この谷は畑地となっていた。

佐藤甲二

Ⅱ．調査の方法と概要(第1図、写真1)

1．調査の方法

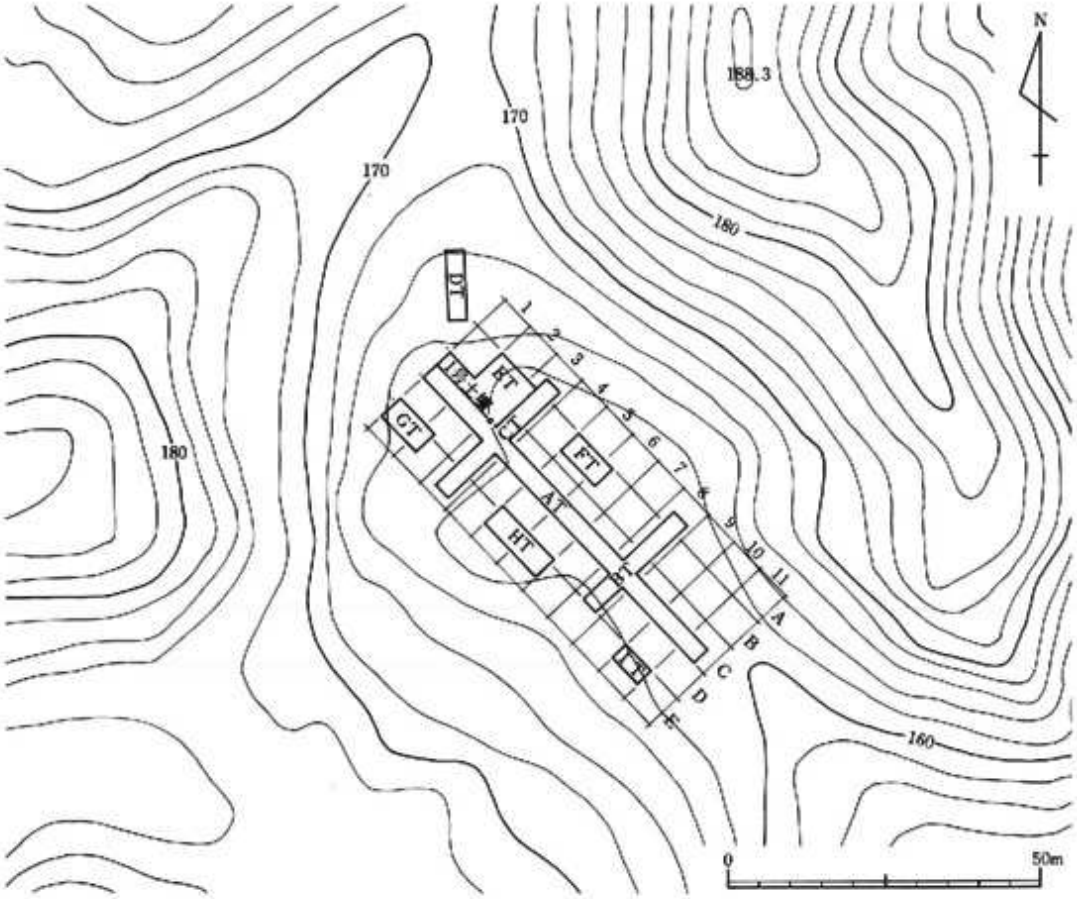
谷部の長軸方向に試掘トレンチとして、3×64mのAトレンチ(AT)、これに直交する3×39、3×25mのB、Cトレンチ(BT、CT)、北西の斜面部には3×12mのDトレンチ(DT)を設定し調査を行ったが、その後、谷部の拡張に関してはB、Cトレンチを縦軸ライン(A～E)、Aトレンチを横軸ライン(1～11)とする6×6mのグリッドによる調査に切り替えたが、一応、拡張部にもE～Iのトレンチ名を付けた(ET～IT)。

2．調査の概要

昭和55年6月19日～9月11日までの約3ヶ月間調査を実施した。谷部分2,800㎡を調査対象とし、530㎡の調査を行った。A～Cトレンチを入れた結果、C－3グリッドⅢ層上面で、時期不詳の人骨片を伴う土壙が1基検出され、C－2、C－9グリッドを中心とするⅦb層中では若干の縄文土器片を出土した。この為拡張を行ったが(E～Iトレンチ)、いずれの拡張区からも遺物、遺構は検出されなかった。北側斜面上に入れたDトレンチでも同様に遺物、遺構は検出されず、谷部で、Ⅰ層(表土)より地山まで深い部分で1.5mあったのに比べ、20～30cmのⅠ層下が直接地山層となる状態であった。

以上、時期不詳の土壙が1基検出された他は、若干の縄文時代(中期・後期)の遺物を含む層が確認されたのみで、出土遺物量も平箱1箱に満たない程度であった。

佐藤甲二



第1図　地形・トレンチ配置図

1．全　景
（西より）

Ⅲ. 基 本 層 位(第2図)

現表土層第Ⅴ層より地山層第Ⅴ層までの大別5層から成り、これらはさらに7層に細別される。第Ⅱ層から第Ⅴ層は谷部分にのみ分布し、斜面部には分布は認められない。

第Ⅰ層　暗褐色(10YR3/4)シルト層。現表土層で、谷部では畑地耕作土。厚さ40cm前後。

第Ⅱ層　2層に細分される。

Ⅱa層　暗褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。炭化粒を少量含む。厚さ20cm前後。谷部調査区全域に分布。無遺物層

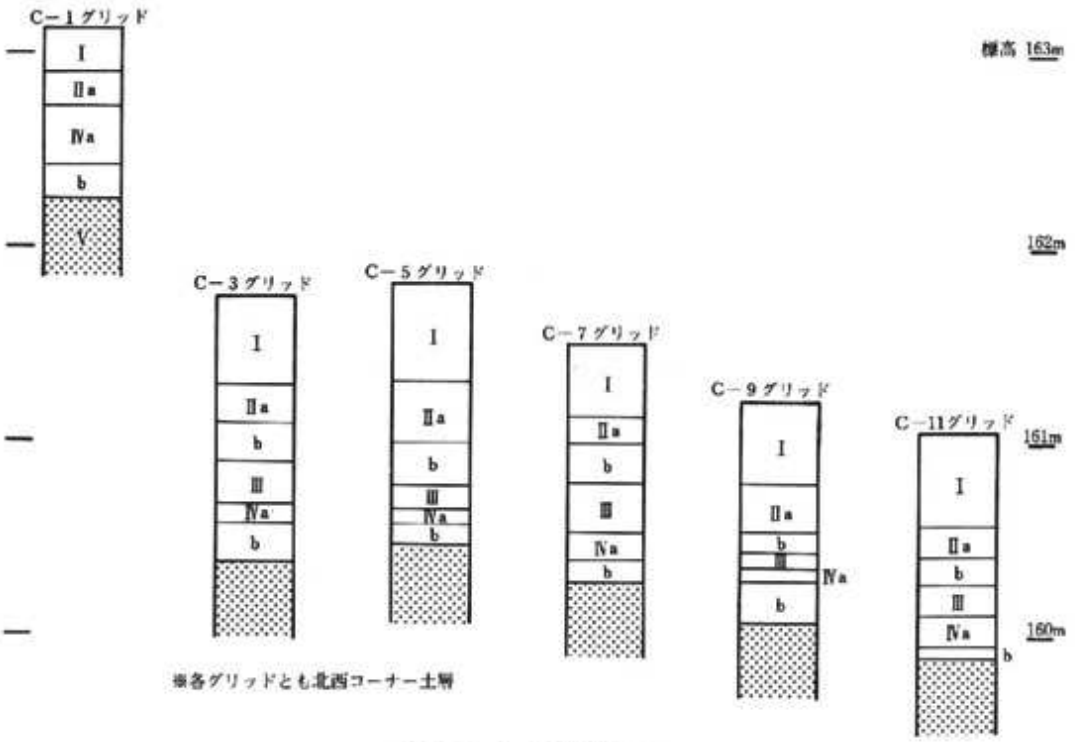
Ⅱb層　黒褐色(10YR3/3)シルト層。混和物、分布範囲も第Ⅱa層と同様。厚さ15cm前後。検出土壙はこの層中より掘り込まれている。

第Ⅲ層　黒褐色(10YR3/2)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。炭化粒を多く含む。下部に灰白色火山灰を部分的に含む。厚さ10~20cm。谷中央部の調査区を中心に分布。無遺物層。

第Ⅳ層　2層に細分される。二次堆積の可能性が強い層。

Ⅳa層　黄褐色(10YR5/6)砂質シルト層。風化凝灰岩粒、炭化粒を含む。厚さ10cm前後。谷部調査区全域に分布。縄文時代の遺物をまばらに含む。

Ⅳb層　黄褐色(10YR5/6)砂質シルト層。風化凝灰岩粒、2cm前後の凝灰岩を多量に含む。厚



第2図　土層柱状図

き10cm前後。谷部調査区全域分布。無遺物層。

第Ⅴ層　明黄褐色(10YR⅝)粘土層。地山層。5cm前後の凝灰岩をまばらに含む。

以上、第Ⅰ層～第Ⅳ層は谷地形に沿ってレンズ状に堆積しており、谷心線では厚く、谷際では薄いという状況を示す。第Ⅳa層中の縄文時代の遺物は、第Ⅳa層上部、下部に於いて時期差は見い出せない。

佐藤甲二

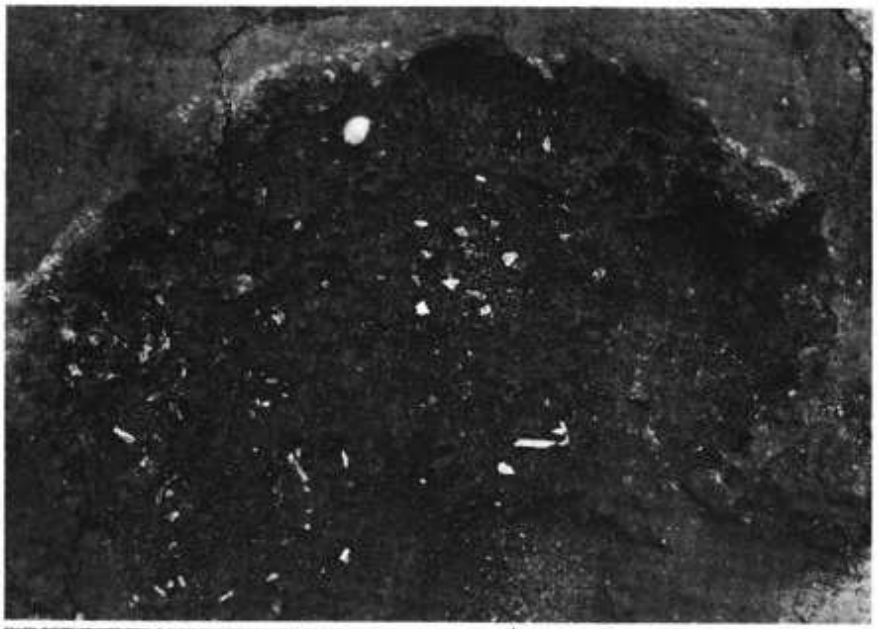
Ⅳ. 遺　　構

1号土壙(第3図、写真2～4)

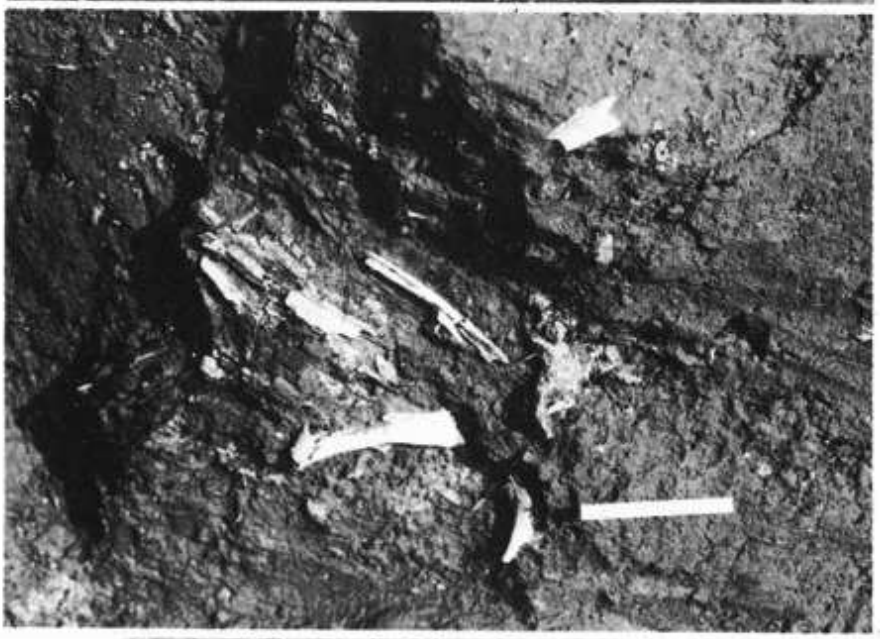
C－3グリッド西隅、Ⅲ層上面で検出された。掘り込み面はⅡb層中と考えられる。試掘トレンチにより、南西側の壁を削平してしまったが、上端推定規模90×70cm前後の土壙と考えられる。底面は隅丸の台形状を呈しており、ほぼ平坦な面を持つ。検出面よりの深さは約15cmである。堆積土はⅡb層とほぼ同じ、黒褐色シルトの単層であった。土壙検出面から底面にかけて、多量の炭化材と伴に人間とニホンザルの骨片(504頁参照)が混在して出土した。炭化材はある程度のまとまりがみられる。骨片は全て火を受けており、堆積土内、壁面には焼土が認められ、この土壙内で火を焚いたと考えられる。

当土壙は、人骨片を出土したことより土壙墓の可能性も十分考えられるが、ニホンザルの骨片も出土したこと、加えて土壙が1基しか検出されなかったことは多分に不可解な点といえる。土壙の所属する時代は、Ⅱb層の堆積時期が不明な上、土壙内より時代決定遺物が出土しなかったことより、不明であるが、おそらく新しい時代のものと考える。

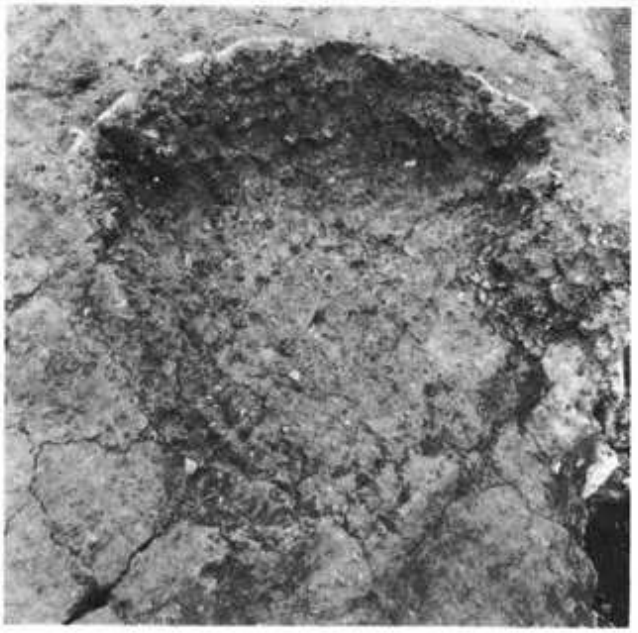
佐藤甲二



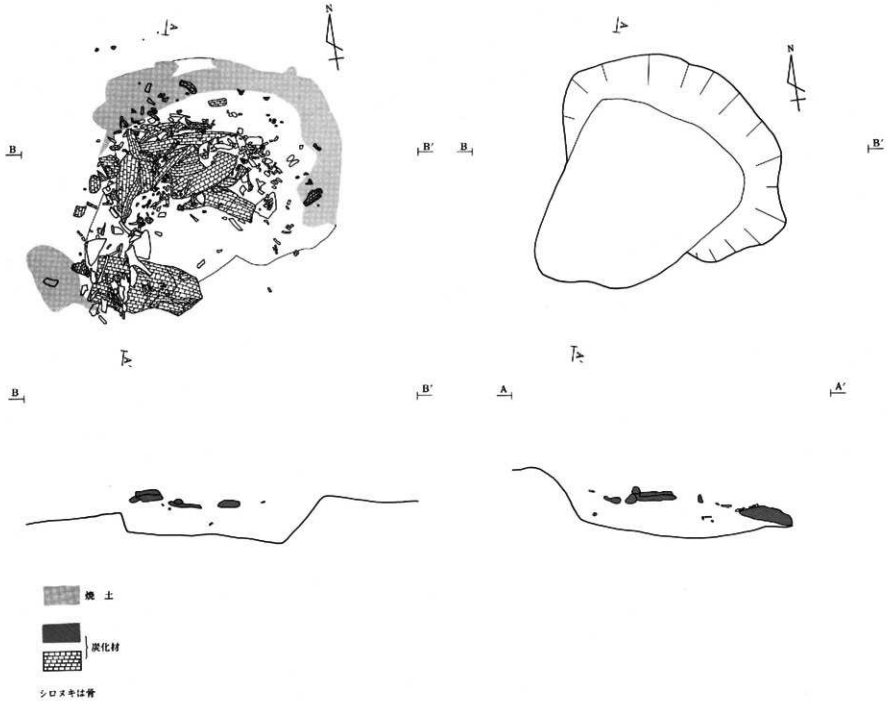
2．1号土壙骨片出土状況（1）
（南西より）



3．1号土壙骨片出土状況（2）
（南より）



4．1号土壙完掘状況
（北西より）



第3図 1 号 土 壙

V. 出 土 遺 物

1. 土　　器（第4・5図、第1表）

出土土器は全て縄文土器で、基本層位Ⅳa層からのみ出土している。復元土器は1点も出土せず、全て破片資料で、総出土数量わずか34点（大型破片1点）である。時期的には中期中葉、後期前葉のものが認められるが、全体的には中期の資料が多い。

佐 藤 甲 二

2. 石　　器（第5図、第1表）

わずか石鏃1点（3）、小型磨製石斧1点（4）の計2点しか出土していない。いずれもⅣa層より出土している。

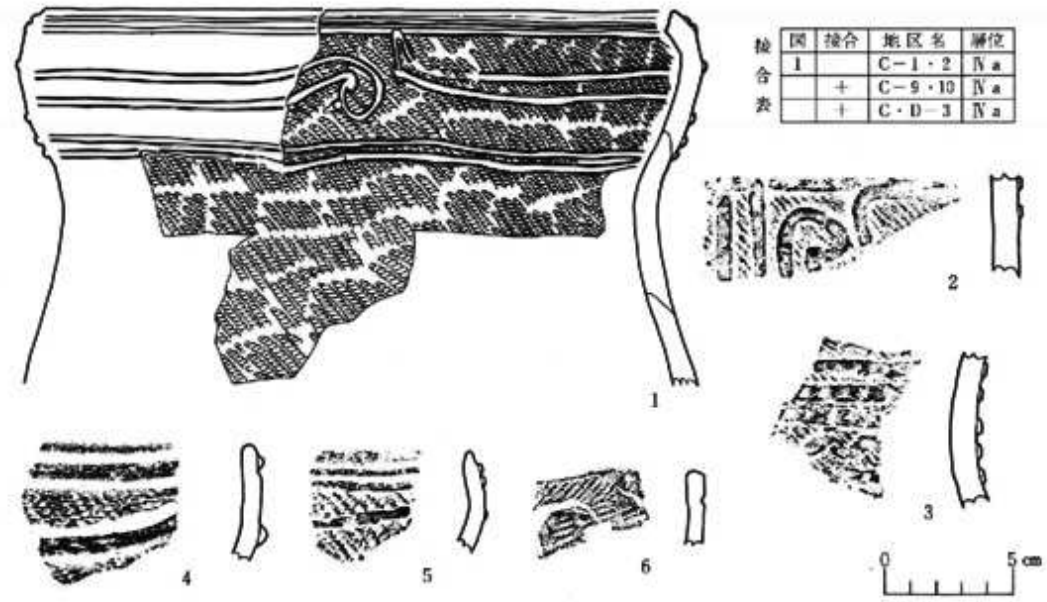
柳 沢 みどり

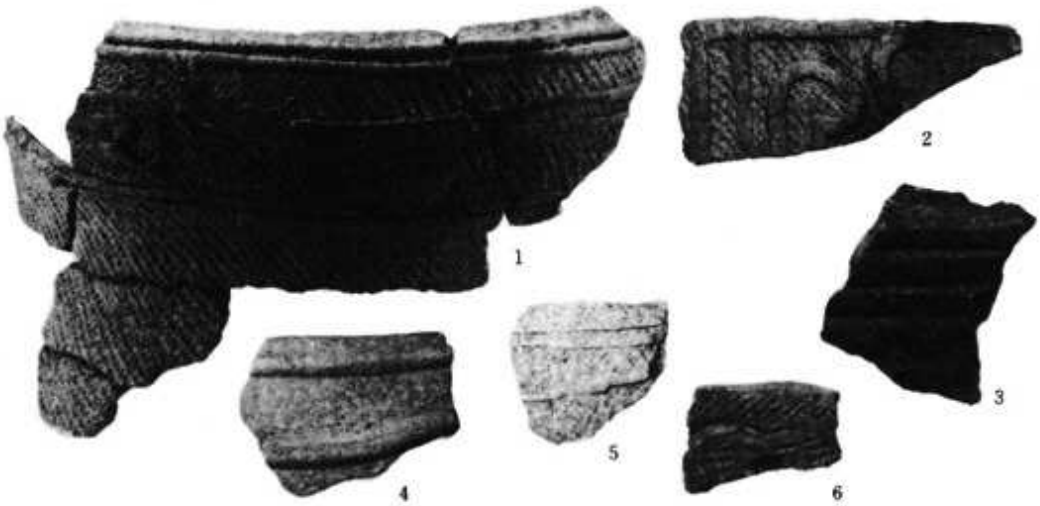
第1表　遺物出土数量表

基本層位	縄文土器							石器		
	破片資料				中期	後期	不明	総数	石鏃	石斧
	総数	口縁部	体部	底部						
Ⅳa	34	7	25	2	7	3	24	2	1	1

土　器

接合表	図	接合	地区名	層位
	1		C－1・2	Ⅳa
		＋	C－9・10	Ⅳa
		＋	C・D－3	Ⅳa





観察表

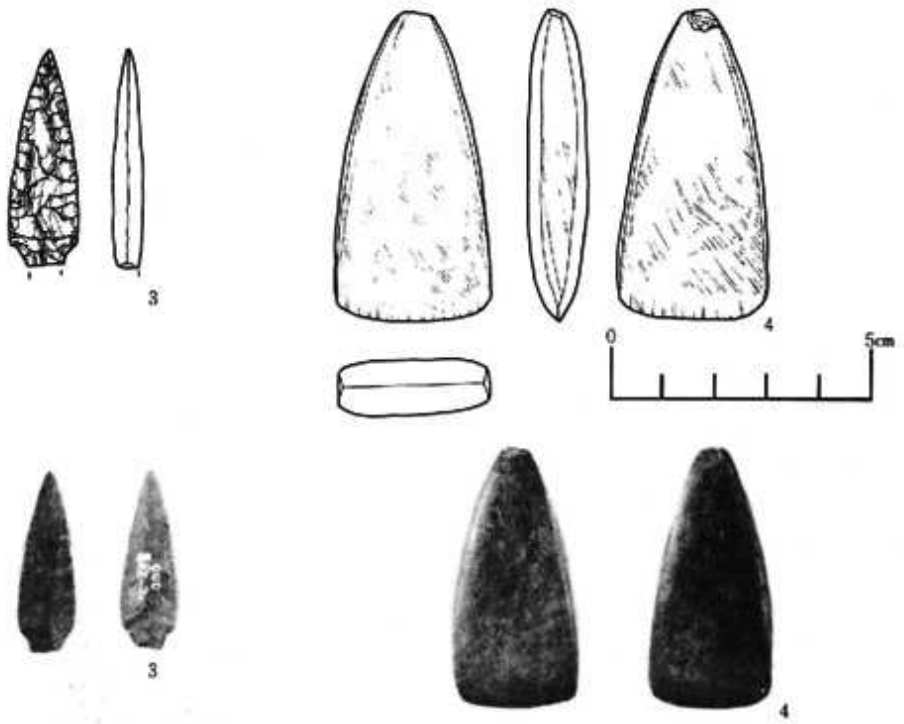
図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	C－1・2	Ⅳa	深鉢	口縁部～体部上半	平縁	口縁部：縦位LR縄文→隆線文 体部上半：縦位LR縄文	磨き	縄文中期中葉	口径(25cm)
2	C－2	Ⅳa	深鉢	体部	—	縦位LR縄文→隆線文	—	縄文中期中葉	内面磨滅
3	C－2	Ⅳa	深鉢	体部	—	縦位LR縄文→隆線文	磨き	縄文中期中葉	図2と同一か
4	C－1・2	Ⅳa	深鉢	口縁部	平縁	縦位LR縄文→隆線文	—	縄文中期中葉	内面磨滅
5	C・D－3	Ⅳa	深鉢	口縁部	平縁	縦位LR縄文→隆線文	磨き	縄文中期中葉	——
6	C－1・2	Ⅳa	深鉢	口縁部	波状？	横位・斜位LR縄文→沈線文	磨き	縄文後期	——

第4図　出　土　土　器（1）

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	AT	Ⅳa	深鉢	口縁部	突起	貫通孔、沈線文	磨き	縄文後期前葉	——
2	AT	Ⅳa	深鉢	体部上半	—	沈線文	磨き	縄文後期前葉	図1と同一

石器



観察表

単位：mm

図	地区名	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	登録番号
3	C－9	Ⅳa	石鏃	(42.2)	13.5	6.0	基部破損	Ⅰ－①	006
4	D－3	Ⅵa	石斧	60.0	29.0	11.0	擦痕(a)が全面に認められる。全面ツルツルし光沢がある。	Ⅱb	002

第5図　出土土器(2)・石器

Ⅵ. ま と め

沼原C遺跡は隣接する嶺山A遺跡で縄文時代の土壙群が検出されていることより、調査前には当遺跡に於いても同種の土壙群が検出されるのではないかと考えられた地点であった。しかしながら、若干の縄文時代の遺物は認められたものの、縄文時代に属する遺構は皆無であり、新しい時期のものと考えられる土壙(1号土壙)が1基検出されただけであった。

1号土壙はⅡb層中より掘り込まれている。また、Ⅲ層下部には灰白色火山灰が断片的に含まれている。Ⅲ層中からは遺物を出土しなかったが、周辺遺跡との土層対比から、Ⅲ層は平安期の堆積層であることが十分考えられ、Ⅱb層の堆積は平安時代の後、すなわち中世以後と推察される。従って1号土壙の構築時期は中世以後であると思われる。1号土壙内よりは焼けた人間の骨片が出土し、土壙底面が焼けていることより、火葬による土壙墓ということも考えられるが、人骨の他にニホンザルの骨片を伴ったという点、他に同様な土壙が検出されなかったという点、出土場所が、人里離れた丘陵中であったという点などの不可解な点も多く、現段階では当土壙の性格については言及を避けざるを得ない。

佐 藤 甲 二

5. 遺跡全景 (北西より)

嶺山A遺跡

（C－246）

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山19

調査期間：第1地点　1次調査　昭和54年10月9日～10月11日

2次調査　昭和55年9月1日～11月6日

第2地点　1次調査　昭和54年10月12日～10月19日

対象面積：第1地点　2300㎡

第2地点　3900㎡

発掘面積：第1地点　1次調査　45㎡

2次調査　1900㎡

第2地点　1次調査　225㎡

担当職員：渡部弘美・斎野裕彦・佐藤甲二・加藤正範

Ⅰ．遺跡の立地（第1図、写真1）

嶺山A遺跡は、造成地ほぼ中央部南側、丘陵中の窪地に立地する。丘陵頂部E（201.6m）の南東側斜面上、標高160～165mの間には、南東に向って緩やかに下り傾斜を示す、長さ約120m、幅約40mの舌状形の緩斜面が形成されている。この北西奥の標高168～172mの間には三方を丘陵に囲まれ北東にやや上り勾配の、幅約25m、長さ90mの、細長い窪地が見られる。遺跡はこの窪地に立地し、周囲の丘陵との比高は約10～20mである。

窪地北西側丘陵上位のテラス状部分には嶺山B遺跡が、緩斜面部北東下の谷には沼原C遺跡が立地する。用地買収前には、窪地は栗林、緩斜面は梅林となっていた。

佐藤甲二

Ⅱ．調査の方法と概要（第1～2図、写真2・3）

嶺山A遺跡は昭和54、55年の2年次に渡って調査された。1次調査（昭和54年度）は窪地部分（第1地点）、緩斜面部分（第2地点）の試掘調査、2次調査（昭和55年度）は第1地点の本調査を実施した。

1．調査の方法

〈第1地点〉窪地の長軸方向に沿ったN－67°－Eを横軸ライン（1～16）、これに直交する縦軸ライン（A～H）による6×6mグリッドを設定し、調査を行う。

〈第2地点〉丘陵緩斜面の長軸方向に沿ったN－33°－Wを横軸ライン（1～19）、これに直交する縦軸ライン（ⅡA～ⅡF）による6×6mグリッドを設定し、調査を行う。

両地点のグリッドとも4分割し、グリッド杭側（第1地点では西側、第2地点では北側）より時計廻りにa、b、c、dの小区を設けた。

2．調査の概要

1次調査

〈第1地点〉10月9日～10月11日までの3日間調査を実施した。窪地の試掘調査でCラインを中心としてC－4（a）、C－7（a）、C－10（a）、C－13（a）、C－15（b）グリッドの45㎡を調査した。その結果、縄文時代の遺物を含む層、遺構が確認され、次年度、本調査の運びとなった。

〈第2地点〉10月12日～10月19日までの約1週間調査を実施した。丘陵緩斜面の約3.900㎡が調査対象で、ⅡC、ⅡDラインa区を中心として25グリッド、225㎡を試掘調査した。その結果、Ⅰ層

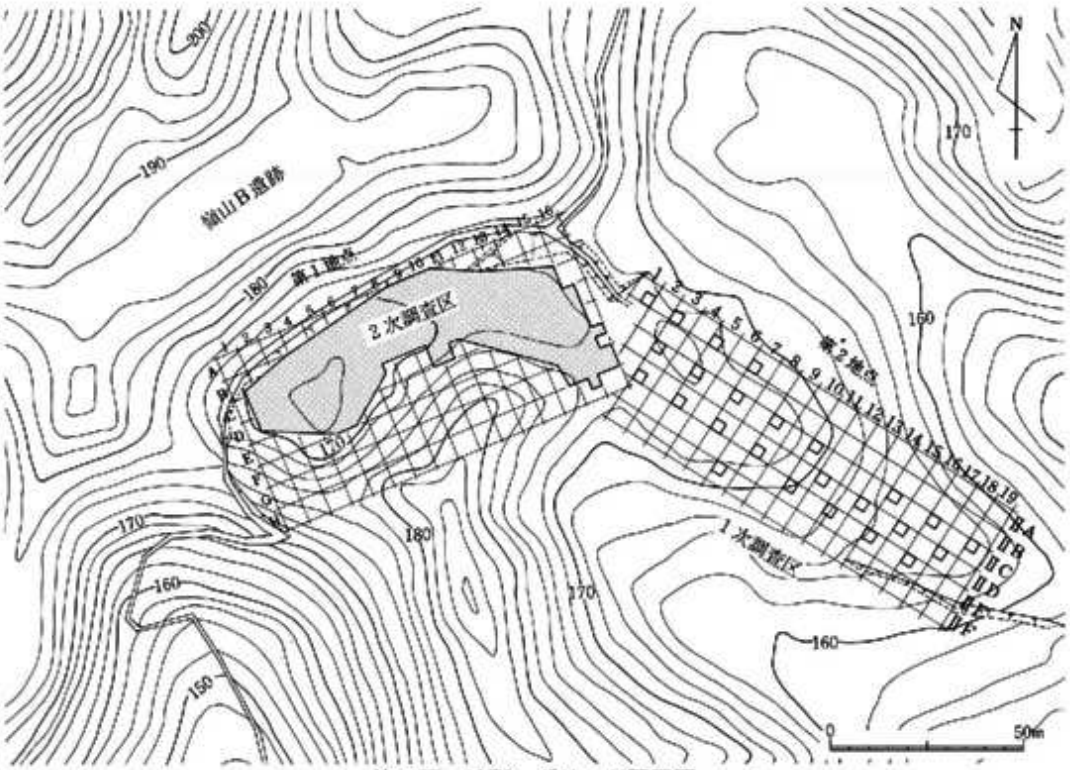
(表土)下が粘土及び凝灰岩の地山となり、遺物、遺物包含層、遺構は検出されなかった。Ⅰ層は厚い部分で約20cm、薄い部分では約5cmであった。

2次調査

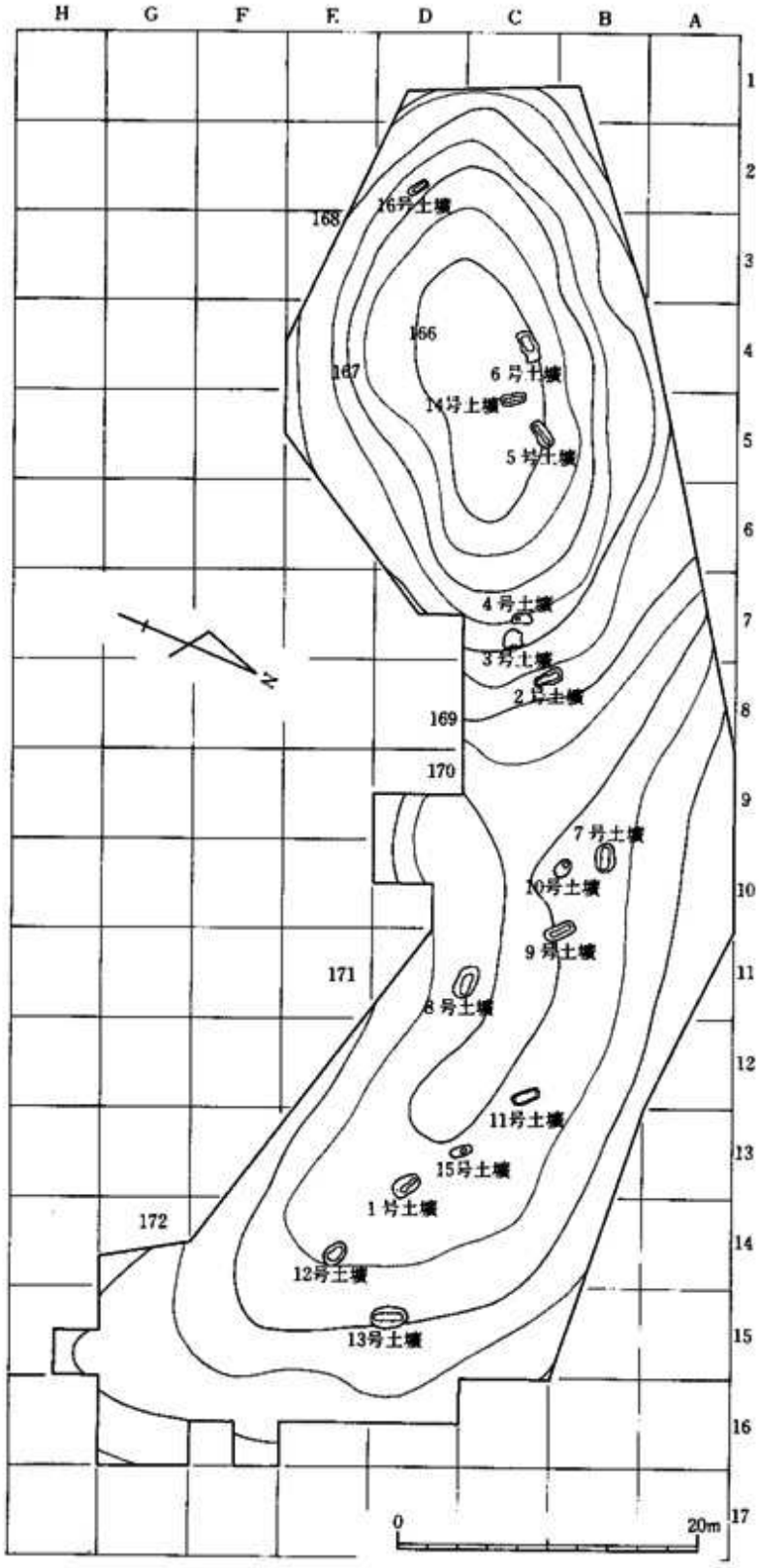
〈第1地点〉 9月1日～11月6日までの約2ヶ月間調査を実施した。窪地全体の約2,300㎡を調査対象とし、ほぼ全域の約1,900㎡を調査した。試掘調査により、Ⅰ層(表土)からⅣ層まで無遺物層であることが確認されていた為、Ⅰ～Ⅲ層は重機により排土し、Ⅳ層より人力による調査を行った。ほぼ全域でⅣ層下地山までの間に、Ⅴ～Ⅶ層の堆積が確認され、C－4グリッド付近ではかなり地山がへこんでおり、Ⅴ～Ⅶ各層も厚い堆積状況を示していた。Ⅵ～Ⅶ層からは縄文時代の遺物を少量出土し、Va層よりは平安時代の土師器が1点出土した。検出遺構は、縄文時代の土壙がⅥ層上面で3基(1・5・8号)、地山上面で13基(2～4・6・7・9～16号)、合計16基が検出された。尚、Ⅵ層上面検出の3基は、沼原A遺跡同様に、Vb層中に灰白色火山灰を含む為に、この落ち込みにより実際の掘り込み面より上層で検出されている。窪地から緩斜面へと移行する部分のGライン以南及び16ラインに東になると、地山はかなりの登り傾斜になり、Ⅰ層下が直接地山となる。また遺構、遺物のひろがりも認められなくなる。

以上2ヶ年に渡る調査の結果、第1地点の窪地では縄文時代の土壙が16基検出された。しかし、これら土壙群は第2地点の丘陵緩斜面へのひろがりはみられなかった。出土遺物は窪地から縄文時代(後期、晩期)の遺物が平箱1個程度と、土師器1点が出土したのみであった。

佐藤甲二



第1図　地形・グリッド配置図



第２図　遺構配置図（等高線は地山面）

1．第1地点
調査前全景
（西より）

2．第1地点
調査後全景（1）
（南より）

3．第1地点
調査後全景（2）
（北より）

Ⅲ．基本層位（第1地点）（第3図）

現表土第Ⅰ層より地山第Ⅷ層までの大別8層から成り、これらはさらに11層に細別される。

第Ⅰ層　暗褐色(10YR3/4)シルト層。現表土層。砂粒を少量含む。厚さ20～40cm。

第Ⅱ層　黒褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を少量含む。厚さ10cm前後。

第Ⅲ層　暗褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒、黄褐色粒を含む。厚さ10～20cm。

第Ⅳ層　黒褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒、黄褐色粒を含む。下部では炭化粒を微量含む。厚さ40～60cm。

第Ⅴ層　2層に細分され、ともに遺物を若干含む。

Va層　黒色(10YR3/1)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。3cm前後の凝灰岩を少量含む。平安時代の土師器1点を出土する。厚さ10cm前後。調査区全域に分布する。

Vb層　黒褐色(10YR3/2)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。上部に灰白火山灰を部分的に含み、下部には縄文時代の遺物を若干含む。厚さ10cm前後。調査区全域に断片的に分布する。

第Ⅵ層　2層に細分され、ともに縄文時代の遺物を若干含む。

Ⅵa層　暗褐色(7.5YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。厚さ10cm前後。調査区全域に分布するが、11ライン以東では断片的となる。

Ⅵb層　黒褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒、黄褐色粒を含む。厚さ10cm前後。

第Ⅶ層　2層に細分される。

Ⅶa層　黒褐色(7.5YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒、砂粒を含む。厚さ10～20cm。調査区全域に分布するが、13ライン以東では断片的となる。縄文時代の遺物を若干含む。

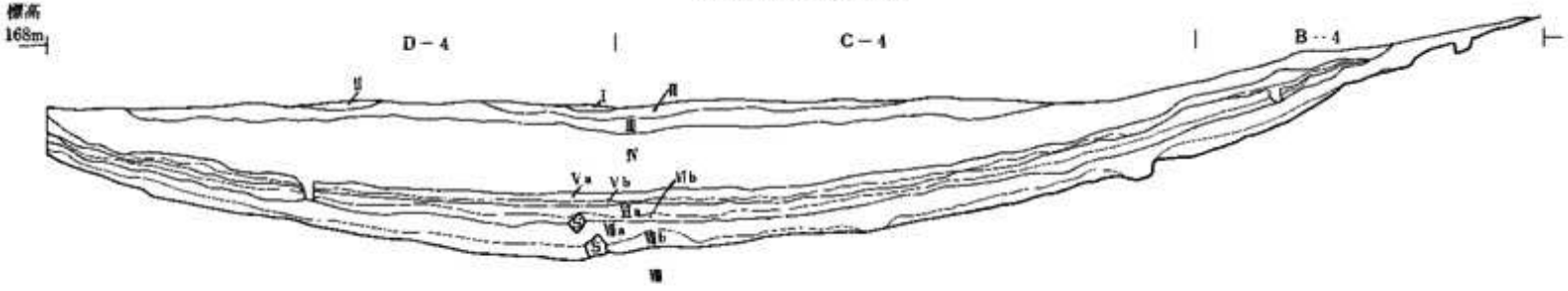
Ⅶb層　褐色(10YR4/6)シルト層。地山漸移層。風化凝灰岩粒、黄褐色粒を含む。厚さ10cm前後。無遺物層。

第Ⅷ層　明黄褐色(10YR6/6)粘土層。地山層。10cm前後の凝灰岩を多く含む。

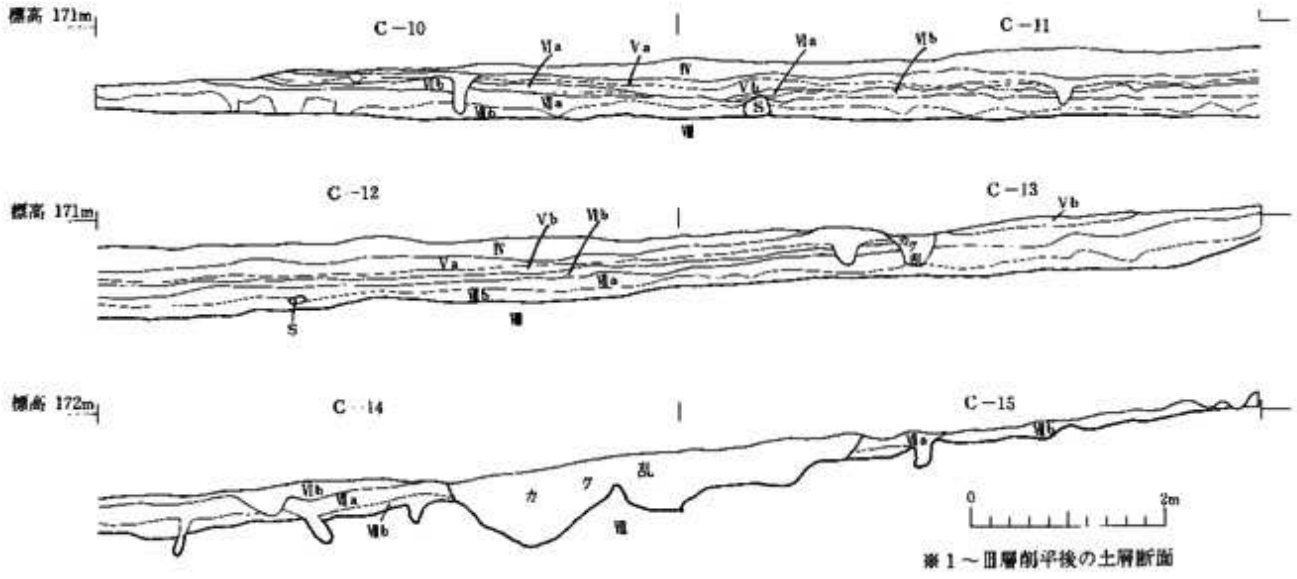
以上、第Ⅰ層から第Ⅷ層までは窪地地形を反映して、レンズ状堆積を示し、窪地中央線上ではほぼ基本層の分布がみられ堆積も厚い。しかし、丘陵際に近づくに従い第Ⅱ～Ⅶ層は薄くなり、断片的な分布、あるいは分布を示さない。また地山粘土層のすぐ下層は凝灰岩層となっており、B－8グリッド周辺及び丘陵際では、地山上に凝灰岩層が顔を出す部分も見受けられる。縄文時代の遺物は第Vb層～Ⅶa層の各層より出土するが、遺物の上からは時期差は見い出せない。

佐藤甲二

B・C・D－4 西壁土層



C－10～C－15北壁土層

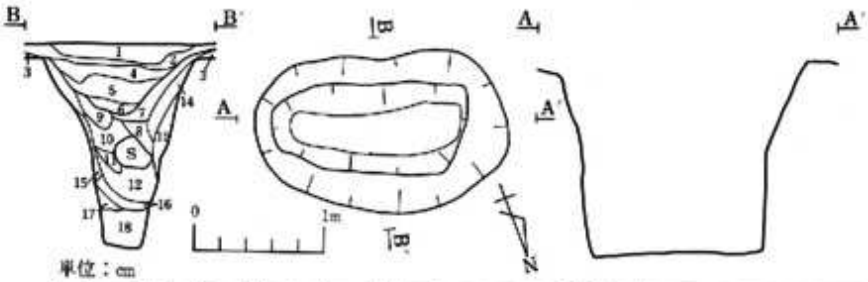


※1～Ⅲ層削平後の土層断面

第3図 基 本 層 位

Ⅳ．縄文時代の遺構と遺構内出土遺物（第４～11図）

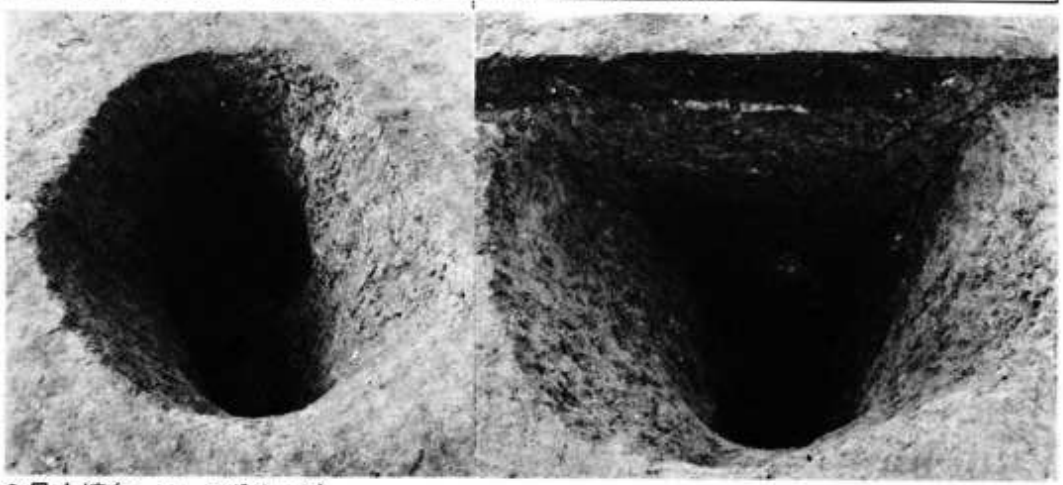
１号土壙（D－13グリット）



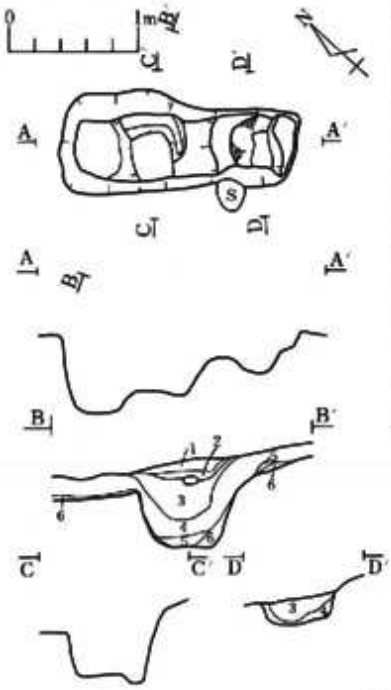
単位：cm

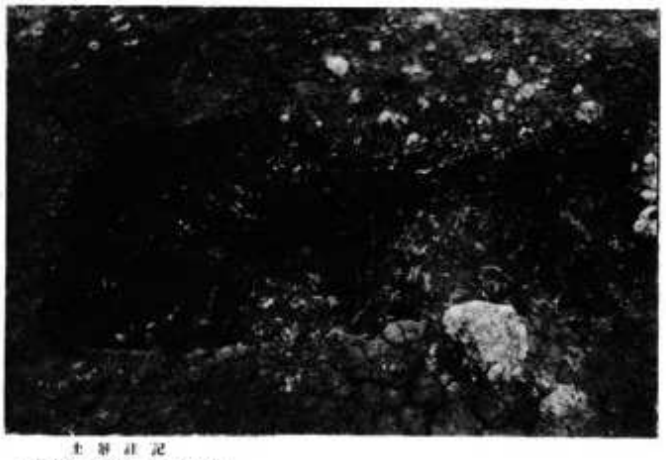
土層注記
1.10YR⅔ 黒色シルト（Va層）
2.10YR⅔ 黒褐色シルト（Vb層・褐白色光雲帯を含む）
3.10YR⅔ 褐色シルト（Ⅲb層）
4.7.5YR⅔ 褐色シルト（Ⅲa層対応）
5.7.5YR⅔ 褐色シルト（Va層対応）
6.7.5YR⅔ 暗褐色シルト（Ⅲa層対応）
7.10YR⅔ 黒褐色シルト（Ⅲb層）
8.10YR⅔ 黒褐色シルト（Ⅲb層対応・小礫を含む）
9.7.5YR⅔ 暗褐色シルト
10.10YR⅔ 暗褐色シルト
11.10YR⅔ 黒褐色シルト
12.7.5YR⅔ 褐色シルト
13.10YR⅔ 暗褐色シルト
14.7.5YR⅔ 黒褐色シルト（Ⅲa層対応）
15.10YR⅔ 褐色シルト（Ⅲb層対応）
16.7.5YR⅔ 黒褐色シルト（地山黒雲土の混入有り）
17.10YR⅔ 黒褐色シルト（地山黒雲土）
18.10YR⅔ 褐色粘土質シルト（地山黒雲土）

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
196×122	150×72	130×40	144	N－73°－W	上端平面形は楕円形、下端円面形は不整隅丸長方形、底面は平坦である。



２号土壙（C・B－８グリット）





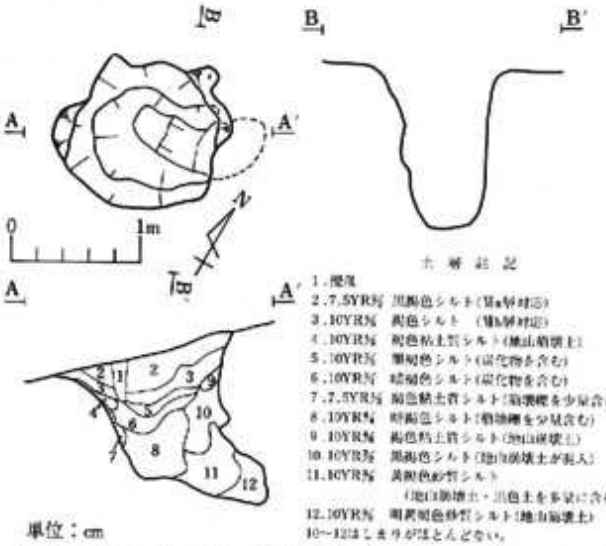
土層注記
1.10YR⅔ 黒色シルト（Va層）
2.10YR⅔ 黒褐色シルト（Vb層）
3.10YR⅔ 黒褐色シルト（Ⅲb層）
4.7.5YR⅔ 黒褐色シルト（Ⅲa層）
5.10YR⅔ 黒褐色シルト
6.10YR⅔ 褐色シルト（Ⅲb層）

単位：cm

上　端	中　段	下　段	深　さ	長軸方向
182×78	170×50	45×34	60	N－47°－W
上端平面形は隅丸長方形、底面は階段状を呈する。 梨野層を掘り込んでいる。				

第４図　１号土壙・２号土壙

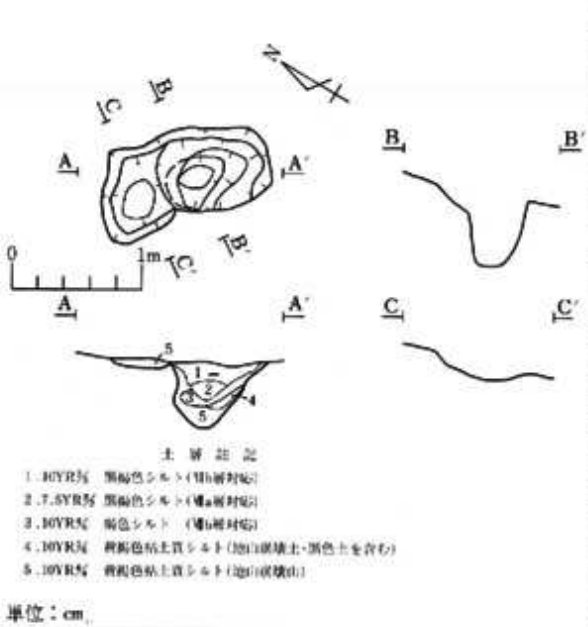
3号土壙 (C－7グリット)



単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
123×118	67×32	64×44	124	―	上端平面形は円形、土壙下半は東北方へオーバーハングしている。褐野層を掘り込んでいる。

4号土壙 (C－7グリット)

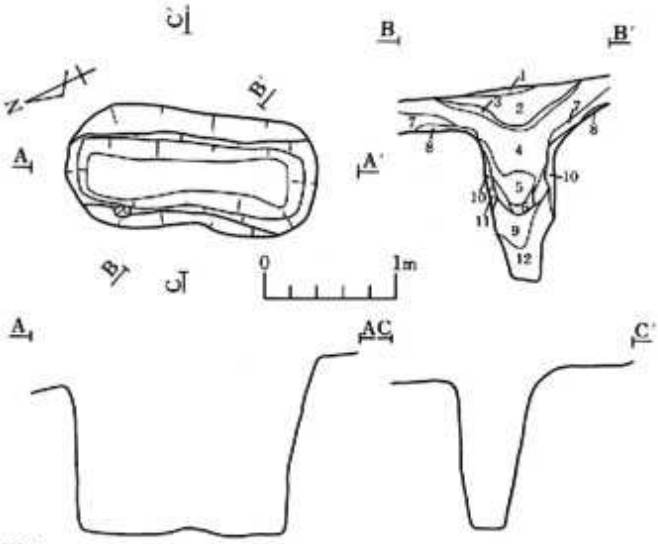


単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
134×70	122×56	28×16	24	N－42°－W	上壙平面形は隅丸長方形、壁面が一部オーバーハングしている。1層中より縄文土器片が1点出土している。

第5図　3号土壙・4号土壙

5号土壙（C－5グリット）



単位：cm

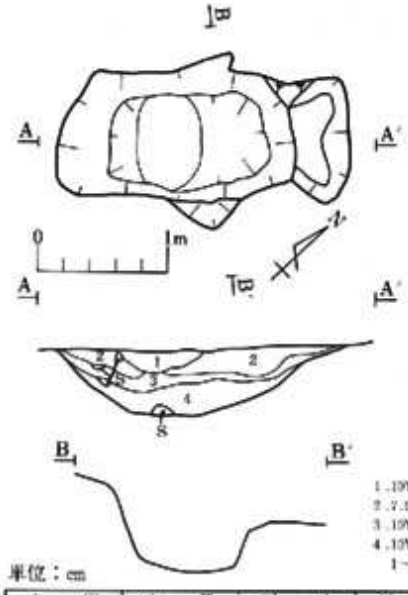
上端	中段	下端	深さ	長軸方向	
190×94	174×50	154×32	120	N－34°－E	上端・下端平面形は共に隅丸長方形、4層中より縄文土器片1点出土

1．10YR⅔　黒色シルト（Va層）
2．10YR⅔　黒褐色シルト（Vb層）
3．7.5YR⅔　暗褐色シルト（Ⅲa層）
4．10YR⅔　黒褐色シルト（Ⅲb層）
5．10YR⅔　にぶい黄褐色粘土質シルト
6．10YR⅔　黒褐色粘土質シルト（第b層対応）

土層注記
7．7.5YR⅔　黒褐色シルト（Ⅲa層）
8．10YR⅔　褐色シルト（Ⅲb層）
9．7.5YR⅔　黒褐色シルト（Ⅲa層対応）
10．10YR⅔　褐色シルト（地山砂壌土）
11．10YR⅔　暗褐色シルト質粘土
12．10YR⅔　暗褐色シルト質粘土（第b層対応・地山砂壌土を多量含む）

第6図1	
遺構名	5号土壙
層位	4層
部位	体部
LR縄文 連続弧状沈線文 横位沈線文	
縄文後期	

6号土壙（C－4グリット）



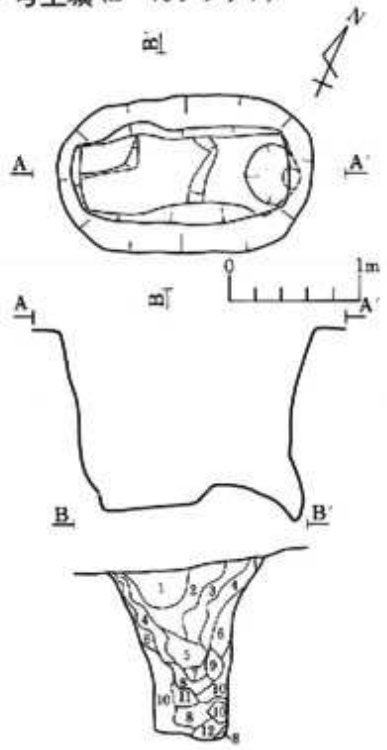
土層注記
1．10YR⅔　黒褐色シルト（第b層対応）
2．7.5YR⅔　黒褐色シルト（第a層対応）
3．10YR⅔　褐色シルト（第b層対応）
4．10YR⅔　黒褐色シルト
1～4の各層に小礫を多く含む。

単位：cm

上端	中段	下端	深さ	長軸方向	
224×134	――	124×68	48	N－44°－E	上端平面形は隅丸長方形、底面はゆるやかな傾斜をもつ2層中より土器片1点出土

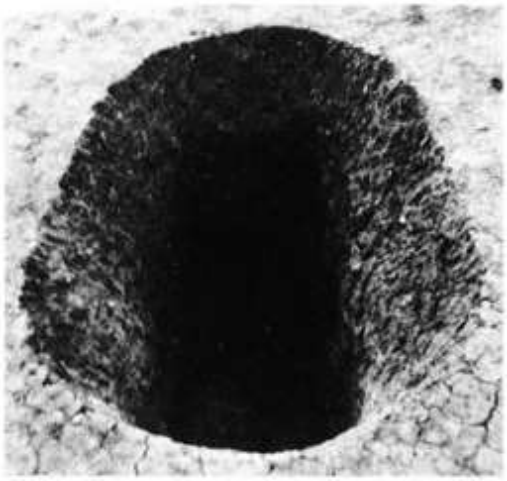
第6図　5号土壙・6号土壙

7号土壙(B−10グリット)



上　端
196×122
中　段
168×78
下　端
168×62
深　き
140
長軸方向
N−34°−E
上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形土壙下半は梨野層を掘り込んでおり、底面は凸凹がある。

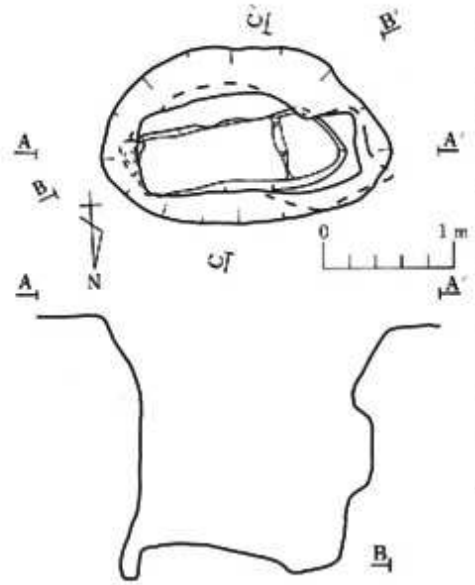
単位：cm



土　層　注　記

1.7.5YR5/6 暗褐色シルト(Ma層対応)
2.10YR5/6 黒褐色シルト(Mb層対応・小塊を含む)
3.10YR5/6 黒褐色シルト(Mb層対応)
4.7.5YR5/6 黒褐色シルト(Mla層対応)
5.7.5YR5/6 豚暗褐色シルト(Mla層対応・小塊を含む)
6.10YR5/6 褐色シルト　(Mlb層対応)
7.10YR5/6 暗褐色シルト(Mlb層対応)
8.10YR5/6 黒褐色シルト(地山崩壊土の混入あり)
9.10YR5/6 黄褐色シルト(黒色土が混入)
10.10YR5/6 暗黄褐色シルト(崩壊塊層・黒色土を一部含む)
11.10YR5/6 褐色粘土質シルト(地山崩壊土の混入あり)
12.10YR5/6 黄褐色シルト(地山崩壊土)

8号土壙(C・D−11グリット)

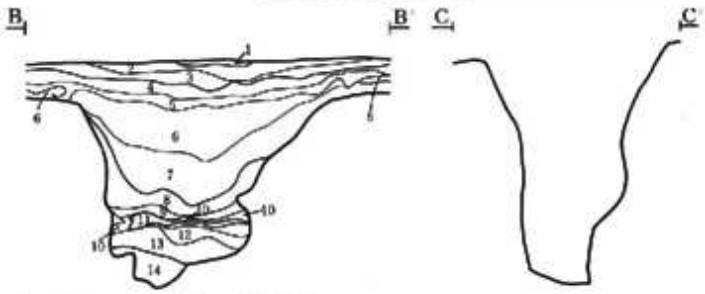


上　端
223×136
中　段
166×75
下　端
153×48
深　き
193
長軸方向
N−87°−E
上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形土壙下半は梨野層を掘り込んでおり、底面は凸凹がある。壁面は一部オーバーハングする。

単位：cm

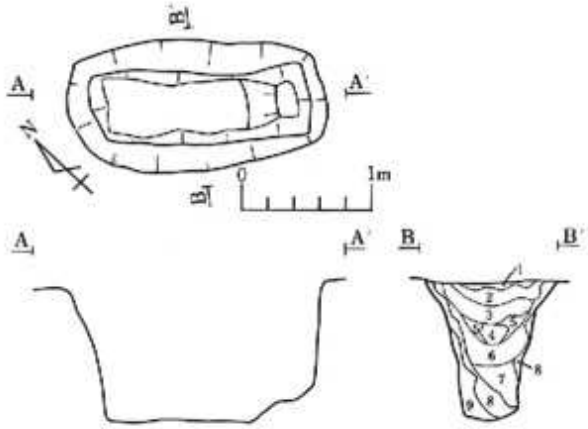
土　層　注　記

1.7.5YR5/6 黒褐色シルト(Ma層)
2.10YR5/6 黒色シルト　(Ma層)
3.10YR5/6 黒褐色シルト(Mb層)
4.7.5YR5/6 暗褐色シルト(Mla層)
5.10YR5/6 黒褐色シルト(Mlb層)
6.7.5YR5/6 黒褐色シルト(Mla層)
7.10YR5/6 褐色シルト　(Mlb層)
8.10YR5/6 暗褐色シルト
9.10YR5/6 黄褐色粘土　(地山崩壊土・黒色土の混入有り)
10.10YR5/6 黒褐色シルト
11.10YR5/6 黄褐色粘土　(3層と同じ層であるが明白が悪しい)
12.10YR5/6 暗褐色シルト(地山崩壊土の混入有り)
13.10YR5/6 暗褐色粘土質シルト
14.10YR5/6 黄褐色粘土質シルト(地山崩壊土)



第7図　7号土壙・8号土壙

9号土壙(B・C−10・11グリット)

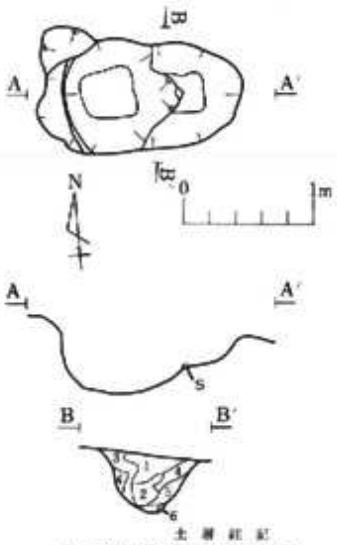


土層注記
1. 10YR3/4　黒褐色シルト(Vb層対応)
2. 10YR3/3　暗褐色シルト
3. 7.5YR3/4　暗褐色シルト(Va層対応)
4. 10YR3/4　黒褐色シルト(Va'層対応)
5. 10YR3/4　黒褐色シルト(Va'層対応、4層に比べてやや明るい)
6. 7.5YR3/4　黒褐色シルト(Va層対応)
7. 10YR3/4　黒褐色シルト(Va層対応、地山粘質土の混入有り)
8. 10YR3/4　褐色シルト　(Vb層)
9. 10YR3/4　黄褐色粘土　(地山粘質土、黒色土の混入有り)

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	上端・下端平面形共に隅丸長方形、底面はほぼ平坦である。
194×100	164×78	146×44	112	N−56°−W	

10号土壙(B−10グリット)



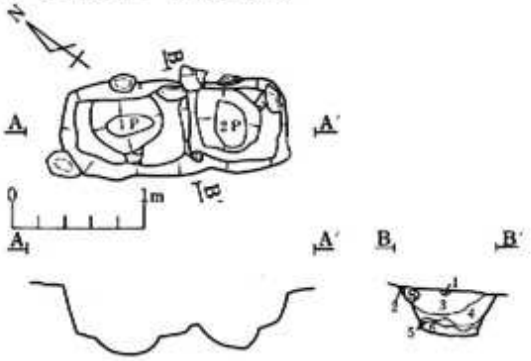
土層註記
1. 7.5YR3/4　黒褐色シルト(Va層対応)
2. 7.5YR3/4　黒褐色シルト(Va層対応、小礫を含む)
3. 10YR3/4　黒褐色シルト(地山ブロック少量含む)
4. 10YR3/4　褐色シルト　(Vb層対応)
5. 10YR3/4　黄褐色粘土質シルト(地山粘質土)
6. 10YR3/4　明黄褐色砂質粘土　(地山粘質土)

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	上端平面形は、楕円形、底面はゆるやかな傾斜をもつ。
152×88	――	40×40	44	N−79°−E	

第8図　9号土壙・10号土壙

11号土壙（C－11グリット）

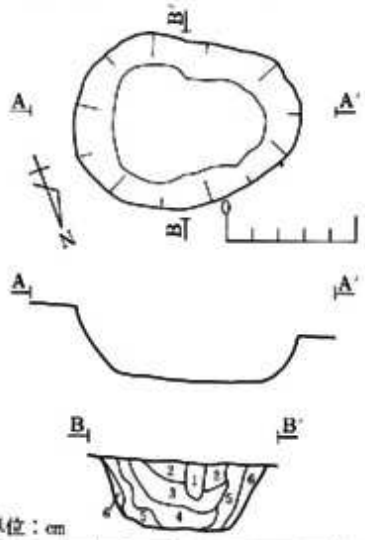


土層注記
1．10YR5/6　明黄褐色シルト　（VI層火山灰）
2．10YR5/6　黄褐色粘土質シルト（地山崩壊土）
3．10YR5/6　黒褐色シルト　（VII層対応）
4．7.5YR5/6　黒褐色シルト　（VIIa層対応）
5．10YR5/6　褐色シルト　（VIIb層対応）
6．10YR5/6　黄褐色粘土質シルト（地山崩壊土）

単位：cm

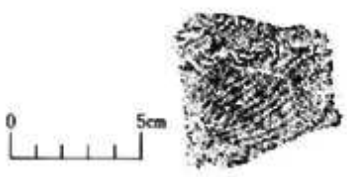
上　端	172×76	上端・下端平面形共に隅長方形、底面に2つのピットがある。	
下　端	156×68		
深　さ	40		
長軸方向	N－46°－W		
	上　端	下　端	深　さ
1　P	54×43	46×15	14
2　P	49×49	35×23	15

12号土壙（E－14グリット）

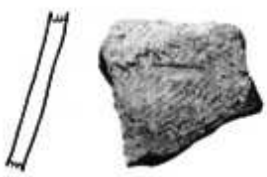


単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
172×132	90	118×90	62	N－74°－W	上端・下端平面形共に楕円形、底面は平坦である。縄文土器1点が出土している。



1

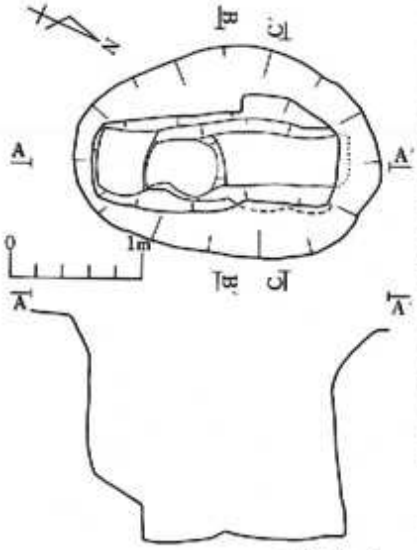


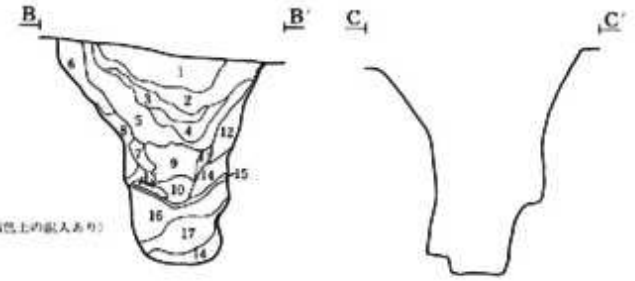
土層記
1．10YR3/1　黒色シルト
2．10YR3/2　黒褐色シルト（VIb層対応）
3．10YR3/2　黒褐色シルト（VIb層対応、炭化物を含む）
4．7.5YR3/4　黒褐色シルト（VIIa層対応）
5．10YR5/6　褐色シルト　（VIIb層対応）
6．10YR5/6　黄褐色粘土質シルト（地山崩壊土）

第9図1	
遺構名	12号土壙
層位	不明
部位	体部
RL縄文＋綾絡文 綾絡文が明瞭に残る	
不明	

第9図　11号土壙・12号土壙

13号土壙（D－15グリット）





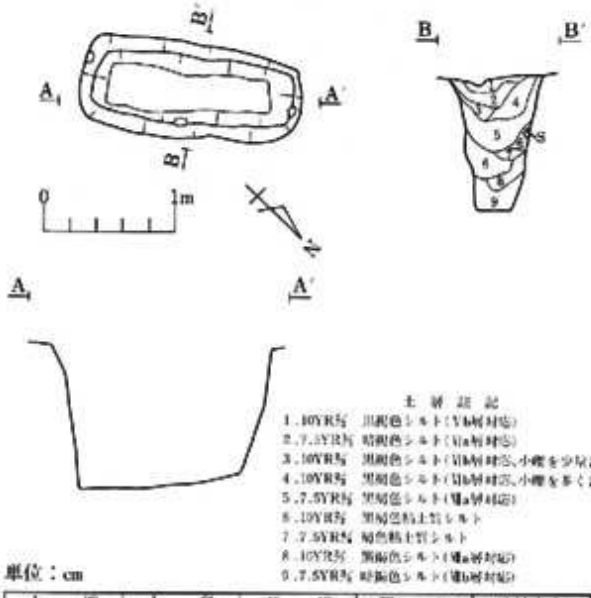
土層注記

1．10YR⅔　黒褐色シルト（Vb層対応）
2．10YR⅔　褐色シルト　（炭化物を含む）
3．10YR⅔　褐色シルト　（砂粒を含む）
4．10YR⅔　暗褐色シルト（小礫を含む）
5．7.5YR⅔　黒褐色シルト（Vaa層対応）
6．10YR⅔　黄褐色粘土　（地山崩壊土）
7．10YR⅔　黒褐色シルト
8．10YR⅔　褐色シルト　（Vab層対応）
9．7.5YR⅔　暗褐色シルト（Vab層対応）
10．10YR⅔　暗褐色シルト（Vab層対応）
11．7.5YR⅔　暗褐色粘土質シルト（地山崩壊土、黒色土の混入あり）
12．10YR⅔　黄褐色シルト（地山崩壊土）
13．10YR⅔　浅黄褐色の凝灰岩崩壊層
14．10YR⅔　黒褐色シルト（小礫を含む）
15．10YR⅔　黒褐色シルト
16．10YR⅔　黄褐色粘土質シルト（地山崩壊土）
17．10YR⅔　暗褐色シルト（地山崩壊土、小礫を含む）

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	上端平面形は楕円形、下端は隅丸長方形、土壙下半は梨野層を掘り込んでいる。底面は凸凹がある。壁面は一部オーバーハングする。
234×162	188×82	158×60	174	N－23°－W	

14号土壙（C－5グリット）



土層注記

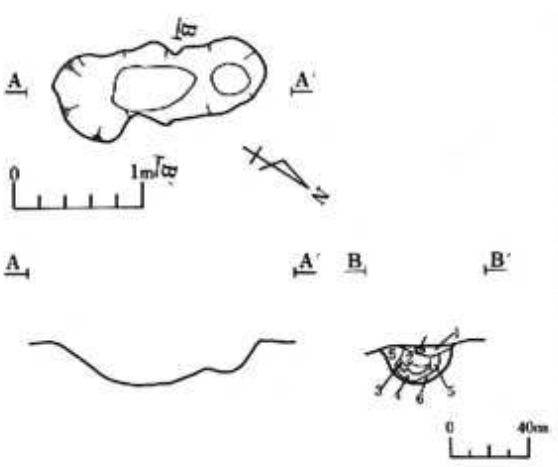
1．10YR⅔　黒褐色シルト（Vb層対応）
2．7.5YR⅔　暗褐色シルト（Vba層対応）
3．10YR⅔　黒褐色シルト（Vb層対応、小礫を少量含む）
4．10YR⅔　黒褐色シルト（Vb層対応、小礫を多く含む）
5．7.5YR⅔　黒褐色シルト（Vaa層対応）
6．10YR⅔　黒褐色粘土質シルト
7．7.5YR⅔　褐色粘土質シルト
8．10YR⅔　黒褐色シルト（Vaa層対応）
9．7.5YR⅔　暗褐色シルト（Vab層対応）

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	上端・下端平面形共に隅丸長方形、底面は平坦である。
168×74	152×44	126×36	116	N－40°－W	

第10図　13号土壙・14号土壙

15号土壙（C・D－13グリット）

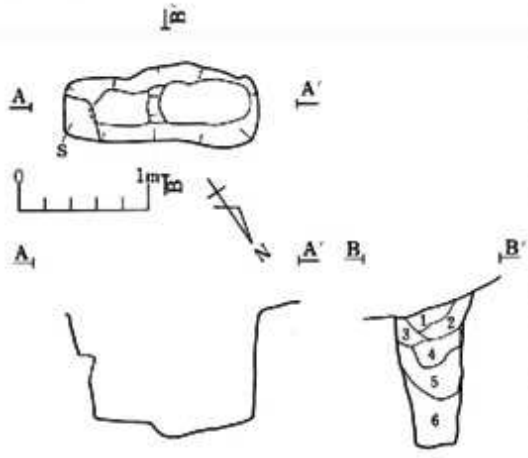


土 層 註 記
1.7.5YR⅔ 黒褐色シルト（第a層対応）
2.5YR⅔ 極暗赤褐色シルト（焼土・炭化物を多量含む）
3.7.5YR⅔ 暗褐色シルト（焼土炭化物を多量に含む）
4.5Y⅔ 暗赤褐色シルト（大半が焼土であるが炭化物も多量含む）
5.10YR⅔ 暗褐色シルト
6.10YR⅔ 褐色シルト （小礫を含む）

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
164×64	――	68×38	34	N－43°－W	上端平面形は長楕円形、底面はゆるやかな傾斜をもつ。

16号土壙（D－2グリット）



土 層 註 記
1.10YR⅔ 黒褐色シルト（小礫を含む）
2.10YR⅔ 黒褐色シルト
3.7.5YR⅔ 極暗褐色シルト（炭化物を含む）
4.7.5YR⅔ 黒褐色シルト（第a層対応）
5.10YR⅔ 褐色シルト （第b層対応）
6.7.5YR⅔ 褐色シルト （第b層対応）

単位：cm

上　端	中　段	下　端	深　さ	長軸方向	
150×60	――	142×36	104	N－57°－W	上端・下端平面形共に隅丸長方形、底面は段差がある。

第11図　15号土壙・16号土壙

V. 出 土 遺 物

1. 土　　器（第1表、第12·13図）

縄文土器：基本層位より復元資料1点、破片資料40点(口縁部4点、体部29点、底部6点、脚部1点)、遺構内(1・4・5・6・12号土壙)より破片資料5点(体部4点、底部1点)が出土している。時期的には後期中葉・後葉・末葉、晩期中葉までの後期以後のものが出土している。時期的なかたよりは認められない。層位的にはⅦ層中よりの出土が最も多い。

土師器：Va層より1点底部破片(第13図3)が出土している。ロクロ使用で、内面はヘラミガキ、黒色処理が施こされている。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整である。平安時代に属する。

佐 藤 甲 二

第1表　土器出土数量表

出土地点		縄文土器											土師器
		復元土器	破片資料					後期	後期~晩期	晩期		不明	破片資料
			総数	口縁部	体部	底部	脚部	破片	破片	復元	破片	破片	底部
基本層位	Ⅰ	—	10	1	6	3	—	1	—	—	—	9	—
	Ⅳ	—	2	—	1	1	—	—	—	—	—	2	—
	Ⅴ	—	5	—	5	—	—	—	—	—	—	5	—
	(a)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	(b)	—	—	—	(5)	—	—	—	—	—	—	(5)	—
	Ⅵ	1	7	2	5	—	—	1	1	1	1	4	—
	(a)	(1)	(3)	(1)	(2)	—	—	(1)	—	(1)	—	(2)	—
	(b)	—	(3)	(1)	(2)	—	—	—	(1)	—	(1)	(1)	—
	Ⅶ	—	16	1	12	2	2	1	3	—	—	12	—
	(a)	—	(15)	(1)	(11)	(2)	(1)	(1)	(3)	—	—	(11)	—
小計		1	40	4	29	6	1	3	4	1	1	32	1
遺構内		—	5	—	4	1	—	1	—	—	—	—	—
合計		1	45	4	33	7	1	4	4	1	1	32	1

2. 石　　器（第2表、第13~15図）

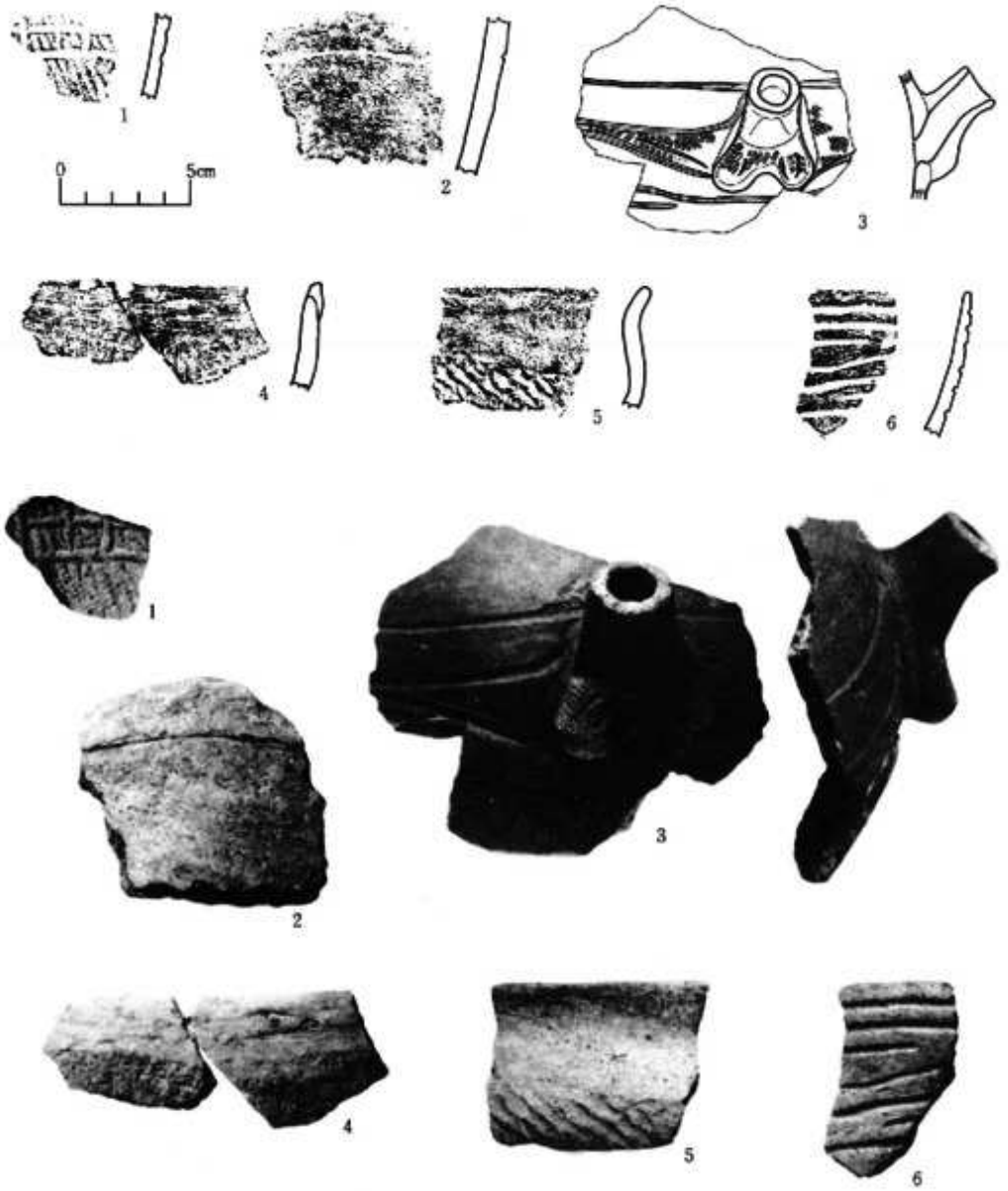
石器は基本層位を中心として17点(表採資料7点を含む)出土した。礫石器1点を除き他は全て打製石器である。Ⅶ層からの出土数が若干多い。

柳 沢 みどり

第2表　石器出土数量表

出土地点		石鏃	石匙	ポイント	スクレイパー	S·F	M·F	石核	礫石器		合計
									Ⅲ	Ⅳ	
基本層位	Ⅱ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	Ⅳ	2	—	—	—	—	—	1	—	—	3
	Ⅴ	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
	Ⅶ	1	1	—	1	—	—	—	1	1	5
表採		2	1	—	2	—	1	1	—	—	7
合計		5	2	1	3	1	1	2	1	1	17

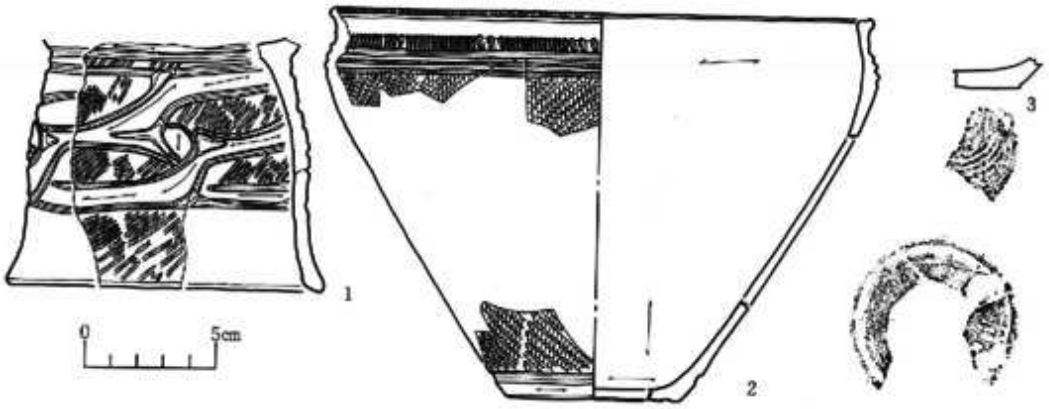
1．土　器



観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	C－6(b)	表採	浅鉢	体部	――	横位RL縄文→沈線文	磨き	縄文後期中葉	――
2	C－4(d)	Ⅶa	――	――	――	沈線→磨き→赤色顔料	――	縄文後期～晩期	内面磨滅
3	C－6(d)	Ⅶa	注口	体部	――	注口部貼付→LR縄文→沈線文→磨き	ナデ	縄文後期後葉	――
4	C－5(c)	Ⅶb	深鉢	口縁部～体部上半	平縁	口縁部：磨き 体部：クシ目状沈線文	――	縄文後期～晩期	内面磨滅
5	E－14(c)	Ⅶa	深鉢	口縁部～体部上半	平縁	口縁部：磨き 体部：横位R縄文	磨き	縄文後期～晩期	――
6	C－13(a)	Ⅶa	――	口縁部	平縁	沈線文→磨き	磨き	縄文晩期	――

第12図　出土土器（1）



接合表

図	接合	地区名	層位
1		C−3(d)	Ⅶa
	+	C−2(c)	+

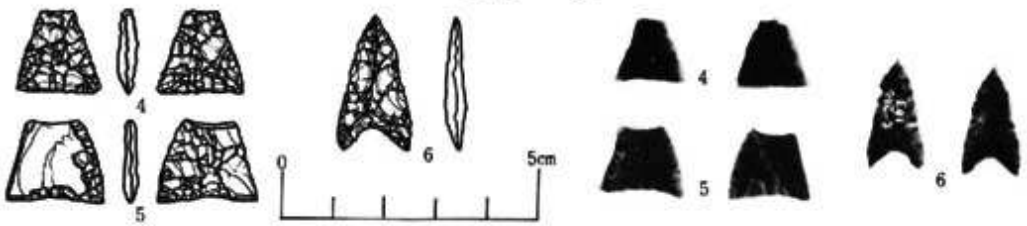
接合表

図	接合	地区名	層位
2		C−13(d)	Ⅶa
	−	+ (+)	Ⅶa

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	C−3(d)	Ⅶa	―	脚部	――	横位LR縄文→沈線文(人組文)→磨き	ナデ	縄文後期末葉	――
2	C−13(d)	Ⅶa	浅鉢	口縁部～底部	平縁 刻み目	口縁部:沈線→刻み→磨き,体部:横位LR・RL羽状縄文 体部下半:沈線→磨き、底部:沈線→磨き	口縁部:沈線磨き	縄文後期中葉	口径(21cm)、底径6.7cm,器高(15cm)
3	C−12(a)	Va	坏	体部下半～底部	――	体部:ロクロ 底部:回転糸切	磨き→黒色処理	平安	――

2. 石　器

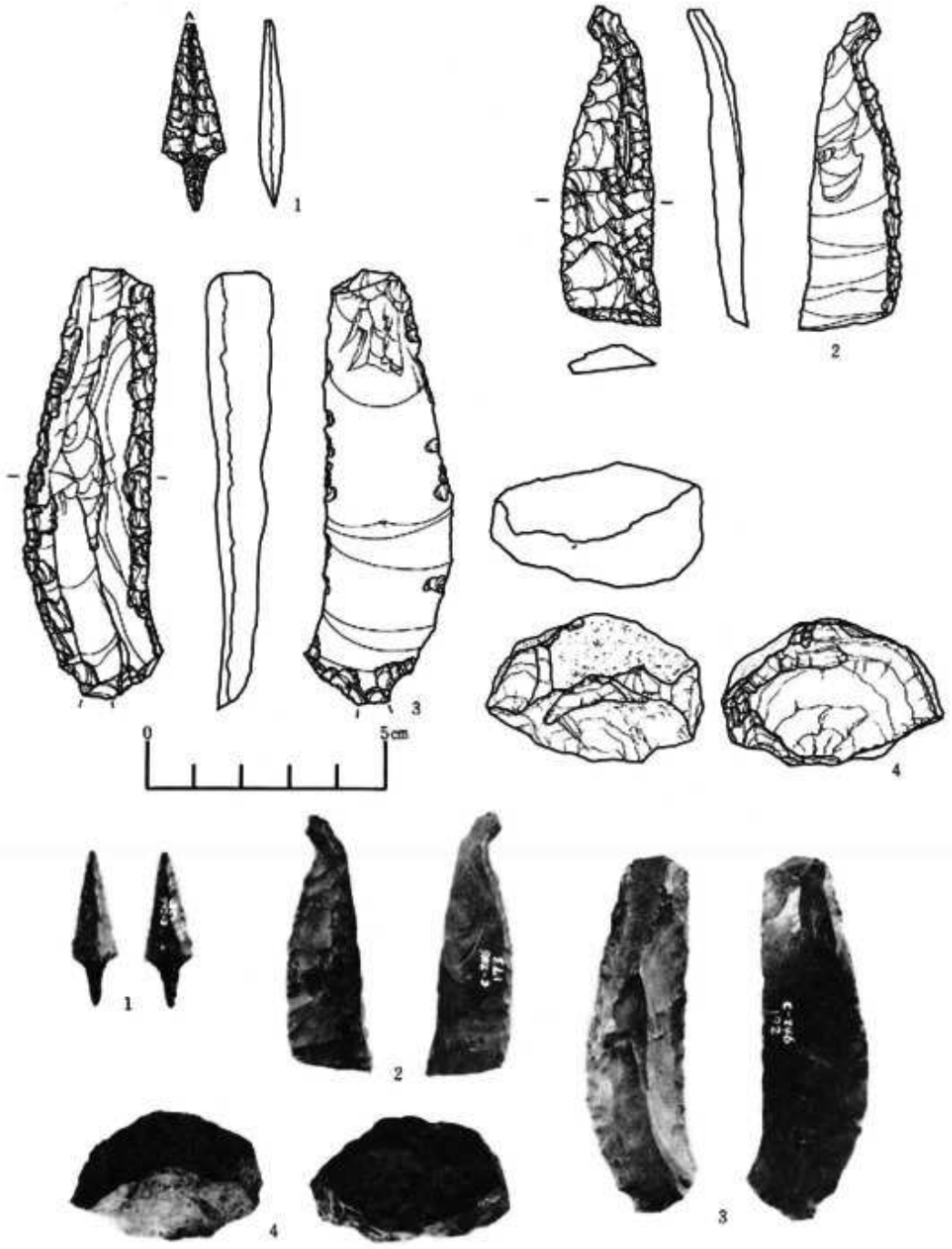


観察表

単位：mm

図	地区名	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
4	B−7(d)	Ⅶb	石鏃	15.0	16.0	3.5	先端部欠損	Ⅶaw㉙	チャート	137
5	C−3(c)	Ⅶa	石鏃	15.2	18.5	3.0	先端部欠損	Ⅶaw㉙	珪質頁岩	150
6	表採	―	石鏃	26.8	14.0	4.0	――	Ⅶaw㉘	珪質頁岩	103

第13図　出土土器(2)・石器(1)

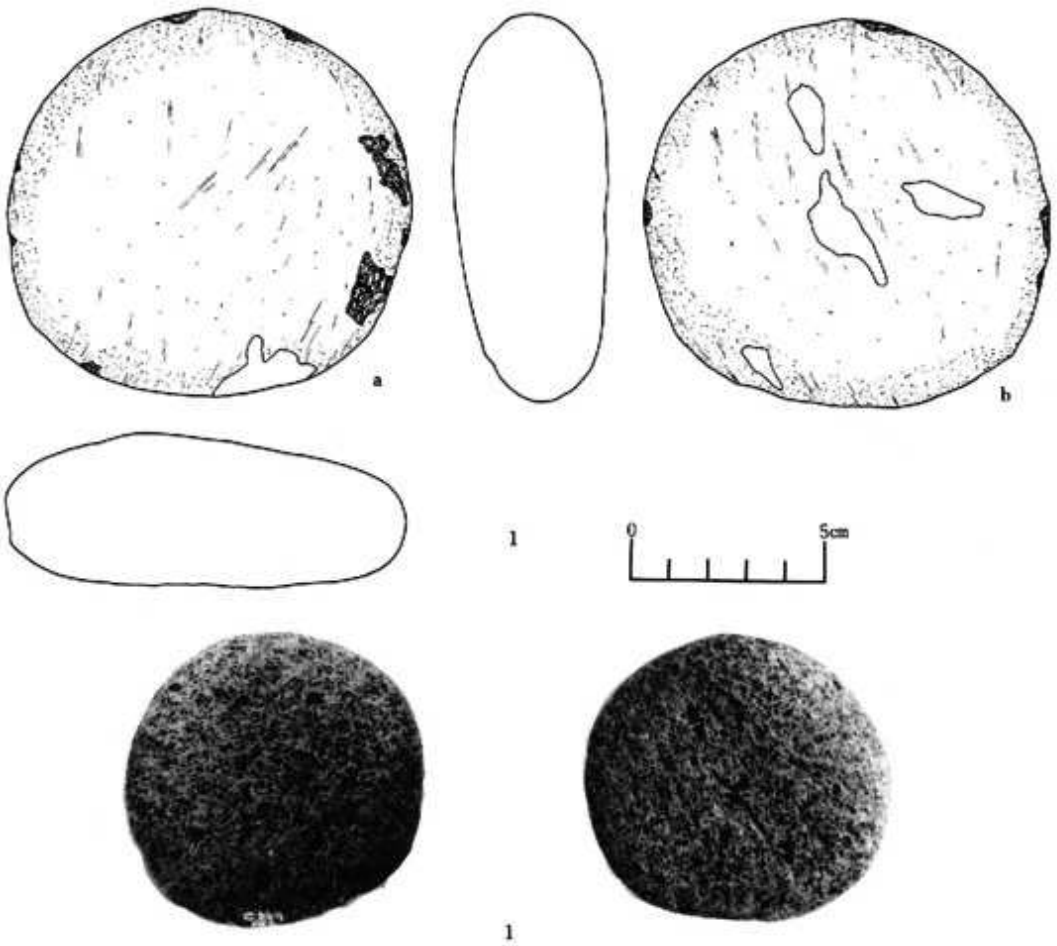


観察表

単位：mm

図	地区名	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	C－7(a)	Ⅶ	石鏃	(40.3)	13.0	5.0	尖頭部欠損	Ⅰα①	珪質頁岩	125
2	表採	—	石匙	67.0	21.0	6.0	—	Ⅱ	珪質頁岩	108
3	D－4(a)	Ⅶa	スクレイパー	91.0	26.0	14.0	—	Ⅲ	珪質頁岩	172
4	C－2	Ⅵc	石核	31.0	44.7	19.2	—	—	珪質頁岩	106

第14図　出土石器（2）



観察表

単位：mm、g

図	地　区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石　材	登録番号
	C－2(c)	Ⅶa	99.7	101.5	40.5	590	B	a・b両面に磨痕(a) 側面の一部に敲打痕(b－1)	Ⅲ	安山岩	185

第15図　出　土　石　器(3)

Ⅵ. ま と め

嶺山A遺跡では第1地点の窪地と第2地点の舌状に張り出す丘陵緩斜面の調査が行われた。検出された遺構は第1地点の縄文時代の土壙16基である。第2地点からは遺構・遺物は検出されていない。土壙の配置は弧状を呈し、谷心線(注1)(河道の横断面の最大水深の点を上・下に結んだ線。当遺跡では河道は検出されていないが、西方・東方から窪地中央に向かう谷状の地形の横断面の最低標高と結んだ線を便宜的に谷心線とする。)に制約を受けている。これらの土壙には沼原A遺跡同様「陥穴」(注2)・「陥し穴状遺構」(注3)・「Tピット」(注4)等と称されてきたものが9基ある(1・3・5・7・8・9・13・14・16号土壙)。3号土壙は上端平面形が円形のものである。他の8基は上端平面形が楕円形ないし隅丸長方形、下端平面形は隅丸長方形、断面形が逆台形もしくはその上半がさらに外に開く形態をしている。底面は平坦なもの(1・5・9・14・16号土壙)と凹凸のあるもの(7・8・13号土壙)がある。後者の土壙下半は、凝灰岩を掘り込んで構築している。底部施設は7号・8号の底面壁際に斜めのピットが1基ずつある。規模においては下端平面形の長軸が168～126cm、短軸が62～32cm、深さは193～104cmと沼原A遺跡に比べ大小の差がある。土壙の堆積土は地山崩壊土、基本層、基本層対応の層、その他の層で構成されており全て自然堆積により埋まっており、最下層に地山崩壊土が堆積しているもの(1・7・8・9・13号土壙)と、基本層最下層対応の層が堆積しているもの(5・14・16号土壙)とに分けられる。前者では地山崩壊土の上層には基本層最下層及び最下層対応の層が堆積している。また、前者と後者では上端平面形にやや差異が認められ、前者では楕円形を呈するものが多いが、後者は隅丸長方形を呈する。前者の地山崩壊土は土壙が使用されなくなってから壁面が崩壊し、それが堆積したものと考えられ後者の方がより使用されていた時の形態を留めているものと判断される。

これらの「陥穴」等と称される土壙以外には7基の土壙が検出されている。上端平面形は長楕円形・楕円形・隅丸長方形を呈し、土壙内に段を有するものが多く、下端平面形は種々の形態を示す。堆積土は「陥穴」等とほぼ同様であるが、地山崩壊土が多量に最下層に堆積しているものはなく、あっても極めて少ない量である。これは土壙の深さと関係するものと考えられる。

嶺山A遺跡で検出された16基の土壙は、基本層Ⅶ層の堆積状況から構築時期はⅦ層の堆積以前であり、全ての土壙が谷心線に制約を受けた配置をしていることから、同一時期に機能していた土壙群と考えられる。

斎 野 裕 彦

註

1．町田貞他『地形学辞典』1981

2．霧ヶ丘調査団『霧ヶ丘』1973

3．瀬川司男「陥し穴状遺構について」『紀要Ⅰ』(財)岩手県埋蔵文化財センター P1～16 1981

4．札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書』Ⅻ 1977

4．第1地点調査風景（遠く太白山を望む）

嶺山B遺跡

（C－293）

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山26

調査期間：昭和55年7月26日～9月1日

対象面積：2000㎡

発掘面積：560㎡

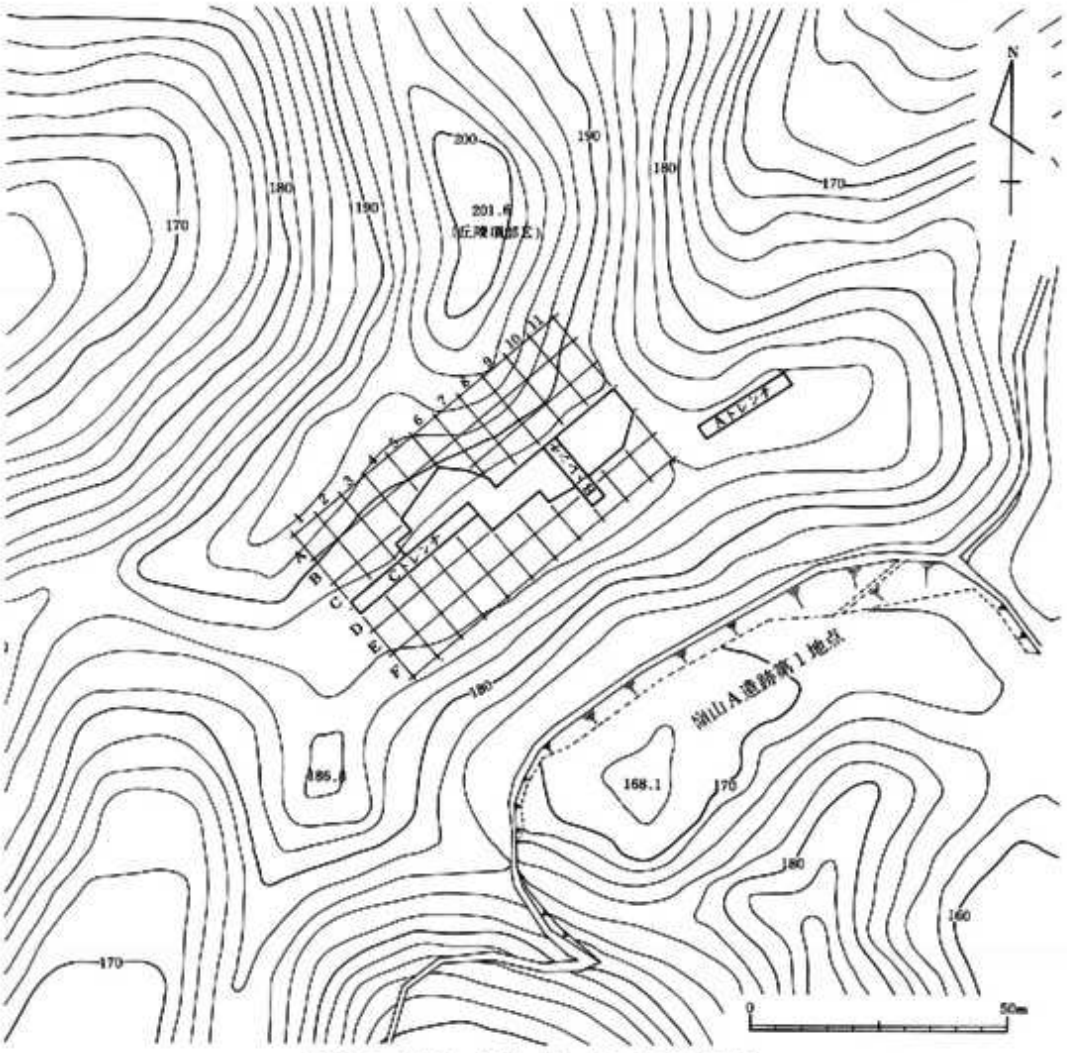
担当職員：佐藤甲二・斎野裕彦・加藤正範

Ⅰ．遺跡の立地（第1図、写真1～3）

嶺山B遺跡は、造成地ほぼ中央南側、丘陵内上位のテラス状に広がる緩斜面に立地する。このテラス状緩斜面は、丘陵頂部E（201.6m）の南東側斜面上、標高186～189mの間に形成された北東一南西に細長い、長さ約100m、幅約20mの平坦部で、北東、南東、南西の三方向は比高差15～20mの窪地、谷に至る急斜面となる。

遺跡は用地買収前までは梅林となっており、その後、調査前までは資材運搬用の道路となっていた。その為、遺跡東側縁辺部及び南東側では、地山がすでに顔を出している部分も認められた。北東側、南西側の窪地には、沼原B、嶺山A遺跡が立地する。

佐　藤　甲　二



第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図

1．調査前全景（南西より）

2．遺跡遠景（南東より）下は嶺山A遺跡

Ⅱ. 調査の方法と概要（第1・2図、写真4）

1. 調 査 の 方 法

地形に沿ってAトレンチ(3×12m)、Bトレンチ(3×9m)、Cトレンチ(3×30m)の3本のトレンチを設定し(B、Cトレンチは直交)、試掘調査を行う。その後のB、Cトレンチの拡張に際しては、Bトレンチを縦軸ライン(A～F)、Cトレンチを横軸ライン(1～11)とする、6×6mグリッドによる調査に切り替える。

2. 調 査 の 概 要

昭和55年7月26日～9月1日までの約1ヶ月間調査を実施した。テラス状緩斜面部分約2.000㎡が調査対象で、560㎡の調査を行った。

Aトレンチ、Cトレンチ南西側では遺物、遺構は検出されず、約5～20cmの表土(Ⅰ層)下が直接地山面(Ⅵ層)となる状態であった。Bトレンチでは表土層下から地山面までの間に、Ⅱ～Ⅴ層が確認され、Ⅴ層を中心として若干の縄文時代の遺物を出土した。また地山上面で、縄文時代の土壙が1基検出された。この為、Ⅴ層堆積部分を中心として拡張を行ったが、Ⅴ層よりわずかに縄文時代の遺物を出土したのみで、遺構は検出されなかった。

以上、縄文時代の土壙1基が検出されたのみで、他に遺構は検出されなかった。出土遺物もⅤ層を中心として縄文時代(早期、中期、後期、晩期)の遺物が平箱半箱も満たない程度であった。

佐 藤 甲 二

Ⅲ. 基 本 層 位（第3図）

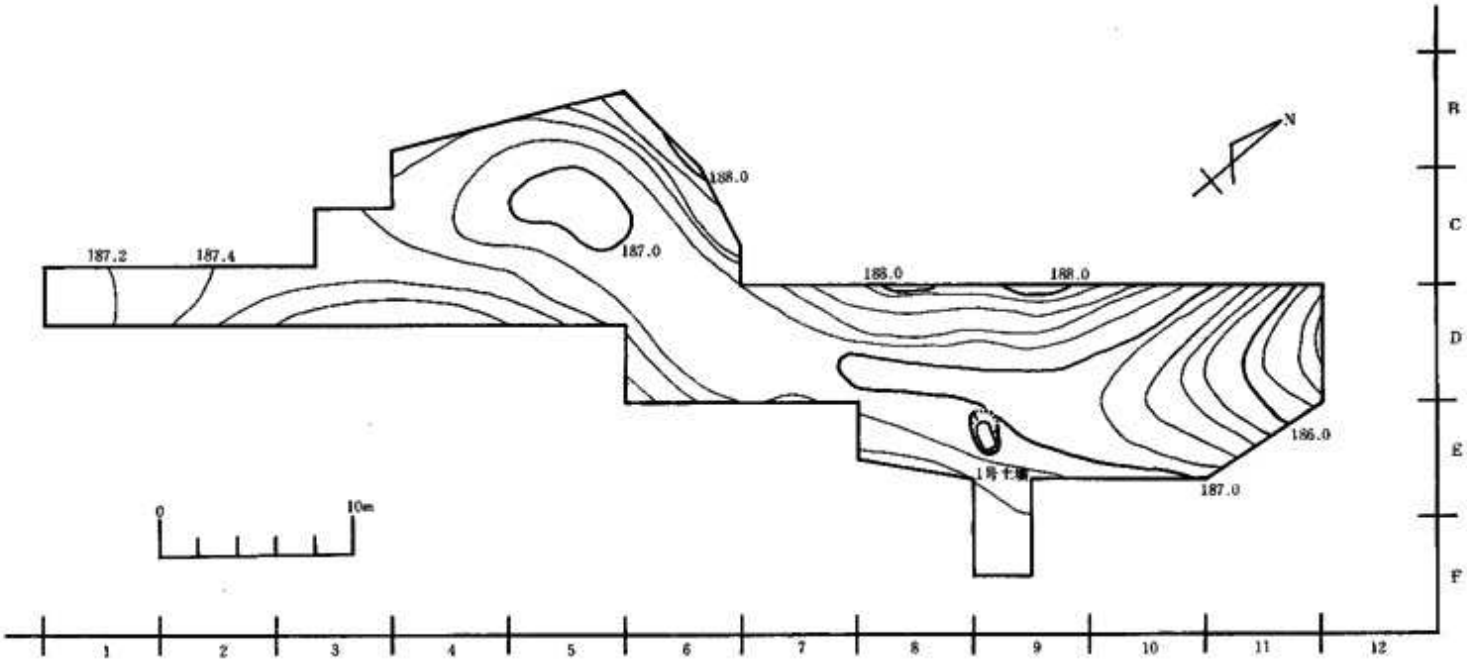
現表土層第Ⅰ層から地山層第Ⅵ層までの大別6層から成り、これらはさらに8層に細分される。第Ⅱ層から第Ⅴ層は、テラス状緩斜面奥の丘陵際(B・C－4～6、D－6～11グリッド)で地山が浅い谷状の地形になる部分においてのみ分布する。

第Ⅰ層 暗褐色(10YR3/3)シルト層。現表土層。草の根、風化凝灰岩粒を含む。厚さ5～30cm。

第Ⅱ層 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト層。砂、風化凝灰岩粒を含む。厚さ10cm前後。

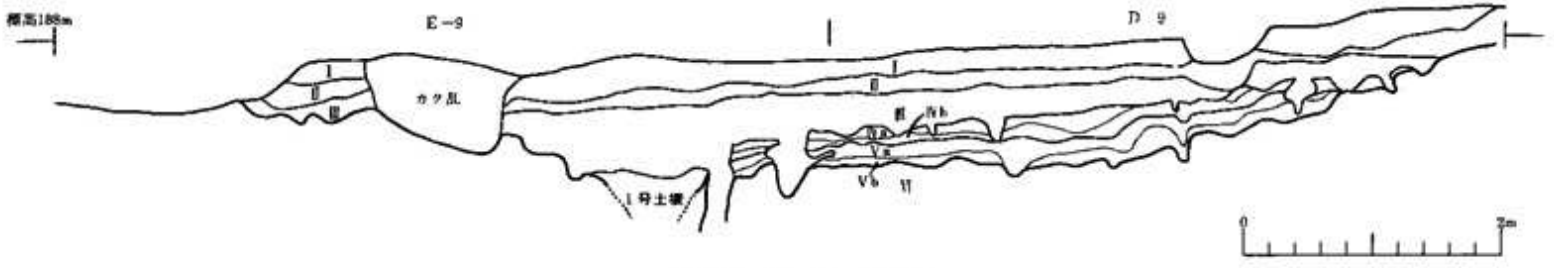
第Ⅲ層 黒褐色(10YR3/2)シルト層。炭化粒を少量、風化凝灰岩粒を含む。厚さ20cm前後、場所によっては40cm以上厚く堆積する場合もある。

第Ⅳ層 2層に細分される。



第2図　グリッド配置図

E・D－9グリッド南壁土層



第3図　基　本　層　位

Ⅳa層　暗褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒を含む。上部に灰白火山灰を部分的に含む場合がある。断片的に分布する。厚さ10cm前後。

Ⅳb層　暗褐色(10YR3/4)シルト層。風化凝灰岩粒、2～3cmの凝灰岩を含む。厚さ10cm前後。

第Ⅴ層　2層に細分される。いずれも縄文時代の遺物を若干含む。

Va層　暗褐色(10YR3/3)シルト層。風化凝灰岩粒、2～3cmの凝灰岩を含む。炭化粒を少量含む。厚さ10cm前後。

Vb層　暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト層。地山漸移層。風化凝灰岩粒、2～3cmの凝灰岩を多量に含む。炭化粒を少量含む。断片的に分布。厚さ10cm前後。

第Ⅵ層　褐色(10YR4/4)粘土層。地山層。5cm前後の凝灰岩を多く含む。

以上、第Ⅰ層から第Ⅴ層の内、第Ⅲ層以下の各層は起伏が大きく、余り安定した堆積状況は示していない。特に第Ⅲ層の起伏は顕著である。第Ⅲ層、第Ⅳa層からも縄文時代の遺物を若干出土したが、第Ⅴ層中の遺物が何らかの理由で、第Ⅲ層、第Ⅳa層中に混入した可能性が強い。第Ⅴ層中には縄文時代の遺物を含むが、細分層第Va層、第Vb層の間には遺物上の時期差は認められなかった。

佐藤甲二

3．遺跡よりの遠景（生出地区・高舘丘陵）

4．発　掘　風　景（南西より）

Ⅳ．遺　　構

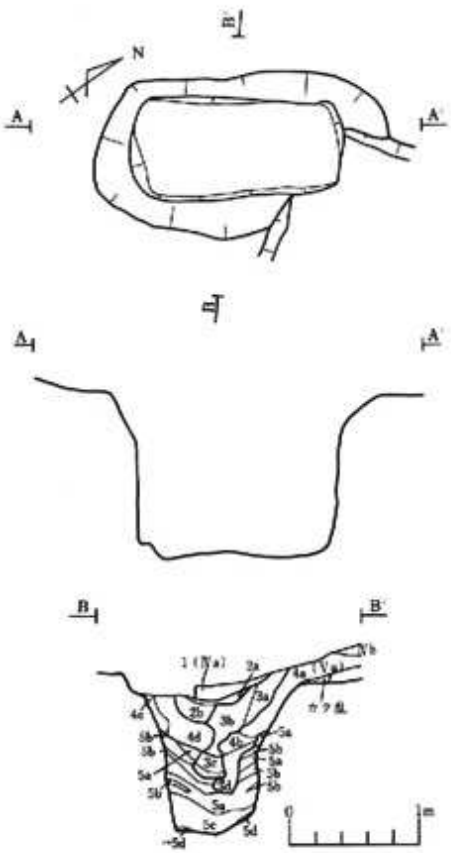
1号土壙（第4図）

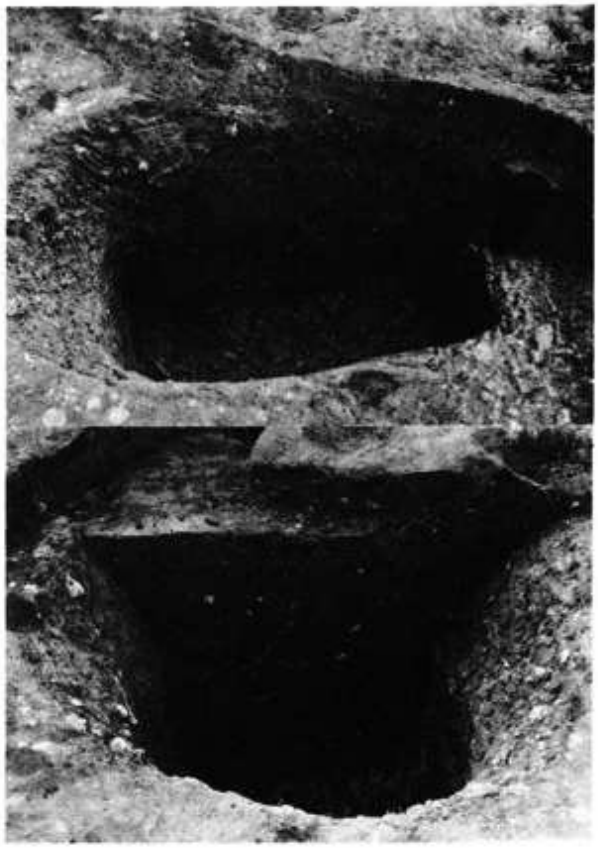
嶺山B遺跡で検出された遺構は1号土壙1基である。土壙は遺跡中央やや東方寄りのE－8・9グリッドに位置する。谷心線はすぐ北を走っている。

土壙の上端平面形は楕円形で、長軸226cm、短軸124cm、中段長軸164cm、短軸80cm、下端平面形は隅丸長方形で、長軸150cm、短軸72cmを測る。深さは116cmで底面はやや凸凹はあるが平坦である。底部施設はなく、下端の長軸方向はN－37°－Eである。土壙の堆積土は地山崩壊土、基本層、基本層対応の層、その他の層で構成されており、全て自然堆積により埋まっている。遺物は皆無である。1号土壙は従来「陥穴」・「陥し穴状遺構」・「Tピット」等と称されてきたものであり、沼原A遺跡、嶺山A遺跡でも検出されており、両遺跡では土壙が群をなすのに対し、嶺山B遺跡では1基のみの検出である点相違する。土壙内には基本層Va層が堆積しており、Va層からは縄文土器が出土しており、縄文晩期の遺物が最も新しい。このことから、構築時期については晩期以前と考えられる。

斎　野　裕　彦

1 号 土 壙





1号土壙土層註記

1	10YR3/4	褐色シルト	(Ⅳa層、灰白色火山灰を多量に含む)
2a	10YR3/4	暗褐色シルト	(炭化物を多く含む)
2b	10YR3/3	暗褐色シルト	(炭化物、凝灰岩粒を含む)
3a	10YR3/4	暗褐色シルト	(Ⅳa層対応、凝灰岩粒を含む)
3b	10YR3/4	暗褐色シルト	(Ⅳb層対応、凝灰岩の小礫を含む)
3c	10YR3/3	暗褐色シルト	(Ⅳb層対応、凝灰岩の小礫を含む)
3d	10YR3/4	暗褐色シルト	(Ⅳb層対応、砂粒を多く含む)
4a	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	(Va層、凝灰岩粒及び小礫を少量含む)
4b	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	(凝灰岩粒を多量に含む、炭化物を少量含む)
4c	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	(凝灰岩の小礫を含む、炭化物を少量含む)
4d	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト	(凝灰岩の小礫を含む)
4e	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト	(凝灰岩粒を少量含む)
5a	10YR3/3	暗褐色粘土	(地山崩壊土。黒色土を含む、凝灰岩の小礫を含む)
5b	7.5YR3/4	褐色粘土	(地山崩壊土。凝灰岩の小礫を多量に含む)
5c	7.5YR3/4	褐色粘土	(地山のブロックを含む、凝灰岩の小礫を含む)
5d	10YR3/3	暗褐色粘土	(腐植土)

第4図　1 号 土 壙

V. 出 土 遺 物

1. 土　　器（第5・6図）

出土土器は全て縄文土器で、基本層位より出土している。復元資料は1点も出土せず、全て破片資料で、総数土数量わずか31点である。時期的には早期後～末葉、中期末葉、後期、晩期前葉・後葉の前期を除く各時期のものが出土しているが、時期的なかたよりは認められない。層位的にはV層を中心に出土している。

佐 藤 甲 二

2. 石　　器（第6図）

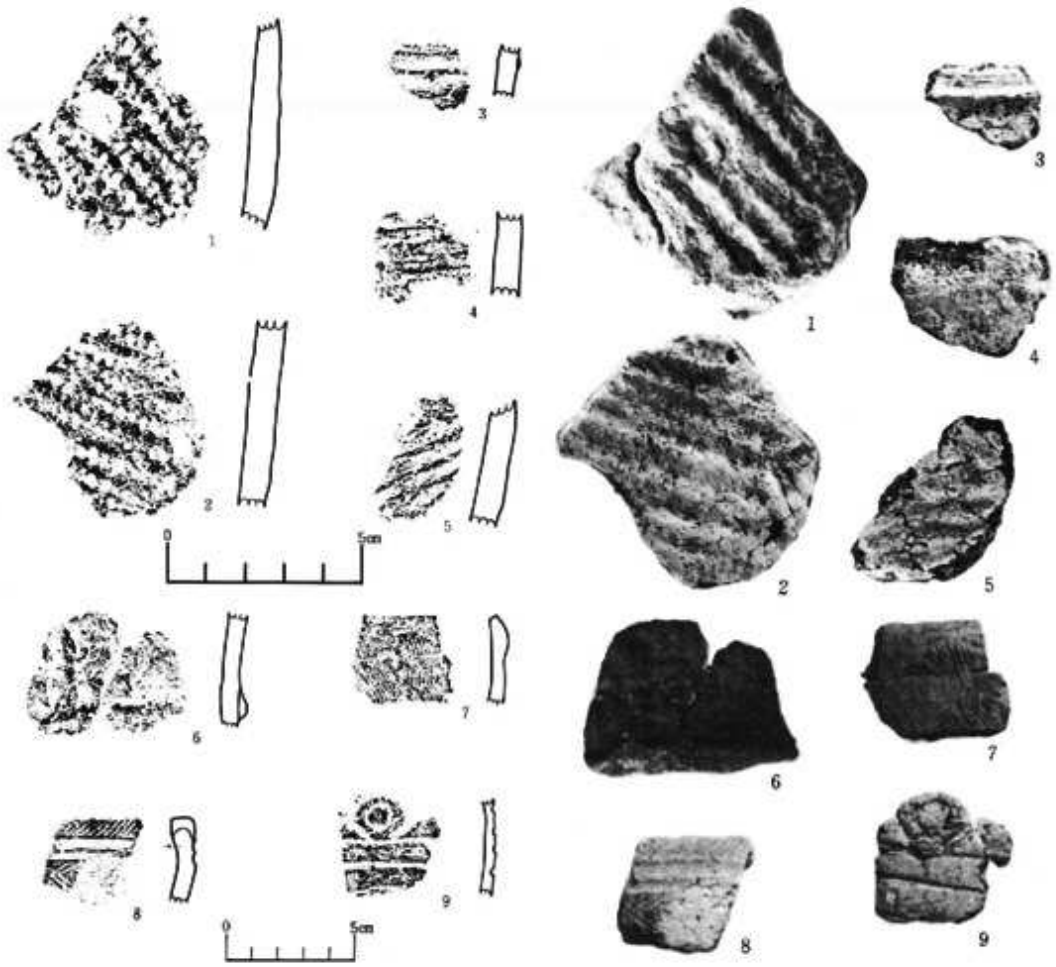
石器は「スクレイパー」2点(第6図4・5)の他に、剥片が1点出土した。この剥片の石材は周囲に木皮部分を残した珪化木であることから、断面形が長さ73.5mm、幅71mmの丸太状の珪化木を輪切りにしたものであることが理解できる。表採の1点を除き他の2点はV層中より出土している。

柳 沢 みどり

第1表　遺物出土数量表

出土地点		縄文土器									石器		
		破片資料				早期	中期	後期	晩期	不明	合計	スクレイパー	剥片
		合計	口縁部	体部	底部								
基本層位	Ⅲ	8	—	6	2	—	—	—	—	8	—	—	—
	Ⅳ	1	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—
	Ⅴ	22	6	14	2	5	1	3	2	11	2	1	1
	(a)	(4)	—	(4)	—	—	—	—	(2)	(2)	(2)	(1)	(1)
	(b)	(16)	(6)	(8)	(2)	(5)	(1)	(3)	—	(7)	1	—	—
表採		—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—
合計		31	6	20	5	5	1	3	2	20	3	2	1

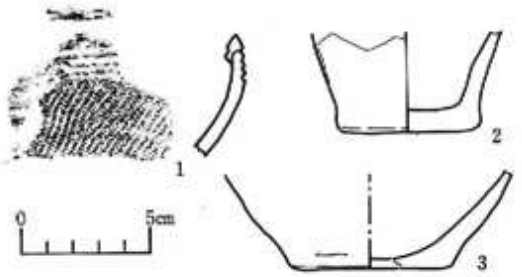
土　器



観察表

区	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	D−7〔d〕	Vb	深鉢	体部	——	横位RL縄文	——	縄文早期後～末葉	結晶破砕含む 内外面磨滅
2	D−7〔d〕	Vb	深鉢	体部	——	横位RL縄文	——	縄文早期後～末葉	結晶破砕含む、内外面磨滅・103と同一？
3	C−6〔d〕	V	深鉢	体部	——	隆線文	——	縄文早期後～末葉	結晶破砕含む 内外面磨滅
4	C−6〔d〕	V	深鉢	体部	——	横位多条LR縄文	——	縄文早期後～末葉	結晶破砕含む、内外面磨滅・103と同一？
5	C−6〔a〕	Vb	深鉢	体部	——	縄文	——	縄文早期後～末葉	結晶破砕含む 内外面磨滅
6	D−11〔d〕	Vb	深鉢	体部	——	隆線文	——	縄文中期末葉	内外面磨滅
7	D−11〔d〕	Vb	深鉢	口縁部	平縁？	クシ目状沈線文→磨き	——	縄文後期	内外面磨滅
8	D−11〔d〕	Vb	鉢	口縁部～体部上半	平縁？	口縁部：沈線文、縄文LR縄文 体部：横位LR羽状縄文	磨き	縄文後期	——
9	B−5〔c〕	Va	鉢	体部	——	沈線文（三角三叉文）→磨き	磨き	縄文晩期初頭	——

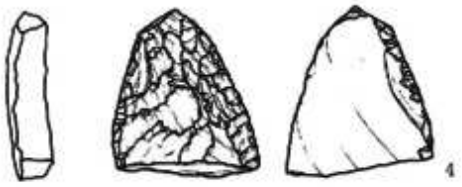
第5図　出土土器（1）

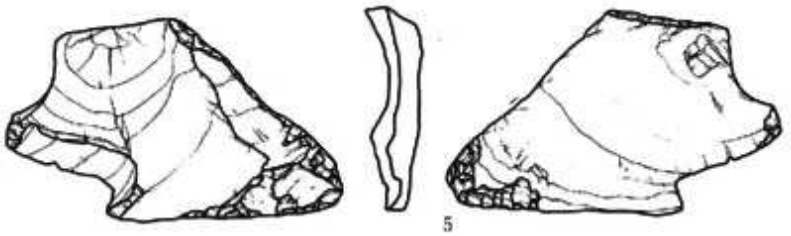


観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	D－7(a)	Va	鉢	口縁部～体部	小波状	口唇部：沈線、口縁部～体部上半：沈線文(工字文) 体部：横位L.R縄文	口縁部：沈線磨き	縄文晩期後葉	外面煤減
2	E－10(b)	Ⅲ	―	体部下半～底部	―	体部下半：磨き？ 底部：無文	―	縄文	内外面煤減 底径 5.5cm
3	D－4	Ⅲ	―	体部下半～底部	―	体部下半：磨き 底部：無文	磨き	縄文	底径(6cm)

石器





観察表

単位：mm

図	地区	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	石材	登録番号
4	表採	―	「スクレイパー」	(33.0)	(27.0)	(7.5)	両端欠損	珪質頁岩	127
5	C－5	Va	「スクレイパー」	39.0	65.0	5.0	―	珪質頁岩	112

第6図 出土土器(2)・石器

Ⅵ. ま　と　め

嶺山Ｂ遺跡は丘陵頂部Ｅから嶺山Ａ遺跡へ下る急斜面中位のテラス状に広がる緩斜面にあり、西方から東北方へ向けて弧状の谷心線が走る浅い谷状の地形をしている。

検出された遺構は１号土壙１基である。縄文時代晩期以前に構築されたと考えられる。同様の形態の土壙は沼原Ａ遺跡、嶺山Ａ遺跡で検出されており、土壙群として存在するのに比べ当遺跡では１基のみの検出であった。当遺跡東南線の斜面下の嶺山Ａ遺跡の土壙群と関係するものであろうか。

また遺物はⅤ層中から縄文土器片が出土している。遺物は縄文時代早期・中期～晩期の時期のものを含んでいる。沼原、嶺山地区で早期の遺物を出土したのは当遺跡だけである。

斎　野　裕　彦

嶺山C遺跡

（C－249）

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山15、16、20.

調査期間：第1地点　昭和55年4月14日～4月22日

第2地点　昭和55年9月16日～11月28日

第3地点　昭和55年4月29日～5月1日

対象面積：第1地点　1200㎡　第2地点　1400㎡

第3地点　800㎡

発掘面積：第1地点　120㎡　第2地点　900㎡

第3地点　40㎡

担当職員：斎野裕彦・加藤正範・佐藤甲二

Ⅰ．遺跡の立地（第1図・写真1）

嶺山C遺跡は、造成地南端、越河堤西側の谷地形に立地する。越河堤は、東へのびる深い沢の上流部を堰止めた、約6.000㎡の人工の農業用貯水池で、四方を丘陵に囲まれている。丘陵との比高は約20～40mである。堤北岸には、標高128～130mの間に形成された、緩やかに南へ傾斜する谷が、西岸には、標高130m前後の南北に細長い、幅25m、長さ80mの谷が入り込んでいる。西岸の谷の西方丘陵上（比高差約40m）には狭い平坦部が見られる。用地買収前までは、堤北岸は栗林、堤西岸は梅林となっていた。

堤南東には、北側を自然の沢で利用した峯館が、沢の下流約150mの北側丘陵中には沼原A遺跡が立地する。

佐藤甲二

Ⅱ．調査の方法と概要（第1図、写真2・3）

堤北岸の谷部を第1地点、西岸の谷部を第2地点、西岸の谷の西側丘陵上平坦部を第3地点として、昭和55年度に調査を実施した。

1．調査の方法

〈第1地点〉ほぼ南北方向に並列する、3×20mの2本のトレンチ（A、B）を設定し、調査を行う。

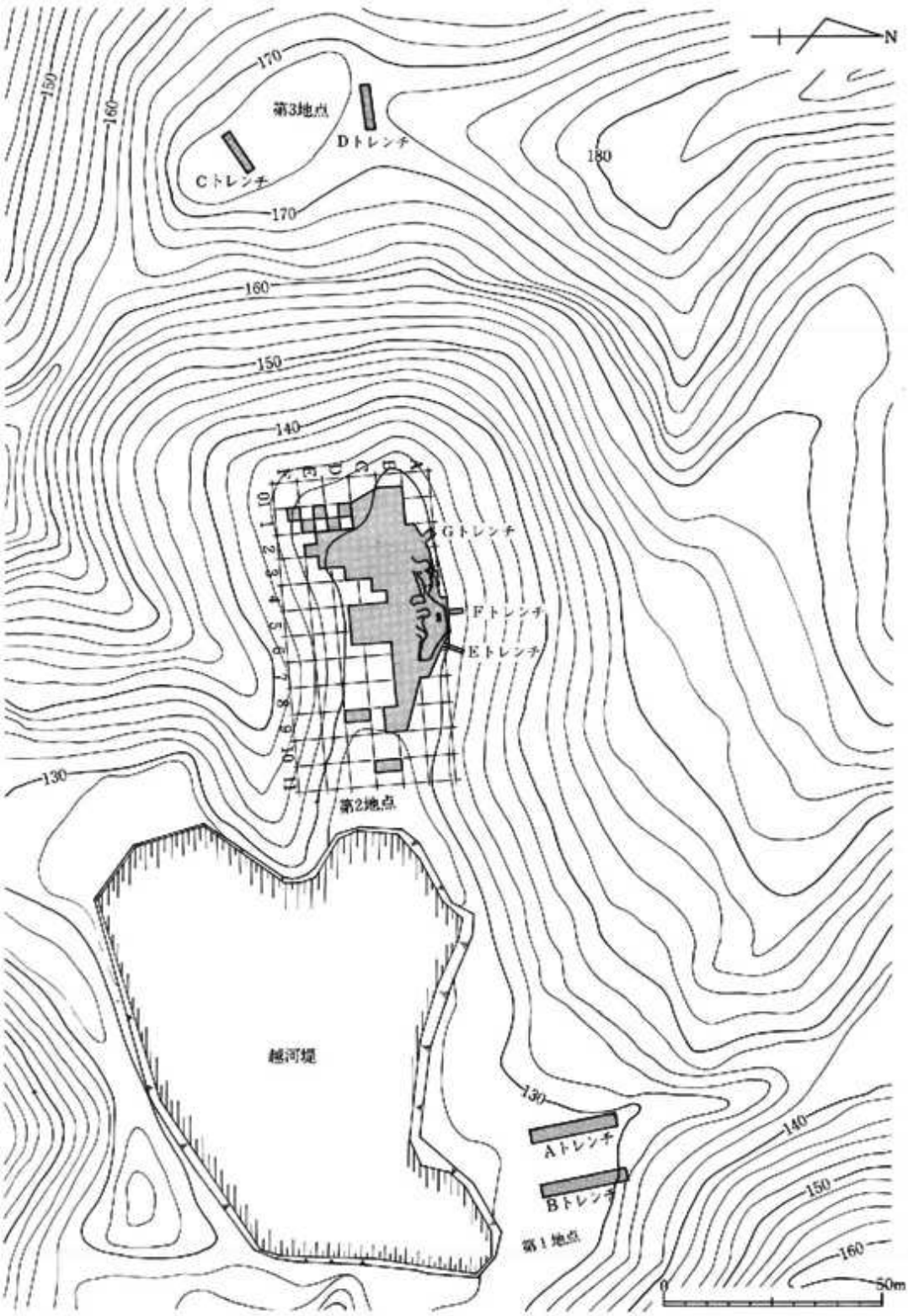
〈第2地点〉谷の長軸方向を横軸ライン（01～11）、これに直交するN－2°－Wを縦軸ライン（A～F）とする6×6mグリッドを設定し、調査を行う。尚、グリッドを4分割し、北西側よりa、b、c、dの小区を設けた。

〈第3地点〉ほぼ東西方向に2本の2×10mトレンチ（C、D）を設定し、調査を行う。

2．調査の概要

〈第1地点〉4月14日～22Hまでの約1週間調査を実施した。堤北岸の谷部約1,200㎡が調査対象で、A・Bのトレンチにより約120㎡の試掘調査を行う。その結果、Aトレンチでは表土下約70cm、Bトレンチでは表土下約150cmで地山となり、両トレンチとも遺物、遺物包含層、遺構は検出されなかった。Bトレンチでは、表土から地山に至る間、砂層が幾重にもレンズ状堆積し、この地区が以前、水の流跡であった様相を呈していた。

〈第2地点〉9月16日～11月28Hまでの約2ヶ月半調査を実施した。堤西岸の谷部分、約1.400㎡が調査対象で、約900㎡の調査を行った。Cライン及び3ラインのa区を中心とした試掘調



第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図

1．調査前遠景
（東より）

2．調査風景
（南より）

3．調査後全景
（西より）

査の結果、Ⅳ層に平安時代の遺物を含むことが確認され、重機により谷全体のⅠ～Ⅱ層を排土し、Ⅲ層より人力による調査を行った。調査は7ライン以東では湧き水によりⅣ層下の調査が困難であった為、6ライン以西を中心として行った。Aライン以北、2ライン以西では、Ⅳ層下に断片的にⅤ層が確認されたが、ほとんどがⅣ層下地山となる状況であった。北側の谷際、A－3～6グリッドより、地山上面で平安時代の遺物と伴に製鉄遺構が検出された。この南側、C－5・6グリッドを中心とするⅣ層中からは、多くの平安時代の土師器片と鉄滓が出土した。C－5グリッドでは、Ⅴ層下から地山までの間にⅥ層が検出され、Ⅵ層中より縄文晩期の一括土器が1点出土した為、C－6（a・d）、D－5（a・b）、D－6（a）グリッドを拡張したが、Ⅵ層中よりは遺物は1点も出土しなかった。また一括土器に伴う遺構は見当らなかった。西側、D－3グリッドa、b区でもⅥ層が確認されたが、堆積も薄く、若干の縄文時代の遺物を出土したのみで、遺構は検出されなかった。最終的には、7ライン以東の湧き水地区にも調査区をひろげたが、9ライン以東になるとⅣ層下の地山がかなり粘性を帯び沼地状の土質となり、調査は不可能であった。D－9、C－11グリッドⅣ層中よりは遺物の出土は認められず、遺構も検出されなかった。尚、製鉄遺構に伴う炭窯を検出する為に、谷の北側斜面に3本のトレンチ（E～G）、北側、西側斜面にボーリングによる調査を行ったが、遺構らしきものは検出されなかった。

〈第3地点〉4月29日～5月1日までの2日間調査を実施した。第2地点西側の丘陵上平坦部、約800㎡が調査対象で、C・Dのトレンチによる約40㎡の試掘調査を行った。その結果、両トレンチとも数cmの表土下が地山となり、地山上にほとんど堆積土がみられない状態で、遺物、遺構とも皆無であった。

以上、3地点の調査の結果、第1・第3地点では遺物、遺構は検出されなかった。第2地点では、平安時代の製鉄遺構が北側の谷際で検出された。また、遺物はⅣ層中より平安時代、Ⅵ層中よりは縄文時代（後・晩期）の土器を中心に平箱4箱程度出土した。

佐藤甲二

Ⅲ．基本層位（第２地点）（第２図）

現表土第Ⅰ層から地山第Ⅶ層までの大別７層から成り、これらはさらに９層に細分される。

第Ⅰ層　褐色（10YR4/4）シルト層。現表土層、木の根を多量に含む。厚さ30cm前後。

第Ⅱ層　暗褐色（10YR3/3）シルト層。地山ブロックを多量に含む場合がある。調査区全域に分布。厚さ20cm前後。

第Ⅲ層　黒褐色（10YR3/2）シルト層。地山ブロックを少量含む。Ｂ－５グリッド北側では焼土ブロックを含む。調査区全域に分布。厚さ20～30cm。

第Ⅳ層　３層に細分される。調査区全域に分布。各層とも平安時代の遺物を含むが、７ライン以東、２ライン以西ではほとんど含まなくなる。

Ⅳa層　黒褐色（10YR3/2）シルト層。焼土粒、炭化粒を少量、風化凝灰岩粒を含む。厚さ10～20cm。

Ⅳb層　黒色（10YR3/1）シルト層。焼土粒、炭化粒を多量、風化凝灰岩粒を含む。厚さ20cm前後。

Ⅳc層　黒褐色（10YR3/2）シルト層。風化凝灰岩粒を含む。焼土粒、炭化粒を多量に含み、Ａ・Ｂ－４・５グリッドでは下部に焼土ブロックを集中的に含む場合がある。厚さ10cm前後。

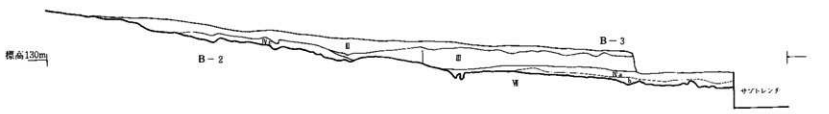
第Ⅴ層　黄褐色（10YR5/6）シルト粘土層。地山ブロック、黒褐色土ブロックを多量に含む。Ｃ－５グリッド付近では灰白色火山灰を上部に部分的に含む。谷際では断片的、９ライン以東では全く分布せず。Ｃ－５グリッド周辺では堆積が厚く約30cmの堆積をみる。

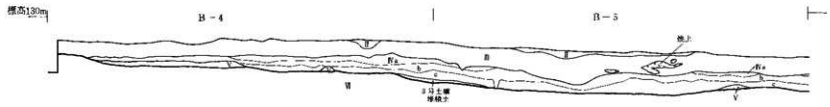
第Ⅵ層　黒褐色（10YR3/3）シルト質粘土層。地山ブロック、酸化鉄、マンガン粒を多量に含む水の影響を強く受けた層。Ｃ－５グリッドを中心とする谷部の中央部分にしか分布せず。厚さ20～30cm。縄文時代の遺物を含む。

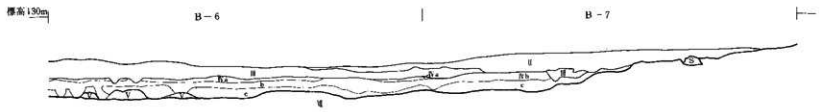
第Ⅶ層　黄褐色（10YR5/6）粘土層。地山。３ライン以西では５～10cmの凝灰岩が混じる。９ライン以東では強い粘性を帯び、沼地状の土質となる。

以上、Ⅰ層からⅥ層中には、かなりの地山ブロックが含まれる。これは谷を取り囲む丘陵面の地山崩壊土の混入と考えられる。特に第Ⅱ層、第Ⅴ層には混入が顕著で、一見、地山と見誤る部分もあるほどであった。第Ⅵ層は、水の影響を受けた層で、第Ⅵ層の時代（縄文時代？）に、この谷の中央部が湿地帯となっていた可能性も考えられる。　　佐　藤　甲　二

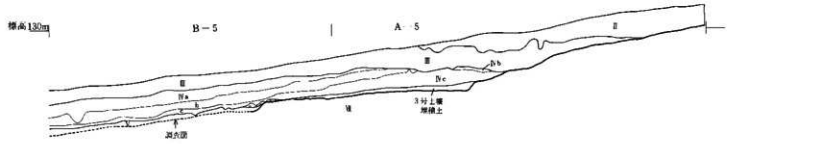
B－2～7グリッド北壁土層

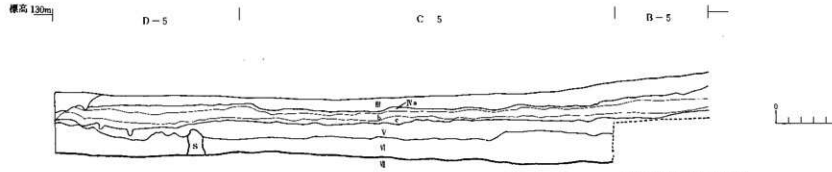






A～C－5グリッド西壁土層





※Ⅰ・Ⅱ層削平後の土層断面

第2図　基　本　層　位

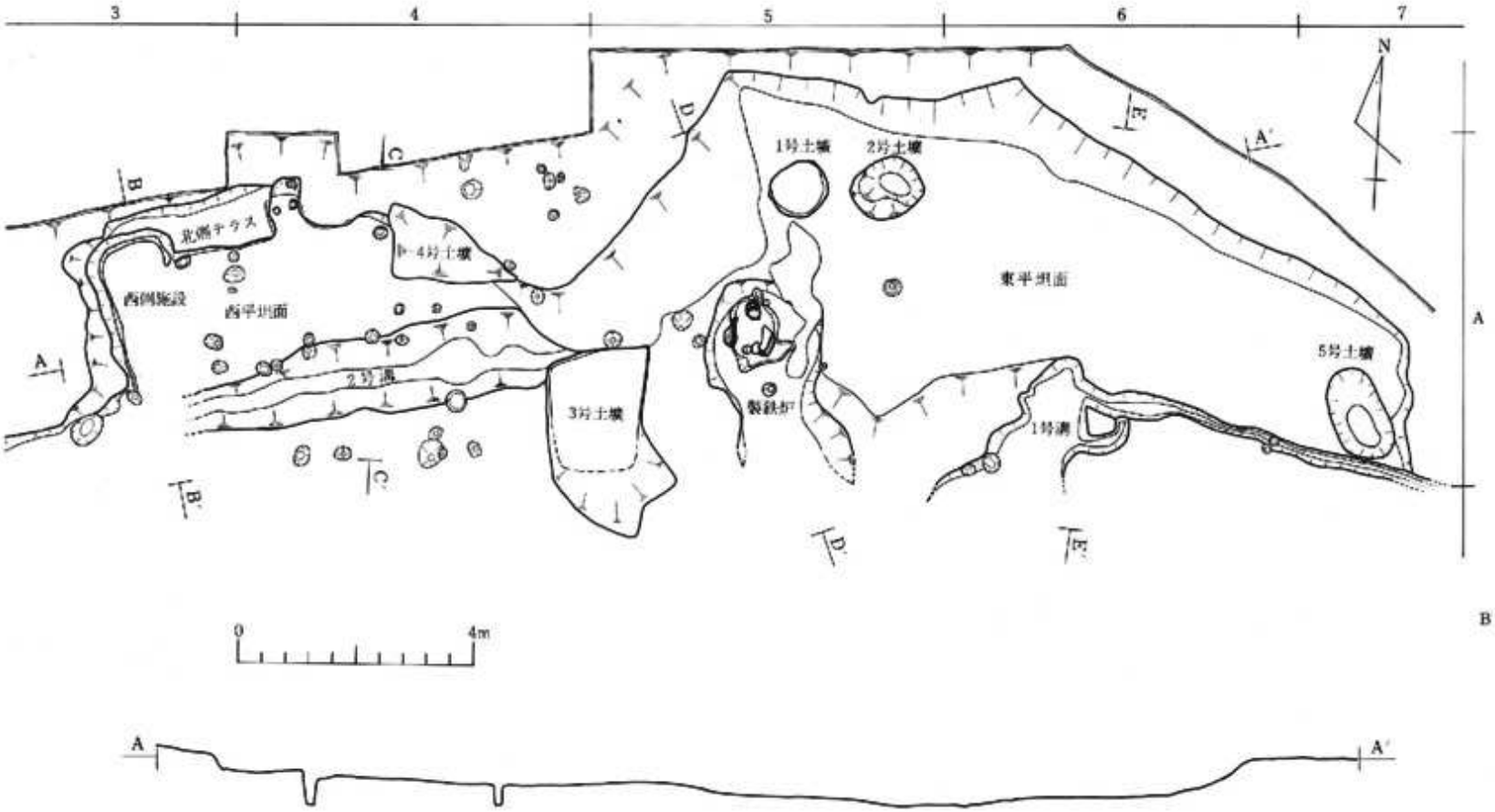
Ⅳ．遺構と遺構内出土遺物

製鉄遺構（第３～10図、写真４～10）

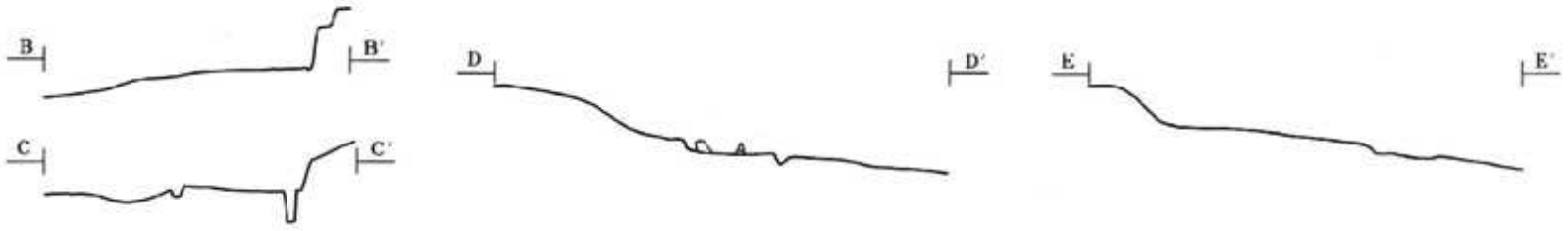
製鉄遺構は遺跡の北側ほぼ中央、A－３～７グリッドの谷際に位置する。丘陵南斜面が谷に移行する緩斜面に、東西に長い平場を作り出し、この内に各種の遺構を配している。平場の南端は谷面と接するため明確ではない。しかし、南端を画すると思われる溝により、平場の規模は、東西幅約20ｍ、南北最大幅約５ｍである。平場は斜面上方で地山層を約0.8～1m掘り下げ形成している。平場上にはⅣ層の堆積が認められた（第２図A・B－５グリッド西壁セクション）。平場中央にはゆるやかな傾斜を持たせた地山張り出し部があり、平場を東西に二分している。東側の平場には製鉄炉（製練炉）と東平坦面、西側の平場には西平坦面、地山張り出し部前方の平場には３号土壙が位置する。

〈製鉄炉〉（第４図、写真５～７）

製鉄炉（製練炉）は、製鉄遺構の中央で焼土のひろがりをもって検出された。南北に主軸を持ち、底辺の開いたカキ穴形を呈する、上端規模３×２ｍ、深さ約５cmの浅い掘り込み部を作り、その北側底面に炉体を構築している。炉体下の底面はほぼ水平であるが、炉体より南になるとやや下り傾斜の底面となり平場南端に至る。この付近では掘り込み部の上端と下端のラインは不明瞭となる。炉体は人為的な破壊、木の根による撹乱により原形は著しく損われており、わずかに炉壁下部の一部と炉底部を残存する状態であった。炉底部は炉体下に上端規模115×80cm、深さ約25cmのゆるやかな壁面をもつ楕円形の小掘り込み（南東壁の上部がやや崩れている。）を作り、下部約15cmの厚さに砂を敷きつめ、上部に粘土が張られている。砂は下層に細いもの、上層にやや粗いものが使われている。炉底上部もかなり破壊を受けていたが、上面に強い火を受け焼け固った平滑部が、径45～50cmの不整円形の範囲で認められた。この周縁部で断片的であるが炉壁が確認された。最大残存高13cm。内面は崩落していたが、厚さは最下部で38cm、上部で20cmを測る。炉底上部、炉壁ともスサ入り粘土が使用されている。南東側炉壁内には大型の角礫（40×18×30cm、Ｓ１）が入れられ、小掘り込み底面には礫の為の堀り方（60×20cmの楕円形、深さ20cm）が設けられていた。また、南側炉底上面より平らな円礫（20×15×５cm、Ｓ２）１個と、その西側より径約15cm、深さ約15cmの落ち込み状のピット（P_1）が検出された。このほかに同規模なピットが掘り込み部内底面で３個（P_2～P_4）みられた。炉体内堆積土最下層中には多量の焼土と小炉壁片が含まれていたが、鉄滓は検出されなかった。炉底上面、残存炉壁内面には出土炉壁面にみられた鉄滓・ガラス質成分の付着は全く認められなかった。炉床部が取り出された可能性もある。炉掘り込み部南側は底面が焼け、堆積土最下層中には多量の焼土と炭化物が含まれていた。排滓口の可能性もあるが、鉄滓の出土はない。遺物は土師器の


3
4
5
6
7
N
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
1号土壙
2号土壙
4号土壙
3号土壙
5号土壙
北側テラス
西側施設
西平坦面
東平坦面
2号溝
1号溝
製鉄炉
0
4m

第3図 製 鉄 遺 構



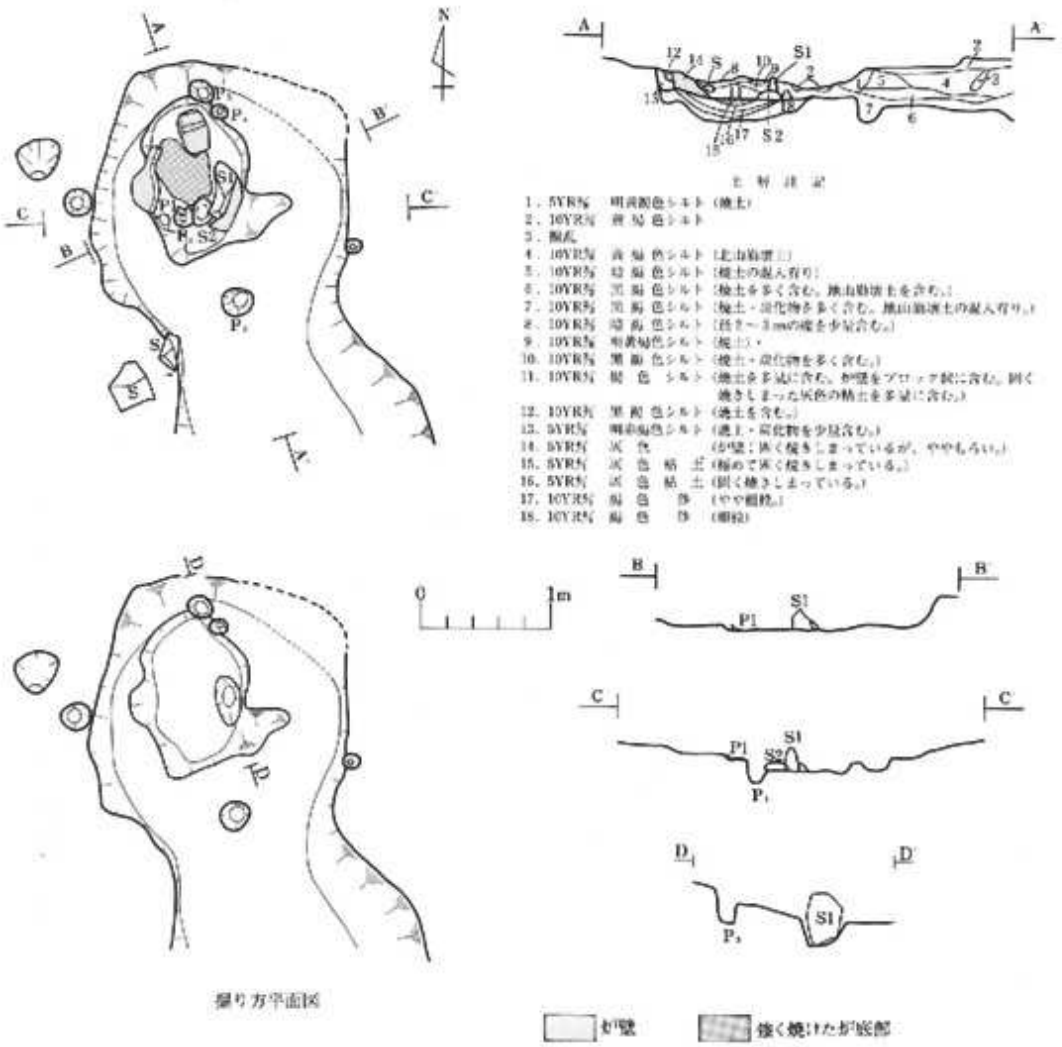
4．製鉄遺構全景（南より）

坏が1点（第4図P1．第9図3）炉底上面より出土した。

〈東平坦面〉（第3・5図、写真8・9）

製鉄炉の東側に接して位置する。底面は東西約10m、南北2～5mの不整方形で、やや南傾する。西側に1・2号土壙が並列して検出された。南端は東西に走る1号溝によって画されている。底面には焼土が数ヶ所広がっていたが、強い焼け面は確められなかった。底面上からは鉄滓・炉壁片・炭化材を含め出土遺物は皆無であった。

1号土壙：製鉄炉の北約1.5mに位置する。上端・下端とも円形。上端径約100cm、下端径約90cm、深さ約15cm、底面がほぼ平坦な浅い土壙である。堆積土は5層から成る。最下層は小炭化材から成る炭化物層で、その上層には焼土層が乗る。炭化物層周辺の底面・壁面には焼面が認められたが、炭化物層下の底面には明瞭な焼け面はみられない。須恵器片が1点3層より出土。



掘り方平面図

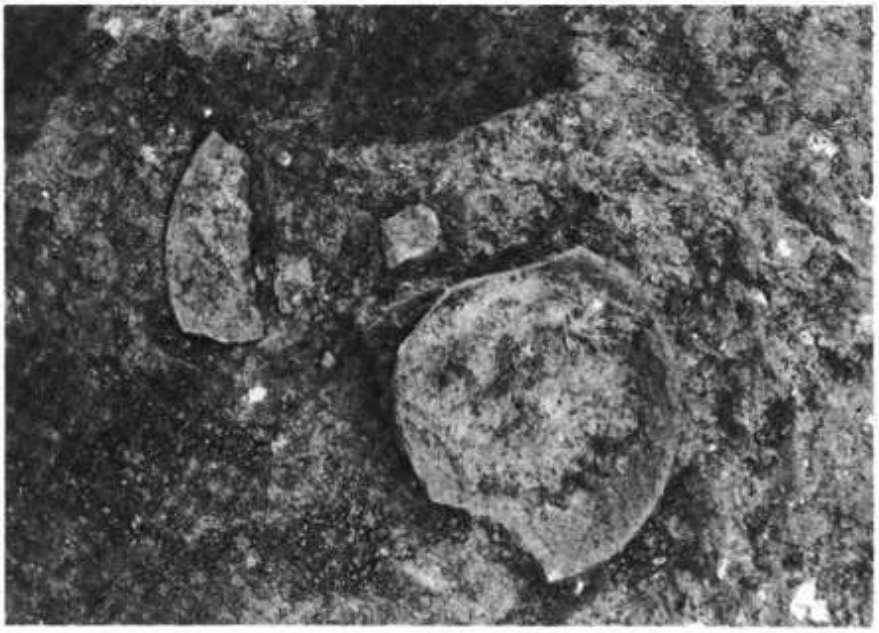
炉壁　強く焼けた炉底部

第4図　製　鉄　炉

5．製鉄炉
炉底検出状況

6．製鉄炉
炉底部セクション

7．製鉄炉内
土器出土状況



2号土壙：1号土壙東約50cmに並列し位置する。上端・下端とも楕円形。上端約115×100cm、下端約55×35cm、深さ約25cm。南西壁に弱い段を有するスリ鉢状の土壙である。堆積土は3層から成る。1号土壙のような焼土層、炭化物層、焼け面は認められなかった。出土遺物はない。

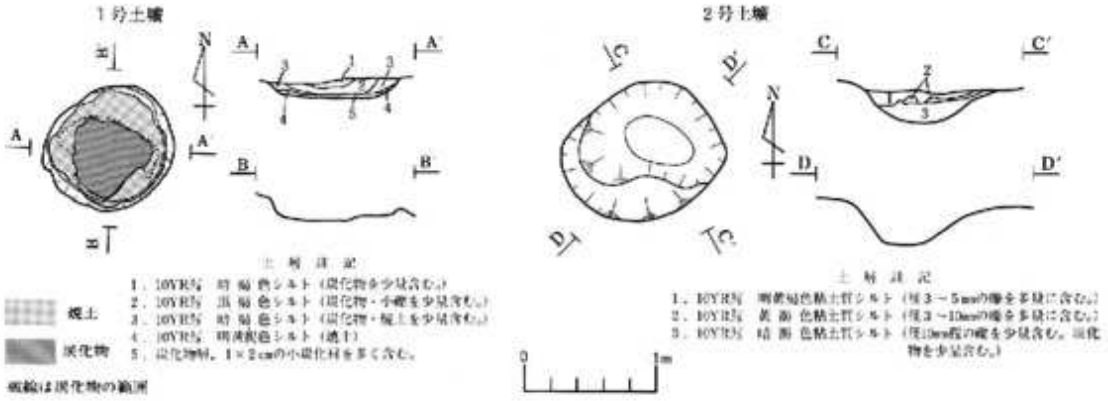
1号溝：平坦面南端に位置する。幅約25cm、深さ約10cm。断面ひらいた「U」字状を呈する小規模な溝である。南端部全域に走らず、ほぼ平坦面中央部で南方向に曲っている。この屈曲点より南方向にかけて溝は浅くなり、加えて幅も広く乱れた形となり、ついには上端・下端ラインも不明瞭となる。また、平坦面東端以東でも溝は不明瞭となる。堆積土は炭化物、焼土粒を含む単層より成る。出土遺物はない。

〈西平坦面〉（第6図、写真10）

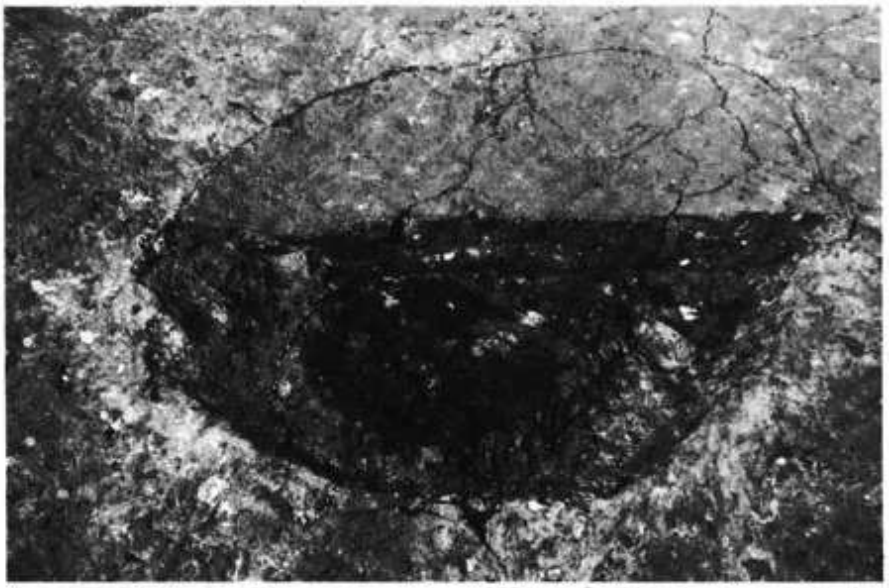
地山張り出し部の西側の平場に位置する。底面は東西約6m、南北約2mの東辺のくずれた方形を呈する。底面に4本の柱穴、北壁にカマドを持ち、西側には西側施設、北壁上段部には北側テラスがある。南端は西平坦面を画する2号溝が東西に走る。底面はほぼ平坦を呈する。底面、及び2号溝に接して14個の小ピットが検出された。しかしP_5～P_8の4ピットを除く他は10cm前後の浅い落ち込み状のものであった。P_5～P_8は上端規模が20～30cmと若干不整いはあるが、いずれも深かが40cmを越えるものである。配列も東西約3.2m、南北1.4mの長方形を呈しており、西平坦面に伴う柱穴と考える。尚、P_6の底面には粘土が敷かれていた。カマドは東西柱穴のほぼ中央線上北壁に位置する。北壁をくり抜いて構築されており、幅60cm、奥行70cmを測る。角礫の支脚が奥壁近く東壁よりに直立した状態で検出された。支脚より焚き口にかけての平坦な底面が燃焼部に当り、底面下約5cmまで強く焼けていた。袖は素掘りの両壁がその機能を果しており、両壁とも焼けている。奥壁はきつく立ち上がり、その上面に煙り出しが造られており、煙道は検出されなかった。遺物はカマドの焚き口及び燃焼部を中心とする底面より土師器、須恵器、赤焼土器、（第7・8図、第9図1・2、第10図1）が出土している。カマド右袖付近の床面には10cm大のやや扁平な円礫が破損した状態で、100点近くまとまって出土した。これらは全て焼けており、その内の幾つかは接合する。また、底面には多くの焼土が認められたが、カマド焚き口から2号溝にかけての底面上では著しく、その周辺より炭化材が出土している。

西側施設：西側には北壁が若干張り出した西側施設がある。底面約2.4×1.1mの南北に長い方形を呈する。北壁・西壁際の底面には、上端幅約10cm、深さ約5cm、断面「V」字状の周溝がめぐる。底面より東西方向に整然と並べられた状態で多くの炭化材が出土した。また、これに混って土師器の坏が1点（第10図2）出土している。

北側テラス：カマド西側から西側施設にかけての北壁上部に位置する。床面より約70cm高い。東西に細長い約2㎡足らずの平坦面である。底面より赤焼土器の坏が1点(第10図3)出土した。

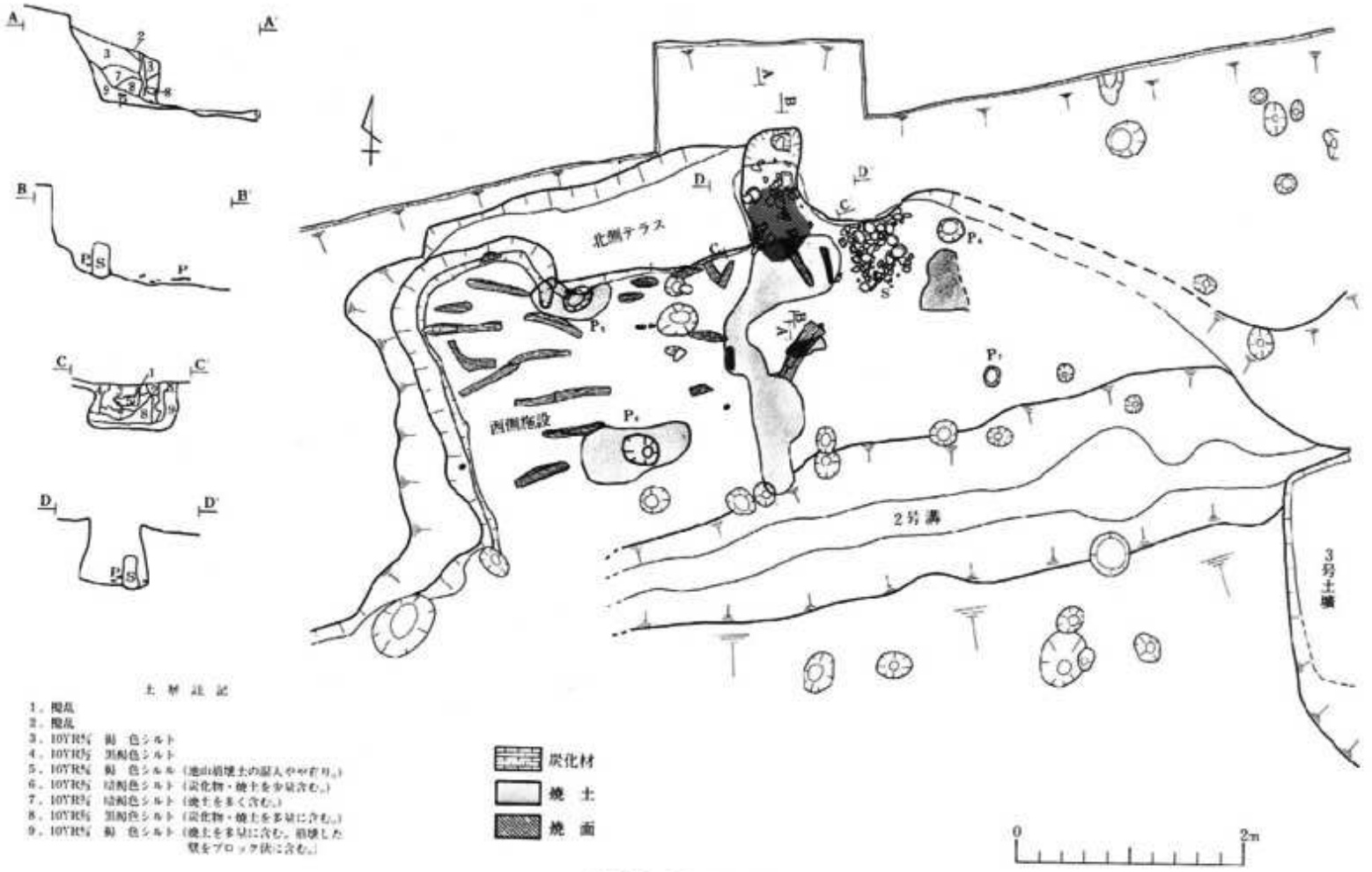


8．1号土壙
セクション
（南より）



9．2号土壙
セクション
（南より）

第5図　1・2号土壙



土層註記

1．攪乱
2．攪乱
3．10YR5/4　鈍　色シルト
4．10YR5/3　黒褐色シルト
5．10YR5/4　鈍　色シルト（地山崩壊土の混入やや多い。）
6．10YR5/3　暗褐色シルト（炭化物・焼土を少量含む。）
7．10YR5/4　暗褐色シルト（焼土を多く含む。）
8．10YR5/3　黒褐色シルト（炭化物・焼土を多量に含む。）
9．10YR5/4　鈍　色シルト（焼土を多量に含む。崩壊した壁をブロック状に含む。）

第6図　西平坦面

10. 西平坦面
カマド内遺物
出土状況
（南より）

2号溝：南端に位置する上端幅75~150cm、深さ約15cm、断面大きく開いた「U」字状を呈する浅い溝である。東側は3号土壙につながる。西側は上端幅が徐々に狭まり、西側施設前方では、上端、下端ラインは不明瞭となる。堆積土は単層から成り、焼土粒、炭化粒を多く含む。出土遺物は堆積土中より土師器片が少量出土したのみであった。

〈3号土壙〉（第2・3図）

地山張り出し部の前方の緩斜面上に位置する。底面を水平に作る為に、北側では約15cm、南側では若干の掘り下げを行っている。従って南半分の下端ラインは不明瞭となっている。上端3.2×2mの不整形であるが、下端は約1.7×2.1の方形になると想定される。堆積土は単層で若干の焼土粒、炭化粒を含む。出土遺物はない。

〈その他の遺構〉（第3図）

土壙：西平坦面東壁上に4号土壙、東平坦面東壁際に5号土壙を検出した。調査の段階及び略報で、撹乱として処理したものである。しかし、その後の土層断面の検討及び製鉄遺構との関連において、単なる撹乱として認定出来ない点もあり、本報告では一応、遺構として取り扱った。4号土壙は上端約2.5×1.5mの不整形、深さ約1m、断面スリ鉢状。堆積土は地山層と黒色土の混合層である。5号土壙は上端約1.6×1mの上端・下端とも楕円形、深さ約30cm、断面「U」字状。堆積土は最上部に約2cmの厚さの地山近似層があり、この下層は黒色土で占められる。両土壙中よりの出土遺物はない。また堆積土中に焼土・炭化物の混入はほとんど認められない。両土壙とも製鉄炉操業前、または操業中に人為的に埋め戻されている可能性もある。従って、調査の不備で4号土壙の方が西平坦面より新しいとしたが、その逆も十分成り立つ。

ピット：西平坦面周辺部を中心として大小のピットが検出されている。これらピットは西平坦面内で認められた深さ10cm前後の浅い落ち込み状のものと同様なもので、配列等に規則制は見出せない。全てが当遺構に伴うものかどうかは判然としない。

〈出土遺物〉（第７～10図）

土師器：製鉄炉・西平坦面底面より坏３点、甕６点が図化された。その他、破片資料としては、坏７点（口縁部２、体部３、底部２）、甕16点（口縁部１、体部14、底部１）がある。

坏はいずれも製作に際してロクロ使用のもので、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整のもの（第９図３、第10図２）で、他の1点は底部欠損のため不明である。内面のヘラミガキは、口縁部・体部が口縁の水平、底部が放射状である。第９図３は、口縁部付近に焼成後３個の小孔が穿けられている。

甕は、第７図１以外は全て破片で、全体の器形は不明である。いずれも製作に際してロクロ使用されている。第７図１は、器高が口径よりも大きく、最大径の位置は体部にある。調整は体部外面が縦・横位のヘラケズリ、内面がヘラナデされている。口縁部から体部のもの（第７図２、第９図１）、体部から底部のもの（第８図１・２）があり、調整は体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデされている。体部から底部のもの（第９図２）で、体部下端までロクロ調整され、底部の切り離し技法は回転糸切りされているものもある。

土師器は、製作に際してロクロ使用のものが製鉄炉、西平坦面底面・カマド・西側施設より出土していることから、氏家和典氏の土師器の編年によると表杉ノ入式（平安時代）に相当する。

赤焼土器：図化されたのは、西平坦面北側テラスより出土した坏１点（第10図３）だけである。その他、破片資料として、坏11点（口縁部２、体部９）が出土している。いずれも製作に際してロクロ使用されている。３は、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整である。

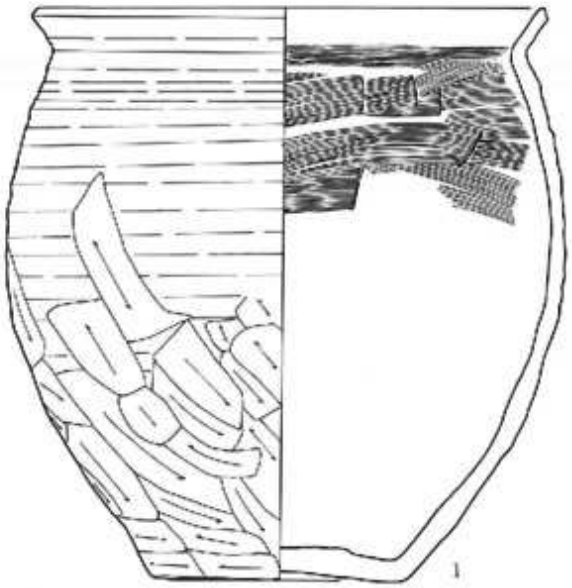
須恵器：１号土壙より坏口縁部片１点、西平坦面カマド底面より甕体部片１点が出土している。

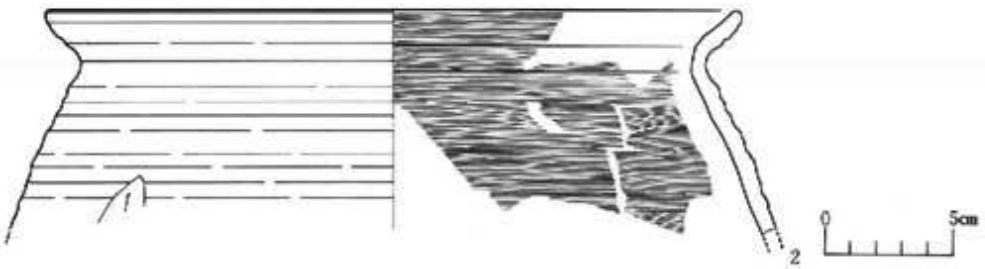
〈その他〉

西平坦面西側施設・カマド周辺底面より多量の炭化材が出土している。これらの内、西側施設出土中の３点は全て「クリ」という同定結果（478頁）が得られている。

佐藤甲二・篠原信彦・斎野裕彦

土　器





接合表

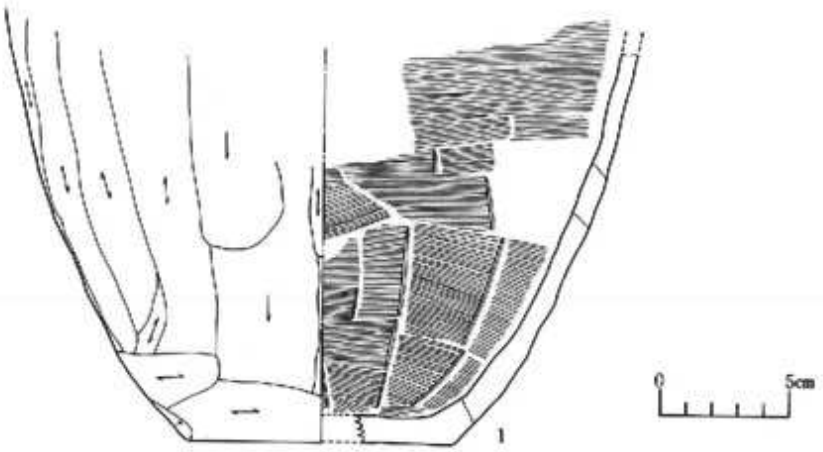
図	接合	地区名	遺構名	層位
2		A－4	西平出面	底面
	＋	B－5(a)		Pb

観察表

単位：cm

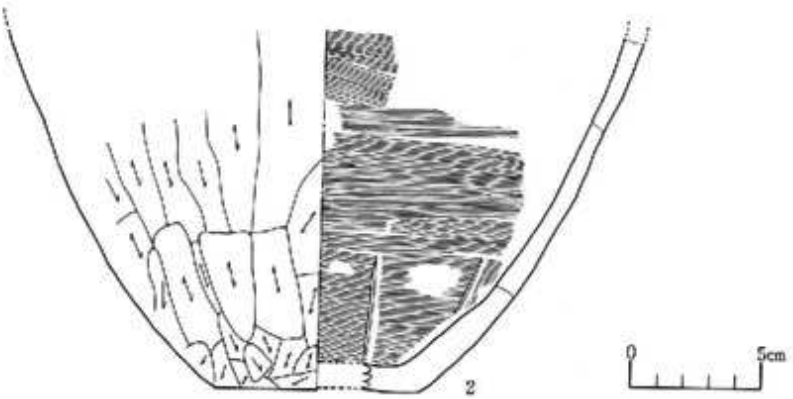
図	出土地点	種類	口径	底径	器高(残存高)	最大径	外面調整	内面調整
1	西平出面カマド底面	土師器	19.8	9.8	22.4	21.5	ロクロ、体部ヘラケズリ	ロクロ、ヘラナデ
2	西平出面カマド底面	土師器	(26.6)	——	(8.4)	——	ロクロ、体部ヘラケズリ	ヘラナデ

第7図　製鉄遺構出土土器（1）



接合表

図	接合	地区名	遺構名	層位
1		A－4	西平坦面	底面
	―	B－5(e)		Ⅳb

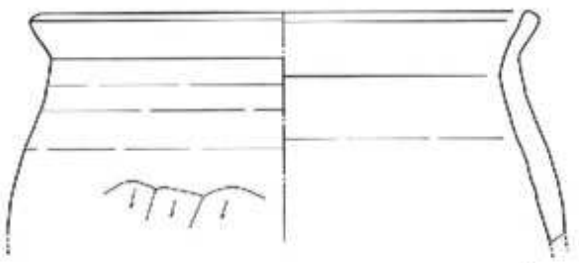


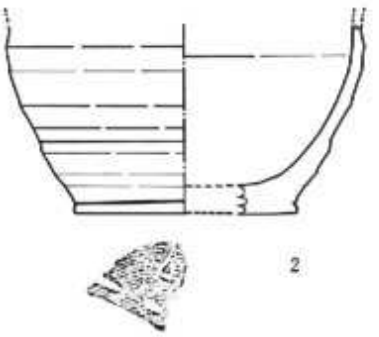
観察表

単位：cm

図	出土地点	種類	口径	底径	器高(残存高)	最大径	外面調整	内面調整
1	西平坦面カマド底面	土師器	―	10.2	(16.6)	―	ヘラケズリ	ヘラナデ
2	西平坦面カマド底面	土師器	―	(7.9)	(14.0)	―	ヘラケズリ	ヘラナデ

第8図　製鉄遺構出土土器（2）





接合表

図	接合	地区名	遺構名	層位
1		A－4	西平B面	底面
	＋	C－4(a)		Ⅳc
	＋	B－5(d)		Ⅴ
	＋	C－5(a)		Ⅳc
	－	C－5(b)		Ⅳc
	－	C－5(c)		Ⅳ

接合表

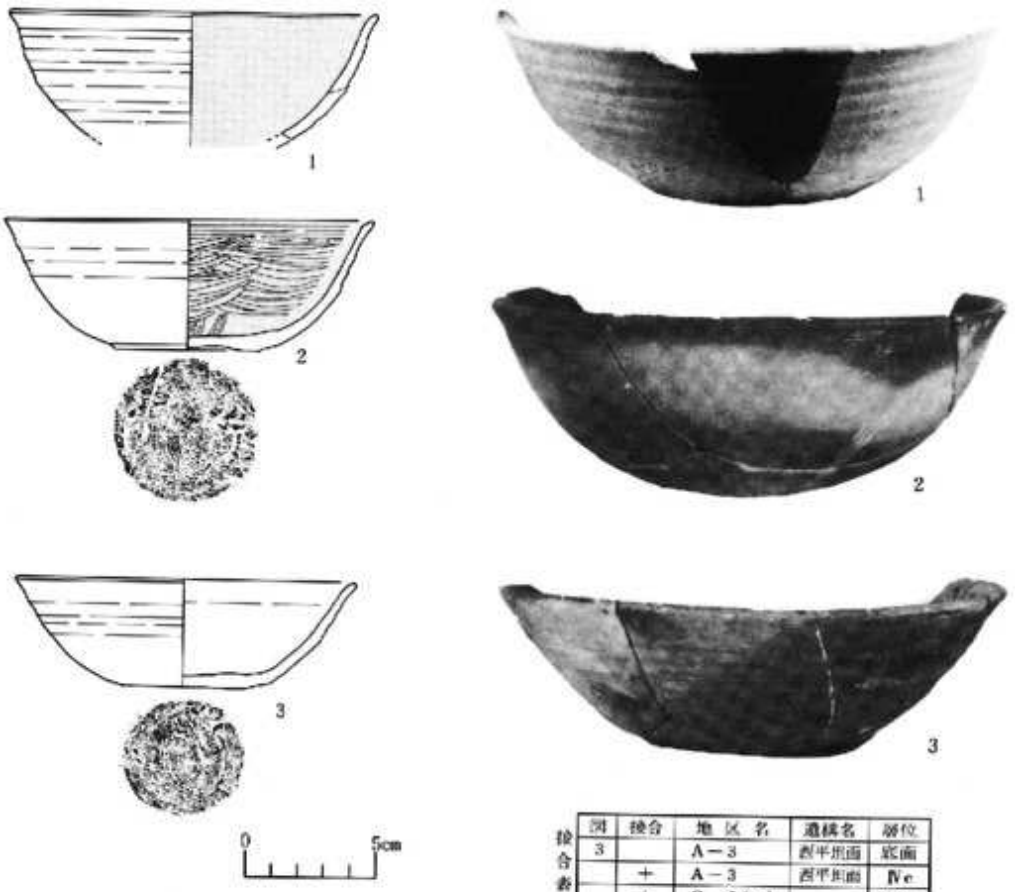
図	接合	地区名	遺構名	層位
2		A－4	西平B面	底面
	－	B－5(a)		Ⅳb

観察表

単位：cm

図	出土地点	種類	口径	底径	器高(残存高)	最大径	外面調整	内面調整
1	西平B面カマド底面	土師器	(19.6)	——	(8.9)	——	ロクロ、体部ヘラケズリ	ロクロ
2	西平B面カマド底面	土師器	——	(8.5)	(7.4)	——	ロクロ、底部回転糸切り	ロクロ
3	製鉄炉	土師器	14.0	6.0	4.0	——	ロクロ、底部回転糸切り、口縁部3箇の小孔	ヘラミガキ、黒色処理

第9図　製鉄遺構出土土器（3）



接合表

図	接合	地区名	遺構名	層位
3		A－3	西平坦面	底面
	＋	A－3	西平坦面	Ⅳc
	＋	C－6(a)		Ⅳb

観察表

単位：cm

図	出土地点	種類	口径	底径	器高(残存高)	最大径	外面調整	内面調整
1	西平坦面底面	土師器	14.2	——	(4.9)	——	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理
2	西平坦面西側縁辺部	土師器	14.2	5.6	5.1	——	ロクロ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理
3	西平坦面北側テラス底面	赤焼土器	13.2	4.7	4.2	——	ロクロ、底部回転糸切り	ロクロ

第10図　製鉄遺構出土土器（4）

V. 出 土 遺 物

1. 土　　器

縄文土器：基本層位(表採も含む)より復元土器資料1点、破片資料53点(口縁部15点、体部36点、底部2点)出土のほか、平安時代の遺構の堆積土中より破片資料2点（体部、底部各1点）が出土している。これら資料中、時期判別が可能なものは12点であった。後期初頭の1点を除けば他は全て晩期に属す(中葉2点含む)。層位別にはⅣ層中よりの出土量が多いが、平安期の攪乱により、下層より混入したものと考えられる。

土師器：基本層位(表採も含む)より坏3点、高台付坏1点、甕5点のほかに、破片資料として、坏85点(口縁部24、体部44、底部17)、甕190点(口縁部13、体部171、底部6)が出土している。層位的にはⅣ層を中心としている。

坏は、多く出土しているが図化されたのは3点だけである。いずれも製作に際してロクロ使用され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、口縁部・体部が口縁部と平行、底部が放射状である。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整のもの(第13図18・10)、図化されていないが、回転糸切りされ、体部下端に手持ちヘラケズリされるもの、切り離しは不明で、体部下端・底部に手持ちヘラケズリされるものがある。

高台付坏は第14図1だけである。製作に際してロクロ使用され、内面はヘラミガキされている。底部の切り離しは回転糸切りされている。高台は付高台で、短く下方に付けられ、断面三角形を呈している。

甕は5点あるが破片のため全体は不明である。製作に際してロクロ使用され、口径が15cm未満で小型のもの(第14図4・5、第15図1・2)がある。第13図7は底部片で、内面に横位の刷毛目調整がされている。

赤焼土器：基本層位(Ⅰ・Ⅳ層)より、皿1点(第14図3)、高台付坏1点(第14図2)があり、その他、破片資料として、坏24点(口縁部10、体部13、底部1)が出土している。いずれも製作に際してロクロ使用されている。2は底部の切り離し技法は回転糸切され、高台は付高台で、「八」の字状を呈している。3は底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。

須恵器：基本層位Ⅳ層より坏口縁部片4点、甕体部片3点、壺体部片1点が出土している。甕には、格子目ふうタタキ目文のもの(第15図3)がある。壺は長頸壺と考えられる体部片である。

篠原信彦・佐藤甲二

2. 土 製 品

羽口：B－6グリッドVb～c層中より5点出土している。全て破片資料で外径、孔径の計測可能なもの3例で、外径4.4～7.4cm、孔径約2.5cmを測り、比較的小型の羽口である。孔径面には

斜位の擦痕が認められるものが3例あり、棒状のものに粘土を巻き付けて製作したものと考えられる。形態的には小破片・部分的資料の為、言及出来ないが、ラッパ状のものは検出されていない。尚、第15図4は端部に鉄滓の付着が著しく、炉内挿入部側のものと考えられる。

3．石器・石製品

佐藤甲二

石器：基本層位(表採を含む)、遺構内より27点出土した。内訳は打製石器23点、礫石器4点である。打製石器中剝片は3点を占めるに過ぎない。

石製品：Nb層中より円盤状石製品が1点出土している。径約5cm、厚さ1.3cmのもので全面に磨痕が認められる。

柳沢みどり

4．鉄製品

鉄滓：320点出土した。表採資料1点を除き他は全てN層中より出土している。地区別では東側平場南側B－6グリッドより多量の出土が認められた。これら鉄滓中5点の分析結果(479頁参照)では、炉壁の可能性のある1点を除き他は全て製練滓という結果が得られており、他の資料も同様のものと考えられる。

佐藤甲二

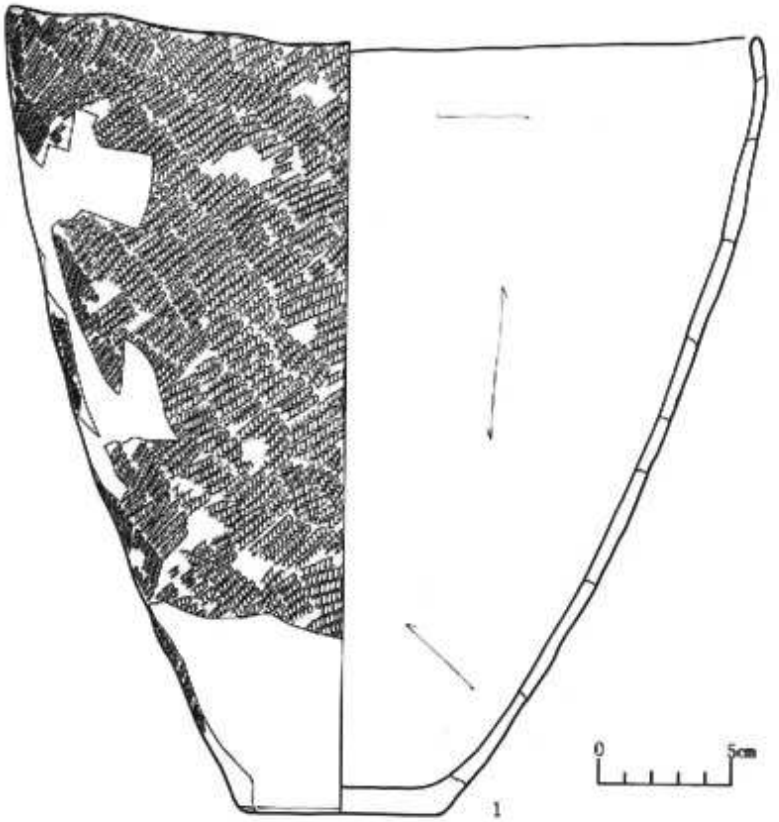
第1表　縄文時代土器・石器・石製品出土数量表

出土地点		縄文土器									石鏃	石匙	ポイント	箆状石器	スクレイパー	S・F	M・ド	剝片	石核	礫石器		石製品
		実測土器	破片				後期	晩期														
			総数	口縁部	体部	底部	破片	復元	破片											Ⅲ	Ⅵ－2	
基本層位	Ⅰ	－	－	－	－	－	－	－	－		1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
	Ⅳ	－	33	9	22	2	1	－	6		1	1	－	1	1	2	－	1	1	3	1	1
	(a)	－	(1)	(1)	－	－	－	－	(1)		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	(b)	－	(11)	(2)	(8)	(1)	(1)	－	(2)		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(1)
	(c)	－	(17)	(6)	(10)	(1)	－	－	(3)		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	Ⅴ	－	9	6	3	－	－	－	3		1	－	－	－	－	2	－	1	－	－	－	－
	Ⅵ	1	8	－	8	－	－	1	－		1	－	－	－	1	－	1	1	－	－	－	－
表採		－	3	－	3	－	－	－	1		－	－	1	1	1	1	－	－	－	－	－	－
小計		1	53	15	36	2	1	1	10		4	1	1	2	3	6	1	3	1	3	1	1
遺構内		－	2	－	1	1	－	－	－		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
合計		1	55	15	37	3	1	1	10		4	1	1	2	3	7	1	3	1	3	1	1

第2表　平安時代土器出土数量表

出土地点		土師器					赤焼土器					須恵器			
		実測土器	破片				実測土器	破片				破片			
			総数	口縁部	体部	底部		総数	口縁部	体部	底部	総数	口縁部	体部	底部
基本層位	Ⅰ	－	21	3	17	1	1	1	－	1		－	－	－	－
	Ⅳ	9	233	31	180	22	1	23	10	12	1	8	4	4	－
	(a)	－	(13)	－	(12)	(1)	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	(b)	(1)	(57)	(2)	(50)	(5)	－	(8)	(3)	(5)	－	(4)	(2)	(2)	
	(c)	(7)	(101)	(19)	(67)	(15)	(1)	(14)	(6)	(7)	(1)	(2)	(2)		－
	Ⅴ	－	12	3	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
表採		－	9	－	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
小計		9	275	37	215	23	2	24	10	13	1	8	4	4	－
遺構内		9	23	3	17	3	1	11	2	9	－	2	1	1	－
合計		18	298	40	232	26	3	35	12	22	1	10	5	5	－

土　器



1

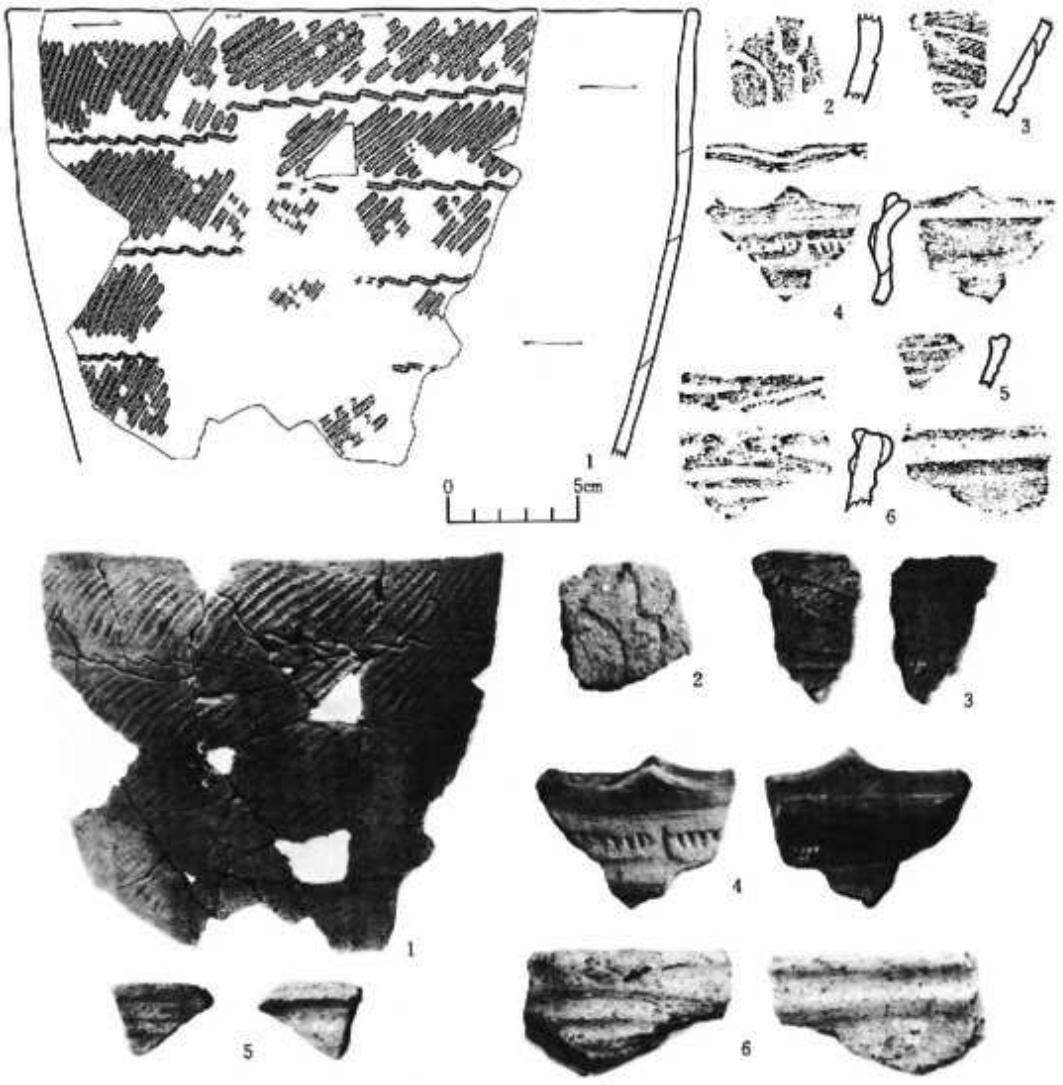
1

接合	図	接合	地区名	層位
接合	1		C－5(a)	Ⅵd
去		＋	C－5(a)	Ⅴ

観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
1	C－5(a)	Ⅵ	深鉢	口縁部～底部	平縁	磨き	縄文晩期	体部外面黒斑あり
法量 (cm)		口径(最大径)28.8　底径 8.0　器高 30.0						
外面施文・調整		口縁部～体部：横位ＬＲ縄文　体部下端：磨き　底部：磨き						
器形		口縁部やや内弯、体部は底部へむかってすぼむ						

第11図　出　土　土　器(1)

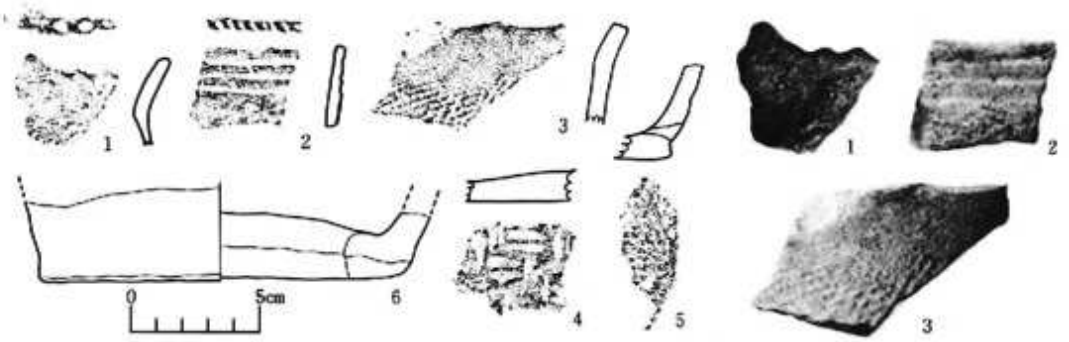


観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	内面施文・調整	時代	備考
1	B－8	Ⅳc	深鉢	口縁部～体部	平縁	磨き	縄文晩期	体部外面黒斑あり
外面施文・調整		横位ＬＲ多条縄文＋綾絡文→磨き（口縁部上端）						
法量（cm）・器形		口径（最大径）（26.5） 口縁部やや外傾						

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
2	C－4（a）	Ⅳb	深鉢	体部	――	縄文→沈線文→磨き	磨き	縄文後期初頭	――
3	C－3（a）	Ⅵb	鉢	体部	――	ＬＲ縄文→沈線文→磨き	磨き	縄文晩期中葉	――
4	A－5	Ⅳc	浅鉢	口縁部	突起	口唇部：沈線 口縁部：沈線文＋彫去、刻み→磨き	沈線＋彫去 磨き	縄文晩期中葉	――
5	表採	――	鉢	口縁部～体部上半	平縁	沈線文	口唇部：沈線 磨き	縄文晩期	外面磨滅
6	B－3（d）	Ⅳc	――	口縁部	平縁	口唇部：沈線 口縁部：沈線文→磨き	沈線 磨き	縄文晩期	――

第12図 出土土器(2)



観察表

図	地区名	層位	器種	部位	口縁形態	施文・調整 外面	施文・調整 内面	時代	備考
1	B－6(c)	V	鉢	口縁部～体部上半	突起 刻み目	体部：縄文	――	縄文晩期	内外面磨滅
2	B－5(c)	VI	深鉢	口縁部～体部上半	平縁 刻み目	口縁部：沈線文 体部：縄文	沈線磨き	縄文晩期	――
3	B－6(a)	Nb	深鉢	口縁部～体部上半	小波状	口縁部：磨き 体部：横位LR縄文	磨き	縄文晩期	――
4	A－4（2号溝）	堆積土	――	底部	――	網代	――	縄文	内外面磨滅
5	B－3(a)	Nb	――	体部下半～底部	――	体部下半：ナデ 底部：網代	磨き	縄文	――
6	C－9(a)	Nc	――	体部下半～底部	――	体部下半：ナデ 底部：磨き	――	縄文	内面磨滅 底径14cm

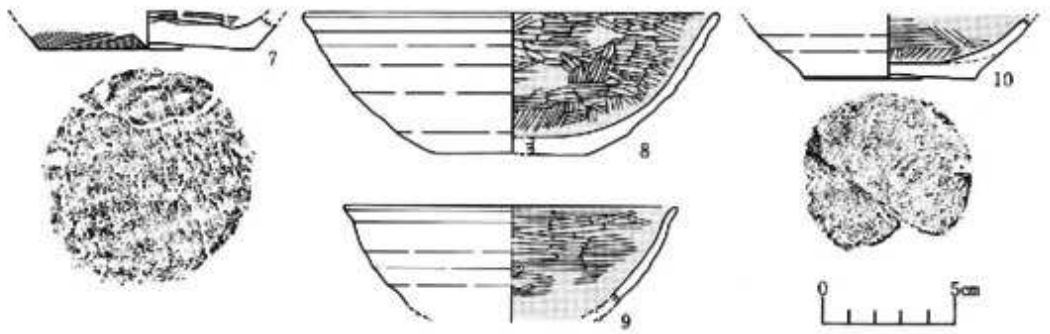


図	接合	地区名	層位
7		A－5	Nc
	＋	D－5(a)	N
8		B－6(d)	Nc
	＋	C－5(a)	Nc
	＋	C－5(b)	Nb

図	接合	地区名	層位
9		B－5(d)	N
	＋	C－5(a)	I
	＋	C－5(a)	N
	＋	C－6(a)	Na
10		B－5(d)	Nc
	＋	B－5(d)	N

観察表

図	地区名	層位	種類	口径	底径	器高（残存高）	最大径	外面調整	内面調整
7	A－5(c)	Nc	土師器	―	8.4	(1.3)	――	ナデ	ハケメ
8	B－6(d)	Nc	土師器	16.0	5.7	5.5	――	ロクロ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理
9	B－5(d)	N	土師器	12.9	―	(3.9)	――	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理
10	B－5(d)	Nc	土師器	――	6.6	(2.4)	――	ロクロ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理

第13図　出土土器(3)

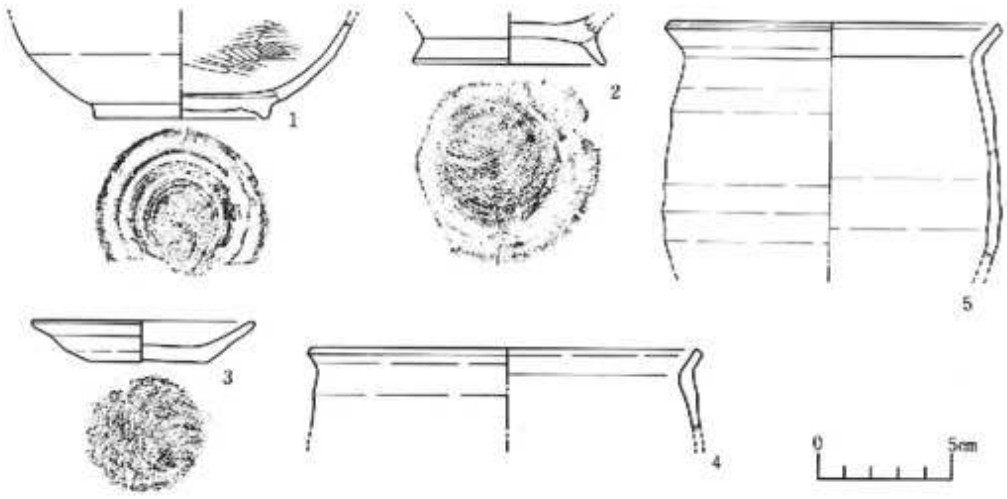


	図	接合	地区名	層位
接合表	1		A−4(c)	Ⅳc
		−	C−6(a)	Ⅳc
	2		A−4(c)	Ⅳc
		+	A−4(a)	Ⅳc

	図	接合	地区名	遺構名	層位
接合表	5		B−5(c)		Ⅳb
		−	C−5(a)		Ⅳb
		−	A−4	西平遺跡	表面

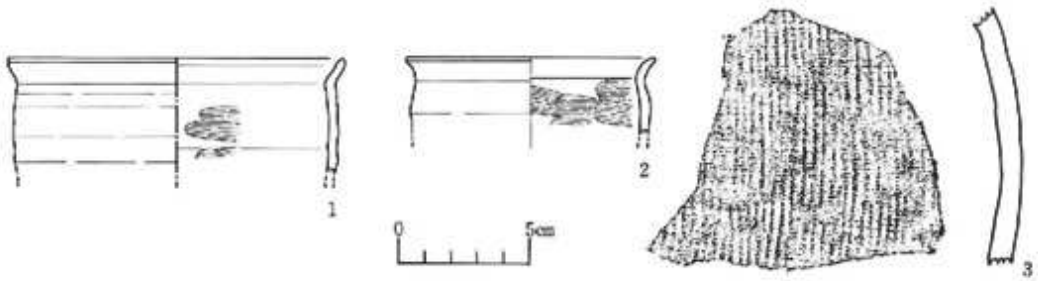
	図	接合	地区名	遺構名	層位
接合表	4		B−6(Ⅳc)		Ⅳc
		+	C−5(d)		Ⅳa
		−	C−5(b)		Ⅳc
		−	A−4(a)	西平遺跡	表面
		−	C−5(c)		Ⅳc
		−	C−6(a)		Ⅳb
		−	C−6(d)		Ⅳc
		−	C−5(a)		Ⅳb

観察表

単位：cm

図	地区名	層位	種類	口径	底径	器高(残存高)	最大径	外面調整	内面調整
1	A−4(c)	Ⅳc	土師器	—	高台径 6.6	(3.9)	—	ロクロ、底部回転糸切り、付高台	ヘラミガキ
2	A−4(c)	Ⅳc	赤焼土器	—	高台径 7.4	(1.9)	—	ロクロ、底部回転糸切り、付高台	ロクロ
3	D−5(a)	Ⅰ	赤焼土器	(8.6)	4.5	1.6	—	ロクロ、底部回転糸切り、付高台	ロクロ
4	B−6(c)	Ⅳc	土師器	(14.9)	—	(3.2)	—	ロクロ	ロクロ
5	B−5(c)	Ⅳb	土師器	(12.6)	—	(9.3)	12.9	ロクロ	ロクロ

第14図　出土土器(4)

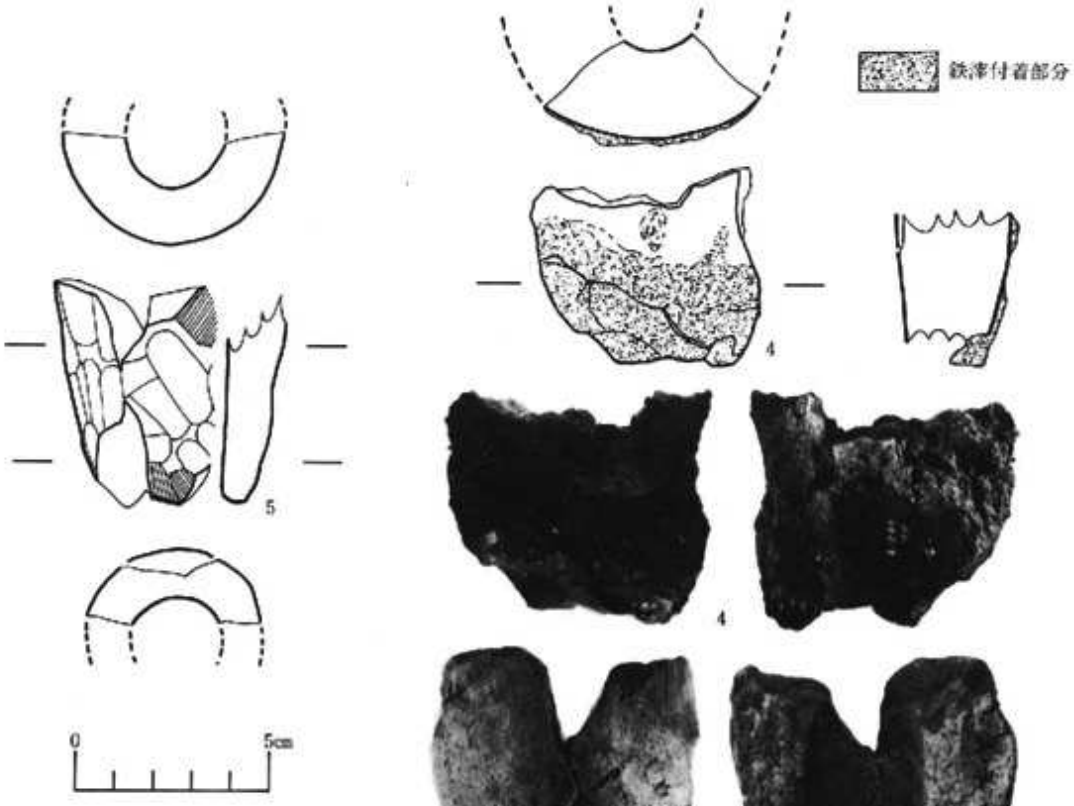


観 察 表

単位：cm

図	地区名	層位	種別	口径	底径	器高(残存高)	最大径	外面調整	内面調整
1	B－6(d)	Ⅳc	土師器	(13.0)	—	(4.5)	—	ロクロ	ロクロ、ナデ
2	C－5(a)	Ⅳc	土師器	(9.5)	—	(3.0)	—	ロクロ	ロクロ、ナデ
3	B－5	Ⅳ	須恵器	—	—	—	—	格子目ふうタタキ目文	スリケシ

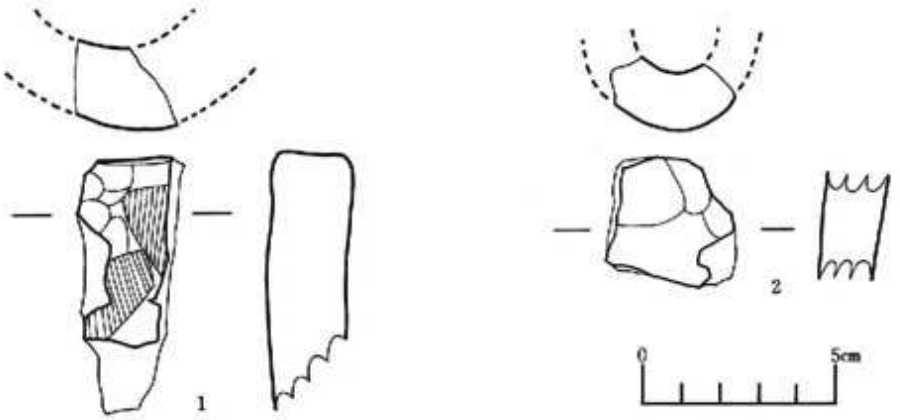
羽 口



観 察 表

図	地区名	層位	外径(cm)	孔径(cm)	特徴 外面	特徴 内面	備考	登録番号
4	B－5	Ⅳb	7.4	2.3	鉄滓付着	斜位の擦痕	破片（炉壁側）	Ⅱ97Col
5	B－6(b)	Ⅳc	最大 6.0 最小 4.0	2.6	ナデ・ヘラナデ	斜位の擦痕	破片（炉壁側？）	Ⅱ81Col

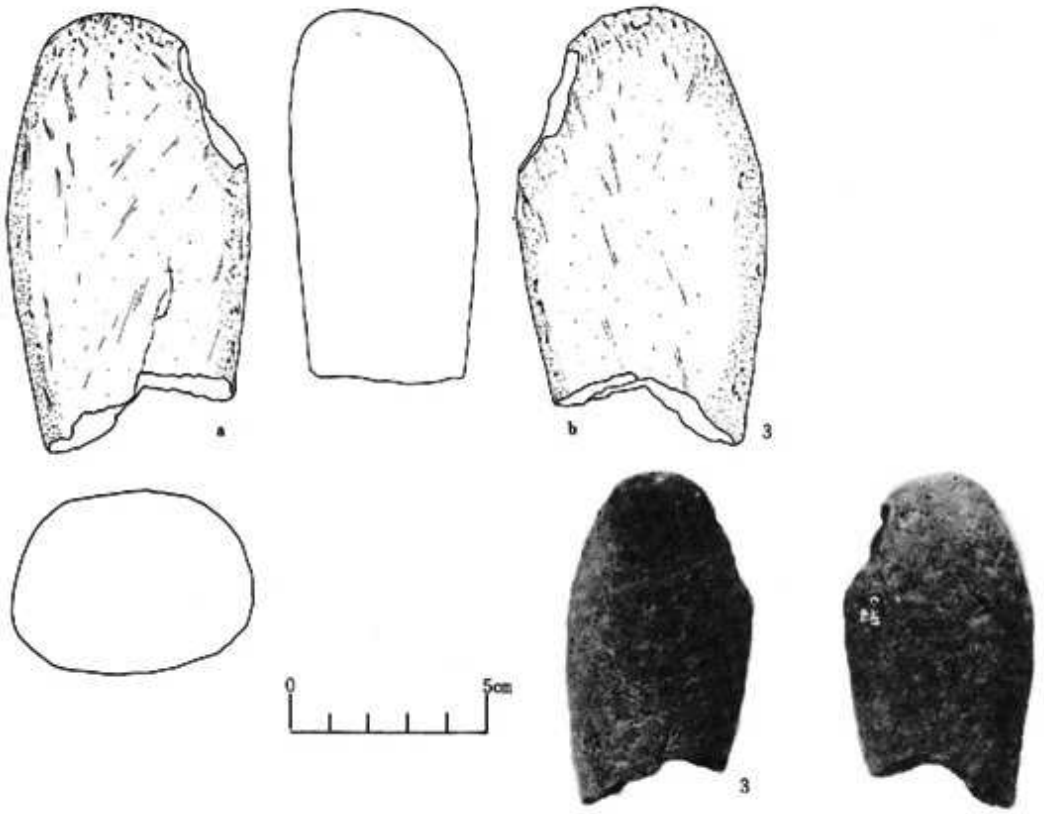
第15図　出土土器(5)・羽口(1)



観 察 表

図	地区名	層位	外径(cm)	孔径(cm)	特徴 外面	特徴 内面	備考	登録番号
1	B－6	Ⅳb	——	——	ナデ・ヘラナデ	斜位の擦痕	破片（送風管）	Ⅱ85Co2
2	B－6(d)	Ⅳc	4.4?	2.6?	ナデ	——	破片	Ⅱ85Co1

石 器

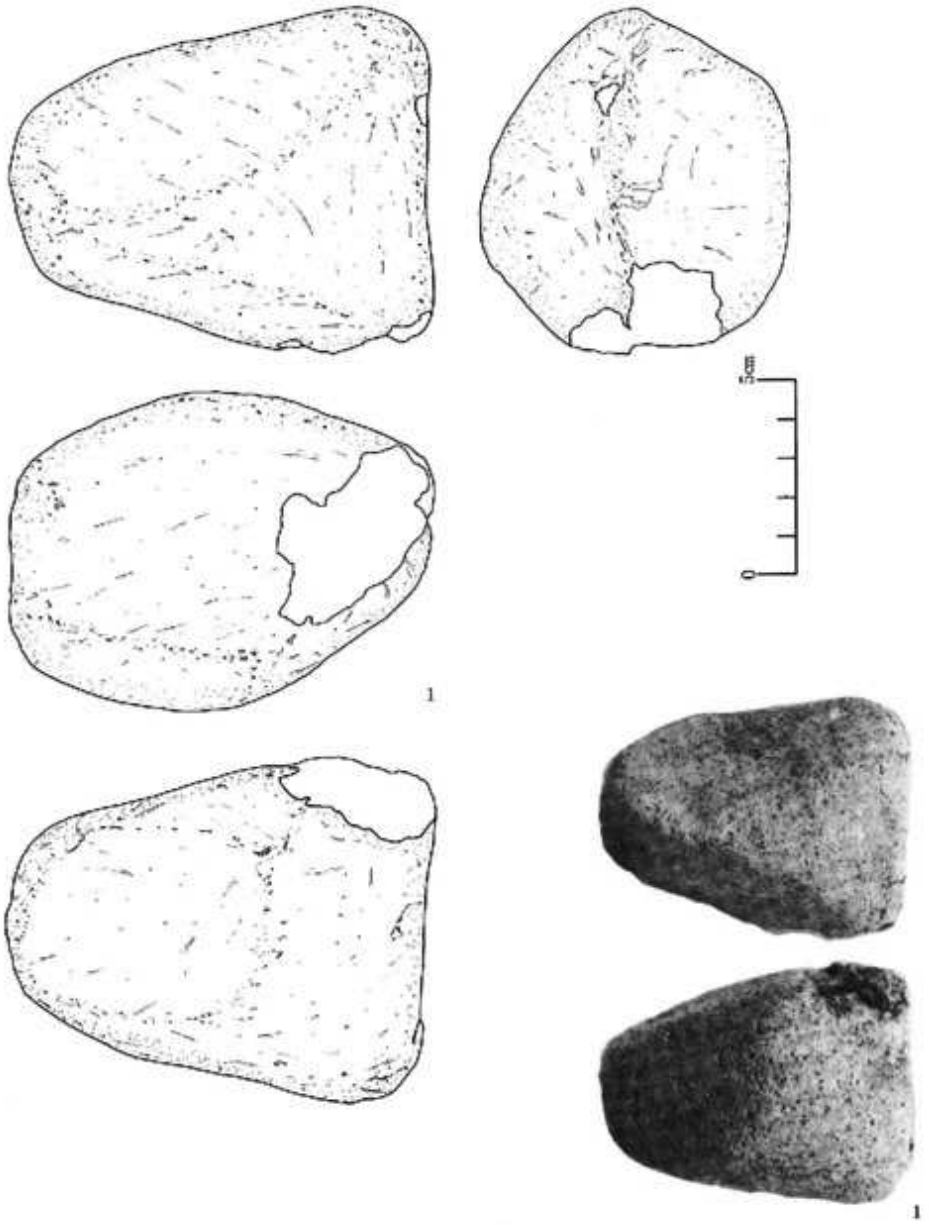


観 察 表

単位：mm.g

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	縦の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
3	A－5(d)	Ⅳa	(113.2)	(62.0)	(47.0)	510	F	先端部が焼けて黒変 a-b 両面に階段(a) 短軸方向の側面に弱い敲打痕(b－1)	Ⅲ	安山岩	46

第16図　出土羽口(2)・石器(1)

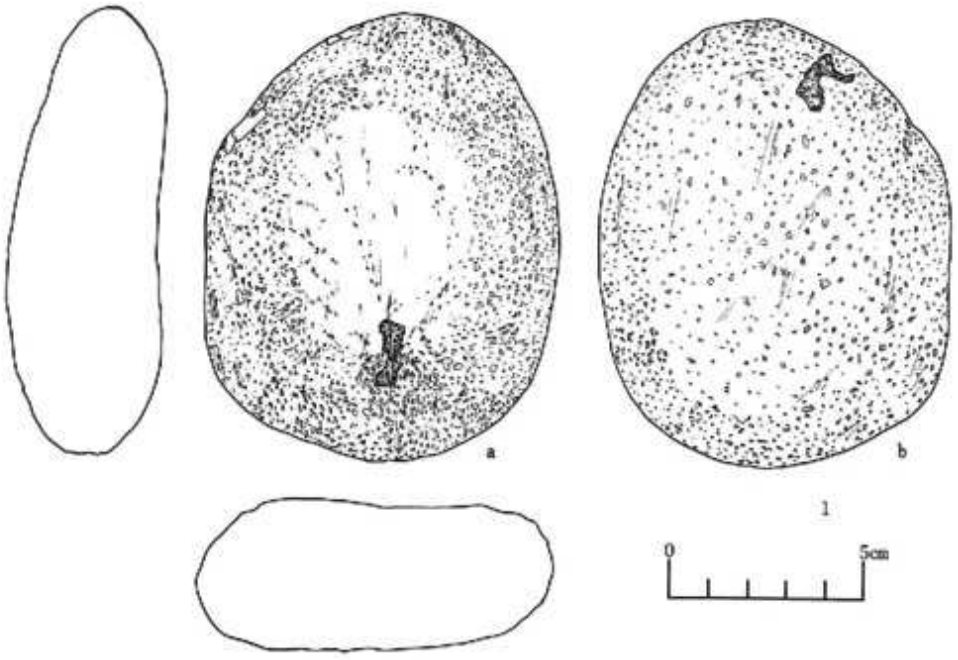


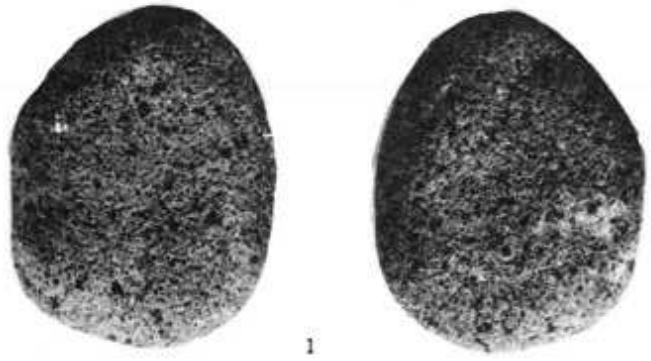
観　察　表

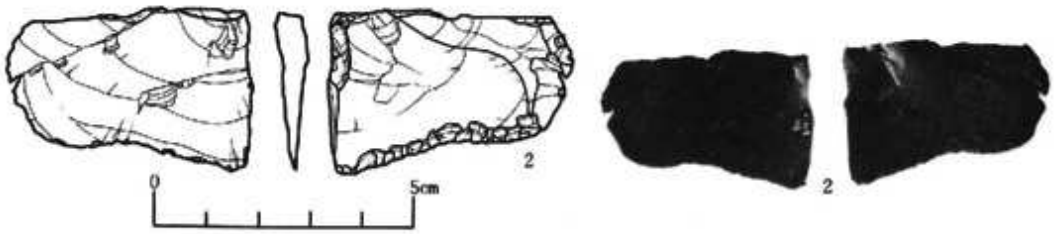
単位：mm, g

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
1	C－5(a)	Nd	112.0	86.0	79.0	910	F	全面に磨痕(a)	Ⅲ	安山岩	59

第17図　出土石器（2）







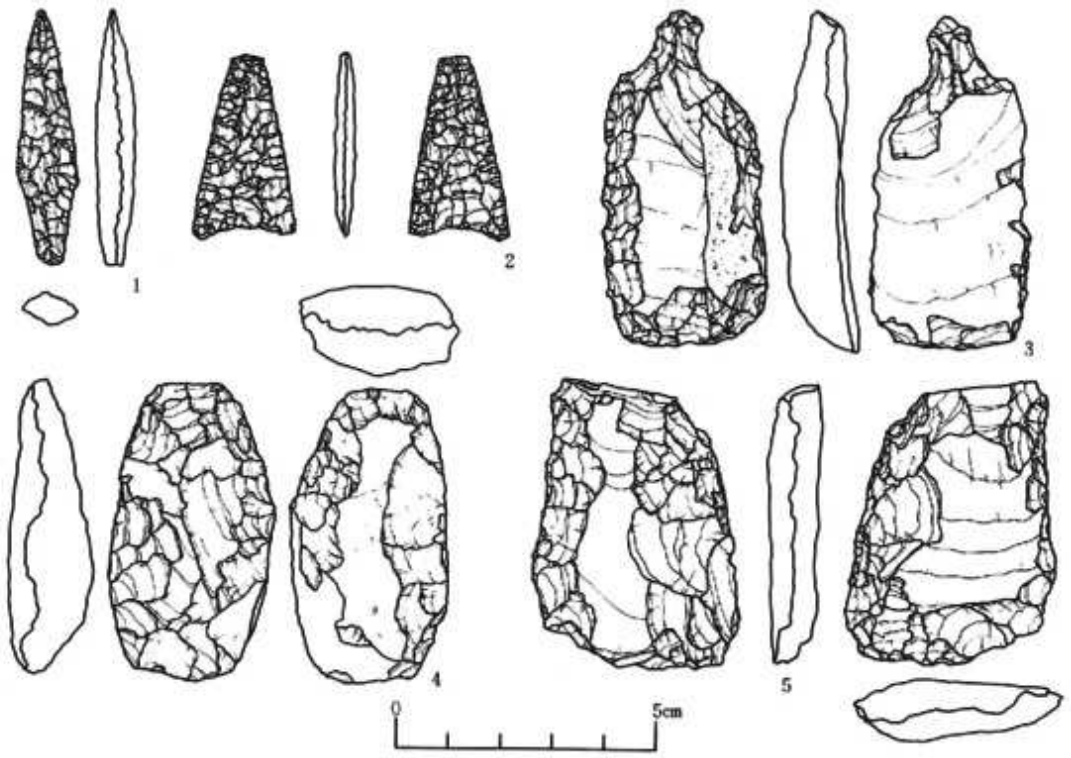
観　察　表

単位：cm.g

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
1	B－6(d)	Ⅳc	111.5	89.0	41.5	680	E	a・b両面に磨痕(a)	Ⅲ	安山岩	111

図	地区	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	石材	登録番号
2	B－3(a)	Ⅳb	「スクレイパー」	31.0	46.6	5.0	———	珪質頁岩	115

第18図　出　土　石　器（3）



観察表

単位：mm

図	地区名	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	表採	—	ポイント	(49.4)	11.3	7.3	基部破損	Ⅱd③	珪質頁岩	164
2	C－6	Ⅴa	石鏃	(35.0)	17.5	3.8	先端部破損	Ⅶtc⑳	珪質頁岩	42
3	C－6(a)	Ⅳ	石匙	65.4	31.3	10.5	二重パティナ	Ⅱ	珪質頁岩	119
4	D－3(b)	Ⅵa	篦状石器	(57.6)	(30.9)	16.6	刃部～側縁部にかけ不規則に破損	Ⅲ	珪質頁岩	62
5	表採	—	篦状石器	54.8	40.5	9.3	——	Ⅰ	珪質頁岩	——

第19図 出土石器（4）

石製品

観察表

単位：mm.g

図	地区名	層位	長さ	幅	厚さ	重量	使用痕・他	石材	登録番号
1	D－3(a)	Ⅶb	53.0	54.5	13.2	40	全面に磨痕(a)がある。	浮石質砂岩	57

鉄滓

第20図　出土石製品・鉄滓

Ⅵ．ま　と　め

1．遺構配置

製鉄遺構は西平坦面、製鉄炉、東平坦面等から成る。これらは丘陵南斜面谷際に造り出された、東西に長い平場内に配されている。平場は中央地山張り出し部により東西に二分され、東側の平場に製鉄炉・東平坦面、西側の平場に西平坦面が整然と配列されている。このような平場の二分、それに伴う遺構の配置は、東西に分けられた平場の機能上の差異を反映しているものと考える。

東側の平場には製鉄の中心となる製鉄炉が築かれている。その東には隣接した東平坦面がある。この平坦面は製鉄に関わる大部分の作業、中でも炉操業中・操業後を中心とする作業を行なっていた作業場的な公算が高い。平坦面西奥に同規模な土壙が2基並列し検出されたが、片方は明らかな燃焼施設で、この場における作業工程の内で、火の使用を伴ったことを物語る。従って、東側の平場は実際に鉄を作る場、その後の鉄の処理を行う場としての機能を有していたと考える。西側の平場の西平坦面は、方形に並ぶ4本の柱穴の存在より上屋を伴っている。西側施設底面には炭化材が整然と出土し、外周に排水用と思われる周溝が巡ることより、ここが製鉄用燃料材置場となっていたと考える。上屋は燃料を雨露より防ぐために必要であったに違いない。おそらくは、原鉱も同様にこの平坦面内に置かれたものと察する。北壁に検出されたカマド付近からは多量の規格性を持つ焼け石が出土しており、このカマドが単なる蒸焚用のためのものではなく何らかの製鉄に関わる機能を有していたとも受けとれる。西平坦面は、作業員の休息の場でもあったろうが、それ以上に、資材置場兼準備作業場的な機能に重点が置かれていたと考える。

2．製鉄炉

炉の構造　上部は破壊を受けて、出土炉壁片からもこれを復元出来るような資料は得られなかった。下部構造のみが調査で得られた唯一の資料である。

〈炉体構築順序〉谷側に開く浅い掘り込み部を作る。その中央北寄りに炉底用のさらに深い小掘り込みを入れる。小掘り込み底面南東隅に大型角礫用の掘り方が設けられる。角礫が据えられると、小掘り込み内に防湿用の2種類の砂が順に入れられ、最後に粘土（スサ入り）が張られ炉底が作られる。炉底粘土縁辺部に炉壁用粘土（スサ入り）がめぐらされる。

〈炉壁下部〉南東壁内には炉底下に掘り方を持つ大型角礫が埋め込まれている。また、南西側炉底上面よりピットと円礫が検出されており、南西壁も南東壁と同様な構造であったと考える。この南側炉壁下部に、20cm弱の間隔を置いた礫の使用は、単なる炉壁の強化というよりも、この部位に何らかの用途を持たせていたという方がより適切かと考える。

〈送風施設〉谷部より鉄滓を付着したものを含む羽口細片が5点出土した。このことより、炉体送風孔に取り付けられていたとも考えられるが、その場合の羽口装着位置、送風方法が人口・自然かは不明である。

炉の形態　炉体の下部形態は、残存炉底・炉壁より推し測ると、内径50cm、外径90cm前後の円形状を呈しており、上部形態もこの延長上に続くものと考える。従って炉形全体としては円筒状が想定される。

3．原鉱

出土鉄滓の分析により本炉に使用された原鉱は砂鉄という結果が得られた(479頁参照)。しかし、遺構内外より砂鉄の出土はみられなかった。砂鉄の産出地に関しては、遺跡の西北西約600m、高田地区付近の岩ノ川流域が最も有力視される。この地点には砂鉄の鉱床が確認されている。[註1)] また、地元の古老の話によれば第二次大戦中に鉄原料としてこれが採取され、仙台方面に積み出されたという。現在は現場付近が崩落し、詳細な地点の確認、砂鉄の採集も不可能な状態であった。従って砂鉄分析による原鉱産出地の割り出しは出来なかったが、おそらくはこの岩ノ川流域の砂鉄が嶺山C遺跡で使用されたのではないかと考える。

4．燃料

西平坦面西側付属施設より出土した炭化材は分析を行っていないため、木炭か薪かの区別を明確に下せないが、薪のみが自然炭化で残存したとは考え難く、この炭化材が木炭であった可能性は高い。樹種はクリと同定された。樹種が異なりそうな3点の同定結果であり、出土炭化材全ての樹種がクリであると言えないまでも、その大部分はクリであったと断定出来よう。製鉄燃料用木炭でのクリの使用は新潟県真木山遺跡[註2)]（平安時代）でみられる。江戸時代のタタラ製鉄関係資料「鉄山秘書」[註3)]にも製練用木炭原木には松・栗・槙がよいとされ、特に松、栗は鍛冶用木炭原木に最適であるという記載がある。近世のタタラ製鉄において、燃料用材の確保が可能な地域が、タタラ立地の主要因の一つであったことより、当時、茂庭丘陵地帯には製鉄用燃料材が豊富であり、とりわけその内でも、クリが多く自生していたと言えよう。出土炭化材は遺存状態が不良であった為、炭化材の明確な大きさを示す資料が得られなかったが、長さ50cm前後、幅5～10cmのものが大半であった。これら炭化材は炉に投入するのには大きすぎる値であり、投入前に細断されたものと考える。

5．所属年代

出土炭化材のC_{14}年代測定では1200±60年B.P.(5730年半減期.506頁参照)という値が得られた。しかし、10世紀前後の降下とも言われる灰白色火山灰層[註4)]が遺構内に堆積していなかった点、出土土師器が平安時代の内でも古い段階ではないという点より、所属年代を一応、平安時代後半に位置づけたい。

6．沼原A遺跡との関連性

嶺山C遺跡の東約150mに位置する沼原A遺跡からは平安時代の住居跡1軒が検出されている。この住居跡は製鉄遺構同様に灰白色火山灰降下後に構築されており、出土土師器も類似性が強く、床面出土炭化材のC_{14}測定結果もほぼ同じ年代を示している（506頁参照）。住居跡の性格としては、鍛冶滓の出土、床面施設、隣接して検出された燃焼施設らしき土壙（12号土壙）の存在より、鍛冶工房とも考えられる。これらの点より、嶺山C遺跡の製鉄遺構と沼原A遺跡の住居跡は同時存在し、一方で製鉄、片方で鍛冶が行なわれていたことも十分考えられる。

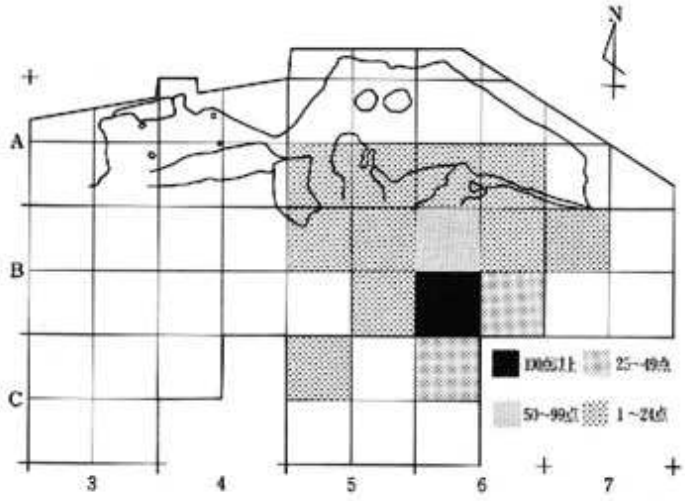
7．茂庭地区の鉄滓散布地

造成予定地外の茂庭地区で、現在、鉄滓の散布地としては、西館裏（仮称）遺跡、高田カナクソ遺跡の2遺跡がある。両遺跡とも岩ノ川流域の丘陵斜面に立地し、それぞれ西館跡の南東斜面下、大館跡の内部に位置するという興味深い共通点が認められる。両遺跡とも所属時代決定資料に乏しく、館跡との関連より中世以後の時代が想定されている。両遺跡表採の鉄滓の分析結果は製錬滓（479頁参照）であった。地元の人の話によれば以前には茂庭丘陵内岩ノ川流域には、もっと多くの鉄滓散布地があったと言う。また嶺山C遺跡では平安時代の面までの堆積土が厚く、表採時に全く鉄滓が採取されなかった経緯があり、造成予定地内未調査区にもこの種の遺構が存在したことも予測される。

8．結語

東日本に於ける古代製鉄遺構の調査は、1969年の群馬県苦ノ沢遺跡[注5]の調査を契機として年々増加の一途をたどっている。しかし、その多くは北・東関東を中心[注6]としており、東北地方では嶺山C遺跡を加えてもわずか5例[注7]にすぎない。嶺山C遺跡は、製鉄炉跡を中心として作業場、資材置場兼準備作業場とも考えうる東西平坦面等から成る製鉄遺構であったが、当遺構に伴う炭窯は確認されなかった。製鉄炉は、いわゆるシャフト炉と呼ばれるものに相当するかと考えるが、関東地方でよく認められる炉体を斜面部に組み込む構築法はとられておらず、浅い掘り込み中に単独に直立する構築法がなされている。この遺跡で炉体の他に特徴的であったのは、遺構内に全く鉄滓が残されていなかった上に、遺構下の谷面出土の鉄滓数（第3表、第21図）も少なかったことである。これは操業回数、操業後の鉄滓の持ち出し等が関係するものと思われるが、これだけの規模の製鉄遺構が1回の操業のみでその機能を終えてしまうとは考え難い。しかしながら、操業回数を推し測る資料は調査結果からは得られなかった。

岩ノ川流域での砂鉄の産出、茂庭丘陵内より得られる豊富な製鉄用燃料材より、この地域は製鉄に良好な自然条件下に置かれており、これに製鉄労働力の集約・技術者の導入が出来る支配力・資本力が加われば、この地域が鉄生産地と成り得ることは容易であったろう。その開始は現在得られている資料では平安時代後半頃であり、それは中世頃まで続いたと考える。



第21図　出土鉄滓分布図

第3表　鉄滓出土地点及び数量表

出土地点		数量
基本層位	Ⅳ	319
	a	2
	b	121
	c	99
表採		1
合計		320

小区名 / 地区名	a	b	c	d	合計
A－5	—	—	2	2	4
A－6	—	—	10	1	8
B－5	1	19	18	—	38
B－6	58	6	37	126	227
B－7	6	—	—	—	6
C－3	3	—	—	—	3
C－6	30	—	—	—	30

住藤甲二

註

1．経済企画庁「地形・表層地質・土じょう仙台」1967
2．新潟大学農学部木材工学教室「真木山製鉄遺跡出土木炭の分析結果について」『真木山製鉄遺跡』新潟県豊浦町教育委員会　1981
3．下原重沖「鉄山秘書」1784
4．白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所1980
5．飯島武次・穴沢義功「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」『考古学雑誌』第55巻第2号1969
飯島武次・穴沢義功「太田市菅ノ沢製鉄遺構の補足調査と化学的検討」『考古学雑誌』第56巻第3号1971
6．代表的な遺跡として次のものが上げられる。
群馬県　菅ノ沢遺跡　前掲
埼玉県　大山遺跡　高橋一夫他『大山―埼玉県立がんセンター埋蔵文化財発掘調査報告―』「埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集」　埼玉県教育委員会　1979
茨城県　堀崎前山遺跡　東京工業大学製鉄史研究会『古代日本の鉄と社会』　平凡社　1982
千葉県　花前遺跡　鈴木定明「柏市花前製鉄遺跡の調査」『千葉県文化財センター研究紀要7』（財）千葉県文化財センター　1982
7．青森県　大平野Ⅲ号遺跡・大館森山遺跡　岩木山刊行会「大平野Ⅲ号遺跡」・「大館森山製鉄炉遺構」・「大館森山・大平野両製鉄址について」『岩木山』　1968
宮城県　深谷遺跡　和島誠一「製鉄技術の展開」『日本の考古学』Ⅵ　河出書房　1967
福島県　山居遺跡　工藤雅樹「山居製鉄遺跡」『国見町史』第2巻　国見町　1973

分析・同定結果

沼原A・嶺山C・梨野A各遺跡出土炭化材樹種同定結果

仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査

沼原C遺跡出土の骨片

梨野A遺跡包含層の花粉分析

梨野A・沼原A・嶺山C各遺跡のC_{14}年代測定結果

梨野A遺跡試料リン分析結果

沼原A・嶺山C・梨野A各遺跡出土炭化材樹種同定結果

奈良国立文化財研究所　光谷拓実

沼原A遺跡、嶺山C遺跡、梨野A遺跡から出土した炭化材は以下のように同定された。

第1表　炭化材樹種同定表

遺跡名	資料名	出土遺構	層位	種類	備考
沼原A	炭化材	1号住居跡	床面	クリ	
沼原A	炭化材	1号住居跡	床面	ブナ属	
沼原A	炭化材	1号住居跡	床面	クリ・ブナ属	
沼原A	炭化材	12号土壙	底面上部	クリ	
嶺山C	炭化材	西平坦面西側施設	底面	クリ	C1
嶺山C	炭化材	西平坦面西側施設	床面	クリ	C2
嶺山C	炭化材	西平坦面西側施設	床面	クリ	C3
梨野A	炭化材	7号土壙	堆積土中	クリ	

仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査

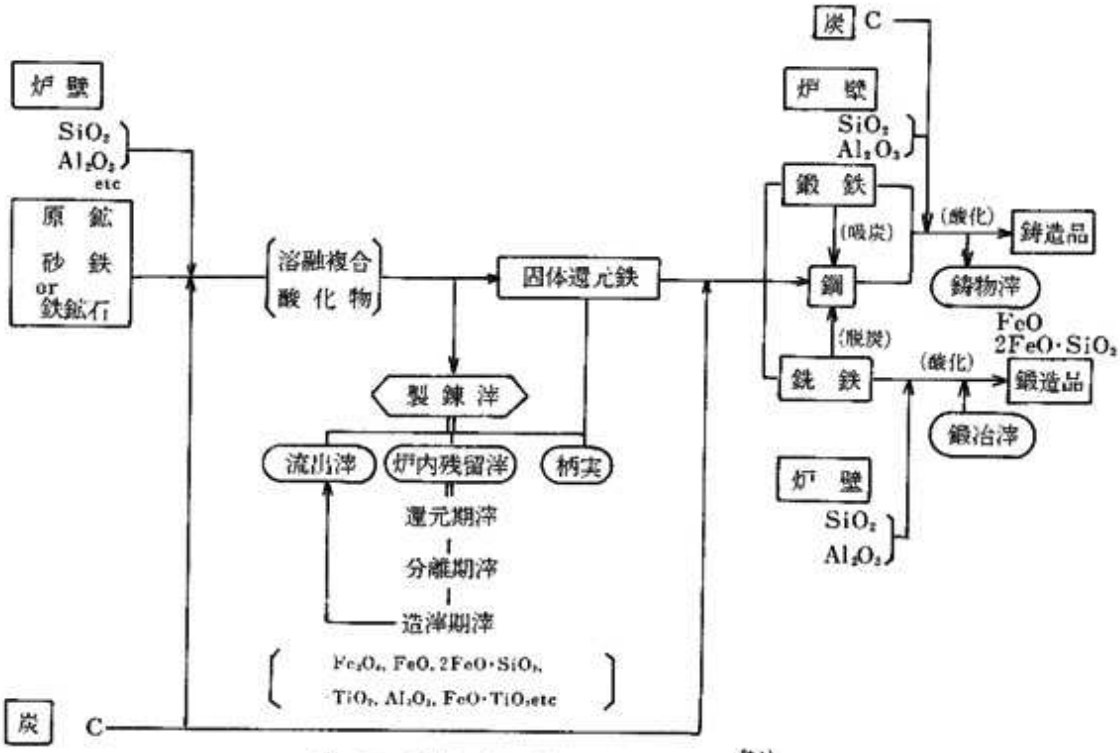
宮城県古川工業高校教諭　鴇　田　勝　彦

Ⅰ　はじめに

宮城県内において、鉄滓の分布がかなり広範に及ぶことは知られているが[註1]、鉄滓の形成年代や種類は殆んど明らかにされていない。また、発掘調査された製鉄炉跡は、白石市深谷の製鉄群[註2]と松島町山下遺跡[註3]の1基、それにこの嶺山C遺跡の一基だけである。

嶺山C遺跡の製鉄炉跡は、標高130m前後の東西に細長い谷の北側緩斜面上に造り出された細長い平場で、多量の焼土とともに検出された。炉の形態は、上部構造が炉壁をわずか残すだけで破損しているため不明だが、炉底は径50cm前後の円形か楕円形を呈するものと推定される。また、西側8mの地点でカマド跡が検出されたことに注目しているがここでは触れない。遺構の年代は、炉上部から出土した土師器の坏の編年から、平安時代と推定されている。

鉄滓は、原鉱から製鉄を経て鍛造、鋳造して鉄器を製作する過程で発生し、工程毎に製錬滓・鍛冶滓・鋳物滓に分けられるが、製鉄炉内及び周辺から出土したものはいずれも製錬滓と考えられる。この中の5点に、周辺の遺跡から出土、採集したもの4点を加えて調査を依頼された



第1図　製鉄・鉄器製作過程と鉄滓の発生[註4]

ので、その結果を以下に報告する。

Ⅱ　調査方法

提供された鉄滓に、各々つぎの調査を行った(第1表)。

ⓐ肉眼観察

ⓑ光学顕微鏡観察

鉄滓は2分割して一方を検鏡試料とし、残りを分析用試料とした。検鏡試料は、グラインダで上下底面を平らにして#320～#2000のエメリーペーパーで研磨した後、酸化クロムを研磨剤としてバフ仕上をした。9試料とも、研磨のまま検鏡して構成鉱物の同定を行った。

ⓒ粉末X線回折法

鉄滓を構成している元素、酸化物がどんな形をしているかを知るため、粉末X線回折法を用いた。試料を粉末にし、鉄（Fe）をターゲットとしたX線回折計（X-ray diffract meter）にかけて回折X線図を記録、ASTMカードと照合して物質の同定をした。

ⓓ化学組成

鉄（Fe）・硫黄（S）は湿式化学分析、二酸化チタン（TiO_2）・二酸化硅素（SiO_2）・酸化アルミニウム（Al_2O_3）の酸化物は蛍光X線分析で求め、他は原子吸光法で検出した。

Ⅲ　調査結果

第1表に示した試料の順に従って述べる。顕微鏡組織は図版1～4に、X線回折による物質の同定は第2表に、そして化学組成は第3表に示す。

1．MCS－1　（写真1）

嶺山C遺跡A－5(d)グリッドⅣc層出土の鉄滓で、表皮は全体的にくすんだ赤灰色を呈し、飴状の平滑面をもつ。破面は黒褐色を呈し、小さな気孔が多い。製錬流出滓と思われる。全長

第1表　供試鉄滓と調査項目

試料		種類	調査項目			備考
			金属顕微鏡	X線回折	化学分析	
仙台市茂庭嶺山C遺跡出土鉄滓	MCS－1	製錬滓	○	○	○	平安時代
	MCS 2	〃	○	○	○	〃
	MCS－3	〃	○	○	○	〃
	MCS－4	〃	○	○	○	〃
	MCS－5	〃	○	-	○	表採
同西館裏遺跡（仮称）	SN－1	〃	○	○	○	表採
	SN－2	〃	○	○	○	表採
同高田カナクソ遺跡	ST－1	〃	○	○	○	表採
同沼原A遺跡	NA－1	鍛冶滓	○	○	○	1号住居跡床面(平安時代)

が約6.5cmあり、比重は2.9と比較的重い。

〈鉱物組成〉成長した白色多角形状のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と淡灰色の長柱状結晶のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）から成り、間隙にガラス質（Glass：SiO_2、Al_2O_3、CaO、MgO）および、ウスタイト（Wustite：FeO）、フェアライト、ガラス質等の微結晶で構成された共晶部が認められる。大きく成長した雪花状のマグネタイトが観察された部分（b）をさらに拡大すると白色の小さな晶出型マグネタイトが認められた（b'）。

X線回折法では、マグネタイト（Fe_3O_4）とフェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）の鉱物組成が同定され、当然のことながら、顕微鏡組織を裏付けている。

〈化学組成〉全鉄分（TotalFe）が39.0%、造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）が28.49%、二酸化チタン（TiO_2）11.99%で、古代製鉄の製錬滓として中程度の操業レベルだと思われる。

2．MCS—2　（写真1）

嶺山C遺跡B－6（d）グリッドⅣc層出土の鉄滓で、表皮はくすんだ灰色を呈し、一部に舶状平滑面が見られる。全体的に大きさの異なる気孔がある。破面は暗褐色を呈し、無数の小さな気孔がある。MCS—1に似ており、流出製錬滓であろう。全長5cm。比重2.8。

〈鉱物組成〉検鏡では、MCS—1と同じく2種のマグネタイト（Fe_3O_4）が認められた。1つはスラグ溶液中で、溶解析出機構によって、粒成長した白色多角形状、および雪花状のマグネタイトであり、もう1つは、樹枝状晶の細かい晶出型マグネタイトである。鉱物組成は、このマグネタイトと、大きく成長した短柱状（b、c）のフェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）から成る。

第2表　供試鉄滓のX線回折（東北金属工業KK分析室）

試料		Fa	Wu	Ma	Go	M・Fe	Di	Il
嶺山C遺跡	MCS－1	2		1				
	MCS－2	2		1				
	MCS－3			2			1	
	MCS－4	2		1		3		
西館裏遺跡（仮称）	SN－1	2						1
	SN－2	2						1
高田カナクソ遺跡	ST－1	3		2		4		1
沼原A遺跡	NA－1	3	1		2			

Fa：Fayalite $2FeO \cdot SiO_2$　　M・Fe：全鉄鉄
Wu：Wustite FeO　　Di：Diopside $CaO \cdot MgO \cdot 2SiO_2$
Ma：Magnetite Fe_3O_4　　Il：Ilmenite $FeO \cdot TiO_2$
Go：Goethite $Fe_2O_3 \cdot H_2O$　　1～4：推定判定順位
（多）（少）

地は黒灰色のガラス質である。

X線回折法による鉱物組成は、マグネタイト（Fe_3O_4）とフェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が同定されている。

〈化学組成〉全鉄分が39.25%、造滓成分が27.83%、$TiO_2$11.59%で、MCS－1に類似した化学組成を示し、同種の砂鉄を使用した製錬時に形成されたものと考えられる。

MCS—3　（写真2）

嶺山C遺跡A－5（d）グリッドⅣc層出土の鉄滓で、表皮はにぶい灰色を呈し、きめの細かい円滑部分に多数の気孔が見られる。裏面に溶けた炉壁粘土の付着が見られる。破面は明るい灰色を呈し、気孔が細かく分布している。全長が7cmあり。比重は1.4と非常に軽い。

〈鉱物組成〉ガラス質が大部分で、一部にマグネタイト（Fe_3O_4）の樹枝晶が認められる程度で鉄分はほとんど残存していない。やきものの顕微鏡組織に類似している。

X線回折法では、透輝石（Diopside：$CaO \cdot MgO \cdot 2SiO_2$）が同定されているが、それ以外の鉱物組成は同定されなかった。

〈化学組成〉TiO_2が0.42%と、砂鉄製錬滓と思えないほど少ないが、全鉄分も6.01%と少なく、ほとんどが炉壁材の成分と見てよいだろう。

4．MCS—4　（写真2）

嶺山C遺跡B－5（b）グリッドⅣb層出土の鉄滓で、赤褐色の表皮はやや粗雑で気孔が見られる。破面は黒褐色を呈し、大きさの異なる気孔が多い。全長が8.5cmで、比重は3.2と重い。

〈鉱物組成〉検鏡では、多角形状に大きく成長した灰白色のマグネタイト（Fe_3O_4）と、灰色で

第3表　鉄滓の化学分析結果

試料		全鉄 Total Fe	二酸化珪素 SiO_2	酸化アルミニウム Al_2O_3	酸化カルシウム CaO	酸化マグネシウム MgO	酸化マンガン MnO
嶺山C遺跡	MCS 1	39.00	18.22	5.89	1.46	2.92	0.85
	MCS－2	39.25	17.69	5.82	1.37	2.95	0.85
	MCS－3	6.01	20.73	20.36	2.01	1.21	0.30
	MCS 4	43.35	14.39	5.07	1.00	2.29	0.75
	MCS 5	35.79	21.41	7.80	1.31	2.51	0.79
西館裏遺跡（仮称）	SN－1	19.25	34.49	9.75	4.04	4.13	0.75
	SN－2	20.98	26.29	7.68	3.41	4.15	1.06
高田カナクソ遺跡	ST－1	33.25	19.53	7.45	1.31	2.22	0.91
沼原A遺跡	NA－1	49.60	15.07	4.10	0.58	0.36	0.05

※　造滓成分は（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）である。

長柱状のフェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$が占めているのがわかる。その間隙にガラス質が見られるが、この鉄滓の特徴は白く輝く金属鉄（Metal Fe）が認められることである(a)。還元鉄がうまく分離しないで残ったものか。

X線回折法による鉱物組成は、マグネタイト（Fe_3O_4）とフェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、それに金属鉄等で構成されている。

〈化学組成〉MCS１～３と異なり、全鉄分が43.35%と高く、造滓部分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)は22.75%と低い。その比は0.525と供試製錬滓中最少で、顕微鏡による鉱物組成を加えて鑑定すると、この鉄滓は製錬初めの還元期滓であると考えられる。TiO_2は、12.34%であった。

５．MCS—５　（写真２）

嶺山C遺跡で表採された鉄滓で、黒褐色の表皮は全体的に気孔を有し、飴状のものと粗鬆なものの中間的な外観をもつ。破面は黒褐色を呈し、無数の小さな気孔が見られる。比重2.6。

〈鉱物組成〉半還元砂鉄粒子と白色多角形のマグネタイト（Fe_3O_4）、それに、フェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、ガラス質から構成されている。MCS１～４と比べて、フェアライトの結晶が小さく比較的急冷されてできた製錬滓と思われる。

〈化学組成〉造滓成分が33.03%と全鉄分の0.923倍あり、炉壁付着滓のMCS－３を除けば最も高い。TiO_2は11.21%あった。

６．SN—１　（写真３）

茂庭西館の南西谷部分で表採された鉄滓で、形式年代は不明である。表皮は黒褐色を呈し、全面に大きさの異なる気孔があり、一部に飴状円滑部が見られる。破面も黒褐色を呈し、細か

(東北金属工業KK分析室)

二酸化チタン TiO_2	酸化クロム Cr_2O_3	硫黄 S	炭素 C	バナジウム V	銅 Cu	※造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
11.99	0.05	0.0193	0.0205	0.54	0.006	28.49	0.730	0.305
11.59	0.05	0.0183	0.0463	0.64	0.006	27.83	0.709	0.295
0.42	0.01	0.0022	0.1690	0.21	0.005	44.31	7.37	0.070
12.34	0.05	0.0211	0.0890	0.64	0.005	22.75	0.525	0.285
11.21	0.06	0.0096	0.0822	0.75	0.005	33.03	0.923	0.313
10.71	0.07	0.0053	0.2801	0.64	0.005	52.41	2.72	0.556
11.86	0.15	0.0050	0.1754	0.86	0.005	41.53	1.98	0.565
15.93	0.09	0.0201	0.0442	0.71	0.015	30.51	0.918	0.479
0.08	0.01	0.0017	0.7803	0.25	0.015	20.11	0.405	0.0016

い気孔が無数にある。全長が約7.0cmあり、比重は2.2と比較的軽い。

〈鉱物組成〉検鏡ではその箇所によって幾分様相がちがうが、主組織は白色の微小板状結晶プシュド・ブルーカイト（Pseude-brookite：$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）である。(a)では、それが棒状に連なっており地はガラス質、フェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）等の共晶である。(b)では、棒状のプシュド・ブルーカイトの他に、晶出型マグネタイト（Fe_3O_4）が認められた。(c)では、ガラス質を地にして、板状プシュド・ブルーカイトが成長しているのがわかる。

X線回折では、イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）が最も強く検出され、ついでフェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が同定された。

〈化学組成〉全鉄分が19.25%と少ない。それに対して造滓部分は52.41%と極めて高目で全鉄分の2.72倍にも達している。鉄収率が良好だったことを示している。TiO_2は、鉱物組成からもっと多いと予想したが、10.71%とMCSと大差なかった。

7．SN－2　（写真3）

SN－1と同じ谷で表採された鉄滓で、形成年代はやはり不明である。にぶい灰色を呈す表皮の全面に細かい気孔が見られるがSN－1ほどではない。一見、自然風化した礫状の外観を有している。破面はSN－1と同じ。全長5.5cmで比重は2.5。

〈鉱物組成〉白色の板状結晶のプシュド・ブルーカイト（$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）が成長しているのがあらゆる箇所で観察された。フェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）は余り見られず、地はガラス質である。このガラス質の中から糸状にプシュド・ブルーカイトが晶出するのがわかる。

X線回折の結果は、SN－1と同じく、イルミナイト（$FeO \cdot TiO_2$）が強く同定され、ついでフェアライトが同定された。

〈化学組成〉造滓成分が41.53%と高目で、全鉄分（20.98%）の1.98倍もあり、やはり鉄収率の良好な操業時の製錬滓であると思われる。SN－1と同じく酸化カルシウム（CaO）が高く、嶺山C遺跡出土製錬滓の2倍以上あるのも特徴の1つだ。TiO_2は11.86%であった。

8．ST－1　（写真3）

高田カナクソ遺跡で表採された全長4cmの小さな鉄滓である。表皮はくすんだ赤灰色を呈し、飴状の平滑面をもつ。破面は黒褐色を呈し、大きさの異なる気孔がある。製錬流出滓と思われる。比重は2.8ある。

〈鉱物組成〉棒状に伸びた白色微小板状結晶のプシュド・ブルーカイト（$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）が主体で、一部に白色多角形状のマグネタイト（Fe_3O_4）が見られる。地はガラス質で、小さな金属鉄が認められた。

X線回折法による鉱物組成は、イルミナイト（$FeO \cdot TiO_2$）をはじめとして、マグネタイト（Fe_3O_4）、フェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）等で構成されているのが確認された。

〈化学組成〉造滓成分は30.51%で余り多いとはいえないが、全鉄分（33.25%）の0.92倍にあたる。TiO_2は供試鉄滓中最高の15.93%あり、ブシュド・ブルーカイト（$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）の存在を裏付けている。古代の製鉄とすれば、中程度の操業レベルであったと思われる。

9．NA－1　（写真4）

嶺山C遺跡より東方150mの位置にある沼原A遺跡で検出された1号住居跡の床面から出土した鉄滓である。赤褐色の表皮はやや粗鬆で、焼けただれたようなブツブツが見られる。椀形鍛冶滓に似た形態をもっている。破面は黒褐色で光沢がある。全長約11cmあり、比重は4.1と重い。

〈鉱物組成〉フェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）を地にして、白色粒状のウスタイト(Wustite：FeO)が全体に分布しており、典型的な鍛冶滓の組織を示している。また、大きな円形のゲーサイト(Goethite：$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）が観察（a、c）された。これは金属鉄が赤さびしたものである。

X線回折では、ウスタイト（FeO）、フェアライト（$2FeO \cdot SiO_2$）ゲーサイト（$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）が同定され、NA－1がこれらで構成されていることがわかった。

〈化学組成〉全鉄分が49.6%と高目である。造滓部分は20.11%とやや高いが、TiO_2が0.08%と極めて低い。これらの成分値は鍛冶滓としての性格をよくあらわしている。鉄収率の良い、質の高い還元鉄を素材にして鍛造したことを示唆している。

Ⅳ　考　察

1．鉄滓の形成温度

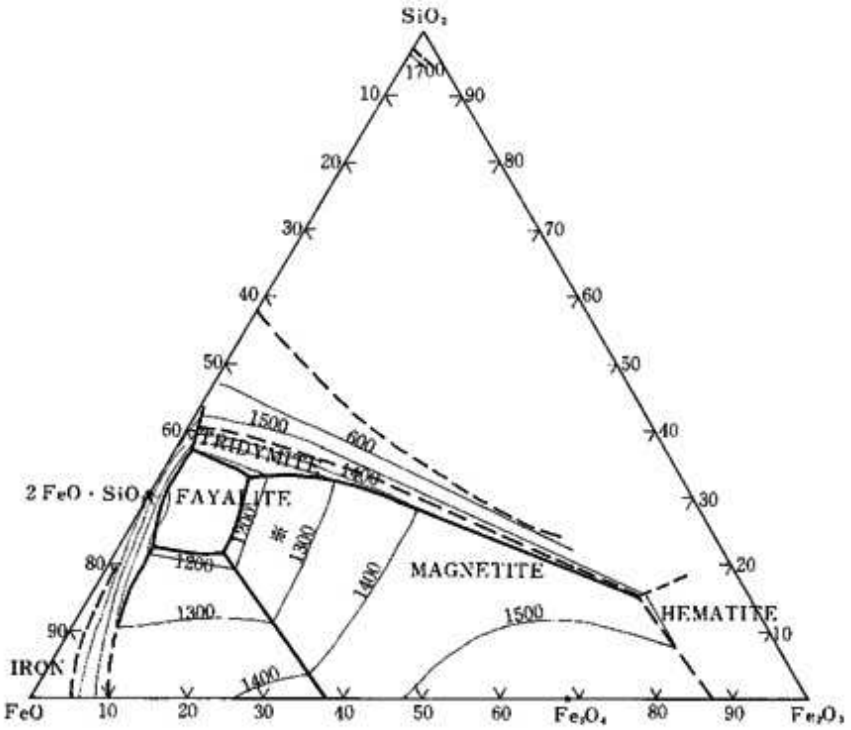
嶺山C遺跡出土鉄滓MCSの形成温度（凝固温度）を求めて、製錬温度を推定してみる。

化学組成および鉱物組成を見ると、MCS－3を除いてほぼ同じ鉄滓とみていいので、分析値は4つの平均値をとった。すると、T・Fe：39.35(FeO：37.44、Fe_2O_3：14.37)[注5]、SiO_2：17.93、Al_2O_3：6.15、CaO：1.29、MgO：2.67、TiO_2：11.78%等となり、鉄滓は$FeO-Fe_2O_3-SiO_2-Al_2O_3-TiO_2$5元系と考えられる。この中で、$Al_2O_3$は比較的低濃度であり、凝固温度に与える影響は少ないと考えて除外する。またX線回折の結果（第2表）、チタン化合物が認められなかったので、考察の対象からはずした。このように仮定すると、この鉄滓は$FeO-Fe_2O_3-SiO_2$3元系滓に単純化して扱うことができる。

そこで、FeO、Fe_2O_3、SiO_2各成分の濃度を計算し直すと、順に53.7%、20.6%、25.7%となる。これを第2図の$FeO-Fe_2O_3-SiO_2$系状態図にプロットすると※にあたり、凝固点として約1260℃が得られる[注6]。そして、初晶の一次がマグネタイトになることがわかる。これは、実際の顕微鏡写真（図版1・2）とよくあう。この結果、製錬温度は1300°C前後と推定できる。

2．原料砂鉄と鉄収率

ここでは、はじめ、製錬滓と原料砂鉄、鉄収率の関係を考え、ついで、嶺山C遺跡の製鉄炉



第2図　FeO…Fe_2O_3－SiO_2 3元系状態図

で用いた砂鉄の種類とその鉄収率を推定してみたい。

砂鉄製錬においては、還元鉄を分離させることと同時に、チタン（Ti）をいかに製錬滓中に濃縮させて除去するかが課題となる。Tiの多い砂鉄の場合は尚更である。考察を単純化するために、砂鉄中のTiがすべて製錬滓に濃縮されて除かれたと仮定する。つまり、砂鉄中のTi/Feが製錬滓中のTi/Feに濃縮されたとする。このとき、鉄収率ηはつぎの式で表わすことができる。[註7)]

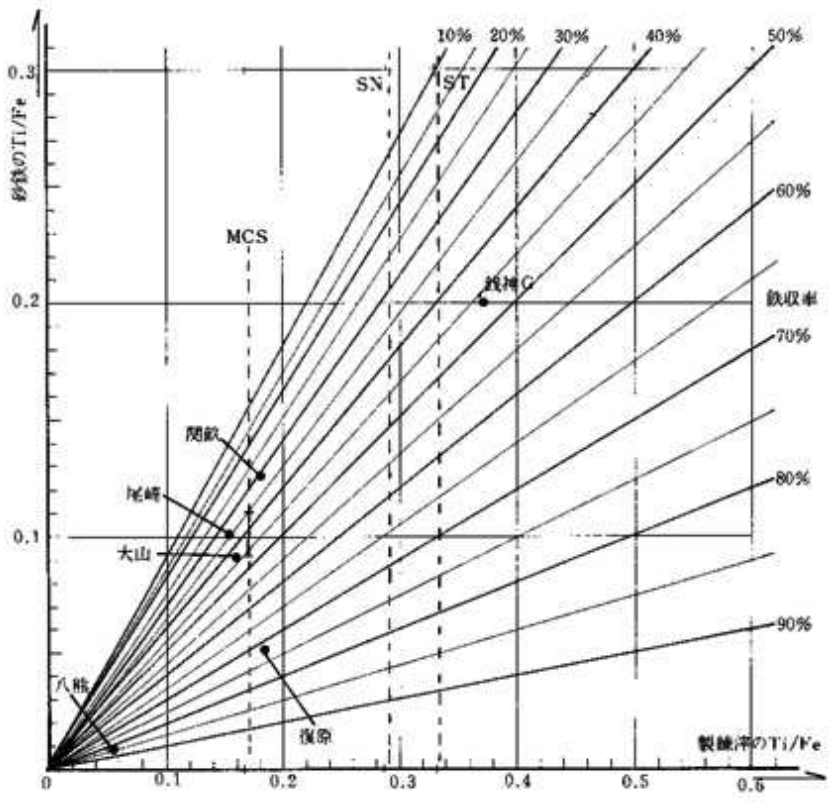
$$\eta = 1 - \frac{G}{S}$$

ただし　G：砂鉄のTi/Fe　S：製錬滓のTi/Fe

第2図はこれの計算図表である。

例えば、大山遺跡の場合、[註8)] Gが平均0.091で、鉄滓No.1～10の平均Sが0.162なので、鉄収率ηは43.7%になる。この他いくつかの遺跡のものをプロットしたのが図中の点である。砂鉄中のTi/Feが0.008と極めて少ない福岡県八熊遺跡[註9)]を除けば、古代の製鉄技術における鉄収率は30～50%とみなすことができる。

さて、嶺山C遺跡の場合は、鉄滓の流動性も良好なことから、η＝35～45%と考えることができよう。砂鉄中のTi/Feは第3図で、0.09～0.11を示し、砂鉄中の全鉄分を55%とみれば、



第3図　製錬滓のTi/Fe—砂鉄のTi/Fe—鉄収率の計算図表　　註9.11)

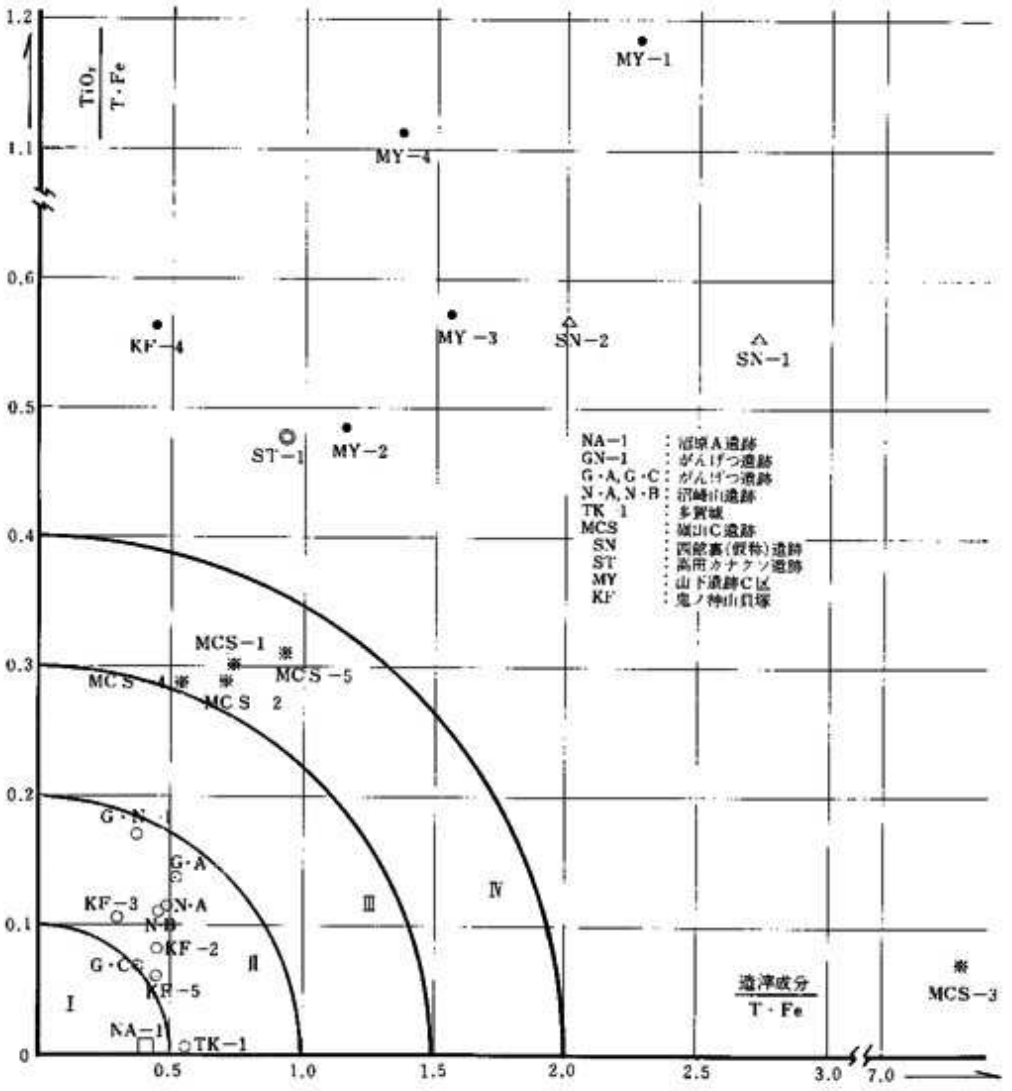
砂鉄に含まれるTiO_2は8.2～10.2%となる。赤目(あこめ)砂鉄[註10]である。とすると、嶺山C遺跡の製鉄炉では、砂鉄1tから190～250kgの鉄を生産できたものと推定される。

同様に、高田カナクソ遺跡ST、西館裏(仮称)遺跡SNの場合は、鉄収率を広くとって30～50%とすると砂鉄中のTi/Feが0.144～0.20、0.168～0.236となる。これはTiO_2を13.2～18.4%および15.4%～21.6%も含む赤目砂鉄を用いたことになる。また、嶺山C遺跡SCMと同じ砂鉄を原料としたと仮定(いずれも、戦時中採集したと古老がいう岩ノ川の砂鉄の可能性がある)すると、SN、STは、鉄収率がそれぞれ62～73%、66～77%と操業レベルの高い製鉄炉が発生した製錬滓ということになる。これほど高い鉄収率とは考えられないが、化学組成と鉱物組成を見る限りは、どちらも嶺山C遺跡よりも鉄収率は良好だったと推定できる。

3．宮城県下出土滓の製錬滓と鍛冶滓の区分

鉄滓の区分は、原則として遺構とのかかわりで決定すべきであるが、化学組成に鉱物組成を加味すれば、大体きめられる。化学組成ではTiO_2量が決め手の一つで、埼玉県下出土滓の調査をした大澤氏は、4～15%のとき製錬滓で、3%以下の時鍛冶滓[註12]とみた。

今回、沼原A遺跡の住居跡床面から出土した鉄滓NA－1はTiO_2が0.08%と非常に少なく明らかに鍛冶滓であることがわかるが、瀬峰町かんげつ遺跡[注13]のG・Aは6.84%もあり、豊里町沼崎山遺跡[注14]のN－11Aが5.40%、N－25Bが5.58%であった。これでは、化学組成からは区分がつきかねる。しかし、後者の場合は鍛冶炉から出土したのである。そこで、筆者は第3図をつくり、過去のデータをプロットしてみた。その結果、Ⅲの区域を境にして、Ⅰ・Ⅱ区に鍛冶滓が、Ⅳ区以降に製錬滓が入ることがわかった[注15]。宮城県下の集落跡から出土した鍛冶滓は、鍛冶素材の一部に付着していた製錬滓をも含んでいるものと解される。



第4図　宮城県下出土滓の製錬滓・鍛冶滓の区分[注15]

V ま と め

1．嶺山C遺跡出土鉄滓は、$TiO_2$10%前後含む赤目系砂鉄を原鉱とした製錬滓であり、検出された遺構が製鉄炉であることを裏づけた。

2．鉄滓の鉱物組成と化学組成から、鉄滓の形成温度が約1250℃と推定され、炉温が1300℃を越える部分もあったと思われる。

3．鉄滓の鉱物組成および流動性が比較的良いことから、平安時代の製鉄技術としては中程度の操業レベルで、鉄の収率は40%前後であったと推定される。

4．宮城県下の鉄滓の区分が、(遺滓成分/T・Fe)－(TiO_2/T・Fe) 相関図をつかうことによって、ある程度明らかにできた。

5．沼原A遺跡出土の鍛冶滓はTiO_2分が非常に小さく、質の良い還元鉄を素材に鍛造したことをうかがわせる。

6．西館裏(仮称)遺跡および高川遺跡の鉄滓は、時代不明だが、TiO_2の高い赤目系砂鉄を原鉱とした製錬滓である。

謝辞 本稿作成に当り、成分分析やX線回折を行って下さいました東北金属工業㈱のご厚意と同社課長遠藤貞氏はじめスタッフの方々、および試料作成にご協力いただいた古川工業高校の有志生徒に感謝の意を表します。

註

1）鶴田勝彦「宮城県七ヶ浜町野山貝塚出土鉄滓について」『たたら研究会昭和52年度大会研究発表資料』1977

2）和島誠一「製鉄技術の展開」『日本の考古学』Ⅵ 河出書房1968、『白石市史』別巻等。

3）1981年8月に県文化保護課が発掘調査。1982年度中に調査報告書発刊予定。

4）横川清志「復元たたら炉による製鉄について」「たたら研究19・20』1976、中の第12図を参考に、丸山益輝「鉄滓による〈たたら〉炉内反応の解析」『たたら研究22』1978中の製錬滓の種類をつけ加えて作成した。

5）本分析では、FeO、Fe_2O_3の定量をせずにT・Feだけ求めたので、この値は推定値である。いくつかの報告書の中で、埼玉県大山遺跡の鉱滓№4・5（註8）が鉱物組成、化学組成とも酷似していたので、これらの平均値から推定した。

6）FeO-Anorthite ($CaO \cdot Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$)－$SiO_2$3元系とみて計算し、状態図にプロットしたら、凝固点が1108～1120℃という低い値を得た。初晶はフェアライトであり、顕微鏡組織と異なったので、文中の値1260℃を採用した。

7）砂鉄中のFe量をa、Ti量をbとするとG－b/a。製錬の結果a'量の金属鉄を得たとすると、製錬滓中のFe量はa－a'に減じて、$S-\frac{b}{a-a'}$となる。鉄収率ηは$\frac{a'}{a}$だから計算すると$\eta=1-\frac{G}{S}$。

8）大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集1979。

9）後藤忠俊、高塚秀治「製鉄滓と鍛冶滓の区別についての試論」「古代日本の鉄と社会』東工大製鉄史研究会編（平凡社）1982 P.287。また、第3図中の尾崎前山、鍛持G遺跡の値もこれによる。

10）長谷川熊彦『砂鉄』（技術書院）1963によれば、砂鉄は塩基性砂鉄と酸性砂鉄に分類できる。後者は鉄品位高くチ

タンおよび燐等不純物が少なく、真砂砂鉄がこれに属する。前者はチタン、燐の含有が多く、赤褐色の微細な粒形をもつので赤目砂鉄ともいう。TiO_2量7％以上。

11) 窪田蔵郎「開畝製鉄炉跡の構造と鉄滓等の理科学的分析」『開畝製鉄遺跡』坂城町教育委員会1978；日本鉄鋼協会：特別報告書№9「たたら製鉄の復原とその鉧について」1971の中から任意に5点選び平均値をとってプロットした。その他は註9)文献。

12) 大澤正己前掲書註8) Table11、でTiO_2量だけでなく滓成分等もあげて区分している。

13) 鴇田勝彦「鉄滓について」『がんげつ遺跡』瀬峰教育委員会。1977

14) 鴇田勝彦「宮城県登米町沼崎山遺跡鍛冶遺構と出土鉄滓」『沼崎山遺跡』登米町教育委員会1980

15) 図中、G・A、G・Bは註13、N・A、N・Bは註14文献である。TK－1は窪田蔵郎「多賀城鍛冶工房遺構と出土鉄滓」『多賀城調査研究所年報1976』1977。GN－1は『がんげつ遺跡第2次調査報告書』瀬峰町教育委員会1980。KF－No.は鴇田勝彦「鉄滓について」『鬼ノ神山貝塚・野山遺跡』七ヶ浜町教育委員会1982予定。MY－No.は鴇田勝彦「山下遺跡C区出土鉄滓の分析調査」『山下遺跡』1982予定。

16) 大山遺跡註8)をプロットすると、埼玉県下の鍛冶滓はすべてⅠの区域に入り、製錬滓はNo.2を除いて、Ⅲ以降の区域に入る。Ⅱ域が空白で、はっきり区分できる。

嶺山C遺跡MCS－1

MCS－1(a)

MCS－1(b)

MCS－1(b')　　×1200

嶺山C遺跡MCS－2

MCS－2(a)

MCS－2(b)

MCS－2(c)

写真１　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅰ　×300

嶺山C遺跡 MCS－3

MCS－3

嶺山C遺跡 MCS－4

MCS－4(a)

MCS－4(b)

MCS－4(c)

嶺山C遺跡 MCS－5(a)

MCS－5(b)

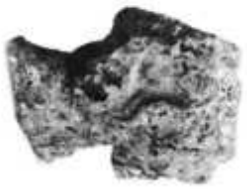
写真２　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅱ　×300

西館裏遺跡(仮称) SN－1

SN－1(a)

SN－1(b)

SN－1(c)



西館裏遺跡(仮称) SN－2

SN－2

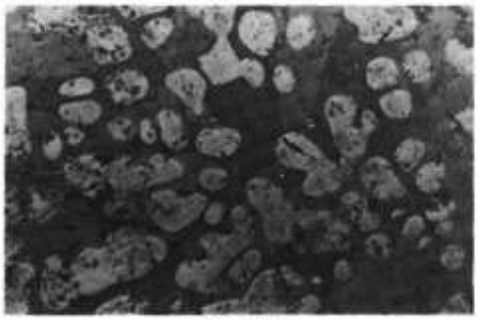
高田カナクソ遺跡 ST－1

ST－1

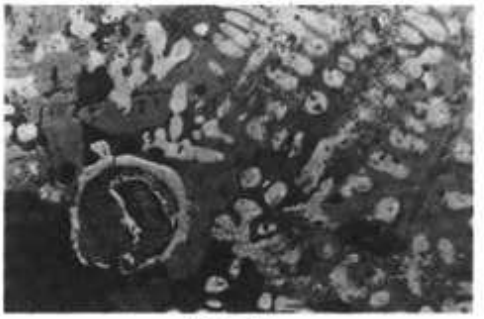
写真３　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅲ　　×300

沼原A遺跡 NA－1

NA－1(a)



NA－1(b)



NA－1(c)

写真４　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅳ　×300

梨野A遺跡包含層の花粉分析

斎藤報恩会自然史博物館　竹　内　貞　子

1．分析方法および結果

当時の植生を復元するために、遺跡包含層の花粉分析を行った。K－13グリッドの東壁面から16個の試料を採取し花粉分析を行うとともに、パラレルチェックの意味でP－9グリッドの北壁面から採取した10個の試料についても花粉分析を行った。試料の採取層準は第1図に示してある。

分析方法はフッ化水素酸法と苛性カリーアセトリシス法を併用したが、粘土質であるため、苛性カリ溶液処理およびフッ化水素酸処理は100mℓビーカーでおこなった。検鏡にあたっては、樹木花粉が最大200個になるまで数えたが、全体として花粉の含有量は少なかった。

花粉分析の結果は第1表に示すとおりである。また、主要な花粉の出現率および、樹木花粉・草本花粉・シダ類胞子のそれぞれの割合については第1図の花粉ダイアグラムに示した。第1図の花粉ダイアグラムは総出現花粉・胞子を基数とする百分率で示してある。試料番号K－13－E－1～5およびP－9－N－1～3の8試料については、樹木花粉が200個になるまで数えた。K－13－E－6～9およびP－9－N－4の5試料については草本花粉あるいは羊歯類胞子に比べて樹木花粉の絶対量が少ないため、樹木花粉・草本花粉・胞子のそれぞれの比率を求めるにとどめた。K－13－E－10～16およびP－9－N－5・6・9の10試料は絶対花粉量が非常に少なかった。また、P－9－N－7・8・10の3試料からは花粉が検出されなかった。

このようにK－13グリッドの東壁面、P－9グリッドの北壁面ともに地表から下位になるにつれて含有絶対花粉量が少なくなる。遺物包含層との関係でみると、縄文時代の遺物包含層のうち、縄文早期の遺物を出土するⅣc層は下位のⅤ層とともに花粉・胞子は非常に少なく、マツ属、スギ属、コナラ属、イネ科、キク科の花粉や羊歯類の胞子がごくわずか産出しただけであった。主として縄文中期から後期にかけての遺物を包含し、上面に晩期の遺物も包含するⅣb層は下位層に比べると絶対花粉量は増加しているが、樹木花粉および草本花粉の割合はごくわずかで、羊歯類の胞子の割合が圧倒的に多く、花粉および胞子全体のほぼ80％をしめている。草本花粉では下位同様イネ科とキク科を主としているが、樹木花粉ではマツ属、スギ属、コナラ属のほかにブナ属、ハンノキ属、ハシバミ属、クマシデ属、カエデ属の花粉が検出された。更に上位の縄文晩期の遺物を主とする遺物包含層のⅣa層になると、イネ科やキク科を主とした草本類の花粉の割合が増加し、40数％から50数％をしめている。逆に羊歯類の胞子の割合が減少し30数％となる。樹木花粉は相変らずわずかではあるが、下位のⅣb層に比べて更

に多くの樹種の花粉が検出された。最上位のⅠ層はⅠb層、Ⅰa層ともに樹木花粉の割合が増加し、40%ほどとなる。樹木花粉の絶対量がふえるとともに種類も多くなっている。スギ属とマツ属が高い出現率を示しているが、K－13グリッドの東壁面のⅠb層下部で、クリ属が10%以上の高率で出現している。コナラ属、クリ属をはじめモミ属、ブナ属、ハンノキ属、クマシデ属、ケヤキ属、ガマズミ属などもわずかではあるが安定して出現している。草本類の花粉は30数%であるが、イネ科、キク科をはじめとしてアカザ科やナデシコ科、キンポウゲ科、セリ科などの花粉もかなり検出された。羊歯類の胞子は下位に比べて若干減少している。

2．考　察

以上の結果をもとに、この付近の地形的特徴と南西方の高田湿原での花粉分析の結果とから遺跡をとりまく自然環境について若干の考察を試みる。

梨野A遺跡の位置する仙台市茂庭地域には第三紀中新統が発達している。特に梨野A遺跡周辺一帯は、綱木層を堆積させた海が退いた後、陸上での激しい火山活動にみまわれた地域で、岩片を含む軽石質凝灰岩が堆積した(湯元層)。火山活動中止後は、陸上で侵食作用をうけてきた。鮮新世になると、竜ノ口層を堆積させた海や、大年寺層を堆積させた海がすぐ近くまで入りこんできたが、この付近は海中に没することなく、相変らず丘陵地を形成し風化・侵食をうけていた。その後、第四紀に入って、幾たびかの寒暖のくり返しの中で、名取川の侵食だけでなく支流によっても谷が刻まれた。丘陵頂面は比較的面がよくそろい、現在標高200～250m の侵食小起伏面をなしている。

縄文時代早期以後の遺物が多数出土し(仙台市教育委員会，1981)、また縄文時代中期の住居跡も発見された梨野A遺跡は、名取川の支流、大堤川によって開析された丘陵の中腹にあり、標高180～190m である。開析の進んだ尾根が緩傾斜で北側に張り出し平坦面をつくっている部分に位置している。

梨野A遺跡より南西へ1.5km弱のところに高田湿原がある。この高田湿原と梨野A遺跡との間には南北に走る断層が存在し、高田湿原地域は断層による地すべり地帯となっているのであるが、この高田湿原堆積物のボーリングコアの花粉分析の結果が、^{14}C年代とともに報告されている（宮城ほか，1979，安田，1981)。

これらによれば、縄文早期から前期にかけて、高田湿原付近はコナラ属を主としクマシデ属、ハシバミ属、クルミ属、ブナ属などの落葉広葉樹林におおわれていた。梨野A遺跡の花粉分析の結果からは、絶対花粉量が少なく周囲の森林の植生を知ることはむずかしいが、高田湿原での分析結果から復元される植生とほとんど同じ植生に支配されていたと考えられる。すなわち、梨野A遺跡のある平坦地の北側は、大堤川の谷をへだててコナラを主とし、クマシデ、ハシバミ、クルミ、ブナなどの落葉広葉樹のしげる丘陵が続いており、南側の背域にも同じような落

葉広葉樹の林が広がっていたであろう。縄文早期から前期にかけての時期は気候的には増温期にあたり、特に縄文時代前期は縄文海進の極相期で、後氷期で最も温暖な時期であった。東北地方の太平洋岸の山地帯から丘陵地帯にかけては、全体としてコナラ属を主とする温帯性落葉広葉樹にマツやスギをまじえる植生におおわれていたことが知られており、梨野A遺跡周辺も例外ではなかった。しかし、梨野A遺跡の花粉分析の結果からみて、この遺跡ののる平坦地には上記のような樹木はほとんど生えていず、イネ科やヨモギをはじめとするキク科草本、羊歯類などがまばらに生えている状態で、風通しがよく水はけのよい、比較的乾燥した場所であったと推定される。背後のコナラを主とした林も、この付近では疎林をなしていたであろう。

縄文時代中期になると、高田湿原での花粉組成ではコナラ属がやや減少し、かわってケヤキ属・ニレ属が増加しはじめる。そして後期になるとクリ属が高い出現率を示しているのが特徴である。縄文時代晩期以後、丘陵地でのコナラ属は更に減少し、ブナやマツ、スギなどが増加してくる。縄文時代中期から晩期にかけて、梨野A遺跡での樹木花粉の出現率は依然として少ない。遺跡周辺の丘陵地ではコナラ属を主とした温帯性落葉広葉樹の林がひろがっていたが、遺跡付近に近ずくにつれて樹木はまばらになっていたであろう。そして遺跡ののる平坦地は羊齒類やイネ科、キク科の優勢な草地から、そこにコナラやクリ、マツやスギなどの喬木がまばらに生える疎林にかわっていったと推定される。高田湿原で縄文時代後期の堆積物からクリ属の花粉が高率で出現しているが、梨野A遺跡からはそれほどは検出されなかった。しかし縄文晩期の遺物とともにクリの炭化した種子と材が出現しているので、当時この付近の林にもクリの木がまじっていたことは確かであろう。遺跡の場所から花粉が検出されないのは、樹木花粉そのものが全体として少ないこととともに、クリ属は花粉の生産量が低いことによるものであろう。ただここで非常に興味があるのは、高田湿原ではクリ属の花粉が全然出現していない地表近くの部分で、クリ属がかなりの出現率を示していることである。クリ属の花粉の生産量が少ないことと、樹木花粉が残りにくいというこの場所の立地條件の中で、上述のように地表近くでクリ属の花粉の割合が増加していることは、この付近でのクリの木の増加は、どちらかというと縄文時代より後の時期により急激であったと考えられる。

遺跡付近の地表近くの土壌は最近では耕作土になっているが、地元の人達によれば開墾前は雑木林であったという。文化庁発行の植生図（1969）によっても、この付近は北側の部分がコナラークリ林、南側の部分がマツとスギを主とする常緑針葉樹植林となっている。前述の地表近くのT層の花粉分析の結果にもこれは反映されている。下草にはイネ科を主としアカザ科やナデシコ科、キンポウゲ科、セリ科などが繁茂していたようすがうかがえる。

以上のようにみてくると、とぼしいデータからの推測ではあるが、遺跡周辺の丘陵地の植生は大まかにみて、縄文時代早期から前期にかけてのコナラを主とした温帯性落葉広葉樹林か

ら、中期から後期以後のクリの木の増加、そして歴史時代に入ってからこれらに更にマツやスギの植林が加わるといった経過をたどってきているといえるであろう。このようななかで遺跡ののる面は、まばらに草が生えていた状態から、イネ科、キク科や羊歯類の優勢な草地へ、そしてコナラやクリなどの疎林をへて、コナラ－クリ林へと変化してきたと推測される。

以　上

文　献

文化庁、1969：天然記念物緊急調査、植生図・主要植物地図，4宮城県，30P

宮城豊彦・日比野紘一郎・川村智子，1979：仙台周辺の丘陵斜面の削剥過程と完新世の環境変化．第四紀研究，18，143～154P

仙台市教育委員会，1981：仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ．仙台市文化財調査報告書第31集，40P

安田喜憲，1981：六反田遺跡の泥土の花粉分析．仙台市文化財調査報告書第34集，241～250P

写真説明

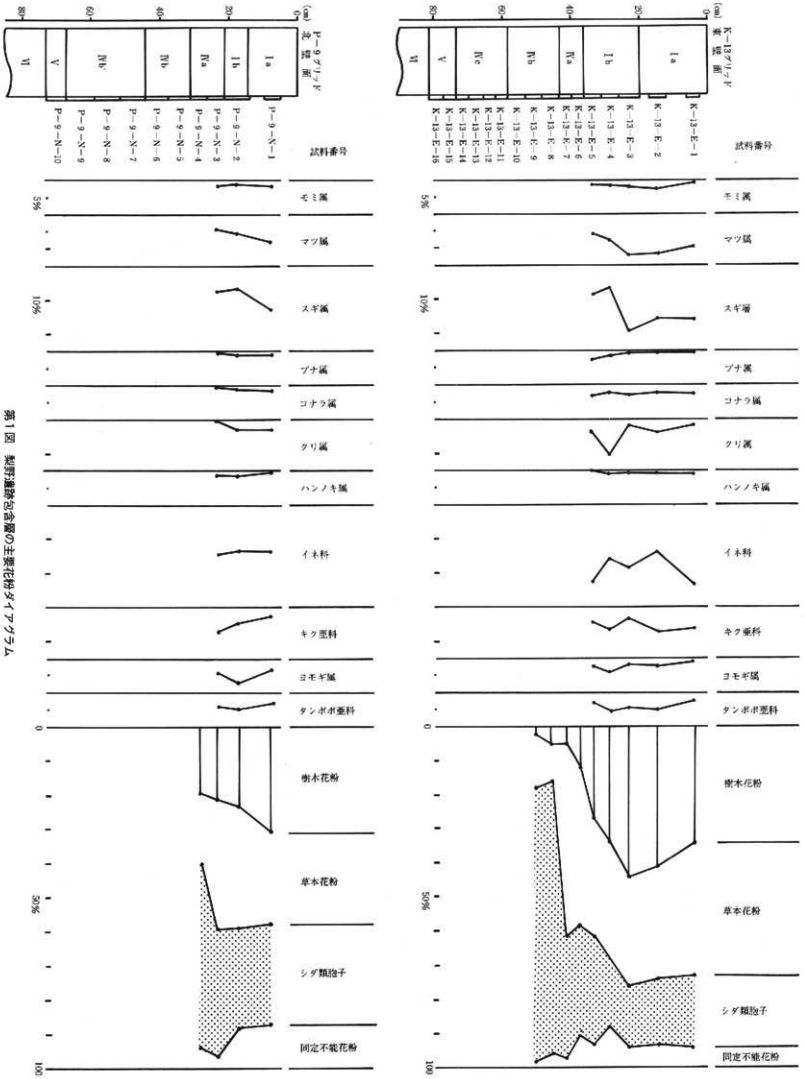
700倍

1：マツ属　K－13－E－4
2：マツ属　K－13－E－8
3：スギ属　K－13－E－3
4：スギ属　K－13－E－4
5：ブナ属　K－13－E－4
6：コナラ属　K－13－E－8
7：クリ属　K－13－E－7
8：ハンノキ属　K－13－E－8
9：ケヤキ属　K－13－E－4
10：イネ科　K－13－E－7
11：セリ科　K－13－E－4
12：アカザ科　K－13－E－2
13：キンポウゲ科　K－13－E－5
14：ナデシコ科　K－13－E－1
15：キク亜科　K－13－E－4
16：キク亜科　K－13－E－1
17：羊歯類胞子　K－13－E－7
18：羊歯類胞子　K－13－E－1
19：羊歯類胞子　K－13－E－5
20：羊歯類胞子　P－9－N－1
21：羊歯類胞子　K－13－E－2

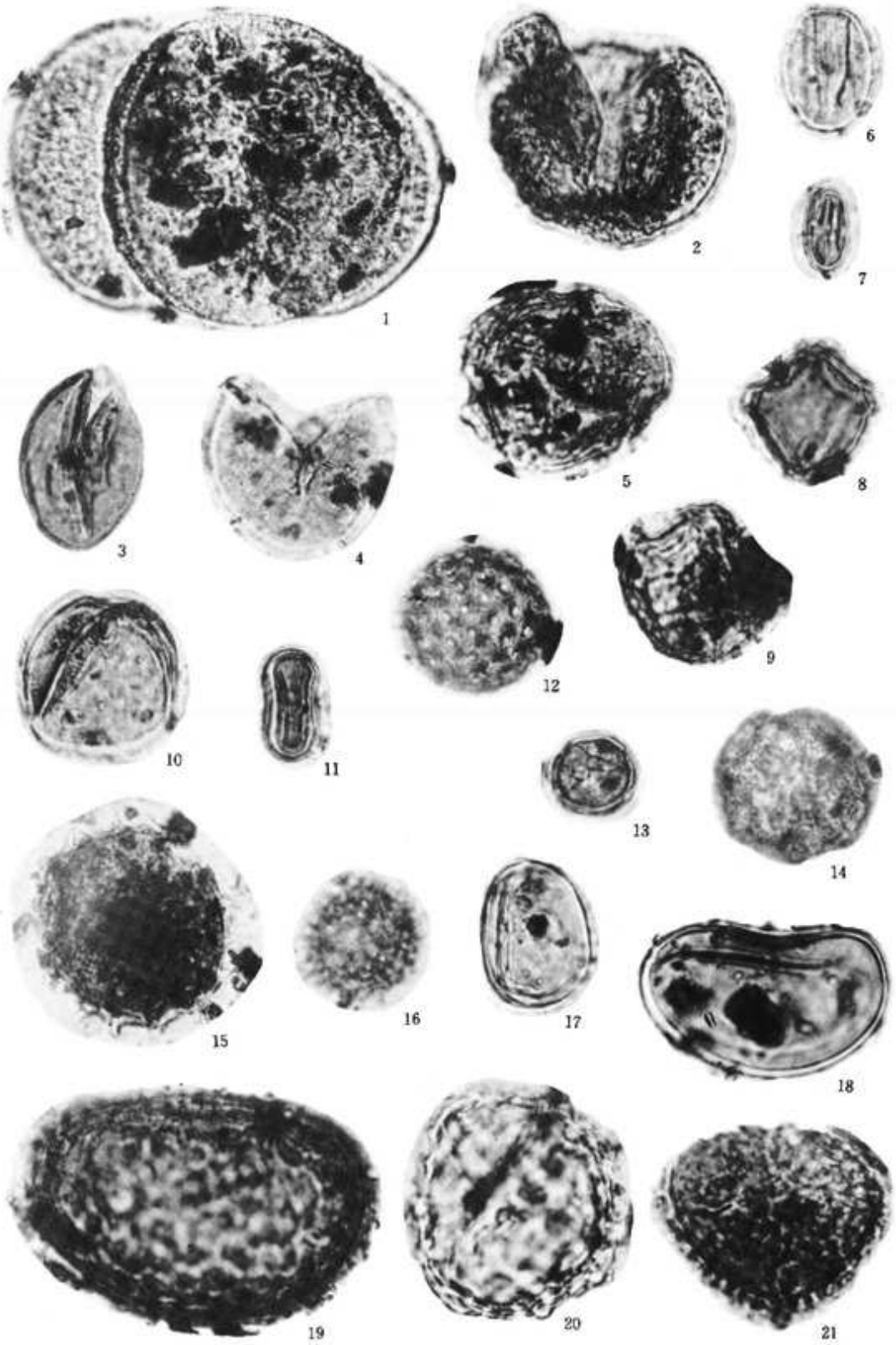
第1表　梨野A遺跡包含層の花粉・胞子出現率表

試料番号＼花粉・胞子	Pinus (マツ属)	Abies (モミ属)	Cryptomeria (スギ属)	Fagus (ブナ属)	Quercus (コナラ属)	Castanea (クリ属)	Alnus (ハンノキ属)	Betula (カバノキ属)	Carpinus (クマシデ属)	Corylus (ハシバミ属)	Juglans (クルミ属)	Pterocarya (サワグルミ属)	Zelkova (ケヤキ属)	Salix (ヤナギ属)	Acer (カエデ属)	Rhus (ウルシ属)	Aesculus (トチノキ属)	Ilex (モチノキ属)	Tilia (シナノキ属)	Prunus (サクラ属)	Styrax (エゴノキ属)	Ligustrum (イボタノキ属)	Oleacae (モクセイ科)	Viburnum (ガマズミ属)	Gramineae (イネ科)	Cyperaceae (カヤツリグサ科)	Liliaceae (ユリ科)	Araceae (サトイモ科)	Persicaria (タデ属)	Chenopodiaceae (アカザ科)	Caryophyllaceae (ナデシコ科)	Ranunculaceae (キンポウゲ科)	Rosaceae (バラ科)	Sanguisorba (ワレモコウ属)	Leguminosae (マメ科)	Myriophyllum (フサモ属)	Umbelliferae (セリ科)	Valerianaceae (オミナエシ科)	Carduoideae (キク亜科)	Artemisia (ヨモギ属)	Cichorioideae (タンポポ亜科)	Indeterminable pollen (同定不能)	Pteridophyta (シダ類胞子)	AP (樹木花粉)	NAP (草本花粉)
K−13−E−1	9.8	1.0	15.7	0.5	2.8	1.7	1.0	0.3	0.5	–	–		0.2	0.2	–	0.2	–	–	–	–	–	0.5		0.3	23.2		–	–	–	1.7	1.0	0.7	–	–	–	–	0.3	0.2	6.6	1.6	3.0	5.6	21.3	34.8	38.3
−2	11.5	2.9	15.3	0.8	2.1	3.9	0.6	–	0.4	–			0.6	0.2	0.2	0.2	–	–	–	0.2	1.4	0.4	-	0.4	13.8		0.6	–	–	1.0	0.6	1.0			0.2	–	0.2	–	7.6	2.3	5.4	6.6	19.4	41.2	32.8
−3	12.0	2.0	19.5	0.9	3.1	1.8	0.7	0.4	0.2	–	0.7		0.9	0.4	0.2	–	–	–	–	–	0.2	0.9		0.4	18.8					1.1	0.4	1.6		0.2		–	0.2	–	3.3	2.0	4.7	5.3	18.0	44.3	32.4
−4	7.3	1.7	6.6	1.7	2.9	10.6	0.9	0.3	0.3	–	–	–	0.5		0.3	0.2	0.2	–	–	–	0.2	0.2	–	0.7	15.9	–				0.3	0.9	–	–	0.2	0.3		0.3	–	6.9	4.3	5.7	11.8	18.6	34.6	35.0
−5	5.7	1.7	8.6	2.7	3.1	3.4	–	–	0.5	0.5	–	–	0.5	0.3	–			–	0.3	–	–	–	–	0.3	22.9	1.0	–	–	–	–	–	0.5	–	–	–	–			4.4	2.6	3.1	6.3	31.8	27.3	34.6
−6	+		+	+	+	+	–		–								+						+	+	+				–						+		+		+	+	+	2.8	98	34	144
7	+	+	+	+	+	+																			+				–										+	+	+	11	179	27	280
8	+		+	+	+		+																		+	+			–										–	–		13	255	17	34
9	+		+							+					+										+														–	–		4	194	6	38
10	+		+	+	+		+																		+														–		+	5	78	5	30
−11			+																																							5	16	1	0
−12	+		+		+																				+														–		–	2	8	5	8
−13																									+														–	+		4	2	0	6
−14																									+																	2	6	0	2
−15			+																						+																	4	2	1	2
−16	+																								+																	6	4	0	0
P−9−N−1	8.3	1.9	13.0	1.1	1.9	3.1	0.8	0.3	0.1	0.1	–	–	–	0.1	–	–	–	–	–			–	–	0.1	13.9	0.3	–	0.6		0.6	0.8	0.8	0.1	–	0.1	0.1	0.1	–	3.1	3.2	3.2	12.5	29.5	30.9	27.2
−2	5.8	1.1	7.7	1.1	2.0	3.2	1.7	0.1	0.1		0.2	0.2	0.2	–	0.1	–	0.1	–	–	0.1		0.1	–	0.2	13.9			0.7	0.1	0.2	0.1	1.2	0.1	0.1	0.8	–	–	0.1	5.2	7.6	4.9	11.2	29.7	23.8	35.3
−3	4.8	1.4	7.9	0.6	1.7	–	1.7	–	1.1		0.6	–	0.6	–	0.3	–	–	0.3	–	–	–			0.6	14.4		0.8		1.1	0.8	1.1	1.7	–	–			1.7	0.6	7.1	4.5	4.5	3.4	36.7	21.5	38.4
−4	+	+	+	+	+		–	+	+				+			–		+	+					+	+							+							–	+	–	11	103	38	39
−5			+		+				+																+	+	+												–	+		2	17	3	21
−6	+		+																						+																	2	6	2	1
−9	+		+	+				+			+							+							+							+							–	–	–	2	18	11	17

K−13−E−6〜K−13−E−16およびP−9−N−4〜P−9−N−9の試料については検出された属または科を＋で示し、数字は産出個数を表わす。



第1図　梨野遺跡包含層の主要花粉ダイアグラム



梨野A遺跡包含層中の主要花粉

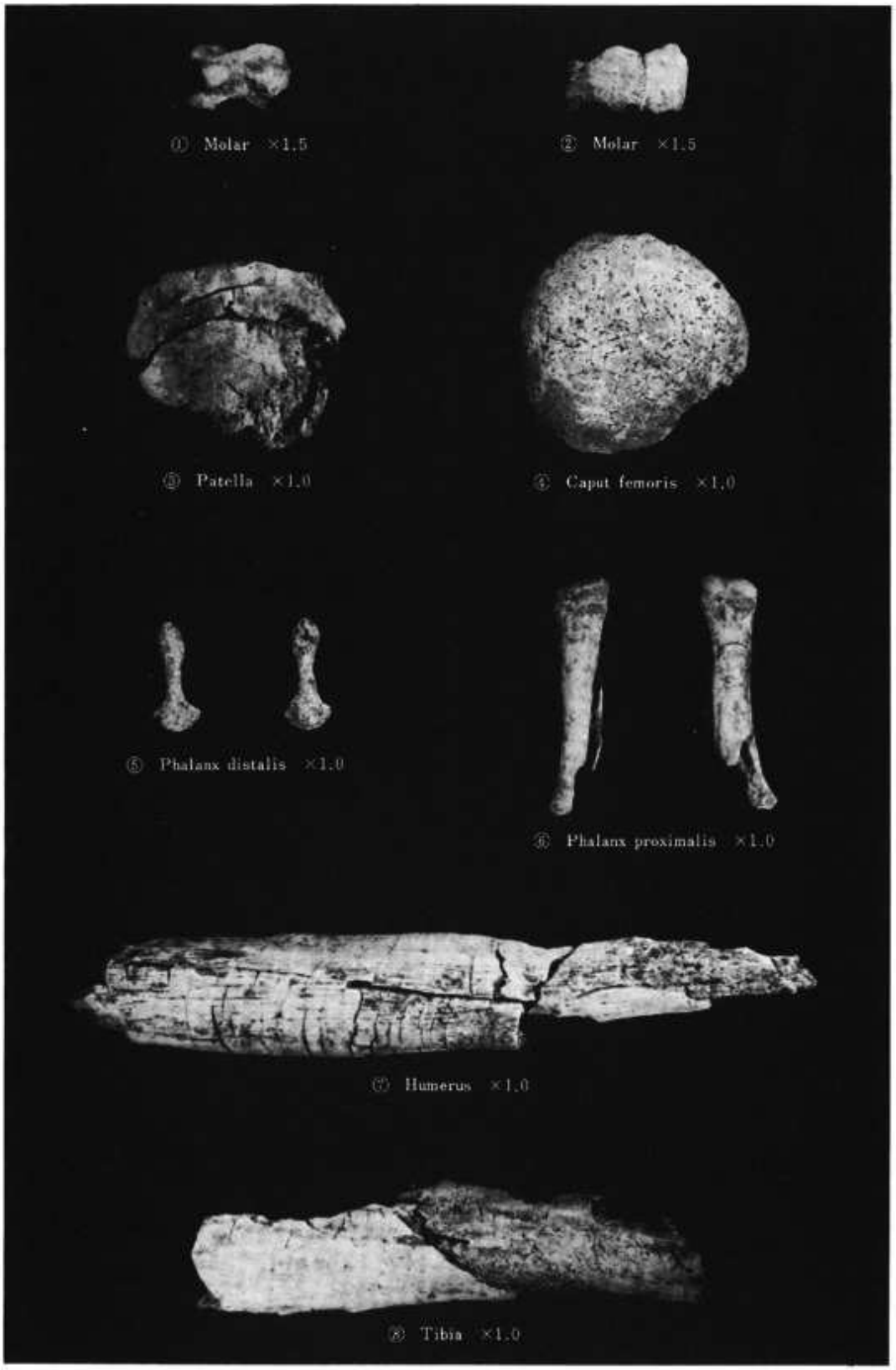
沼原C遺跡出土の骨片

東北大学大学院院生 高 橋 理

沼原C遺跡の1号土壙出土の骨片は、ヒトとニホンザルのものであることが確認された。これらの骨は焼かれており、細片化し、かつ熱によって相当にゆがんでおり、原形のカーブを保持し得ている例はほとんどなかった。細片化している骨は可能な限り、復元したが、それによって判別できた大きな骨は多くはなかった。

番号	同定部位		計測値 (mm)
③	膝蓋骨 左 (Patella)	ヒト	27.6×31.6
—	末節骨 (Phalanx distalis)	ヒト	全長 17.8 底部関節面 8.1×5.5
—	基節骨 (Phalanx proximalis)	ニホンザル	残存部長 32.2 頭部関節面 ×6.0
—	基節骨 (Phalanx proximalis)	ニホンザル	残存部長 23.6 頭部関節面 ×6.2
—	基節骨 (Phalanx proximalis)	ニホンザル	残存部長 20.1 頭部関節面 6.9×4.5
—	末節骨 (Phalanx distalis)	ヒト	全長 17.1 底部関節面 8.6×5.2
—	中節骨 (Phalanx media)	ニホンザル	残存部長 4.4 頭部関節面 ×6.6
①	大臼歯(破片) (Molar)	ヒト	残存部歯冠高 6.9
⑤	末節骨 (Phalanx distalis)	ヒト	全長 17.3 底部関節面 7.5×4.1
②	第2大臼歯(下顎?) (Molar)	ヒト	残存部歯冠高 7.6
—	末節骨 (Phalanx distalis)	ヒト	残存部長 10.0
—	末節骨 (Phalanx distalis)	ヒト	全長 17.4 底部関節面 8.3×5.4
—	基節骨 (Phalanx proximalis)	ヒト	残存部長 12.2 頭部関節面 8.9×4.8
—	臼歯(破片) (Molar)	ヒト	
—	下顎骨右関節突起及び下顎骨頭の一部 (Processus condylaris, Caput mandibulae)	ニホンザル	
④	大腿骨頭 (Caput femoris)	ヒト	残存部 34.5×35.4
⑥	基節骨 (Phalanx proximalis)	ヒト	残存部長 37.2 頭部関節面 8.9×5.2
⑧	脛骨 (Tibia)	ヒト	
⑦	上腕骨 (Humerus)	ヒト	

第1表 骨片同定表


① Molar ×1.5
② Molar ×1.5
③ Patella ×1.0
④ Caput femoris ×1.0
⑤ Phalanx distalis ×1.0
⑥ Phalanx proximalis ×1.0
⑦ Humerus ×1.0
⑧ Tibia ×1.0

1号土壙出土骨片

梨野A・沼原A・嶺山C各遺跡のC14年代測定結果

社団法人　日本アイソトープ協会
パリノ・サーヴェイ株式会社

第1表　C14年代測定結果一覧表

内容	遺跡記号		遺物No	遺構名	層位	時代	C14 Code	C14 5730年半減期	C14 5568年半減期
炭化物	梨野A	C-180	3031	2号住居	炉堆積土	縄文中期後葉（大木9）	N-4430	3410±100 yb.p.	3320±95yb.p.
炭化材	梨野A	C-180	3022	7号土壙	堆積土	縄文晩期後葉	N-4431	2560±80yb.p.	2480±75yb.p.
炭化物	梨野A	C-180	3036	2号埋設土器	埋土	縄文後期初頭	N-4432	3920±85yb.p.	3810±80yb.p.
炭化材	沼原A	C-247	（2）	1号住居	床面	平安	N-4433	1280±85yb.p.	1250±80yb.p.
炭化材	嶺山C	C-249	1012（7）	西平坦面西側施設	底面	平安	N-4434	1200±60yb.p.	1160±60yb.p.

梨野A遺跡試料リン分析結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試　料

試料は、梨野遺跡の遺構を主とし採取したものである。試料表参照

2．分析方法

○試料を100℃で定量になるまで乾燥し粉砕する。

○1.00mgを測りとり、10mℓの$HClO_4$を加え加熱分解する。

○遠心分離により分解液と不溶物に分ける。

○不溶物に水を加え遠心分離し洗浄液と分ける。

○洗浄液と分解液を100.00mℓにし、この内15.00mℓを10%のフェロシアン化カリ3mℓでかくはんする。

○さらに2.5mℓのM_nSO_4（10%）を加えFeを沈澱させる。

○アンモニア水をpH6.8～6.9になるまで加える。

○2NH_2SO_4を1.75mℓ加えpHを3.0にする。

○水を加え遠心分離し験液を得る。

○モリブデン酸法で濃度をよみとる。

3．分析結果

分析結果は分析資料リストに従い作成した。

○4号ピット

No1は、小型鉢形土器内よりの試料で、他の堆積土試料よりP_2O_5の濃度は低い。しかしNo3、No4の底面、壁面、No5の周辺の検出面の土試料よりは濃度は高く、何らかの要因が考えられる。

○基本層

No6～9の基本層位の試料は、濃度の差が激しく上から下にその数値は減少している。No6～9においてリン酸の濃度が減じることは、現在までその地点がどのように使用されてきたかによるものと思われる。

○7号土壙

土器内試料はP2、P1、P3の各土器内からNo13、14、15の3点である。濃度は、P2が高くP1、P3は1.00mg/gを下まわる。しかし4号ピットのNo1よりは高い数値を示している。しかもNo10を除けば、底面直上の堆積土、底面の土よりは高く4号ピットより土壙墓の可能性は強いと考えられる。

○2号埋設土器

No16は、0.826mg/g と基本層位のⅣa～Ⅴ層よりも高い値を示している。他の遺構と比較するとほぼ同じ程度の値である。

第1表　リン分析試料表

試料No	遺跡名(記号)	地区名	遺構名	サンプリング箇所	分析値P_2O_5 mg/g
1	梨野A(C－180)	K－7	4号ピット	土器内	0.604
2	梨野A(C－180)	K－7	4号ピット	堆積土	0.669
3	梨野A(C－180)	K－7	4号ピット	底面	0.548
4	梨野A(C－180)	K－7	4号ピット	壁面	0.418
5	梨野A(C－180)	K－7	―――	4号ピット周辺の検出面	0.436
6	梨野A(C－180)	K 7	―――	基本層Ⅰa層	1.77
7	梨野A(C－180)	K－7	―――	基本層Ⅲ層	0.938
8	梨野A(C－180)	K 7	―――	基本層Ⅳb層	0.799
9	梨野A(C－180)	K－7	―――	基本層Ⅴ層	0.585
10	梨野A(C－180)	K－13	7号土壙	堆積土上部	1.00
11	梨野A(C－180)	K－13	7号土壙	底面直上の堆積土	0.780
12	梨野A(C－180)	K 13	7号土壙	底面の土	0.678
13	梨野A(C－180)	K－13	7号土壙	P2土器内	1.14
14	梨野A(C－180)	K－13	7号土壙	P1土器内	0.854
15	梨野A(C－180)	K 13	7号土壙	P3土器内	0.966
16	梨野A(C－180)	K－12	2号埋設土器	土器内(底部付近)	0.826
17	梨野A(C－180)	K－13	―――	基本層Ⅰa層	3.54
18	梨野A(C－180)	K－13	―――	基本層Ⅰb層	1.34
19	梨野A(C－180)	K 13	―――	基本層Ⅳa層	0.650
20	梨野A(C－180)	K 13	―――	基本層Ⅳb層	0.696
21	梨野A(C－180)	K－13	―――	基本層Ⅳc層	0.539
22	梨野A(C－180)	K－13	―――	基本層Ⅴ層	0.585

周辺遺跡の表採資料

――門野山囲遺跡・嶺岸遺跡――

門野山囲遺跡および嶺岸遺跡の表採資料

1．門野山囲遺跡（C－182）　所在地：仙台市茂庭字門野山囲

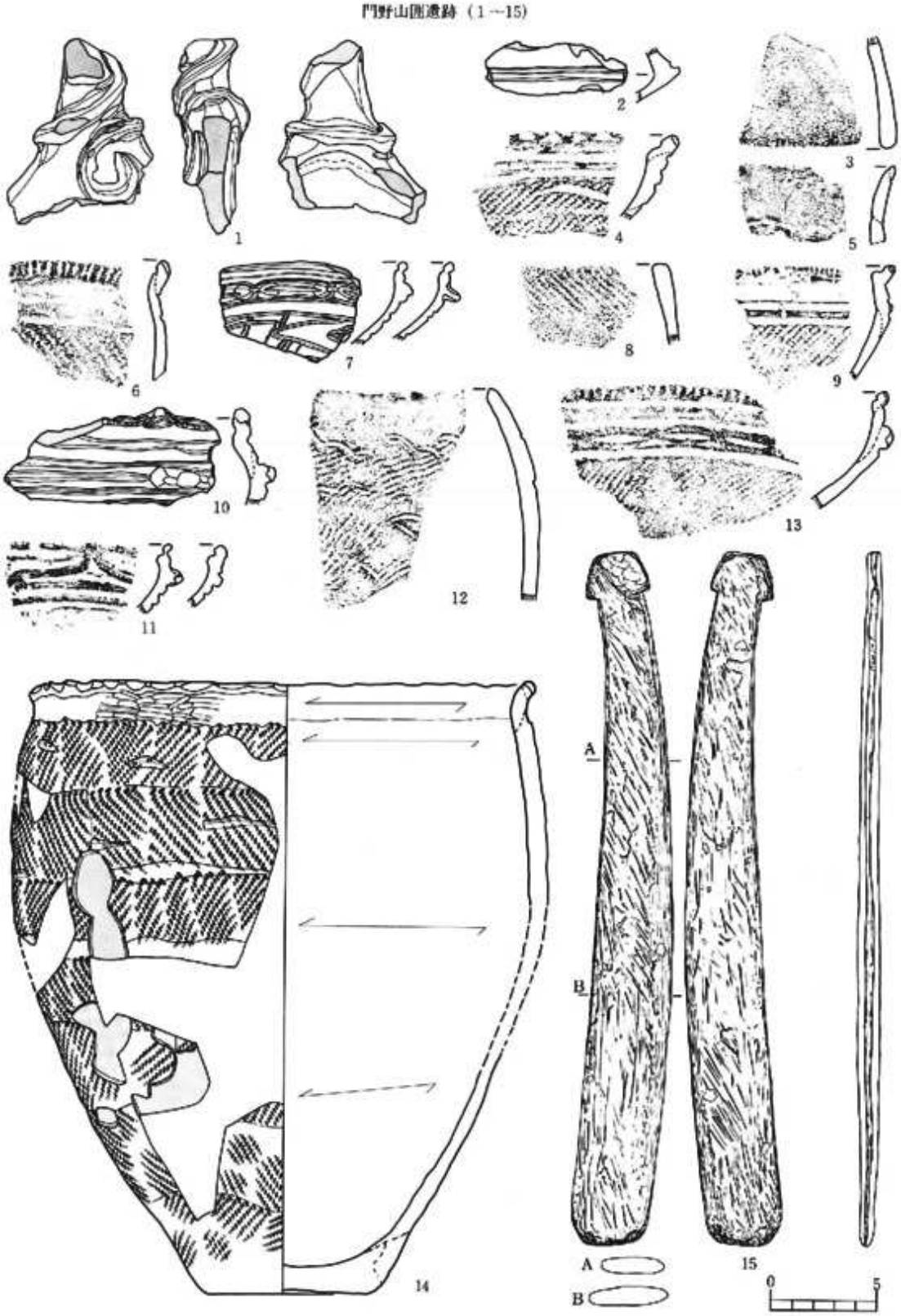
門野山囲遺跡は岩ノ川が茂庭丘陵地より生出低地へ移行する右岸に位置し、丘陵東側末端部、の緩斜面上に立地する。標高75～85m。岩ノ川との比高は約5mである。現在は畑地として利用されている。

掲載資料は地主、板山喜蔵氏が農作業中に発見し、保管していたものである。

〈出土遺物〉土器と石器が出土している。土器は縄文時代後期中葉および、晩期中葉に属する。晩期中葉の資料中には、ほぼ完形な深鉢形土器（第1図14）1点が含まれる。石器の資料中では完形の石刀（第1図15）1点が出土している。

1．門野山囲遺跡遠景（岩ノ川左岸東方から撮影）

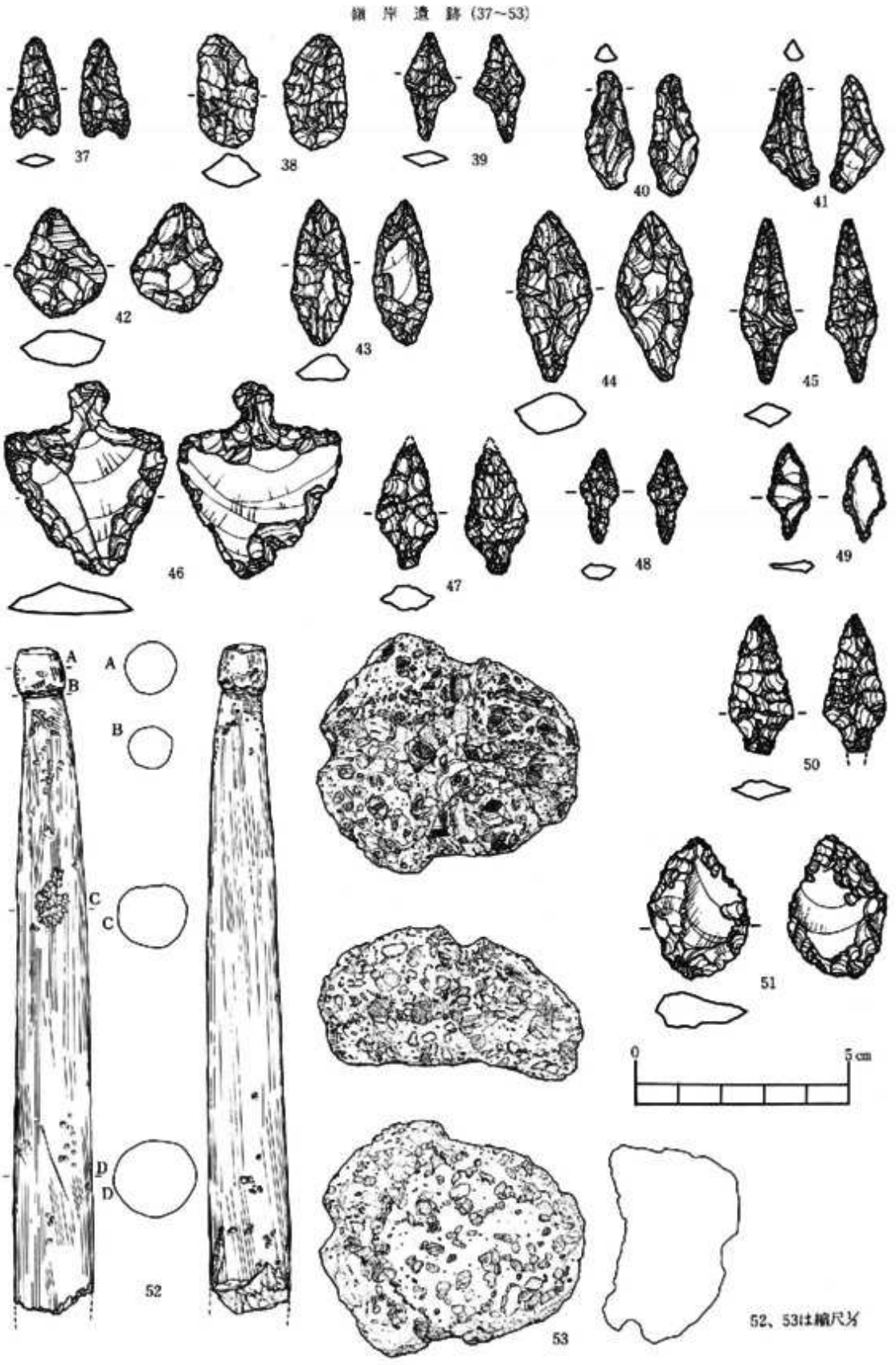
2．嶺岸遺跡遠景（東方から撮影）



第1図　表　採　資　料（1）

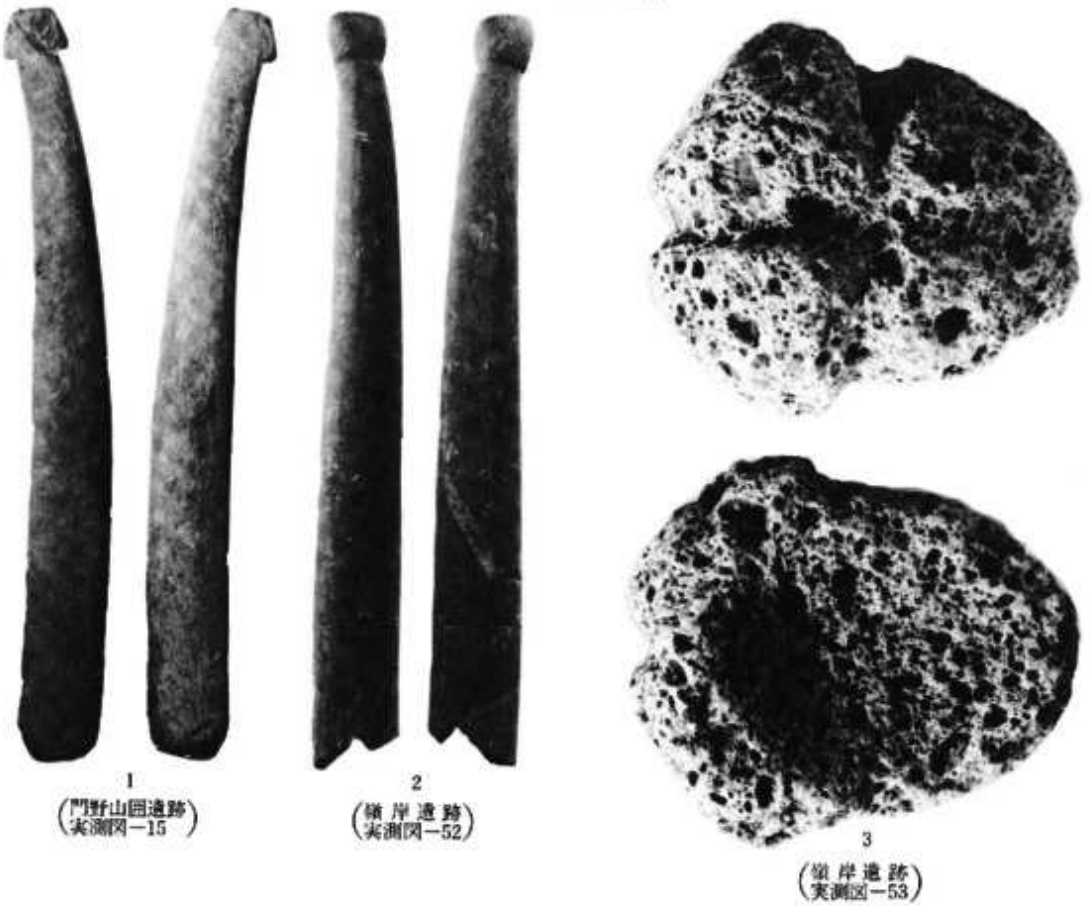
海岸遺跡（1～36）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10
0
5cm

第2図　表採資料（2）


磯 岸 遺 跡 (37~53)
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
A
B
C
D
52
0
5cm
52、53は縮尺¼
53

第3図 表 採 資 料 (3)

門野山囲遺跡、嶺岸遺跡



1
(門野山囲遺跡
実測図－15)

2
(嶺岸遺跡
実測図－52)

3
(嶺岸遺跡
実測図－53)

門野山囲遺跡土器観察表

図	器形	部位	口縁形状	口(台)径(cm)	縄文	時期	備考
1	?	把手部	—	—	—	後期中	—
2	深鉢?	体部	—	—	—	後期中?	—
3	?	台部	—	10	—	晩期前?	—
4	皿	口縁部	平縁(刻み目)	?	LR ⊢	晩期中	—
5	壺?	口縁部	平縁	8	—	晩期?	—
6	深鉢	口縁部	平縁(刻み目)	18	RL ⊢	晩期中	炭化物付着
7	浅鉢	口縁部	平縁	22	LR	晩期中	—
8	深鉢	口縁部	平縁	26	RL ⊢	晩期?	炭化物付着
9	鉢	口縁部	突起(刻み目)	12	LR ⊢	晩期中	—
10	浅鉢	口縁部	突起(刻み目)	22	—	晩期中	—
11	浅鉢	口縁部	平縁	16	LR	晩期中	—
12	深鉢	口縁部	平縁	26	L ⊢ あやくり	晩期中	—
13	浅鉢	口縁部	平縁(刻み目)	26	LR ⊢	晩期中	—
14	深鉢	口縁～底部	平縁(刻み目)	24	LR、RL ⊢ 羽状	晩期中	—

第4図　表採資料(4)

嶺岸遺跡土器観察表

図	器形	部位	口縁形状	口(台)径(cm)	縄文	時期	備考
1	?	口縁部	平縁?	?	無文	?	—
2	深鉢?	口縁部	平縁?	?	無文	?	—
3	浅鉢?	体部	—	—	—	後期中	—
4	?	体部	—	—	—	後期中	—
5	鉢?	口縁部	平縁	11	LR?	後期?	—
6	?	体部	—	—	LR?	後期中	—
7	深鉢	口縁部	平縁	26	RRL ↦	後期後	—
8	深鉢?	体部	—	—	LR	後期後	—
9	?	突起(口縁)	突起	?	LR	後期後	—
10	?	口縁部	突起	?	—	後期後	—
11	深鉢?	口縁部	突起	?	—	後期後	—
12	深鉢	口縁部	突起	?	LR ↦	後期後	—
13	深鉢	突起(口縁)	突起	?	LR充填	後期末	—
14	深鉢	口縁部	波状	?	LR?	後期末	—
15	深鉢	口縁部	波状	?	LR ↦	晩期前	—
16	深鉢?	体部	—	—	LR ↦	後期後～晩期	—
17	深鉢	口縁部	平縁	28	LR ↦ 帯状	後期後?	—
18	?	体部	—	—	LR	後期～晩期	—
19	深鉢	口縁部	平縁	28	—	後期～晩期	—
20	深鉢?	体部	—	—	LR	後期～晩期	—
21	深鉢?	口縁部	波状	?	—	後期後～晩期前	—
22	壺?	体部	—	—	LR ↦	後期～晩期	炭化物付着
23	壺	体部	—	—	LR	後期後	—
24	?	体部	—	—	LR充填	後期～晩期	—
25	?	台部	—	?	—	晩期?	—
26	鉢?	口縁部	平縁	12?	LR ↦	晩期前	—
27	皿	口縁部	平縁(刻み目)	?	?	晩期中	—
28	鉢	口縁部	小波状?	?	LR ↦	晩期中	—
29	深鉢	口縁部	平縁	?	RL ↦	晩期?	—
30	深鉢	口縁部	平縁	?	RL ↦	晩期?	—
31	浅鉢?	底部	—	—	—	晩期前	いわゆる精製土器、赤色物質付着
32	?	台部	—	5	—	晩期中?	—
33	皿	口縁部	平縁	12?	—	?	磁器、内面に櫛描波状文

2．嶺岸遺跡（C－251）　所在地：仙台市茂庭字嶺岸

嶺岸遺跡は門野山開遺跡の北東約50mの対岸、岩ノ川左岸に位置し、丘陵南側末端部の緩斜面上に立地する。標高75～80m。岩ノ川との比高は約10mである。遺跡の北西約50mの地点には西館がそびえる。遺跡の現況は、宅地と畑地から成る。

掲載資料は地主、嶺岸盛氏が畑地耕作中に採集し、仙台市に寄贈したものである。

〈出土遺物〉土器、磁器、石器が出土している。土器は縄文時代後期中葉から晩期中葉までのほぼ連続した時期に属す。磁器は破片資料1点のみ出土している。石器の資料中では石棒（第3図52）1点が出土している。

以上、隣接した門野山囲遺跡、嶺岸遺跡からは多くの出土遺物が認められ、その多くが縄文時代後期中葉から晩期中葉の時期に属する。両遺跡とも生出低地を一望出来る丘陵末端のほぼ平坦面にちかい比較的広い緩斜面上に立地しており、上記時期の集落跡を十分期待出来る立地条件である。

また、嶺岸遺跡出土の磁器片は、隣接地に西館が位置することより、館跡との関連も十分に考えられる。

これら資料を報告するにあたり、板山喜蔵氏ならびに嶺岸盛氏の御好意に対し、深く感謝の意を表する次第である。

佐藤広史（東北大学大学院院生）・佐藤甲二

考察・まとめ

沼原・嶺山地区の層位関係と土壙・土壙群について

沼原A・嶺山C遺跡の土師器、赤焼土器、須恵器

茂庭造成団地工事地内遺跡群について

沼原・嶺山地区の層位関係と土壙・土壙群について

1．各遺跡間の層位関係

沼原・嶺山地区では6遺跡11地点の調査が行なわれた。これらの中には基本層位において共通する関係が認められる地点が数ヶ所ある。沼原A遺跡の層位によりその概略を述べることにする。沼原A遺跡ではⅠ層表土～Ⅶ層地山層までの層位が認められ、これらの層の中でⅤa層は鍵層となる灰白色火山灰[註1]である。当遺跡では土壙に灰白色火山灰が堆積しているものが多く、9号土壙3層の灰白色火山灰の分析を行なった。(分析は東北大学農学部、庄子貞雄・山田一郎両氏に依頼した。)結果は下表の通りであり、重鉱物含量は2％と極めて少なく、重鉱物組成においてシン輝石が大半を占め、軽鉱物組成では火山ガラスが圧倒的に多いことなどにより、宮城県各地（岩沼以北）に見られる灰白色火山灰と同一のものと同定された。

第1表　沼原A遺跡の灰白色火山灰の分析結果

一次鉱物組成（0.1～0.2mm）

重鉱物組成（粒数%）				軽鉱物組成（粒数%）				重鉱物含量(wt%)
シン輝石	普通輝石	普通角閃石	強磁性鉱物	斜長石	石英	火山ガラス	風化粒	
61	9	2	28	2	1＞	97	1＞	2

火山ガラスの形態※（0.1～0.2mm）（粒数%）

カスプA	カスプB	カスプC	繊維状	平板状	ペリー
45	29	16	7	1	2

※　カスプ型：無色で鋭角な多数の角をもつものをいい、気胞がないか極めて少ないガラスをA型多いものをC型、中間のものをB型とした。
繊維状型：繊維が束状になっているようにみえるガラス。
平板状型：板状のガラスで、カスプ型や繊維状型より厚みがある。
ペリー型：有色（黒褐色～茶褐色）で、内部に多数の微結晶をもつ。

庄子・山田両氏によれば、灰白色火山灰の降下年代は火山灰直下の泥炭（古川市において採取）のC^{14}年代：1170±80B.P.から約800年A.D.より新しいとしている[註1]。また白鳥氏は陸奥国分寺の白土層の年代が七重塔の焼失年代等から10世紀前半頃の可能性を指摘し、この白土層が多賀城の灰白色火山灰と同一のものと認識されていることから、年代をほぼ10世紀前半ごろと推定している[註2]。

沼原A遺跡における各層の遺物出土数量はP.36第1表により明らかであり、Ⅰ・Ⅱ層に縄文土器・土師器、Ⅲ層がほとんど遺物を含まず、Ⅳ層、Vb層は縄文土器、弥生土器、土師器が混在しており、Ⅵ層は10数片の土師器と1片の弥生土器を除き他は全て縄文土器である。当遺跡で出土している土師器は各層とも表杉ノ入式である。Ⅵ層中の縄文土器は時期的には縄文時代前期～晩期まで含んでおり、その形成された時期は縄文時代晩期以降と考えられるが、第1地点ではほぼ完形の大洞B式の鉢（第28図8 365頁）がⅥ層中から出土しており、Ⅵ層の形成年代は晩

期の可能性が高い。またVa層灰白色火山灰の年代は古くとも9世紀であることからⅣ層は平安時代に形成された層であり、Vb層は縄文時代晩期以降、平安時代以前に形成された層である。Ⅰ～Ⅲ層については明確な年代は不明であるが、平安時代以降現代までに形成された層である。これらのことから沼原A遺跡の形成年代による層位区分は地山層を除き層相、出土遺物により以下のようにA～Eの5層に大別される。

A層：平安時代以降、現代まで……Ⅰ～Ⅲ層の暗褐色～黒褐色土層

B層：平安時代……Ⅳa・Ⅳb層の黒褐色～黒色土層

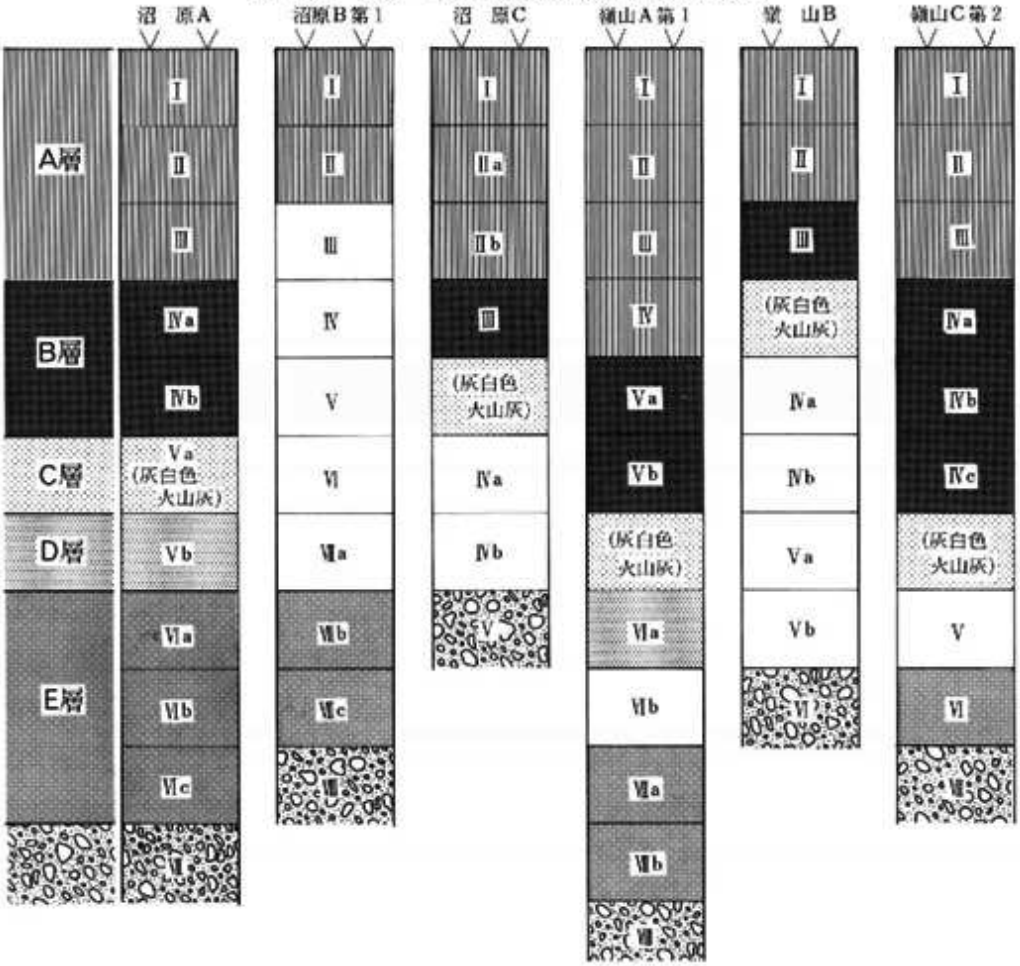
C層：平安時代……Va層の灰白色火山灰層

D層：縄文時代晩期以降、平安時代以前……Vb層の暗褐色土層

E層：縄文時代晩期以降、平安時代以前……Ⅵa・Ⅵb層の黒褐色土層＋Ⅵc層の褐色土層

この沼原A遺跡における層位関係は嶺山A遺跡第1地点でほぼ同様に見られ、他の遺跡でも部分的に認められる。各遺跡間の基本層の対応関係は第1図の通りである。また沼原B遺跡第

第1図　沼原・嶺山地区の基本層位対応関係



２地点、嶺山Ｃ遺跡第１・第３地点では対応関係は見出せない。（灰白色火山灰の堆積状況は、一定の層厚を保って遺跡全面に見られるわけでなく、下層のやや凹んだ所に部分的に堆積しているが、第１図では便宜的に１つの層として扱った。）

これらの対応関係の中でＥ層とされた黒褐色土層（十褐色土層）は沼原Ａ遺跡第１・第２地点、沼原Ｂ遺跡第２地点、嶺山Ａ遺跡第２地点、嶺山Ｃ遺跡第２地点において見られ、全て最下層であり縄文時代の遺物を含む層である。各地点Ｅ層の出土遺物の数量、及び時期の判明する点数は、沼原Ａ：総数312点、前期３点、中期４点、後期13点、晩期11点、沼原Ｂ：総数12点、中期１点、晩期３点、嶺山Ａ：総数４点、後期１点、後期～晩期３点、嶺山Ｃ：晩期１点である。各遺跡ともＥ層中の最も新しい時期の遺物は晩期の遺物であり、沼原Ｂ遺跡第２地点では細分層最下層のⅦb層から晩期の遺物を出土しており、嶺山Ｃ遺跡第２地点では、１点ではあるが、ほぼ完形の深鉢（第11図1 463頁）が出土していることから、Ｅ層は各地点で晩期に形成された層と考えられる。またＢ層は灰白色火山灰の存在及び、黒褐色～黒色を呈する層相から明瞭に他層と区別される。Ｂ層中からは沼原Ｂ・Ｃ遺跡、嶺山Ｂ遺跡では遺物は出土しなかったが、嶺山Ａ遺跡では１点ではあるが、表杉ノ入式の土師器の底部破片が出土（細分層Ⅴa層）、嶺山Ｃ遺跡では平安時代の製鉄遺構をＢ層が覆い、Ｂ層中から表杉ノ入式の土師器も数点出土しており、沼原Ａ遺跡同様平安時代に形成された層と判断される。またＤ層は嶺山Ａ遺跡で確認されたが遺物から明確な年代はわからない。

沼原、嶺山地区の各遺跡間でこのような層序の対応関係が見られることからＢ～Ｅ層の各層は降下火山灰層の２次堆積[※]により形成されたものであり、各層は各遺跡においてほぼ同時性を有しているものと考えられる。各層の細分層は２次堆積時の状況及び堆積後の腐植等の変化によるものと判断される。またＡ層も降下火山灰の２次堆積により形成された層と考えられ、層相から２～４層に分けられるが対応関係が不明であることから一つの層として扱っている。

さて、対象地区は新第三紀の梨野層堆積以降、洪積世には火山灰を堆積させながら開析を受けてきたが、ほぼ２万年前には巨大な崩壊[注3)]（地すべり）が起こり、現地形は、その後降下火山灰及び斜面等の梨野層の崩落による堆積や、開析などにより形成されたものである。沼原、嶺山地区における基本層Ａ～Ｅ層をのせる基盤となる地山層は斜面等から梨野層が崩壊、堆積したものである。沼原Ａ遺跡、沼原Ｂ遺跡第１地点、嶺山Ａ遺跡第２地点、嶺山Ｃ遺跡第２地点では地山層の上層に縄文時代晩期に形成されたＥ層があることからこれらの地点での地山層は晩期以前に形成されたものである。また、嶺山Ｂ遺跡では最下層Ⅴ層は縄文時代の遺物包含層であり、最も新しい時期の遺物が晩期であることから地山層の形成時期は晩期以前と判断され、最下層は大別層Ｅ層に対応するものと考えられる。

※P11注9参照

2．土壙・土壙群について

沼原・嶺山地区では、土壙の掘り込み面は地山層上面と考えられ、その後、E層堆積以前の地山層の新たな崩壊等は認められない。つまり、当地区においてE層が最下層に堆積している地点では、ほぼ生活面が残っているものと判断されるのである。これは、たとえ地山層上部が小規模な崩壊等により高所から低所へ滑動[註4]し、その際土壙上半をある程度損なったとしても、遺跡には崩れた地山層が広がることになり、少なくとも窪地である嶺山A遺跡には残るはずであるが、それが見られないことによる。またE層細分層最下層には地山層を部分的に含む地点はあるが、これはE層堆積時の滑動において、当時の地表面である地山層最上部を巻き込んだ結果によるものである。

当地区の土壙及び土壙群の検討については、各土壙を土壙の形態分類・堆積土・底部施設・出土遺物と時期の点から、土壙群としては長軸方向、土壙群の構成・立地と配列の点から行なうこととする。

土壙の形態分類

沼原・嶺山地区では縄文時代の土壙が沼原A遺跡で11基、嶺山A遺跡第1地点(以下「嶺山A遺跡」)で16基、嶺山B遺跡で1基、計28基検出[註5]されており、沼原A、嶺山A遺跡ではそれぞれ同一時期の土壙群と捉えられている。これら28基の土壙は「上端長軸」と「深さ」の関係から第1図に示すように形態から2大別される。これを、

Ⅰ類：　「深さ」＞1m　　「深さ÷上端長軸」＞0.5（傾き½以上）

Ⅱ類：　「深さ」＜65cm　　「深さ÷上端長軸」≦0.4（傾き⅔以下）

とする。Ⅰ類は従来「陥穴」[註6]・「陥し穴状遺構」[註7]・「Tピット」[註8]等と称されてきたもの(以下「陥穴等」)である。次に、上端平面形において「短軸÷長軸」の形態要素による分類を行いⅠ類をさらに1種と2種に分ける。

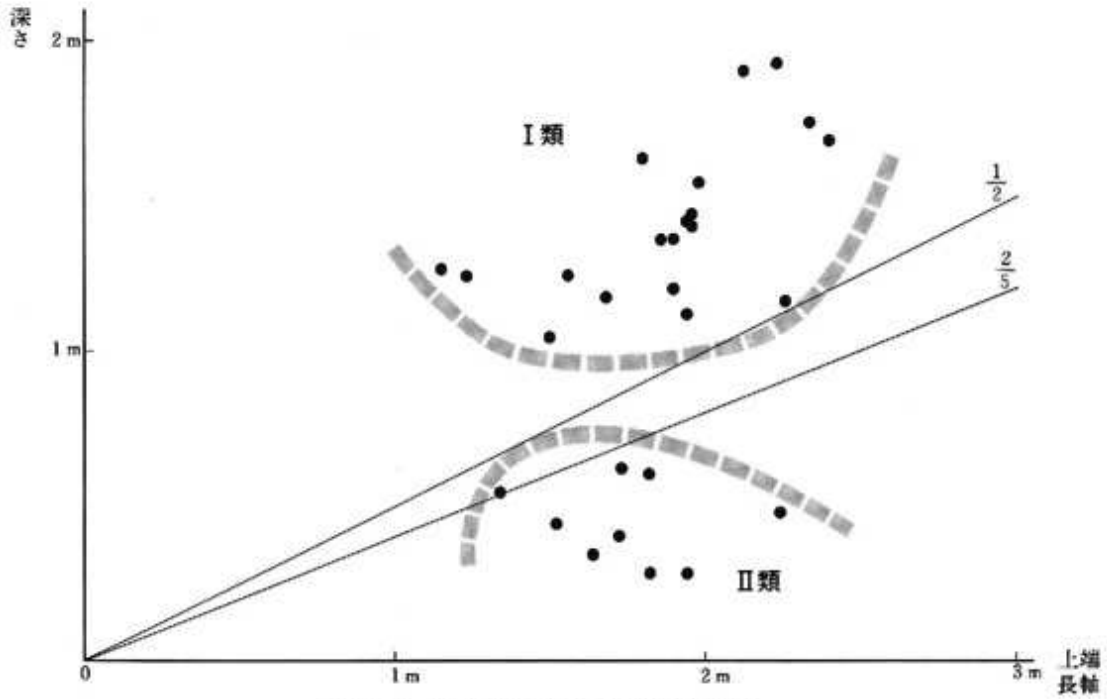
Ⅰ類1種：　「短軸÷長軸」≧0.9……円形(0.95、0.99)

Ⅰ類2種：　「短軸÷長軸」＜0.9……楕円形ないし隅丸長方形(0.40～0.79)

Ⅱ類　　：　「短軸÷長軸」＜0.9……楕円形、長楕円形、隅丸長方形(0.36～0.76)

数値的にはⅠ類2種とⅡ類の上端平面形は近似する。

Ⅰ類1種に属する土壙は沼原A遺跡7号土壙、嶺山A遺跡3号土壙の2基である。上端平面形は円形を基調としており、上半部は円筒状を呈するが下半部では序々に壙径が小さくなり一方向にオーバーハングする。オーバーハングの方向は共に標高の高い方へ引かれている。底部施設はない。後者が土壙中位に段を有する点両者に差異はあるが、ほぼ同じ形態の土壙である。円形の土壙は神奈川県霧ヶ丘遺跡で3基検出され、今村氏によりF・G・H型に分類されている[註9]。他には青森県長七谷地7号遺跡で「陥し穴状遺構」として3基、東京都神谷原遺跡で「落し



第2図　土壙の上端長軸と深さの関係

穴」として5基検出されているほか[注10]、千葉県星谷津遺跡[注11]などでも検出されている。当地区Ⅰ類1種はこれらの中で今村氏のG類に近似するが、土壙下半の形態が異なる。平面形が円形を基調とする土壙は「陥穴等」の中では検出例は少なく、これは上部を削平された場合の残存形態や、貯蔵穴等と形態的に類似する点があることなど、「陥穴等」と判断するには困難な点もあるが、青森県鶏窪遺跡で長七谷地7号遺跡とほぼ同形態の土壙が16基検出されたとの報告[注12]もあり、今後類例は増加するものと考えられる。

Ⅰ類2種は沼原A遺跡で8基、嶺山A遺跡で8基、嶺山B遺跡で1基検出されている。上端平面形は楕円形及び隅丸長方形、下端平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈する。規模の点ではやや相違が認められる。これらの中には最下層に大別層最下層のE層及びE層対応層が堆積している土壙が4基ある。沼原A遺跡1号土壙、嶺山A遺跡5号・14号・16号土壙である。これらの土壙は遺棄形態（土壙が使用されなくなった直後の形態）を残しているものである。また他の土壙はほとんどのものが最下層に地山崩壊土が堆積し、その上に基本層及び基本層対応の層が堆積しており、最下層地山崩壊土は遺跡周囲の地山層の崩壊等による流入土ではなく、土壙の壁面の崩壊土と考えられることから、遺棄形態を残していないものと判断される。さて、これらの中で嶺山A遺跡16号土壙は中段をもたず、最下層E層対応層の堆積後にも壁面の崩壊は見られないことから構築形態をほぼ留めているものと判断される。また他の16基の土壙は中

段をもつことからⅠ類2種は以下の3つに分けられる。

①遺棄形態を残しており、中段をもたないもの……嶺山A遺跡16号土壙

②遺棄形態を残しており、中段をもつもの…沼原A遺跡1号土壙、嶺山A遺跡5・14号土壙

③遺棄形態を残しておらず、中段をもつもの…沼原A2～6･9･11、嶺山A1･7～9･13、嶺山B1

②・③の中段より下位は構築形態を残しているものと考えられる。つまり、①は構築時の形態を残したままで遺棄され、②は土壙が埋まりきるまで壁面の崩壊はほとんど起っておらず、構築形態を留めているとも考えられるが、使用中に壁面の崩壊が起こり、崩壊土を除去した後に遺棄された可能性もある。また③の遺棄形態が①か②かは不明である。Ⅰ類2種の構築時の形態には嶺山A遺跡16号土壙のように、上端平面形・下端平面形共に隅丸長方形であり、壁面は直線的にやや外傾するものが存在する。このことは他の中段をもつ土壙16基が、壁面の崩壊の程度に差があるにもかかわらず、中段の平面形が隅丸長方形を呈することから、その構築形態が嶺山A遺跡16号土壙に類似する可能性も指摘できよう。Ⅰ類2種の形態は上述の通りであるが、17基の土壙の中には底面にピットを有するものがある。沼原A遺跡2号・6号・9号土壙、嶺山A遺跡7号・8号土壙の5基である。また、土壙は全て梨野層が崩壊・堆積した層(地山層)を掘り込んでいるが、崩壊した梨野層中には凝灰岩が大きな単位で存在している所もある。嶺山A遺跡の7号・8号・13号土壙の下半部は極めて固い凝灰岩を掘り込んでおり、他の土壙に比べての労力は多大なものがあったはずである。土壙構築に際しては土壙が機能するための深さが必要とされたと考えられるが、嶺山A遺跡では深さは一定せず、上記の3基は凝灰岩をも掘り込んでいることから土壙の配置や構築時の上端平面形の規模により、ある一定の深さまで掘る必要があったものと推測される。

Ⅱ類は沼原A遺跡で2基(8号・10号土壙)、嶺山A遺跡で7基(2・4・6・11・12・15・16号土壙)検出されている。Ⅱ類は土壙内及び底面に種々の形態があり、ピット及び段のあるものがほとんどを占めるが、ないものも1基ある。上端平面形は長楕円形、楕円形、隅丸長方形を呈しており形態差が認められる。沼原A遺跡の2基は共に底面にピットが1基ずつあり、やや形態差はあるがほぼ同規模である。嶺山A遺跡では2号、4号、6号、15号、16号土壙は土壙内に段を有する。11号土壙では底面の2つの落ち込みをピットとしたが、段のある底面と考えられる。12号土壙にはピット及び段がない。また、これらの土壙には上端平面形が隅丸長方形のものがある。それは沼原A遺跡8号土壙、嶺山A遺跡2号・6号・11号土壙であり、Ⅰ類2種の嶺山A遺跡16号土壙における構築形態と類似すると考えられるがⅠ類に比べ浅い。これは嶺山A遺跡7号・8号・13号土壙では凝灰岩を掘り込んでいることから、技術的困難によるⅠ類構築放棄ではなく他のⅠ類土壙同様、Ⅱ類そのものに機能があることによると考えられる。

堆積土

検出された28基の土壙は壁面の崩壊等により断面図を示すことのできなかったものもあるが、全て自然堆積により埋まっており、堆積土は次の3つに分けられる。①地山崩壊土、②基本層及び基本層対応層(土質・色調等から基本層に対応するが、基本層と連続しない層ないしは混入物の相異によりこの名称を使用する。)③その他の層である。28基の土壙の最下層には①・②・③が見られる。土壙は遺棄された後、上に降下火山灰の2次堆積により順次埋まったものと解され、①が最下層に堆積しているものは土壙遺棄後、E層堆積以前に壁面の崩壊が起こったものと考えられる。Ⅰ類に多い。Ⅱ類にも2基あるが崩壊した土量はⅠ類に比べ極めて少ない。壁面の崩壊はE層堆積後にも火山灰の2次堆積と相前後しながら起こっているものもある。②が最下層のものは、Ⅰ類で4基、Ⅱ類で7基認められ、③は沼原A遺跡9号土壙にだけ見られる水平堆積層である。また堆積の過程では2次堆積に先行する1次堆積層の存在が考えられ、土壙が開口し上部をさえぎるものがない場合には土壙内に存在する可能性は高いが、土壙内堆積土において大別層D層、E層の1次堆積層を識別することはできなかった。

当地区では堆積土に焼土の見られる土壙が2基ある。沼原A遺跡1号土壙と嶺山A遺跡15号土壙である。前者では土壙遺棄後E層が堆積してできたくぼみに堆積しており土壙の機能していた時期とは異なる。焼面は認められない。後者では6層の地山崩壊土が堆積し、その上層に5層が堆積した時点でピットを掘った形跡があり、焼土はピットの下層にみられ、ピット底面となる6層上面には焼面が認められた。ピットはその後E層対応層により埋まっており、5層もE層対応層と考えられることから、使用された時期はE層が堆積している時期と判断される。土壙は遺棄後の堆積の過程ではくぼみとして存在していたわけであり、こうした焼土の存在は、土壙遺棄後の再利用といえる。またⅠ類では灰白色火山灰がレンズ状に堆積しているものもあり、土壙が完全に埋まりきるまでに1000年以上もの期間を有したことになる。

さて、「陥穴等」の堆積土では「霧ヶ丘」以来、土壙最下層に見られる層厚5～10cmの「水平堆積層」の存在が注意されてきた。水平堆積層には黒色土と黒色土でないローム土等の2つがある。前者は霧ヶ丘遺跡で「陥穴の上を覆っていた土が落ちたのかもしれない。」[注6]とするものや、札幌市S267・S268遺跡では枯葉や落葉の流入を考えており[注8]、共に自然堆積により形成された層としている。また福島県鳴海・柿内遺跡では「掘り込み面の風化した旧表土である腐植土の存在」も考慮し、①表土の黒土の流入、②斜面上方から流れ落ちる黒土の流入、③開口部の黒土のフタの落下、などの種々のケースを考えている[注13]。後者では神奈川県菅生水沢遺跡において「壙底下にピットを有さない土壙ではほとんど水平堆積層がみられない」ことから「壙底の大形ピットの内部に棒状のものを入れ、それを強く固定するための補助的な土層」と考えている[注14]。水平堆積層はその堆積状況から土壙周囲からの流入土の自然堆積層としては不自然で

ある。人為堆積、あるいは自然堆積であれば上方及び真上からの堆積以外には水平堆積層は形成されないのではないだろうか。また、黒色土からなる水平堆積層は多くの遺跡で認められているが、これが全て同じ要因により形成された層なのかの検討も必要であろう。当地区では水平堆積層が沼原A遺跡9号土壙において最下層にみられたが、2層に分かれており上層にしまりのない黒色土、下層はシルト質の黄褐色土の水平堆積層が堆積している。下層は地山崩壊土ではない。水平堆積層は当地区ではこの土壙1基においてのみ認められただけで他のⅠ類土壙には見られない。またこの水平堆積層が遺棄以前に堆積したのか以後なのかの問題もあり、形成要因は不明と言わざるを得ない。今後水平堆積層を考える上では形成要因を種々想定する必要がある。その点では水平堆積層＝降下火山灰の一次堆積層とする見方もあってもよいのではないだろうか。当地区においてはこの見方をするには無理があるが、降下火山灰の堆積→動植物相の環境の変化→土壙の遺棄→土壙の埋没or火山灰を掘り上げての再使用というパターンはいささか考え過ぎであろうか。

底部施設

底部施設はⅠ類2種とⅡ類に見られる。Ⅱ類については前述の通り底面にピットをもつものと、土壙内に段を有するものがある。土壙内の段の存在は嶺山A遺跡のⅡ類では一般的であり、土壙の機能との密接な関係が考えられることから施設と理解される。またⅠ類2種では底面にピットを有するものが5基認められた。ピットは形態・配置から①土壙底面の4隅にほぼ垂直に掘られているもの、②底面中央部を避けるように斜めに掘り込まれているもの、③極めて浅いものの3つに分けられる。①は沼原A遺跡2号土壙に、①+②は沼原A遺跡6号土壙に、②は嶺山A遺跡7号・8号土壙に、③は沼原A遺跡9号土壙にそれぞれ見られる。③については極めて浅く、土壙を掘った時の用具の痕跡かとも考えられる。①・②のピットは江別市東野幌4遺跡で土壙底面のピットから先端が尖っており杭状に加工されている木製遺物「杭」が発見されたことから[注15]、棒状のものを立てた痕跡と考えられる。「陥穴等」では底面にピットがあるものは多数検出されており、構築法として2つが考えられている。一つは打ち込みによるもので、他の一つは掘り方の中に棒状のものを立てたとするものである。後者はさらに一つずつ立てるものと、いくつかをいっしょに立てるものがあり、掘り方と考えられるピットに規模の差が見られる。東野幌4遺跡の「杭」は「杭穴にささった状態で発見された。」[注15]とあり、打ち込みか掘り方をもつものか不明である。当地区では沼原A遺跡2号・6号土壙の①のピットは打ち込みによるものと判断されたが、壁面の崩壊等により図示できなかった。霧ヶ丘遺跡では「底に立てた棒は、槍というよりは棒や網によって動物の足を拘束して外に出られないようにする仕掛けの一部」とする考え方[注6]が示され、陥穴説の有力な根拠となっている。しかし、底面のピットは当地区のように同一配列の中でも「陥穴等」にピットの有無が認められることから、その

機能を左右するものでないと考えられる。また棒状のものが底面より上方へ伸びていることは、断面図により東野幌4遺跡[注15]や多摩ニュータウンNo145遺跡[注16]などで確認されているが、それが底面よりどれだけ伸びているかは不明であり、美沢4遺跡のように底面にピットが2基あり、いずれもピットの底から確認面までの空洞が伸びており、「杭状のものが確認面まで続いていたことを物語っている。」としている例[注17]もある。また霧ヶ丘遺跡、菅生水沢遺跡等では壁面に穿たれたピットが見られ、壙底から伸びる棒状のものとの関連が考えられるが、棒状のものの上部形態については不明である。

出土遺物と土壙の時期

「陥穴等」では出土遺物が皆無か極めて少ないのが特徴のようになっているが、当地区では沼原A遺跡で5基の土壙から土器片45点、フレーク2点、嶺山A遺跡でも5基の土壙から土器片が5点出土している。沼原A遺跡では1号、3号、6号土壙出土遺物の中に基本層出土遺物と接合したり、同一個体の関係のものがあり、その分布図を示した。基本層は降下火山灰の2次堆積により形成された層であり、火山灰は1次堆積ののち主に流水により2次堆積が行われるが、この過程で火山灰は当時の地表面を高所から低所へと滑動し、降下時期の遺物とともにそれ以前の時期遺物をも含んで堆積したものと考えられる。このため晩期に形成された大別層E層中には縄文時代前～晩期の遺物が含まれており、沼原A遺跡1号土壙では最下層、E層中から縄文時代中期末葉の土器片が出土することになるわけである。また本来はE層中に含まれていた縄文土器もその後の降下火山灰の堆積の過程で上層に含まれることが考えられる。これは3号土壙の遺物の出土状況を見れば明らかである。

当地区の各土壙は最下層及び最下層が地山崩壊土の場合にはその上層にE層が堆積しており、E層は堆積直前の時期の遺物をも含むことから土壙の機能していた時期は縄文時代晩期と考えられる。またE層中の晩期の遺物は大洞B～大洞A式を含むが、E層の堆積状況及びD層の堆積による影響等からE層が晩期のどの時期に形成されたのかを判断するのは困難である。

土壙群とその構成

当地区では3遺跡から土壙及び2つの土壙群が検出されている。沼原A遺跡、嶺山A遺跡の2つの土壙群は、立地に谷地形+緩斜面と窪地という差異はあるが、共に谷心線が走り、土壙はこの谷心線に沿うように地形的な制約を受けた配置をしており、配列をなす土壙群と捉えられる。また土壙群は共に3形態の土壙により構成されており、Ⅰ類1種、Ⅰ類2種の基数が同数であり、Ⅰ類がほぼ同形態であるのに対し、Ⅱ類は基数、形態に変化があることからⅠ類土壙に規制される面が強いと考えられる。このように配列をなす2つの土壙群にはその構成に共通性が認められる。

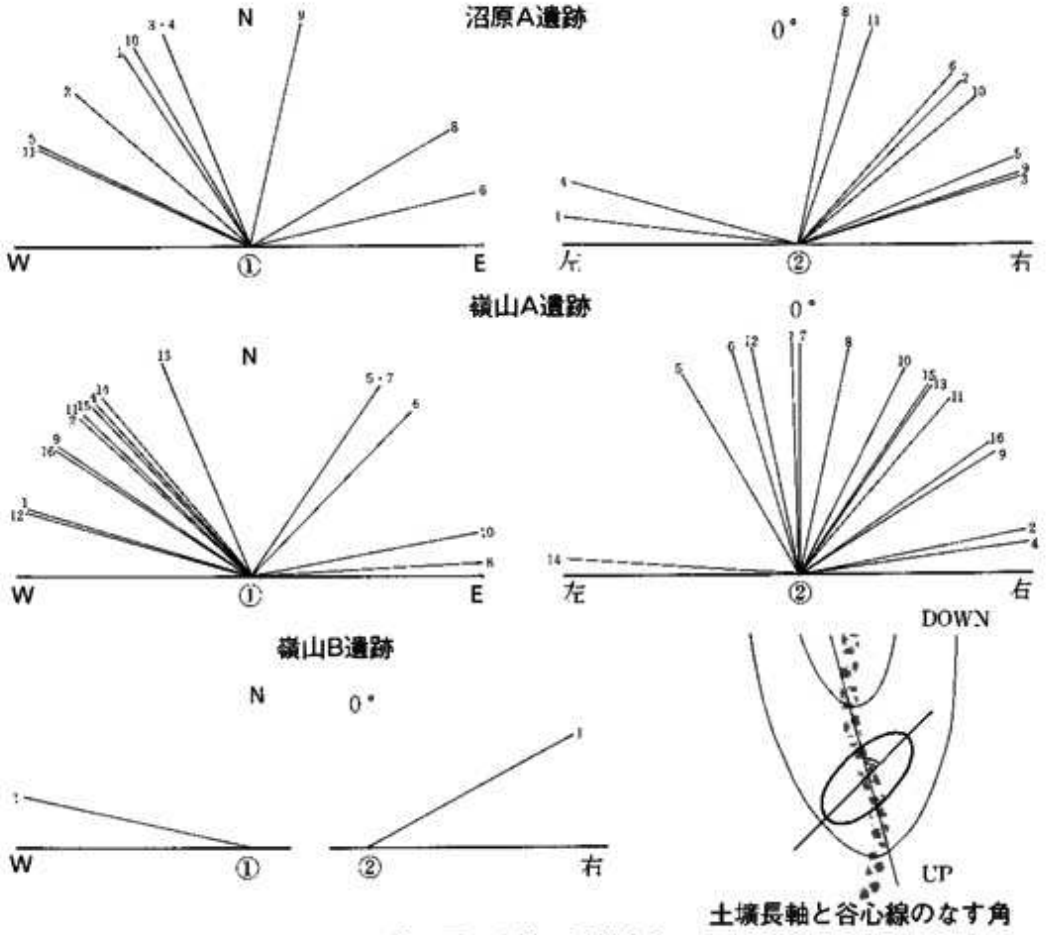
長軸方向

霧ヶ丘遺跡では土壙の長軸方向に着目し、北方向に対する長軸の東西へのふれ、等高線との長軸のなす角が検討されている。[註6] 当地区では谷地形や窪地に立地していることもあり、等高線とのなす角の計測は難かしいことから、以下の2点によりⅡ類をも含め、長軸方向と土壙群との関係を検討する。尚、嶺山B遺跡1号土壙についても合わせて行なう。

①. 北方向と長軸方向とのなす角

②. 谷心線と長軸方向とのなす角

計測結果は第3図に示す通りである。沼原A遺跡ではⅠ類・Ⅱ類の配置及び①により「2陥穴1単位」[註17]の関係が5単位認められた。つまり円形の7号土壙が最も標高が高く傾斜の急な所にあり、その下位に10基の土壙が2基ずつ配されている。単位ごとの長軸方向はほぼ一致し、Ⅰ類2種2基による1単位のものが3単位(1－4号土壙、2－3号土壙、5－6号土壙)とⅠ類2種とⅡ類による1単位のもの2単位(8－11号土壙、9－10号土壙)が認められ、Ⅱ類の土壙がⅠ類の土壙と有機的な関係をもつことがわかる。これは「陥穴等」とされるⅠ類土壙



第3図　土壙の長軸方向

が、Ⅱ類土壙をも含めることにより土壙群の機能を果すものであることを示している。②については規則性は認められない。また嶺山A遺跡では3～5基による4ヶ所程のまとまりはみられるが、①、②との関係に規則性は認められない。

立地と用途

当地区では6遺跡11地点の調査が行なわれ、立地は丘陵緩斜面、窪地、谷地形、尾根に分けられる。従来「陥穴等」は丘陵地では緩斜面や尾根で多く検出され谷地形、湧水に立地が制約される傾向が指摘されていた。今回の調査では緩斜面3地点の調査が行なわれ、沼原A遺跡第1地点、嶺山B遺跡でⅠ類土壙を検出したが共に谷心線が走るという地形的な特徴をもつ。嶺山A遺跡第2地点では遺構は検出されなかった。また尾根に立地する嶺山C遺跡第3地点でも遺構は検出されていない。当地区の土壙群は谷心線の走る谷地形及び窪地である沼原A遺跡(第1、第2地点)、嶺山A遺跡(第1地点)で検出されており、沼原C遺跡、嶺山C遺跡第2地点といった谷地形や、窪地である沼原B遺跡では検出されていない。これは土壙群構築時に土壙群を最もよく機能させるための選地があったためと考えられる。沼原A、嶺山A遺跡の選地の共通性は谷状の地形であり、谷を下ると三方が、斜面及び急崖となっていることである。つまり、沼原A遺跡では谷頭から各心線を下り、緩斜面に出ると北は上りの急斜面、東方と南方は下りの急崖となっており、嶺山A遺跡では谷頭から谷心線を下ると窪地であることから北方西方、南方の三方が上りの急斜面となっている。さらに両土壙群の配置は弧状を呈しており谷頭からは地形の展開が見えないことの共通性もある。

また対象地区では沼原、嶺山地区以外には梨野A遺跡の調査が行なわれている。梨野A遺跡では縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居跡2軒、早期末葉～後期の土壙、晩期の土壙墓が検出されており、居住域、墓域といった遺跡の性格がうかがわれる。これは、梨野A遺跡ではその東北方約50mの地点に恒常的なスズ湧水があり、定住域としての水利条件を備えていたことによる。これに対し、対象地区内には湧水点はほとんど認められない。沼原、嶺山地区では、沼原A遺跡で平安時代の竪穴住居跡1軒と土壙1基を検出しているが、これは嶺山C遺跡の製鉄遺構に関連する鍛冶遺構と捉えられ、定住性をもつものとは考えられず、少なくとも当地区においては集落を営む水利条件は備えていないものと判断される。また縄文時代晩期の土壙墓が梨野A遺跡で検出されていること、門野山開遺跡、嶺岸遺跡（509頁参照）といった縄文晩期の遺跡が茂庭低地の北西縁、岩ノ川沿いに丘陵を背後にひかえて立地していることから、縄文時代晩期には水利条件を備えた丘陵地縁辺の緩斜面及び茂庭低地縁辺に居住域が存在し、対象地区内は狩猟域、採集域としての性格をもっていたものと考えられる。[註19)]

本稿ではこれら立地をふまえ、検出された「陥穴等」の用途としては狩猟における「おとし穴」が妥当であろうと考える。「陥穴説」を強く主張する今村氏は霧ヶ丘遺跡でその使用法に

ついて、「偶然動物が落ちるのを待ったもの」と「動物を追いつめて追い落としたもの」の２通りを考えており[註6]、その後函館市西桔梗ＥＩ遺跡の検出例[註20]について後者の可能性を指摘している[註21]。また最近では、「陥穴は追い込み猟の場合も多いが、基本的には待って捕る狩猟法である[註22]。」という考え方を示している。この「待って捕る狩猟法」は鳴神・柿内戸遺跡では「仕掛け猟」としており、２つの狩猟法に「追い込み猟」と「仕掛け猟」の名称を与えている[註13]。この言葉を借りれば、当地区において土壙群の検出されている沼原Ａ遺跡と嶺山Ａ遺跡は「追い込み猟」における捕獲、捕殺の場としての条件を十分備えている。土壙群が谷心線に沿って配列をなすのは追い込まれた対象獣の通り道を想定しての構築と解される。また土壙群はⅠ類とⅡ類の構成により機能しており、Ⅰ類の機能は対象獣を落とし行動の自由を奪うこと、あるいは足を踏み入れることによる骨折等を目的としたものであり、Ⅱ類は沼原Ａ遺跡ではⅠ類と共に２陥穴１単位を構成し、嶺山Ａ遺跡では多くが段をもつ形態的な特徴がみられ、Ⅰ類の機能を高めるための補助的な付属施設と考えられ、異的なものが想定される。

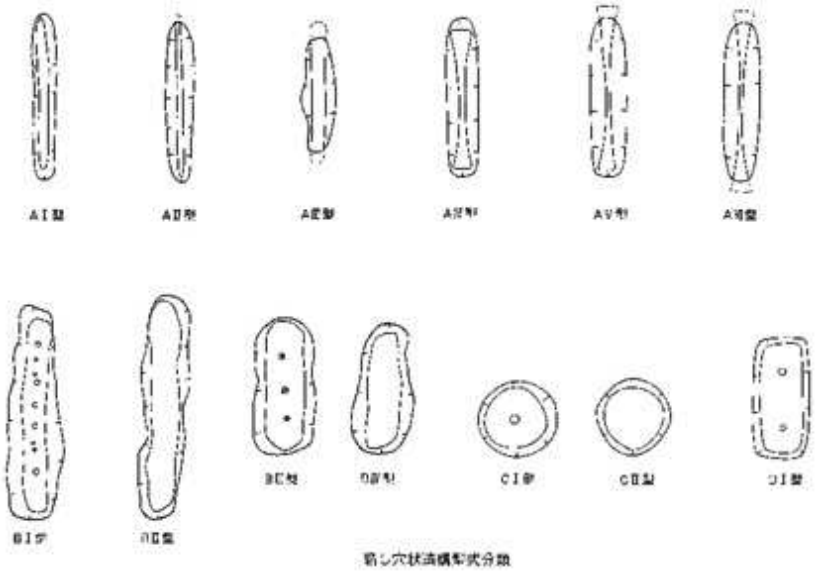
また狩猟域においては水場は重要であるが、前述のように対象地区内には湧水はほとんど認められず、東、西を南流する大堤川、岩ノ川沿いには急崖が多い。しかし対象地区には窪地である沼原Ｂ遺跡のように不定期的に水の溜まる場所があり、他の窪地においても同様の地質構造をもっている事は十分推測される。狩猟の対象獣は南流する二河川を水場としたではあろうが、水の溜まっている時期の窪地を水場とした可能性は高い。これは沼原、嶺山地区では地理的条件から対象獣の水場：沼原Ｂ遺跡、→追い込み猟の捕獲、捕殺の場：嶺山Ａ遺跡の関連性を考えさせる。この点、嶺山Ｂ遺跡１号土壙は嶺山Ａ遺跡の土壙群と同時に機能したとすれば、「追い込み猟」において追い込む前に逃げた対象獣を考えての構築であろうか。また沼原Ａ遺跡については付近に窪地があり、沼原Ｂ、嶺山Ａ遺跡のような関係も考えられるが、河川に近いため水場へ行く対象獣を追い込んだ可能性もある。いずれにせよ「陥穴等」は対象獣の行動の上に成り立つものであり、合理的な構築法をとっているものと考えられる。また「陥穴等」は本来人間の介在により機能を有効に発揮できるものであり、当地区では「仕掛け猟」は副次的な利用法として存在していたものと推測される。

３．配列について

さて、霧ヶ丘遺跡で陥穴説が改めて提唱されてから10年にもなろうとしている。この間霧ヶ丘遺跡で「陥穴」とされた遺構は数多く検出され、形態、規模、堆積土、長軸方向、底部施設、遺物、年代、立地、配列、分布、用途等、さまざまな方面から研究がなされてきた。

形態分類は霧ヶ丘遺跡での今村氏の８型式分類[註6]、石川氏の８型式分類[註23]が最初であり、宮沢、今井両氏の９型式分類[註24]と、当初関東においては底部施設の多様性から多型式分類が行なわれた

が、札幌市S267・268遺跡では内山氏による4型式分類[注8]がなされた。以降3～4型式の分類がなされてきている。これは底部施設の相異が必ずしも「陥穴等」の用途の違いを示さないことや、同一配列の中に底部施設の有無や相異があること、分布域を背景とした分類が可能になったことなどによる。最近では岩手県の「陥穴等」を集成した瀬川氏の4型式分類[注7]がある。本稿ではこの分類に筆者なりの考えを加え、「陥穴等」の配列について少し述べてみたい。（瀬川氏は「陥穴等」に対して「陥し穴状遺構」という名称を与えているが、混乱を避けるため敢えて「陥穴等」を使用する。）



陥し穴状遺構型式分類

分　類

現在岩手県において検出されている陥し穴状遺構の分類を試みて見る。

A型、B型、C型、D型と分かれ更に幾つかのタイプに分けられる。

A型

A型は全体の特徴として、長軸に対して短軸の比が小さいもので底部施設に備り込まれている。落ケ丘の分類ではB型と近似している。

AⅠ型　底部面積が、上部深口部面積と同じ長さか、又は短かく、底面が平行であるタイプ

AⅡ型　底部一端が上部深口部より外側にえぐり込まれており、側面が平行であるタイプ

AⅢ型　底部面積が上部深口部より外側にえぐり込まれており、側面が平行であるタイプ

AⅣ型　底部面積が上部深口部面積と同一の長さか、又は短かいが、路先端部が広がるタイプ

AⅤ型　AⅣのタイプで底部一端が開口部より外側にえぐり込まれているタイプ

AⅥ型　AⅣのタイプで底部両端が開口部より外側にえぐり込まれているタイプ

B型

B型は全体の特徴として、長軸に対する短軸の比が大型より大きく、やや底面間を近わせるもの、この型にはえぐり込み、底部先端部の広がりはない。落ケ丘ではA型とやや似ている。

BⅠ型　底部の長軸と短軸の比が5：1前後で、底部にはほぼ直列の杭穴が見られるもの。

BⅡ型　BⅠ型の杭穴が見られないもの。

BⅢ型　底部の長軸と短軸の比が3：1前後で、底部にはほぼ直列の杭穴が見られるもの。

BⅣ型　BⅢ型の杭穴が見られないもの。

C型

C型の全体の特徴としては、円盤で、どーか一般を見するもの。落ケ丘C型と近似している。

CⅠ型　底部に1～2の杭穴を有するもの。

CⅡ型　底部に杭穴を有しないもの。

D型

D型の全体の特徴としては、長方形である。落ケ丘C型と近似している。

DⅠ型　底部に1～2の杭穴を有するもの。

※瀬川氏の諒解をいただき、本稿ではA～D型を以下のようにA型・BⅠ・Ⅱ型・BⅢ・Ⅳ型・C型・D型として使用する。

A型：細分類はせず全てA型とする。尚、厚真3遺跡や静川8遺跡などで検出されている「溝状ピット」もA型とした。

B型：底部施設の有無による細分類はせず、BⅠ型とBⅡ型をBⅠ・Ⅱ型、BⅢ型とBⅣ型をBⅢ・Ⅳ型とし、両者の判断の困難なものはB型とした。

C型：底部施設の有無による細分類はせず、平面形が円形を基調とするもの全てとした。

D型：底部施設の有無による細分類はしない。

第4図　形　態　分　類　（瀬川、1981「陥し穴状遺構について」による。）

配列は霧ヶ丘遺跡でも確認されていたが[注25]、今村氏により「陥穴等」の長軸方向についての検討が主になされた。つまり「土壙の長軸は多くの場合、等高線と直角方向、すなわち傾斜の方向をとるが、谷状の窪地の周辺ではその谷の方向へ引かれる。」[注6]とされるものである。また宮沢、今井両氏は関東地方及び長野県で「陥穴等」の検出された46遺跡約400基を対象とし種々の角度から分析を試みており、「遺跡における土壙の分布状況は、多くの土壙が湧水や谷に強く影響を受けて作られている。こまかくみると、土壙の長軸方向に一定の傾向がうかがえる。すなわち、多くの土壙が谷の方向に長軸を向けている点である。」[注24]としているが、特に配列については触れられていない。「陥穴等」の配列は板東山遺跡B地点でも確認されていたが[注26]、札幌市S153遺跡でピット列として検出され、加藤氏はA型土壙、B型土壙相方に「等高線に直交するピット列」と「台地縁辺部に等高線に対し平行するピット列」の2種の存在を認めている[注27]。さらにこれをうけて札幌市S153遺跡同様ピット列の検出された札幌市S267・268遺跡では、内山氏によりS153遺跡をも含めて配列においては「谷の存在を強く意識したうえで構築される配列方向がとられている。」と指摘し、S153遺跡同様2種の配列を認め「谷と直交する列」、「谷と平行する列」としている[注8]。また両遺跡では等高線に対する角度による長軸方向の分析は行なわれておらず、これは地形的要因から「遺構の配列をつかむうえで有効でない」との考えによっている。

「陥穴等」の検出例は札幌市S153、S267・268遺跡を含め昭和50年代に入ると序々に増加し、そのほとんどが谷地形や湧水、湿地帯や沢などを周囲に伴なうという点で立地に共通性が認められ、主に東日本において検出されることが明らかになってきた。中でも配列をなすものは東北北半の太平洋側～北海道西南部において多く検出されている。最近では佐藤氏[注28]、瀬川氏[注7]、今村氏[注22]などにより、配列及び配置についての考え方が示されている。本稿ではこれらを踏まえ、当地区沼原A、嶺山A遺跡を含めて管見の限りではあるが、配列をなす「陥穴等」の分類を試みることにする。尚、分類に際しては対象を遺跡単位ではなく配列単位としたため、函館空港第4地点[注29]や発茶沢遺跡[注30]、湯沢遺跡[注31]など、「陥穴等」が密集して検出される場合には、配列があったにせよ判断が困難なため対象から除いた。また「陥穴等」は個々の時期すら不明であるものが多く、配列及び配列を構成すると認めた「陥穴等」については筆者の判断によるものがある。分類は立地・配列方向について類別、さらに各類について配列における「陥穴等」のあり方を配列中心線[注32]との関係から種別した。分類された配列は2表に示した。

配列の分類

Ⅰ類：丘陵における平坦部の縁辺及び段丘の縁辺に配列をなすもの

Ⅱ類：丘陵における平坦部の縁辺及び段丘の縁辺に対して直角ないし斜めに配列をなすもの。

Ⅲ類：谷地形の谷心線に沿って配列をなすもの

Ⅳ類：丘陵における平坦部及び段丘上に配列をなすが縁辺まで伸びないもの

第2表 配列分類表

I 類

種別	No	配列単位	立地	形態	基数	間隔
1種	①	札幌市S153遺跡 第5列	河岸段丘	A	9	4.5~14m
	②	〃 第7列	〃	B Ⅲ·Ⅳ	5	11~14m
	③	札幌市S320遺跡第1号ピット・第2号ピット	〃	B Ⅲ·Ⅳ	2	13.5m
	④	〃 第3号~5号ピット	〃	B Ⅲ·Ⅳ	3	13.5~19.5m
	⑤	札幌市S456遺跡第1号~6号ピット	〃	B Ⅲ·Ⅳ	6	4.5~25.5m
	⑥	美々5遺跡AP19、BP25、BP21、BP20	〃	B Ⅰ·Ⅱ	4	約22m等
	⑦	静川8遺跡 MP-1~7	丘陵	A	12	1~6m
	⑧	荒屋Ⅱ遺跡 EI-102~105	河岸段丘	B Ⅰ·Ⅱ	4	2~2.5m
	⑨	荒屋Ⅱ遺跡 EⅡ-105、106、DⅢ 101、103	〃	B Ⅲ·Ⅳ	4	6~13m
	⑩	荒屋Ⅱ遺跡 FⅠ-101、EⅠ-106~108 ⅡE-101、102、104	〃	B Ⅲ·Ⅳ	7	5~11m
3種	⑪	美沢1遺跡[P38] FP 37、57、35、9、65	〃	A	5	7~16m
	⑫	厚真3遺跡 S53、TP 1、MP 1、TP 2~4、TP7~13、S54、TP1~4、9、10、15、16	丘陵	A	20	2~17m
	⑬	多開寺前遺跡[P41] D1~3、9、14、17、19、20、26、27、31、32	河岸段丘	B Ⅲ·Ⅳ	13	2~33m
4種	⑭	東野幌4遺跡 P16、23、17、24、14、15、25、30、31、4、5	〃	B Ⅲ·Ⅳ	11	12~38m

II 類

種別	No	配列単位	立地	形態	基数	間隔
1種	⑮	札幌S267、268遺跡 第1例	河岸段丘	A	4	9~14m
	⑯	下平遺跡 DⅠ-1~18	〃	A	18	1.3~2.5m
	⑰	大久保A遺跡 AⅠ	丘陵平坦部	B Ⅲ·Ⅳ	7	2~3m
	⑱	〃 AⅡ	〃	〃	8	近接~3m
	⑲	〃 AⅢ	〃	〃	3	2m
	⑳	〃 FⅠ	〃	〃	4	1~2m
	㉑	〃 FⅡ	〃	〃	4	1~2m
	㉒	〃 FⅢ	〃	〃	4	1~2.5m
3種	㉓	山田上ノ台遺跡[P41]	河岸段丘	D	9基以上	3~12m

III 類

種別	No	配列単位	立地	形態	基数	間隔
2種	㉔	青井の沢1遺跡 T-20、3、11、8、9、5、6	丘陵谷地形	A	8	13~40m
3種	㉕	静川8遺跡 TP-6、7、20、P-36、TP-20、MP-13、TP-10~19	〃	A·B Ⅰ·Ⅱ B Ⅲ·Ⅳ·C	15	3~12m
	㉖	沼原A遺跡 1号~11号土壙	〃	B Ⅲ·Ⅳ·C	11	2.5~20m
4種	㉗	稲山A遺跡 1号~16号土壙	丘陵遷地	B Ⅲ·Ⅳ·C	16	2~14m

IV 類

種別	No	配列単位	立地	形態	基数	間隔
1種	㉘	荒屋Ⅱ遺跡 EⅡ-107~111、EⅢ-101、102	河岸段丘	B Ⅰ·Ⅱ	7	1~2m
	㉙	〃 DⅠ-102 ~108	〃	B Ⅲ·Ⅳ	7	1~2m
	㉚	下原田遺跡[P48] 土壙1~10	〃	D	10	3~9m
	㉛	板東山遺跡B地点 L-7~10、L-12、13	〃	A	6	1.5~4m

1種：長軸方向が配列中心線に対してほぼ直交するもの

2種：長軸方向が配列中心線に対してほぼ平行するもの

3種：長軸方向が配列中心線に対して不規則であるが2陥穴1単位を含むもの

4種：長軸方向が配列中心線に対して不規則なもの

Ⅰ類

1種では札幌市S320遺跡の配列③、④[註33]と札幌市S456の配列⑤[註34]は同じ谷の両岸にあり、同時存在及びその関連性が考えられる。⑥[註35]、⑧[註36]はほぼ等間隔で「陥穴等」が配列されており、⑧は「陥穴等」間の距離が2～2.5mと極めて近接している。⑦[註37]は平坦部の両側に谷が入り込むため、「陥穴等」は舌状に張り出す丘陵平坦部の縁辺に弧状に配されている。⑩はⅡ類1種と考えることもできるがここではⅠ類にした。また⑩は配列中心線がやや弧状をなしており、平坦部の3基の「陥穴等」が弧状をなす配列とも捉えられることから、⑨を含めてその関連性を考えることができる。2種は認められなかった。3種は⑫の2陥穴1単位の配列が明瞭である。また⑫は東方と西方から谷が入り込んでおり、谷心線に沿って2陥穴1単位の配列の存在もうかがえる。[註39,40]

Ⅱ類

1種である大久保A遺跡の⑰～㉒は⑰～⑲と⑳～㉒の2つに大別される。これらの配列には平面形はBⅠ・Ⅱ型土壙に近似するが、比較的浅く底面にピットを有する土壙が配列をなして伴い、これと、羽賀氏は「垣」的なものと判断している。[註42]⑯は「陥穴等」間の距離が極めて近接しているものである。[註43]尚、札幌市S267・268遺跡では「谷と直交(及び斜行)する列」として9つの配列を認めているが、[註8]ここでは第1列だけを扱った。また、2種、4種は認められなかった。

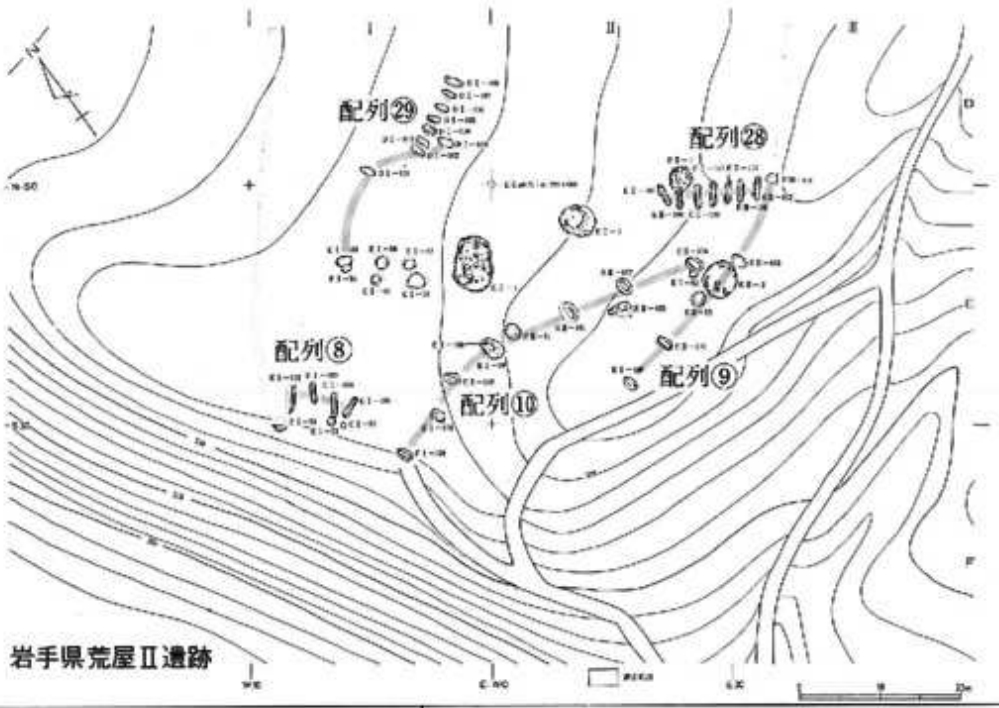
Ⅲ類

1種は苫小牧市静川Ⅰ遺跡においてその存在がうかがえるが、[註45]ここでは例証しなかった。㉔は谷の両側の斜面上部にもそれぞれ配列が認められ、㉔を含めて谷頭から3つの配列が放射状に展開している。[註46]㉕はY字状の谷の谷心線に沿って配列が認められ、A型、B型、C型の「陥穴等」により構成されている。㉕はⅠ類の⑦と共に機能していたものと考えられる。[註37]㉖、㉗については前述の通りである。また、Ⅲ類に含まれないが、多摩ニュータウンNo144遺跡のように、谷地形の谷頭付近に5基の「陥穴等」のまとまりが認められ、谷地形に立地を制約された配列をなさない土壙群と考えられるものもある。[註47]

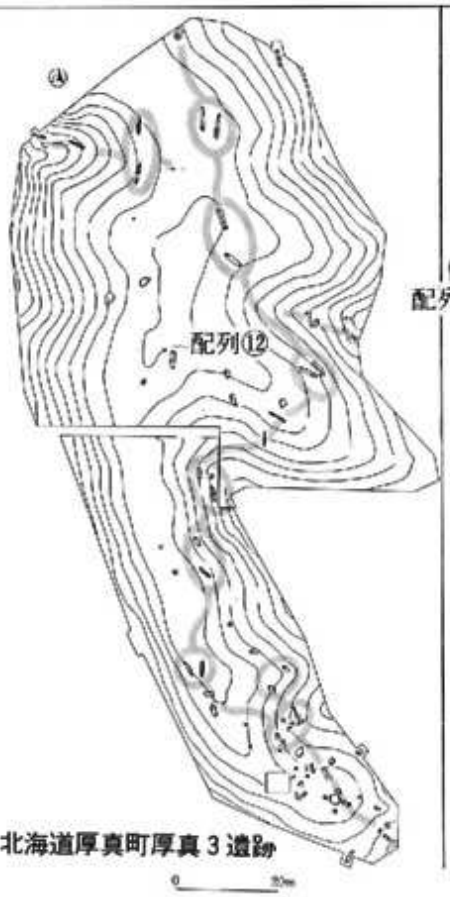
Ⅳ類

Ⅳ類は1種のみ認められた。㉘、㉙は極めて近接した距離で配列されている。㉛は2ないし、3基単位の存在とする見方もある。[註45]尚、Ⅳ類には配列の完結していないものも含まれている。

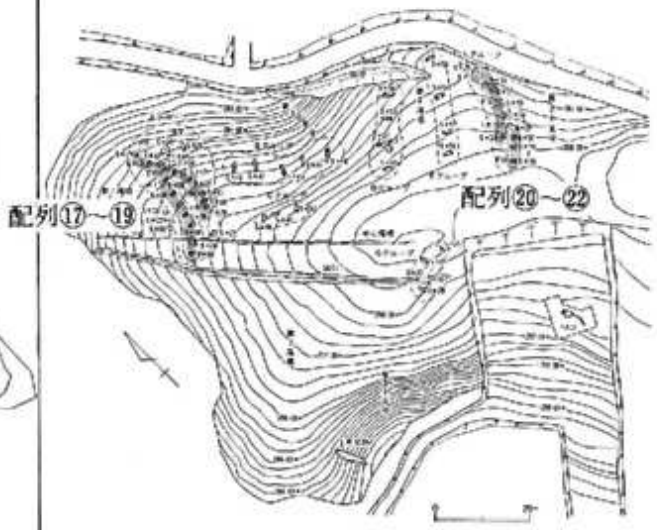
以上のように配列は大きく4つに分けられ、丘陵の平坦部及び段丘と、谷地形の2つの立地



岩手県荒屋Ⅱ遺跡

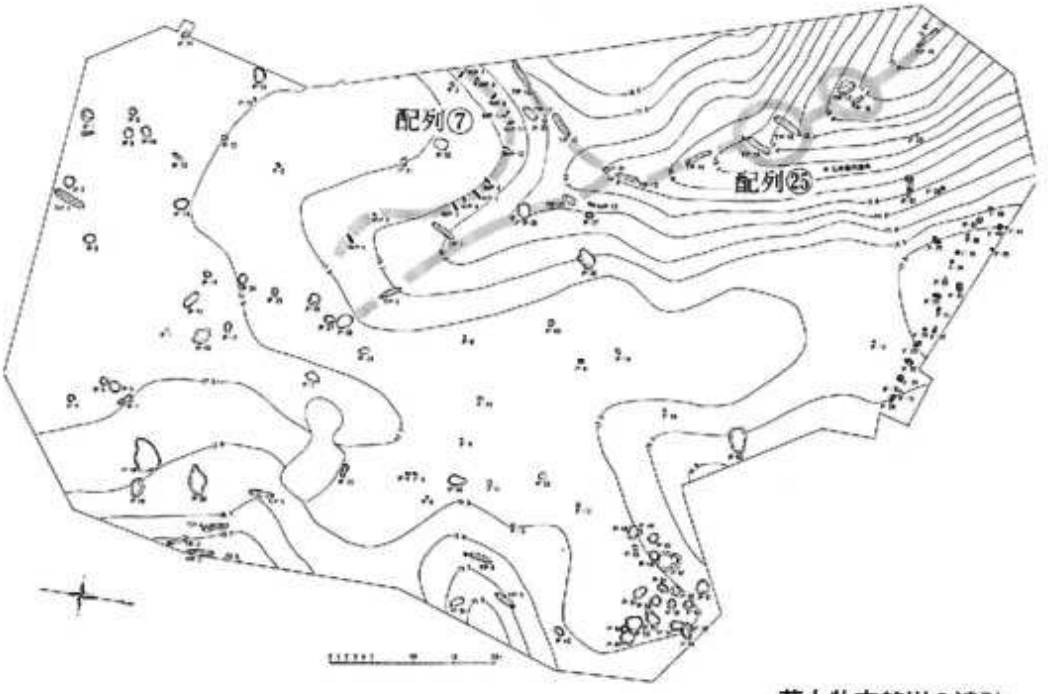


北海道厚真町厚真３遺跡

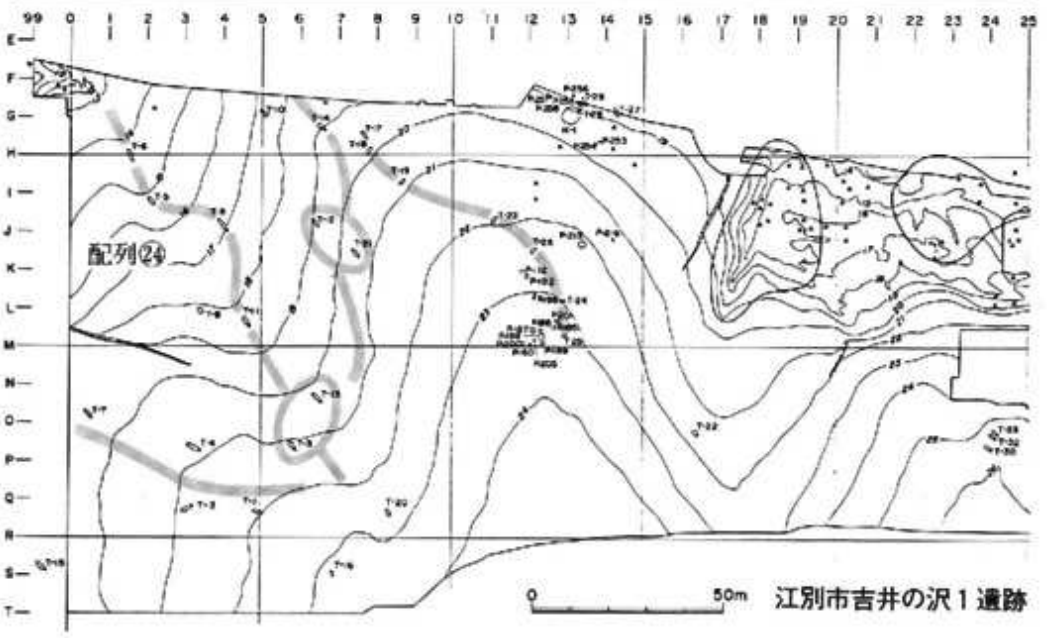


福島県大久保A遺跡

第５図　配列と土壙群（１）



苫小牧市静川８遺跡



江別市吉井の沢１遺跡

第６図　配列と土壙群（２）

条件を示したが、他には扇状地に立地するものもある[註49]。また、分類により「陥穴等」にはA～D型の形態差による特徴的な立地や配列は認められず、同一配列に2～3型式の「陥穴等」が存在することも知られた。

さて、これら配列をなす「陥穴等」の中で、当地区沼原A遺跡、嶺山A遺跡の配列㉖・㉗はⅢ類に属し、他には苫小牧市静川8遺跡の㉕[註37]と江別市吉井の沢1遺跡の㉔[註46]がある。配列は当地区では共にBⅢ・Ⅳ型、C型と付属施設と考えられる土壙から、㉔はA型、㉕はA型・B型・C型からそれぞれ構成されている。㉖・㉗と㉕はC型を1基伴ない配列に2型式以上の「陥穴等」がある点で類似性が認められる。

立地については、㉔・㉕が湿地・沢に制約される面が強く、谷を下ると沖積面が広がるのに比べ、当地区では周縁に河川・湧水点はあるが、それらに立地が制約されている傾向はうかがえない。これは東・西を南流する2つの河川沿いに急崖が多いこと、南方には茂庭低地が広がるが、当地区南縁に硬質の三滝安山岩類がみられ、開析をあまり受けないため、㉔・㉕のような谷地形が形成されなかったことによる。つまり㉖・㉗は湧水点や河川による制約を受けなくとも機能できたことを示し、そのための選地がなされたと判断される。

また当地区では㉖・㉗をそれぞれ土壙群として捉えているが、静川8遺跡と吉井の沢1遺跡においても土壙群が認められる。前者はⅢ類㉕と1類⑦の2つの配列により構成され、後者はⅢ類㉔と両斜面上半の2つの配列により構成されている。この4遺跡の土壙群は「追い込み猟」と「仕かけ猟」を考える場合、静川8遺跡・吉井ノ沢1遺跡の2つの土壙群と当地区の2つの土壙群に分けられる。つまり前者においては、谷を下ると湿地・沢があることから、谷心線に沿った配列を「けもの道」の痕跡とも考えられ、また土壙群をなすことから意図的な面が強く、各心線に対して対称をなす配列が認められ「けもの道」の痕跡としてだけでは不自然であることから、「仕かけ猟」と「追い込み猟」の2面性をもっているものと解され、後者は、地形的要因により「追い込み猟」を主目的とせざるを得なかったものと考えられる。

このことは、同一土壙群に「仕かけ猟」と「追い込み猟」の2面性を認めるとともに、立地条件、選地により、使用法において両者の占める割合に差が生じることを示す。またこの4遺跡以外にも、北海道厚真町厚真3遺跡[註39,40]や大久保A遺跡[註43]、岩手県荒屋Ⅱ遺跡[註36]などでも土壙群が認められ、他の遺跡でも「陥穴等」による土壙群の存在が想起される。土壙群は配列だけにより構成されるもの、配列をなし付属施設を伴なうもののほかに、配列とその周辺に散在する1～数基の「陥穴等」と群をなすものや、配列をなさないものなどさまざまな構成が考えられ、「陥穴群」とでも称すべきものであろう。「陥穴等」は単独で検出されるものもあるが、群として機能する点でより有効であり、使用法は立地に規制される面が強いと考えられる。

4．まとめと今後の課題

本稿では沼原・嶺山地区で検出された土壙及び土壙群についての検討の後に、「陥穴等」の配列の分類を行ない、沼原A遺跡、嶺山A遺跡の配列の位置づけを他遺跡との間で行なってきたわけであり、以下のように要約される。

1．当地区では沼原A遺跡で11基、嶺山A遺跡で16基、嶺山B遺跡で1基、計28基の土壙が検出されており、形態・規模からⅠ類とⅡ類に大別される。Ⅰ類は従来「陥穴」・「陥し穴状遺構」・「Tピット」等と称されてきたもので、本稿ではこれを「陥穴等」とした。

2．28基の土壙は全て自然堆積により埋まっており、各遺跡間の層位関係・出土遺物・堆積土の点から縄文時代晩期に構築されたものと考えられる。

3．沼原A遺跡・嶺山A遺跡ではⅠ類＋Ⅱ類により機能していた土壙群として捉えられ、共に谷心線に沿って配列をなしている。沼原A遺跡では2陥穴1単位の規則制が認められる。

4．当地区では「陥穴等」の用途を「おとし穴」として捉え、土壙群の検出された沼原A遺跡・嶺山A遺跡は、対象地区内に湧水点がほとんどなく、立地に共通性が認められ意図的な選地をしていることから「追い込み猟」における捕獲・捕殺の場と考えた。また沼原B遺跡－水場、嶺山A遺跡－捕獲、捕殺の場の関係も想定した。

5．当地区の土壙群の位置づけを行なうために、配列をなす「陥穴等」を立地、配列の方向から4類に分け、さらに配列中心線と土壙長軸の関係から4種に分類した。

6．配列の分類からはA－D型の形態差による特徴的な立地・配列は認められない。また同一配列を2～3形態の「陥穴等」があることが知られた。

7．当地区の土壙群は共にⅢ類に属する。静川8遺跡・吉井ノ沢1遺跡でもⅢ類の配列が認められ、他の配列と土壙群を形成している。

8．静川8遺跡・吉井ノ沢1遺跡の土壙群と当地区の土壙群との比較を行ない、同一土壙群に「追い込み猟」と「仕かけ猟」の2面性を認めるとともに、立地条件、選地により、使用法において両者の占める割合に差が生じることを示した。

9．「陥穴等」による土壙群は他の遺跡においても認められ、さまざまな構成をとっているものと考えられ、これらを「陥穴群」とでも称すべきものとした。

さて本稿では沼原・嶺山地区以外の配列や単独検出例の年代については特に触れていない。これは「陥穴等」の年代を把握することが難かしく、年代の不明であるものが多いことと、「陥穴群」の存在を考えたうえで年代の把握がなされるべきであるとの判断による。また「陥穴等」はその発生・存在・消滅の過程の中に、時間的・空間的な生業の変化や文化圏の相異を内包しているものと考えられ、今後、形態・配列・分布等の関連性から「陥穴等」を捉える必要がある。

最後に、「陥穴等」の対象獣には鹿や猪が想定されているが、最近多摩ニュータウンNo.759遺跡で「陥穴等」から獣骨の出土が報告された。[註50)] 詳報を待ちたい。

本稿を草するにあたり、山田一郎・宮城豊彦・瀬川司男・長谷川徹・佐藤中二・田中則和・佐藤洋・吉岡恭平・土浜光朗・荒井格の各氏に協力をいただいた。記して謝意を表したい。

斎野裕彦

註

1．出子貞雄・山田一郎「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報－』P.97～102　1980

2．白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所　P.1～38　1980

3．宮城豊彦「仙台都市圏の地形的基盤－とくに、仙台周辺の古期崩壊地形について－」『東北文化研究所紀要』第12号　P.176～184　1981

4．滑動：岩屑粒子が流体中を底面に沿って運動する掃流の様式の一つで、底面に接触しながらすべるように移動する様式。『地形学辞典』二宮書店　1981

5．沼原B遺跡1号土壙は性格不明のため対象から除いた。

6．今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団　P.131～159　1973

7．瀬川司男「陥し穴状遺構について」『紀要Ⅰ』(財)岩手県埋蔵文化財センター　P.1～16　1981

8．内山真澄「札幌S257・S268遺跡の土壙群－いわゆるTピットについて」『札幌市文化財調査報告書ⅩⅣ』　P.206～228　1977

9．八戸市教育委員会「長七谷地7号遺跡」『長七谷地遺跡発掘調査報告書．長七谷地2・7・8号遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集　P.195～259，313～327　1982

10．八王子市椚田遺跡調査会「神谷原Ⅱ」1982

11．千葉県文化財センター『佐倉市屋谷津遺跡』　1978

12．青森県埋蔵文化財調査センター「鶴泥遺跡」『埋文あおもり』第1号　P.10　1982

13．鈴鹿八重子「ピット」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅴ．地神・柿内戸遺跡』福島県文化財調査報告書第101集P.332～340　1982

14．野中和夫「土壙」『川崎市高津区宮生水沢遺跡発掘調査報告書』川崎市　P.34～46　1982

15．江別市教育委員会『東野幌4』『江別市文化財調査報告書Ⅱ』1981

16．(財)東京都埋蔵文化財センター「多摩ニュータウンNo.145遺跡」『多摩ニュータウン遺跡　昭和56年度－(第1分冊)」　東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集．P.134～200　1982

17．北海道埋蔵文化財センター『美沢4遺跡』『フレペツ遺跡群』　1980

18．2陥穴1単位：本稿では単位を構成する2つの「陥穴等」及び土壙が近接し、長軸が平行あるいは交差角が45°以内のものとした。

19．沼原・湯山地区の調査面積は対象地区全体としてみれば極めて少なく、梨野A遺跡で縄文時代中期後～末葉の竪穴住居跡が検出されていることなどより、対象地区は他時期においても狩猟域・採集域であった可能性は高い。また、仙台市山田上ノ台遺跡でも、「陥穴等」が検出されており、土浜光朗氏の教示によれば、時期は縄文時代中期末葉～後期初頭とのことであり、対象地区においても晩期以外の「陥穴等」の存在は十分考えられる。

20．後述する配列の分類では、この両遺構の特殊遺構A、第1号～3号ピットはⅡ類1種に属する。

21．今村啓爾「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27　1976

22．今村啓爾「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2　雄山閣　1983

23．石川和明「土壙群についての考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘調査団　1973

24．宮澤寛・今井康博「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題－いわゆる落し穴について　」『調査研究集録第1冊』泉北ニュータウン埋蔵文化財調査団　P.3～56　1976

25．123基もの「陥穴等」が検出された霧ヶ丘遺跡の報告書『霧ヶ丘』(1973)には今村氏・石川氏それぞれの「陥穴等」についての考え方が示されている。検出された「陥穴等」には配列と考えられるものが存在しており、今村氏はB1型、C型、D型に規則性をもって並んでいることを認めたが、立地的に「追い込み猟」を否定しながらも断定を避け、類例を待ちたいとしている。また、石川氏はC・D・F類に調査に認められる帯状の連続が用途と地形に密接な関連性をもつことは疑いないとし、「陥穴等」が特に地形との関係では

丘陵の縁辺部の各所に存在する谷に対する配慮が多分に含まれていると推定している。

26. 埼玉県教育委員会『板東山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集　1973
27. 加藤邦雄「溝状遺構について」「札幌市文化財調査報告書Ⅹ」札幌市S153遺跡、札幌市教育委員会　P.195～197　1976
28. 佐藤訓敏「陥穴について」「東野幌4」江別市教育委員会　P.77～79　1981
29. 函館市教育委員会『函館空港第4地点・中野遺跡』　1977
30. 青森県教育委員会『発茶沢』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集　1982
31. (財)岩手県埋蔵文化財センター『都南村　湯沢遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集　1978
32. 配列の構成を規制する中心線。
33. 札幌市教育委員会「札幌市S320遺跡」『札幌市文化財調査報告書ⅩⅩⅢ』　P.19～29　1982
34. 札幌市教育委員会「札幌市S456遺跡」『札幌市文化財調査報告書ⅩⅩⅢ』　P.30～39　1982
35. 北海道教育委員会「美々5遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』　P.63～267　1979
36. (財)岩手県埋蔵文化財センター「荒屋Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集　P.91～219　1981
37. 苫小牧市教育委員会『静川8遺跡』『苫小牧東部工業地帯　埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』　P.3～70　1980
38. 北海道教育委員会「美沢1遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』　P.17～197　1978
39. 苫小牧市教育委員会「厚真3遺跡」『苫小牧東部工業地帯　埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』　P.41～48　1979
40. 苫小牧市教育委員会「厚真3遺跡」『苫小牧東部工業地帯　埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』　P.71～77　1980
41. 多聞寺前遺跡調査会『多聞寺前遺跡Ⅰ』　1982
42. 芳賀英一「陥し穴状土坑について」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅶ』大久保A遺跡　福島県文化財調査報告書第96集　P.83～88　1981
43. (財)岩手県埋蔵文化財センター「下平遺跡」「宰石町　下平遺跡　高校西遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第14集P.1～51　1981
44. 仙台市教育委員会『山田上ノ台遺跡－発掘調査概報－』仙台市文化財調査報告書第30集　1981　尚、「陥穴等」の基数等については主浜光朗氏の教示に負うところが大きい。
45. 渡辺俊一「厚真1遺跡のTピットについて」『郷土の研究』第4号　1978
46. 北海道埋蔵文化財センター「吉井の沢1遺跡」『吉井の沢の遺跡』P.26～92　1981
47. 東京都埋蔵文化財センター「多摩ニュータウンNo144遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度(第1分冊)』　東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集　P.97～133　1982
48. 宮城県教育委員会「下原田遺跡」『仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第79集P.8～25　1981
49. 宮城県教育委員会「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集　P.37～186　1981
50. 東京都埋蔵文化財センター「多摩ニュータウンNo759遺跡」『多摩ニュータウン遺跡　昭和56年度－(第4分冊)』　東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集　P.195～260　1982

沼原A・嶺山C遺跡の土師器、赤焼土器、須恵器

土師器

両遺跡出土の土師器は、坏・高台付坏・甕があり、この中では甕が多い。

坏　いずれも製作に際してはロクロ使用のもので、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部の切り離し技法によって次のように分類される。切り離し技法が回転糸切りのもの(A類)、不明のもの(B類)があり、A類は再調整の有無により細分される。

A Ⅰ類……底部の切り離し技法は回転糸切り無調整のもの

A Ⅱ類……底部の切り離し技法は回転糸切りされ、体部下端に手持ちヘラケズリされるもの

B　類……底部の切り離し技法は不明で、底部・体部下端に手持ちヘラケズリされるもの

坏A Ⅰ類は、坏の中では多く出土しているが図化されたのは7点である。口径は12.9～16.0、底径は5.5～6.6cm、器高は4.0～5.5cmに含まれる。口径1に対する底径の割合は、0.36～0.42である(第9図3 459頁、10図2 460頁、13図8・10 465頁、19図4 354頁、31図2・3 368頁)。

坏A Ⅱ類は、図化されたものがなく、わずかに嶺山C遺跡第Ⅳb層から底部片1点が出土している。

坏B類は、図化されたものが1点で、沼原A遺跡第Ⅳb層より出土している。口径18.3cm、底径8.5cm、器高5.6cmで、坏A Ⅰ類と比較して口径、底径が大きいものである(第32図3 369頁)。その他、底部の破片資料3点が嶺山C遺跡第Ⅳc層より出土している。

高台付坏　わずかに2点があるだけで、欠損のため全体の器形は不明である。製作に際してロクロ使用のもので、内面はヘラミガキで、黒色処理が施されているものもある。底部の切り離し技法は回転糸切りされる。高台は付高台である(第14図1 466頁、32図4 369頁)。

甕　製作に際してロクロ未使用のものとロクロ使用のものがあり、前者をA類、後者をB類に分類する。さらにB類は、器形の大小により細分される。

A　類……器高が口径より大きく、最大径の位置が口縁部にある大型のもの

B Ⅰ類……器高が口径より大きく、口径が20cmを超える大型のもの

B Ⅱ類……口径が15cm未満の小型のもの

甕A類は、沼原A第2地点第Ⅴa層出土のもの1点だけである。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデされ、体部外面が縦・横位のハケメ、内面がヘラナデ、ナデされる(第31図1 368頁)。

甕B Ⅰ類は、甕の中で最も多く、口径はほぼ20cmを超え、器高も22cmから30cmを超える。器面調整は、口縁部から体部上半がロクロ調整され、体部中央から体部下端まで縦・横位のヘラケズリされるものが大部分である。外面にハケメ、ナデされるものもある。

甕B Ⅱ類は、完形のものがなく、全体の器形は不明である。口径は15cm未満のもので、器厚

も薄いものである。器面調整はロクロ調整され、内面にナデがある。体部から底部のものは、ロクロ調整が体部下端にまでに及んでおり、底部の切り離し技法は回転糸切りされている。

赤焼土器

両遺跡出土の器種は、坏・高台付坏・皿があり、いずれも製作に際してはロクロ使用のもので、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されていないものである。「須恵系土器」、「あかやき土器」などとも言われているが本稿では赤焼土器としてあつかっている。

坏　わずかに2点が図化されている。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である（第10図3 460頁、32図2 369頁）。

高台付坏　1点が図化されているが底部の破片のため全体の器形は不明である。底部の切り離し技法は回転糸切りされ、高台は付高台である（第14図2 466頁）。

皿　1点がある。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である（第14図3 466頁）。

須恵器

図化されたものは甕1点だけで、他は、坏・甕・壺の破片資料がわずかに出土している。

甕　沼原A遺跡1号住居跡出土のもので、器高22cmを超え、口径18.6cm、最大径の位置は体部にあり、30.4cmを測る小型のものである。内外面ロクロ調整され、体部外面にヘラケズリ、ナデ調整されている（第20図1 355頁）。

両遺跡の遺物は、前記のように分類された。遺構ごとの共伴関係については、沼原A遺跡1号住居跡では、土師器坏A1類、甕BI類、須恵器甕が出土している。坏AI類は堆積上第2層出土のため厳密には共伴しているとはいえないが、第2層は床面を覆っている層であり、床面よりわずかに浮いて出土していることから住居跡出土の土器は共伴関係にあるものと思われる。

鶴山C遺跡の製鉄炉、西平坦面では、土師器坏AⅠ類、甕B1・BⅡ類、赤焼土器坏が出土している。西平坦面は、製鉄炉に付随する関連施設であり、これらが一体となって機能していることから出土した土器は共伴関係にあると言える。

両遺跡における遺構出土の土師器は、全て製作に際しロクロ使用のもので、共通してみられる器種は坏AⅠ類・甕BⅠ類に分類されたものである。坏は少量であるが、共に底部の切り離し技法が回転糸切り無調整である。甕は、細部で多少異るが、器面調整はロクロ調整され、体部外面が縦・横位のヘラケズリされるものが多い。このように、両遺構出土の土師器は共通する点が見られる。

両遺跡の遺構及び基本層位出土の土師器の年代は、甕A類以外、全て製作に際してロ

クロ使用のものであり、このような特徴をもつものは、氏家和典氏の土師器の編年では表杉ノ入式（第7型式）に比定され、平安時代に位置づけられる。甕A類は、仙台市山出の八幡西遺跡1号住居跡では、製作に際してロクロ使用のものと甕A類と極めて類似するものが出土していることから鉢A類も表杉ノ入式に含まれる。赤焼土器は、製作に際してロクロ使用のもので、坏が嶺山C遺跡の遺構出土の土師器と共伴していることより、表杉ノ入式期に、須恵器甕も沼原A1号住居跡出土の土師器と共伴していることより、表杉ノ入式期に位置づけられる。

以上により、沼原A1号住居跡、嶺山C製鉄遺構出土の遺物については平安時代に属するが、土師器坏の底部切り離しは全て、回転糸切り無調整であり、口径も14cm程の小形のものであり、清水遺跡・第Ⅷ C群土器、安久東遺跡・第2号住居跡の土器と類似するものと考えられ、平安時代でも後半のものと考えられる。

篠原信彦

参考文献

氏家　和典　(1957、3)　「東北土師器の型式分類とその編年」　歴史第14輯　東北史学会

工藤　哲司　(1980、3)　「八幡西遺跡発掘調査報告　一年報1」　仙台市文化財調査報告第23集　仙台市教育委員会

丹羽・小野寺・阿部　(1981、3)　「清水遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書V」　宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

土肥山　武　(1980、3)　「安久東遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」　宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

森　貢吾他　(1981、3)　「水入遺跡」　宮城県文化財調査報告書第84集　宮城県教育委員会

白鳥　良一　(1980、3)　「多賀城跡出土土器の変遷」　「研究紀要」Ⅵ　宮城県多賀城跡調査研究所

桑原　滋郎　(1976、10)　「須恵系土器について」　「東北考古学の諸問題」　東北考古学会

茂庭造成団地工事地内遺跡群について

1．遺跡の立地条件　茂庭造成団地工事地内を対象とした茂庭丘陵地帯の調査は、昭和53年より56年までの間、17地点の調査が実施された。その結果、現代の炭窯跡であった2地点等を除く7地点より、縄文時代、平安時代を中心とする遺物の出土、遺構の検出が認められた。

これら遺跡は立地条件において二つに分かれる。茂庭丘陵地帯は、北を梨野平坦面、南を生出低地、東と西は大堤川と岩ノ川によって周辺丘陵とは隔絶されたような観がある。北・南端の丘陵の多くは、緩やかな傾斜をもって梨野平坦面、生出低地に接している。これに対し、北・南端を除く丘陵地の大部分は急斜面から成り、多くの谷部、窪地部をかかえる。梨野A遺跡は北端の丘陵緩斜面上の広い平坦部に立地する。丘陵際には大堤川が流れ、その河岸には湧水点が求められる。他の6遺跡（沼原A～C、嶺山A～C）は丘陵内に位置し、谷・窪地・丘陵斜面・丘陵斜面上の狭い平坦部に立地する。また、湧水点は特定の谷部、窪地部に限られている。この茂庭丘陵地帯南北端と丘陵地内における遺跡立地の差異は、各時代の遺跡分布、遺跡構成の上にも反映している。

2．各時代の遺跡分布　各遺跡で出土した遺物、検出された遺構をもとに各遺跡を、縄文時代から中世までの各時代に並べてみたものが第1表である。縄文時代の遺物は各遺跡でみられ、梨野A遺跡では全時期の遺物を出土している。弥生時代になると遺構は検出されず、わずかに沼原A遺跡で少量の土器片の出土をみるにすぎず、古墳時代も梨野A遺跡で土壙が検出されたのみである。さらに、奈良時代になると遺物の出土もみられない。しかし、平安時代になると沼原A・嶺山C遺跡で遺構が検出され、嶺山A・梨野A遺跡ではわずかながら遺物を出土している。これ以後の中世になると、わずかに梨野遺跡で陶器片が1点出土するのみである。以上をまとめると、縄文時代には全遺跡に色濃く痕跡を残すが、その後の時代にはその痕跡はほとんど残されない。しかし、平安時代になると再び痕跡が残され始めるが、その後はまた痕跡が残されなくなる傾向が認められる。ただし、平安時代の遺構は全て丘陵内の遺跡である。また、丘陵地帯北端の梨野A遺跡は、弥生時代・奈良時代の遺物・遺構を欠くが、調査遺跡内では最も遺跡継続時期の長い遺跡である。

第1表　各遺跡の時代別変遷

※　黒ラインは遺構が出土、白ラインは遺物のみ。沼原B遺跡出土の土壙（縄文時代）は時期不明。

第2表　各遺跡の縄文時代の土器・石器総出土数量表

遺跡名		梨野A	沼原A	沼原B	沼原C	嶺山A	嶺山B	嶺山C
調査面積 ㎡		2320	2263	800	530	1920	560	900
土器	総出土数	約 40000	567	127	34	46	31	56
	1㎡当りの総出土数	約 17.24	0.25	0.16	0.06	0.02	0.06	0.06
石器	総出土数	4165	50	18	2	17	3	27
	1㎡当りの総出土数	1.80	0.02	0.02	0.004	0.01	0.01	0.03

※　沼原B遺跡は第2地点、嶺山A遺跡は第2地点、嶺山C遺跡は第1、第3地点の調査面積を除く。土器の出土数は破片数、完形及び復元資料も破片数1点として計算。石器は明らかに縄文時代と区別されるものは数量より除外。

3．縄文時代の遺跡構成　梨野A遺跡は、1㎡当りの遺物出土量が他遺跡に比べ卓越している（第2表）。しかも、早期からの遺構・遺物が検出されており、中期には住居跡も検出され、この地は、早期から晩期にわたる居住域の性格をそなえている。対して、沼原・嶺山地区の各遺跡では、早期よりの断続的な遺物の出土はあるが、遺構として捉えられたのは、晩期に所属すると考えられる、けもの捕獲用の落し穴群が主体であった。

これら両遺跡間の立地条件・遺物・遺構構成の差異は、この時代における丘陵南北端[註1)]と丘陵内との居住域↔狩猟域（あるいは採集域）としての性格差が反映したものとも捉えられるが、これは、今後の他地域における、この種の遺跡群の詳細な比較に委ねたい。

4．平安時代の遺跡構成　平安時代になると縄文時代後の痕跡をさほど残さなかった丘陵地が、特に丘陵内を中心に活気を帯びてくる。それは岩ノ川流域より砂鉄の採取、その周辺の丘陵地に自生する豊富な燃料用材に起因する。嶺山C・沼原A遺跡より製鉄遺構・鍛冶遺構が検出され、当時この丘陵内が鉄生産の場として利用されたことが確認された。しかし、この時代の一般集落跡は検出されず、おそらくは、調査対象外の丘陵南端部にその存在が想定される。

5．結語　茂庭丘陵地帯において、南北端と丘陵内との自然条件は異なる。南端は造成地外の為調査外であったが、北端と丘陵内では、縄文時代以後、遺跡構成上に大きな差異が見出せた。縄文時代には丘陵南北端に居住域が形成され、丘陵内は狩猟・採集域として活用されたことが十分に考えられる。この後の奈良時代までに関しては資料が乏しく、どのようにこの丘陵地が利用されたかは不明である。しかし、平安時代になると丘陵内は鉄の生産域としての役割に変貌する。その後の中世においては、調査遺跡内から、遺物がわずかに出土したのみであった。しかし、南端付近の丘陵上、岩ノ川流域の丘陵上には多くの館跡が築かれている。その内部、隣接地よりは、精練滓を出土する遺跡が確認されている。これは平安時代に始まる製鉄域が、中世において軍事的性格の中に包括されていったとも考えられる。すなわち、平安時代の鉄の生産域としての役割が、その後の茂庭館群の成立に何らかの強い影響を与えたとも考えられる。しかしながら、これら遺跡の調査が成されていない現状では、中世における遺跡構成の在り方については、推測の域を出ないことは否めない。

佐藤甲二

註1．丘陵南端には未調査ではあるが、表採遺物・遺跡立地より縄文後期～晩期の集落跡とも考えられる。門野山岡遺跡・嶺岸遺跡が立地する。

仙台文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市熊沢薬定寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡　範囲確認調査報告書一（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　坂江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ　昭和55年度発掘調査概報　（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　馬ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ　昭和56年度発掘調査報告書　（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ一昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年３月）
第39集　熊沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査　一（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　馬ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭一条庭住宅土地区画整理組合造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ一昭和57年度発掘調査概報一（昭和58年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ　昭和57年度発掘調査報告書　（昭和58年３月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年３月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年３月）
第50集　岩切坂中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年３月）
第52集　南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第２次調査報告（昭和58年３月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡一古里女子学園移転新築工事地内調査報告一（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡一倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書　（昭和58年３月）

職員録

社会教育課

課長	永野昌一
主幹	早坂春一

文化財管理係

係長	大沢隆夫
主事	山口宏
〃	渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)	早坂春一
教諭	佐藤隆
〃	渡辺忠彦
〃	佐藤裕
〃	加藤正範
主事	田中則和
〃	結城慎一
〃	成瀬茂
教諭	青沼一民
主事	柳沢みどり
〃	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	吉岡恭平
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
〃	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	長島栄一
〃	荒井格
派遣職員	高橋勝也
嘱託	鈴木実

仙台市文化財調査報告書第45集
昭和57年度
宮城県仙台市
茂庭
茂庭住宅団地造成工事地内遺跡
—発掘調査報告書—
昭和58年3月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL63－1166